

群跡遺數叢

—森ノ木遺跡の調査—

筑後市文化財調査報告書

第 6 集

1990

筑後市教育委員会

藏敷遺跡群

1990

筑後市教育委員会

卷頭圖版



森ノ木遺跡皆既

序

歴数遺跡群森ノ木遺跡の発掘調査は筑後北中学校の新設工事に伴い、昭和62年度に学校敷地予定地内に所在する埋蔵文化財の調査を行ったものです。校舎建築の工期との関係で、3ヶ月間という非常に限られた期間の中で調査を行いましたが、その中に大きな成果があったものと思っております。

森ノ木遺跡からは、多くの堅穴住居跡、掘立柱建物跡、落し穴、円形周溝状遺構等が発見されました。中でも堅穴住居跡は240軒以上が発見され、筑後地方の堅穴住居を考えるうえで大変貴重な資料になると思われます。

この報告書は3ヶ月間にわたる発掘調査の記録であり、今後の文化財保護思想の普及の一助として、また学術研究の資料として、広く活用していただければ幸いです。

おわりに、この報告書の発行にあたり、調査を担当していただいた福岡県教育厅南筑後教育事務所の佐々木隆彦技術主査のご労苦に深く感謝の意を表するとともに、発掘調査に参加された皆様と関係各位に対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成2年3月31日

筑後市教育委員会

教育長 森田基之

例　　言

1. 本書は、昭和63年度に筑後市立北中学校建設に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査の結果についての報告書である。
2. 調査に係る費用は筑後市が負担し、福岡県教育委員会の調査指導のもとに筑後市教育委員会が実施した。
3. 遺構の実測図は、川述昭人、飛野博文、佐々木四十臣、佐土原逸男、江上貴子、牛島アケミ、浅川文枝、大塚啓子、田島洋子、西坂ヨシエ、佐々木隆彦が作成し、整理での実測・製図は、平田春美、農福弥生、若松三枝子、鬼木つや子、萬田佳子、佐藤みゆき、関久江、蘭牟田秀子の協力を得た。
4. 遺構写真は、川述、佐々木（隆）、佐土原が撮影し、遺物写真は、九州歴史資料館の石丸洋技術主査、須原悦子、矢野明美にお願いした。
5. 遺物整理は、福岡県教育庁指導第二部文化課整理指導員の岩瀬正信の指導助言を得て九州歴史資料館で行った。
6. 積穴住居跡の面積値はプラニメーターによる測定である。
7. 本書の執筆は、Ⅰを県立吉木歴史資料館副館長の川述昭人、Ⅱを筑後市教育委員会社会教育課永見秀徳、他は佐々木（隆）が分担した。
8. 題字は筑後市中央公民館主事、下川栄孜氏による。
9. 本書の編集は佐々木（隆）が行った。

本文目次

	頁
I.はじめに	1
II.遺跡の位置と環境	3
III.発掘調査の記録	5
(1) 壺穴住居跡	5
(2) 挖立柱建物	239
(3) 周溝状遺構	243
(4) 落し穴状遺構	251
(5) 土墳	251
(6) 壺穴状遺構	262
(7) 溝状遺構	262
(8) 墓地	263
(9) その他の遺物	266
IV.おわりに	269

図版目録

- 図版 1 (1) 森ノ木遺跡周辺断面
(2) 森ノ木遺跡東側斜面
- 図版 2 (1) 9号竪穴住居跡周辺構造
(2) 9号・10号竪穴住居跡、3号周壁・隣接
- 図版 3 (1) 12号竪穴住居跡周辺断面
(2) 16号・21号竪穴住居跡周辺断面
- 図版 4 (1) 19号竪穴住居跡周辺断面
(2) 23号・48号竪穴住居跡周辺断面
- 図版 5 (1) 34号～38号竪穴住居跡周辺断面
(2) 43号竪穴住居跡周辺断面
- 図版 6 (1) 43号竪穴住居跡周辺断面
(2) 58号竪穴住居跡周辺断面
- 図版 7 (1) 59号竪穴住居跡周辺断面
(2) 66号竪穴住居跡周辺断面
- 図版 8 (1) 79号竪穴住居跡周辺断面
(2) 91号竪穴住居跡周辺断面
- 図版 9 (1) 100号竪穴住居跡周辺断面
(2) 93号～96号竪穴住居跡周辺断面
- 図版10 (1) 106号竪穴住居跡周辺断面
(2) 116号・117号・124号竪穴住居跡周辺断面
- 図版11 (1) 127号竪穴住居跡周辺断面
(2) 137号竪穴住居跡周辺断面
- 図版12 (1) 140号竪穴住居跡周辺断面
(2) 159号竪穴住居跡周辺断面
- 図版13 (1) 160号竪穴住居跡周辺削正
(2) 169号竪穴住居跡周辺削正
- 図版14 (1) 204号・218号竪穴住居跡、5号・6号獨立柱迹周辺断面
(2) 208号～212号竪穴住居跡、24号土壤剖面
- 図版15 (1) 220号竪穴住居跡周辺断面

(2) 1号・2号土壙瓶、石蓋土壙瓶削破

図版16 (1) 12号竪穴住居跡、5号・6号周溝状遺構

(2) 16号竪穴住居跡

(3) 23号・42号・71号～74号竪穴住居跡

(4) 19号竪穴住居跡

図版17 (1) 19号竪穴住居跡カマド

(2) 35号～38号竪穴住居跡

(3) 34号竪穴住居跡遺物出土状態

(4) 44号(6)竪穴住居跡遺物出土状態

図版18 (1) 40号・43号竪穴住居跡

(2) 45号・103号竪穴住居跡

(3) 103号竪穴住居跡機内土壤

(4) 53号・54号竪穴住居跡

図版19 (1) 59号竪穴住居跡

(2) 7号周溝状遺構、15号・17号土壙、1号幕し穴

(3) 64号竪穴住居跡遺物出土状態

(4) 63号・64号・65号竪穴住居跡

図版20 (1) 61号・62号竪穴住居跡、11号・12号土壙

(2) 66号～68号竪穴住居跡、13号上塙

(3) 75号～77号竪穴住居跡

(4) 79号～81号竪穴住居跡

図版21 (1) 82号竪穴住居跡

(2) 83号竪穴住居跡、10号周溝状遺構

(3) 84号竪穴住居跡、20号土壙

(4) 91号・92号竪穴住居跡

図版22 (1) 93号竪穴住居跡

(2) 86号～90号・98号・119号竪穴住居跡

(3) 101号・102号竪穴住居跡遺物出土状態

(4) 121号・122号竪穴住居跡

図版23 (1) 122号竪穴住居跡屋内土壤

(2) 126号～128号竪穴住居跡

(3) 129号竪穴住居跡

(4) 130号竪穴住居跡

図版24 (1) 132号竪穴住居跡

(2) 135号・136号竪穴住居跡

(3) 136号竪穴住居跡出土二頭

(4) 137号・153号・154号・171号・172号竪穴住居跡

図版25 (1) 138号・139号・171号竪穴住居跡

(2) 138号竪穴住居跡構内土壤

(3) 140号・147号・148号竪穴住居跡

(4) 143号～145号竪穴住居跡

図版26 (1) 147号竪穴住居跡構内土壤

(2) 150号・167号竪穴住居跡

(3) 159号～161号竪穴住居跡

(4) 159号竪穴住居跡構内土壤

図版27 (1) 142号・176号・177号竪穴住居跡

(2) 180号～183号・185号・187号・188号・190号・192号・196号竪穴住居跡

(3) 200号・201号竪穴住居跡

(4) 202号・203号竪穴住居跡

図版28 (1) 208号～212号竪穴住居跡

(2) 208号竪穴住居跡構内土壤

(3) 217号竪穴住居跡構内土壤

(4) 218号竪穴住居跡構内土壤

図版29 (1) 4号獨立住居跡

(2) 3号窓構造遺構

(3) 16号土壤、1号溝し穴状遺構

(4) 2号溝し穴二遺構

図版30 (1) 3号溝し穴状遺構

(2) 3号土壤

(3) 25号土壤

(4) 1号土壤

図版31 (1) 2号土壤

(2) 石基土壤

(3) 石基土壤高石除却機

(4) 3号土壤

図版32 3号・9号・14号・16号竪穴住居跡出土遺物

- 図版33 16号・18号・19号・23号・24号・27号堅穴住居跡出土遺物
- 図版34 27号・29号・34号堅穴住居跡出土遺物
- 図版35 34号堅穴住居跡出土遺物
- 図版36 34号・37号・38号・43号・44(a)号堅穴住居跡出土遺物
- 図版37 44(a)・(b)号堅穴住居跡出土遺物
- 図版38 45号・47号・48号・49号・54号堅穴住居跡出土遺物
- 図版39 55号・57号・58号堅穴住居跡出土遺物
- 図版40 58号堅穴住居跡出土遺物
- 図版41 58号・61号・62号・64号堅穴住居跡出土遺物
- 図版42 64号堅穴住居跡出土遺物
- 図版43 64号堅穴住居跡出土遺物
- 図版44 64号堅穴住居跡出土遺物
- 図版45 64号～66号堅穴住居跡出土遺物
- 図版46 66号～68号・75号堅穴住居跡出土遺物
- 図版47 73号・78号・80号・81号・82号堅穴住居跡出土遺物
- 図版48 82号～84号・87号堅穴住居跡出土遺物
- 図版49 87号～89号・91号堅穴住居跡出土遺物
- 図版50 93号～96号・98号・100号堅穴住居跡出土遺物
- 図版51 100号堅穴住居跡出土遺物
- 図版52 100号・101号堅穴住居跡出土遺物
- 図版53 102号・103号堅穴住居跡出土遺物
- 図版54 103号・104号・106号・107号・111号・112号・117号・119号堅穴住居跡出土遺物
- 図版55 119号・120号・126号(127号)堅穴住居跡出土遺物
- 図版56 130号・133号・135号・136号堅穴住居跡出土遺物
- 図版57 136号・137号堅穴住居跡出土遺物
- 図版58 137号・138号・142号・144号～146号堅穴住居跡出土遺物
- 図版59 147号・153号堅穴住居跡出土遺物
- 図版60 159号・170号～172号・178号・180号・181号堅穴住居跡出土遺物
- 図版61 183号・188号・190号・191号・194号・196号堅穴住居跡出土遺物
- 図版62 196号・199号・201号・203号・208号堅穴住居跡出土遺物
- 図版63 208号・217号・220号・223号・227号・229号・235号・239号堅穴住居跡出土遺物
- 図版64 240号・243号・244号堅穴住居跡、2号・4号周溝状遺構出土遺物
- 図版65 3号・9号・12号・17号土壙、3号土壙墓、堅穴状遺構出土遺物
- 図版66 各ピット出土遺物

挿 図 目 次

	頁
第 1 図 麻ノ木遺跡と周辺の主要遺跡分布図.....	2
第 2 図 麻ノ木遺跡周辺地形図(1/5,000).....	4
第 3 図 1号竪穴住居跡実測図(1/80).....	5
第 4 図 1号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	5
第 5 図 2号竪穴住居跡実測図(1/80).....	6
第 6 図 2号竪穴住居跡出土石器実測図(1/3).....	7
第 7 図 3号、4号竪穴住居跡実測図(1/80).....	7
第 8 図 3号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	8
第 9 図 4号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	9
第 10 図 5号竪穴住居跡実測図(1/80).....	9
第 11 図 8号竪穴住居跡実測図(1/80).....	10
第 12 図 8号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	10
第 13 図 9号竪穴住居跡実測図(1/80).....	11
第 14 図 9号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	12
第 15 図 10号竪穴住居跡実測図(1/80).....	13
第 16 図 10号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	13
第 17 図 12号竪穴住居跡、5号周溝状遺構、5号土壤実測図(1/80).....	14
第 18 図 12号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	15
第 19 図 13号竪穴住居跡実測図(1/80).....	16
第 20 図 13号～15号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	16
第 21 図 15号竪穴住居跡実測図(1/80).....	17
第 22 図 16号竪穴住居跡実測図(1/80).....	18
第 23 図 16号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	18
第 24 図 16号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2).....	19
第 25 図 18号竪穴住居跡出土石器実測図(1/3).....	19
第 26 図 19号竪穴住居跡実測図(1/80).....	20
第 27 図 19号竪穴住居跡カマド実測図(1/40).....	21
第 28 図 19号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	21
第 29 図 19号竪穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2).....	22

第 30 図	21号墾穴住居跡実測図(1/80).....	22
第 31 図	21号墾穴住居跡出土土器実測図(1/4)	23
第 32 図	22号墾穴住居跡出土石器実測図(1/3)	23
第 33 図	23号墾穴住居跡出土石器実測図(1/2・1/4)	24
第 34 図	24号墾穴住居跡出土石器実測図(1/3)	24
第 35 図	24号墾穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2)	24
第 36 図	27号墾穴住居跡実測図(1/80).....	25
第 37 図	27号～29号墾穴住居跡出土土器実測図(1/4)	26
第 38 図	27号墾穴住居跡出土石器実測図(1/2)	27
第 39 図	29号、105号墾穴住居跡実測図(1/80)	28
第 40 図	30号墾穴住居跡出土土器実測図(1/2)	28
第 41 図	34号墾穴住居跡実測図(1/80).....	29
第 42 図	34号墾穴住居跡出土土器実測図その 1(1/4)	31
第 43 図	34号墾穴住居跡出土土器実測図その 2(1/4)	32
第 44 図	34号墾穴住居跡出土土器実測図その 3(1/4)	33
第 45 図	34号墺穴住居跡出土土器実測図その 4(1/4)	34
第 46 図	34号墺穴住居跡出土石器実測図その 1(1/3)	35
第 47 図	34号墺穴住居跡出土石器実測図その 2(1/2)	35
第 48 図	35号、36号墺穴住居跡実測図(1/80).....	36
第 49 図	36号～40号、43号墺穴住居跡出土土器実測図(1/4)	37
第 50 図	37号墺穴住居跡出土石器実測図(1/2)	38
第 51 図	39号、41号、104号墺穴住居跡実測図(1/80)	39
第 52 図	40号墺穴住居跡実測図(1/80).....	40
第 53 図	43号墺穴住居跡実測図(1/80).....	41
第 54 図	43号墺穴住居跡出土石器実測図その 1(1/2)	42
第 55 図	43号墺穴住居跡出土石器実測図その 2(1/3)	43
第 56 図	44号(A、B)墺穴住居跡実測図(1/80).....	44
第 57 図	44号(A)墺穴住居跡出土土器実測図(1/4)	45
第 58 図	44号(B)墺穴住居跡出土土器実測図その 1(1/4)	47
第 59 図	44号(B)墺穴住居跡出土土器実測図その 2(1/4)	48
第 60 図	45号、103号墺穴住居跡実測図(1/80)	49
第 61 図	45号墺穴住居跡出土土器実測図その 1(1/4)	50
第 62 図	45号墺穴住居跡出土土器実測図その 2(1/4)	51

第 63 図	47号堅穴住居跡実測図(1/80).....	52
第 64 図	47号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	52
第 65 図	47号堅穴住居跡出土石器実測図(1/3)	52
第 66 図	48号堅穴住居跡実測図(1/80).....	53
第 67 図	48号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	54
第 68 図	48号堅穴住居跡出土石器実測図(1/2)	54
第 69 図	49号堅穴住居跡実測図(1/80).....	54
第 70 図	49号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	55
第 71 図	49号堅穴住居跡出土石器実測図(1/3)	56
第 72 図	50号、51号、52号堅穴住居跡実測図(1/80)	57
第 73 図	50号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	58
第 74 図	52号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	58
第 75 図	53号、54号堅穴住居跡実測図(1/80・1/20)	59
第 76 図	53号、54号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	60
第 77 図	53号堅穴住居跡出土土器実測図(1/2)	60
第 78 図	55号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	61
第 79 図	55号堅穴住居跡出土石器実測図(1/2)	62
第 80 図	56号堅穴住居跡出土石器実測図(1/2)	62
第 81 図	57号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	62
第 82 図	58号堅穴住居跡、8号周溝状遺構実測図(1/80)	63
第 83 図	58号堅穴住居跡出土土器実測図その1(1/4)	65
第 84 図	58号堅穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)	66
第 85 図	58号堅穴住居跡出土土器実測図その3(1/4)	67
第 86 図	58号堅穴住居跡出土土器実測図その4(1/4)	68
第 87 図	58号堅穴住居跡出土石器実測図(1/2)	68
第 88 図	59号堅穴住居跡実測図(1/80).....	69
第 89 図	59号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	70
第 90 図	59号堅穴住居跡出土土塊実測図(1/4)	71
第 91 図	61号、62号堅穴住居跡実測図(1/80).....	72
第 92 図	61号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	73
第 93 図	61号堅穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2)	74
第 94 図	62号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	76
第 95 図	63号堅穴住居跡出土土器実測図その1(1/4)	77

第 96 図	63号堅穴住居跡出土土器実測図その 2 (1/4)	78
第 97 図	63号堅穴住居跡出土土器実測図(1/2)	78
第 98 図	64号、65号堅穴住居跡出土土器実測図(1/80)	79
第 99 図	64号堅穴住居跡出土土器実測図 その 1 (1/4)	81
第100図	64号堅穴住居跡出土土器実測図 その 2 (1/4)	82
第101図	64号堅穴住居跡出土土器実測図 その 3 (1/4)	83
第102図	64号堅穴住居跡出土土器実測図 その 4 (1/4)	84
第103図	64号堅穴住居跡出土土器実測図 その 5 (1/4)	85
第104図	64号堅穴住居跡出土土器実測図 その 6 (1/4)	87
第105図	64号堅穴住居跡出土土器実測図 その 7 (1/4)	88
第106図	64号堅穴住居跡出土土器実測図 その 8 (1/4)	89
第107図	44号、64号堅穴住居跡出土土器実測図(1/8)	90
第108図	64号堅穴住居跡出土石器実測図 (1/4・1/2)	91
第109図	65号堅穴住居跡出土石器実測図(1/2)	92
第110図	66号堅穴住居跡出土土器実測図 その 1 (1/4)	93
第111図	66号堅穴住居跡出土土器実測図 その 2 (1/4)	94
第112図	66号堅穴住居跡出土石器実測図(1/2)	94
第113図	67号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	94
第114図	67号堅穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2)	95
第115図	68号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	96
第116図	69号堅穴住居跡実測図(1/80)	97
第117図	69号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	98
第118図	70号、71号堅穴住居跡実測図(1/80)	99
第119図	70号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	100
第120図	72号～74号堅穴住居跡実測図(1/80)	101
第121図	73号堅穴住居跡陶器実測図(1/4)	102
第122図	73号堅穴住居跡出土石器実測図(1/2)	103
第123図	75号～77号堅穴住居跡実測図(1/80)	104
第124図	75号～77号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	105
第125図	78号堅穴住居跡実測図(1/80)	106
第126図	79号堅穴住居跡実測図(1/80)	106
第127図	78号、79号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)	107
第128図	80号、81号堅穴住居跡実測図(1/80)	108

第129図	80号竪穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2)	109
第130図	81号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	110
第131図	81号竪穴住居跡出土石器実測図その1(1/3)	111
第132図	81号竪穴住居跡出土石器実測図その2(1/2)	111
第133図	82号竪穴住居跡実測図(1/80)	112
第134図	82号竪穴住居跡出土土器実測図その1(1/4)	113
第135図	82号竪穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)	114
第136図	82号竪穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2)	114
第137図	83号、151号竪穴住居跡実測図(1/80)	115
第138図	83号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	116
第139図	83号竪穴住居跡出土土製品実測図(1/2)	116
第140図	84号竪穴住居跡実測図(1/80)	117
第141図	84号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	118
第142図	85号、120号竪穴住居跡実測図(1/80)	118
第143図	86号、100号、119号竪穴住居跡実測図(1/80)	折り込み
第144図	86号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	119
第145図	87号竪穴住居跡実測図(1/80)	120
第146図	87号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	120
第147図	87号竪穴住居跡出土石器実測図(1/4・1/2)	121
第148図	88号竪穴住居跡実測図(1/80)	122
第149図	88号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	123
第150図	89号、90号、98号竪穴住居跡実測図(1/80)	折り込み
第151図	89号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	123
第152図	90号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	124
第153図	91号、92号竪穴住居跡実測図(1/80)	125
第154図	91号竪穴住居跡出土土器実測図その1(1/4)	126
第155図	91号竪穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)	127
第156図	91号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2)	128
第157図	93号竪穴住居跡実測図(1/80)	129
第158図	93号～95号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	130
第159図	93号竪穴住居跡出土土製品実測図(1/2)	130
第160図	96号竪穴住居跡実測図(1/80)	131
第161図	96号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	132

第162図	97号竪穴住居跡実測図(1/80).....	132
第163図	97号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	133
第164図	98号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	133
第165図	99号竪穴住居跡実測図(1/80).....	134
第166図	100号竪穴住居跡出土土器実測図その1(1/4).....	折り込み
第167図	100号竪穴住居跡出土土器実測図その2(1/4).....	136
第168図	100号竪穴住居跡出土土器実測図その3(1/4).....	137
第169図	100号竪穴住居跡出土土器実測図その4(1/4).....	138
第170図	100号竪穴住居跡出土土器実測図その5(1/6).....	138
第171図	100号竪穴住居跡出土石器実測図(1/4・1/2).....	139
第172図	101号、102号竪穴住居跡実測図(1/80).....	140
第173図	101号竪穴住居跡出土土器実測図その1(1/4).....	141
第174図	101号竪穴住居跡出土土器実測図その2(1/4).....	142
第175図	101号+102号竪穴住居跡出土土器実測図(1/8).....	143
第176図	101号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2).....	143
第177図	102号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	144
第178図	103号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	145
第179図	103号竪穴住居跡出土石器実測図(1/3).....	146
第180図	103号竪穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2・1/4).....	146
第181図	104号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2).....	147
第182図	105号、106号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	148
第183図	107号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2).....	149
第184図	111号、112号、115号、117号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	150
第185図	116号竪穴住居跡出土土器実測図(1/2).....	150
第186図	119号竪穴住居跡出土土器実測図その1(1/4).....	152
第187図	119号竪穴住居跡出土土器実測図その2(1/4).....	153
第188図	119号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2).....	153
第189図	120号、121号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	153
第190図	121号竪穴住居跡実測図(1/80).....	154
第191図	122号竪穴住居跡実測図(1/80).....	155
第192図	123号竪穴住居跡実測図(1/80).....	155
第193図	126号、127号竪穴住居跡実測図(1/80).....	156
第194図	126号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	157

第195回	126号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2).....	158
第196回	127号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2).....	158
第197回	128号竪穴住居跡実測図(1/80)	159
第198回	129号竪穴住居跡実測図(1/80)	159
第199回	130号竪穴住居跡実測図(1/80)	160
第200回	130号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	161
第201回	130号竪穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2).....	161
第202回	131号竪穴住居跡実測図(1/80)	162
第203回	131号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	162
第204回	132号竪穴住居跡実測図(1/80)	162
第205回	133号、134号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	163
第206回	135号、136号竪穴住居跡実測図(1/80).....	164
第207回	135号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	165
第208回	135号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2).....	165
第209回	136号竪穴住居跡出土土器実測図その1(1/4).....	166
第210回	136号竪穴住居跡出土土器実測図その2(1/4).....	167
第211回	136号竪穴住居跡出土土製品実測図(1/2).....	167
第212回	137号竪穴住居跡実測図(1/80)	168
第213回	137号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	169
第214回	137号竪穴住居跡出土石器実測図(1/4・1/2)	170
第215回	138号、139号竪穴住居跡実測図(1/80)	171
第216回	138号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	171
第217回	138号竪穴住居跡出土石器実測図その1(1/3).....	172
第218回	138号竪穴住居跡出土石器実測図その2(1/4・1/2)	172
第219回	140号、148号、156号竪穴住居跡実測図(1/80)	折り込み
第220回	140号～145号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	173
第221回	142号、176号、177号竪穴住居跡実測図(1/80)	174
第222回	142号竪穴住居跡出土土器実測図(1/2).....	175
第223回	143号～145号、157号竪穴住居跡実測図(1/80)	176
第224回	144号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2).....	177
第225回	145号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2).....	178
第226回	146号、158号竪穴住居跡実測図(1/80)	179
第227回	146号～148号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	180

第228回	147号竪穴(住居跡)美術圖(1/80)	181
第229回	147号竪穴(住居跡出土石器、執器美術圖(1/4・1/2)	182
第230回	149号竪穴(住居跡出土石器美術圖(1/2)	183
第231回	150号竪穴(住居跡出土、土器美術圖(1/4)	183
第232回	153号竪穴(住居跡出土土器美術圖その1)(1/4)	185
第233回	153号竪穴(住居跡出土土器美術圖その2)(1/4)	186
第234回	153号竪穴(住居跡出土土器美術圖その3)(1/4)	187
第235回	153号竪穴(住居跡出土土器美術圖(1/2)	187
第236回	155号竪穴(住居跡出土土器美術圖(1/4)	187
第237回	158号竪穴(住居跡出土石器美術圖(1/2)	187
第238回	159号竪穴(住居跡出土土器美術圖(1/80)	188
第239回	159号、163号竪穴(住居跡出土土器美術圖(1/4)	189
第240回	159号竪穴(住居跡出土石器美術圖(1/2)	189
第241回	163号、164号竪穴(住居跡美術圖(1/80)	190
第242回	165号竪穴(住居跡美術圖(1/80)	191
第243回	165号、166号竪穴(住居跡出土土器美術圖(1/4)	192
第244回	165号竪穴(住居跡出土石器美術圖(1/2)	192
第245回	166号、169号、231号竪穴(住居跡美術圖(1/80)	193
第246回	169号竪穴(住居跡出土土器美品美術圖(1/2)	193
第247回	170号竪穴(住居跡出土石器美術圖(1/2)	194
第248回	171号、172号竪穴(住居跡美術圖(1/80)	194
第249回	171号竪穴(住居跡出土土器美術圖(1/4)	195
第250回	171号竪穴(住居跡出土石器美術圖(1/2)	195
第251回	172号竪穴(住居跡出土土器美品美術圖(1/2)	196
第252回	173号竪穴(住居跡美術圖(1/80)	196
第253回	173号竪穴(住居跡出土土器美術圖(1/4)	196
第254回	174号、175号竪穴(住居跡出土土器美術圖(1/80)	197
第255回	174号竪穴(住居跡出土土器美術圖(1/4)	198
第256回	175号竪穴(住居跡出土土器美術圖(1/4)	199
第257回	178号竪穴(住居跡出土土器美術圖(1/4)	199
第258回	178号竪穴(住居跡出土石器美術圖(1/2)	200
第259回	180号、181号、186号竪穴(住居跡出土土器美術圖(1/80)	201
第260回	180号、182号～186号竪穴(住居跡出土土器美術圖(1/4)	202

第261図	180号竪穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2).....	202
第262図	181号竪穴住居跡出土土石器、鉄器実測図(1/2).....	203
第263図	183号～185号、187号竪穴住居跡実測図(1/80)	204
第264図	183号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2・1/4)	205
第265図	188号、246号竪穴住居跡実測図(1/80).....	折り込み
第266図	188号竪穴住居跡出土石器、鉄器実測図(1/2).....	207
第267図	190号、191号、193号、194号竪穴住居跡実測図(1/80).....	折り込み
第268図	190号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	208
第269図	190号竪穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2).....	209
第270図	191号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	209
第271図	191号竪穴住居跡出土石器実測図(1/4).....	210
第272図	194号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2).....	210
第273図	195号、199号竪穴住居跡実測図(1/80).....	211
第274図	195号、196号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	213
第275図	196号、197号竪穴住居跡実測図(1/80).....	214
第276図	196号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2).....	215
第277図	199号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	215
第278図	199号竪穴住居跡出土石器、鉄器、土製品実測図(1/2).....	216
第279図	200号、201号竪穴住居跡実測図(1/80).....	217
第280図	201号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	218
第281図	201号竪穴住居跡出土石器実測図(1/4).....	218
第282図	202号、203号竪穴住居跡実測図(1/80).....	219
第283図	203号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	219
第284図	203号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2).....	220
第285図	208号～212号竪穴住居跡実測図(1/80).....	折り込み
第286図	208号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	221
第287図	208号竪穴住居跡出土石器実測図(1/4).....	221
第288図	212号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2).....	222
第289図	214号竪穴住居跡、26号土壤実測図(1/80)	222
第290図	217号、218号竪穴住居跡実測図(1/80).....	224
第291図	217号竪穴住居跡出土石器実測図(1/3).....	225
第292図	217号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2).....	225
第293図	218号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	225

第294回	220号、221号堅穴住居跡実測図(1/80).....	226
第295回	220号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	226
第296回	220号堅穴住居跡出土石器実測図(1/3).....	227
第297回	222号堅穴住居跡実測図(1/80).....	228
第298回	222号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	228
第299回	223号、224号堅穴住居跡実測図(1/80).....	229
第300回	223号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	230
第301回	225号～227号、244号堅穴住居跡13号周溝状遺構実測図(1/80).....	231
第302回	227号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	231
第303回	227号堅穴住居跡出土土製品実測図(1/2).....	231
第304回	236号(1)、238号(2)堅穴住居跡実測図(1/80).....	232
第305回	238号堅穴住居跡出土石器実測図(1/4).....	233
第306回	239号、240号堅穴住居跡実測図(1/80).....	234
第307回	240号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	235
第308回	243号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	235
第309回	244号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4).....	236
第310回	1号掘立柱建物実測図(1/80).....	239
第311回	3号(1)、4号(2)掘立柱建物実測図(1/80).....	240
第312回	5号(1)、6号(2)掘立柱建物実測図(1/80).....	241
第313回	7号(1)、8号(2)掘立柱建物実測図(1/80).....	242
第314回	1号、2号周溝状遺構実測図(1/80).....	折り込み
第315回	1号、2号、4号周溝状遺構出土土器実測図(1/4).....	244
第316回	2号周溝状遺構出土土石器実測図(1/2).....	245
第317回	3号周溝状遺構実測図(1/60).....	245
第318回	4号周溝状遺構実測図(1/80).....	246
第319回	5号、6号周溝状遺構実測図(1/60).....	247
第320回	7号周溝状遺構実測図(1/60).....	248
第321回	7号、10号周溝状遺構出土土器実測図(1/4).....	249
第322回	10号周溝状遺構実測図(1/60).....	249
第323回	11号周溝状遺構出土土石器実測図(1/2).....	250
第324回	1号、2号、3号落し穴状遺構実測図(1/30).....	252
第325回	3号土壤実測図(1/60).....	253
第326回	3号、6号、9号土壤出土土器実測図(1/4).....	254

第327図	8号、11号、12号土壤実測図(1/40).....	256
第328図	12号、17号土壤出土土器実測図(1/4)	257
第329図	14号、23号、25号、26号土壤実測図(1/40・1/60).....	259
第330図	24号土壤出土土製品実測図(1/2)	260
第331図	25号土壤出土土器実測図(1/4)	260
第332図	26号土壤出土土器実測図(1/4)	261
第333図	堅穴状遺構出土土製品実測図(1/2)	262
第334図	石蓋土壤軸、1号土壤蓋実測図(1/40).....	264
第335図	2号、3号土壤軸実測図(1/30).....	265
第336図	3号土壤蓋出土土器実測図(1/4)	265
第337図	3号土壤蓋出土土器実測図(1/3)	266
第338図	各ピット出土石器実測図(1/2)	267
第339図	各ピット出土石器実測図(1/3)	267

表 目 次

第 1 表	不掲載堅穴住居跡一覧表	237
第 2 表	1号掘立柱建物計測表	239
第 3 表	3号掘立柱建物計測表	239
第 4 表	4号掘立柱建物計測表	239
第 5 表	5号掘立柱建物計測表	243
第 6 表	6号掘立柱建物計測表	243
第 7 表	7号掘立柱建物計測表	243
第 8 表	8号掘立柱建物計測表	243

付 図

- 付 図 1 森ノ木遺跡遺構配置図(1/400)
 付 図 2 森ノ木遺跡の集落時期別変遷図(1/800)

Iはじめに

本の木連絡は筑後北中学校新設工事に先立って緊急に調査を実施したものである。

当該地区は文化財等遺跡分布地図（筑後市分）に歴史遺跡として記載されている周辺の遺跡¹⁾であり、遺跡は久留米に所在することが予想された。

昭和62年の夏、当該地区が中学校新設予定地となりたため地区内の文化財の保護について、筑後市教育委員会と筑後市教育委員会と協議を行った。県・市の文化財担当職員による現地調査の結果、遺跡は丘陵部を除く頂部から斜面にかけての全面に所在することが予想された。県・市二重による協議の結果、工法的には、斜面を削平した土砂で低い部分を埋めて用地を確保するしか方法がないとの結論に達し、全面発掘調査による調査を免²⁾面積は約15,000m²となつた。市側から、開校は平成元年4月1日であるため早急に調査を開始して欲しいとの要望であったが、他に発掘調査が予定されているなど隣接の調査・測量が終わらなければ、時間的調整が必要であった。

昭和63年2月に入り、重機を使っての全面発掘検査作業を開始し、発掘調査の本格的取り組みは3月20日からとなり、6月18日までの間で実施した。

調査関係者は下記のとおりである。

調査責任者 築後市教育委員会

教育長 中島栄三郎（前任）

同 森田 基之

社会教育課長 江里口 C

社会教育係長 松永盛四郎

社会教育係 木本 敏信

同 本村 也晴

同 光延 久幸（文化財担当前任）

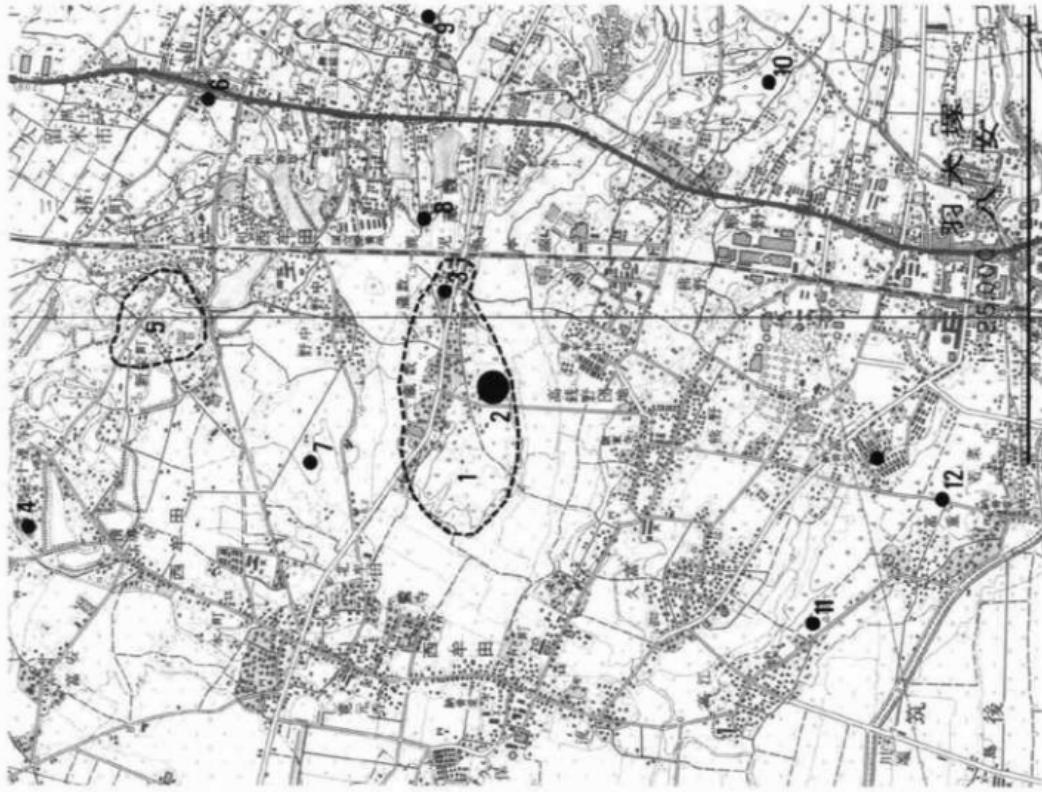
福岡県教育厅南筑後教育指導所 社会教育課 技術主査 川越 昭人

同

福岡県教育厅指導第二部文化課

主任技師 補助員

このほか、福岡県文化財保護指導委員の佐々木四十郎氏より指導・助言ならびに発掘調査の手助けを頂き、また、八女市教育委員会の赤崎敏男氏には実測についての御高配を頂いた。現地作業にあたっては地元歴史地区的区長成吉基氏のお世話により地元の方々に作業に従事して頂き調査を無事に終了することができた。記して感謝の意を表します。



1. 森ノ木道跡
2. 森ノ木道跡
3. 森敷東野原道跡
4. 滝谷林道跡
5. 十八頭山道跡
6. 加王寺古跡
7. 田佛道跡
8. 長原山道跡
9. 榛ノ木道跡
10. 船中ノ玉道跡
11. 萩江道跡
12. 江道跡
図1 図 森ノ木道跡と周辺主要道路分布図 (1/25,000)

II 遺跡の位置と環境

葛城遺跡群は福岡県筑後市大字葛城一帯に広がる一大遺跡群である。筑後市は福岡県南部、筑後地区のほぼ中央に位置し、久留米市から南へ12km、大牟田市から北へ21kmの距離にある。JR鹿児島本線に平行する20号線沿いにある未舗装の市街地は、江戸時代の宿場町一里塚の名残りをわざかにながらにとどめている。市の北側は八女町・八女丘陵群のびる八女丘陵が、東を江戸時代より開拓してローマ貢の低丘陵群を形成している。この低丘陵群は茶園や果樹園に利用されており、特に近年は果樹園として抜け、梨やブドウの栽培が盛んである。市の南側は標高5m未満の低湿地が中心をなし、広く水田が広げているが、灌漑が多く無数のダムが発達している。

葛城遺跡群は筑後市北部、八女丘陵の西端近くに展開し、遺跡東部には東洋風の東洋館、牧場跡が所在する。歴史木造建築は遺跡群西部の丘陵斜面に位置している。この丘陵には、東から立川丸山古墳、金崎1・2・3号墳、鶴見山古墳^(注2)、善藏塚古墳、東堀古墳、筑紫の村創建の奥津城である岩戸山古墳、神奈魚田古墳、そして筑後市に入つて次塙古墳、石人山古墳等の前方後円墳が点在する。門境では、石人山古墳の東方300mに鬼塙古墳^(注3)として知られる弘化谷古墳が有在し、西方1kmには珠文鏡・本当に鉄製輪留などを出土した楊王寺古墳^(注4)がある。また、久嘸古墳の南約500mの前原地区には、奈良時代の墓葬遺跡である前原遺跡群が展開し、前原中の三遺跡ではカマドを有する瓦壙が12軒確認されている。

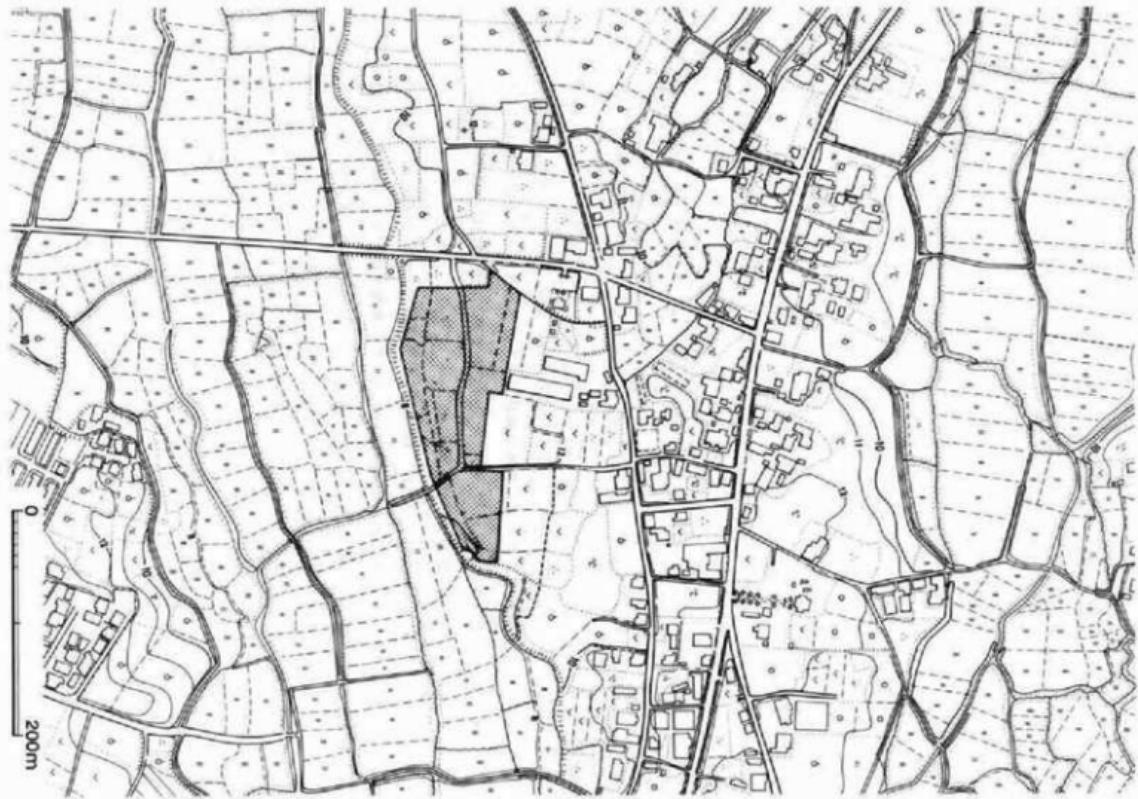
筑後市内のその他の主な遺跡としては、朝文時代の集落跡である奥山遺跡^(注5)、弥生時代前期から中期にかけての集落・墓地跡である芥川遺跡^(注6)、古墳時代の墓葬遺跡である田代遺跡^(注7)、弥生時代から近世までの複合遺跡で羽州鏡などが出土した高江遺跡^(注8)、奈良時代から平安時代にかけての舟目瓦を出土した石屋守跡などがある。

そのほか、奈良時代の街道である西海道を「平越」の小字名等から推定する説もある。

また筑後市一帯は、石人山古墳や岩戸山古墳の石人・石馬で知られるように石造美術の宝庫である。中でも鎌倉時代のものとして船野坂寺の真永五重塔や津島光明寺の石造鳳凰塔、室町時代のものとしては、相手塙町直原の元^(注9)・年間の作で市指定文化財の六所宮の忠比御神像、少し武代を下り、水田東通寺の石塔群、船野神社の腰鼓橋、江戸時代のものとしては、水田天端宮の石造廟宇などがあり、何れも貴重な資料として知られている。

- 註(1) 筑後市文化財調査報告書3集〔福岡:久留米市、筑後市農林水産課、1984〕
(2) 葛城村文化財調査報告書4集〔福岡:久留米市、筑後市農林水産課、1987〕
(3) 「興味深極」 筑後市教育委員会 1966
(4) 「鬼塙遺跡」 筑後市教育委員会 1970:一地所
(5) 筑後市文化財調査報告書5集〔福岡:久留米市、筑後市農林水産課、1978〕
(6) 大下 良「鬼塙・考・參照」『福岡県史』昭和20年版

第2図 森ノ木道路周辺地形図(1/5,000)



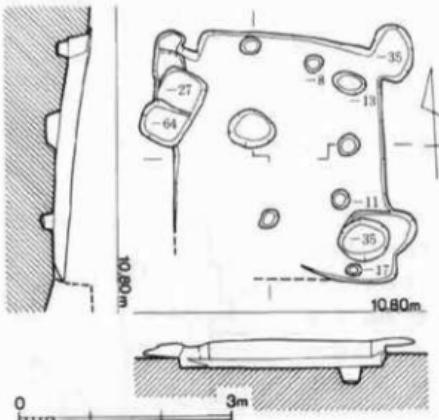
III 発掘調査の記録

(i) 窪穴住居跡

1号窓穴住居跡 (圖版2-1、第3図)

調査区の南斜面に位置する住居跡で、現況での平面形状は五角形を呈するが、ベット部分の削平を考えられる。規模は東壁が3.40m、床面までの深さは30.00cm前後を測る。支柱穴など詳細は不明である。

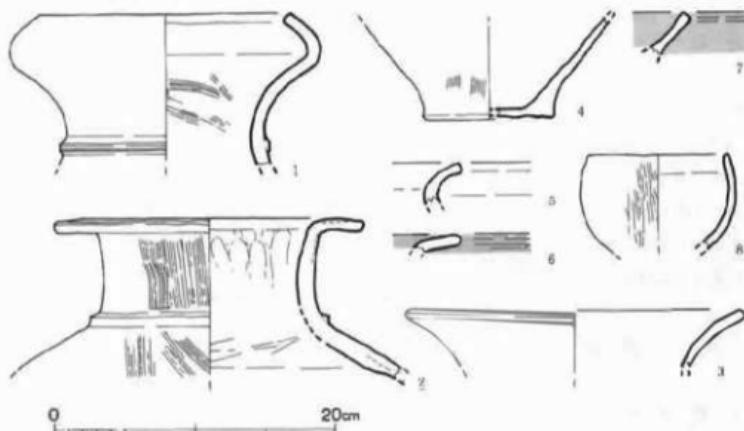
出土遺物は壺、甕、鉢がある。



第3図 1号窓穴住居跡実測図(1/80)

出土遺物

土器 (第4図)



第4図 1号窓穴住居跡出土土器実測図(1/4)

壹は1～4がある。1は中期末の袋状口縁壹の発達したもので、口縁部が鋭く内凹するが、尾折部に棱をもたない。頸部には「M」字状の突帯を貼付する。2は頭先状に縁が退化した壹で、頸部に三角突帯を貼付する。外面には荒いハケを施す。復原口径22.0cm。3は朝顔状に外反する口縁を有す壹で精製土器である。復原口径24.0cmを測る。4は壹の底部で薄手作りである。二次加熱を受け渋く赤変する。

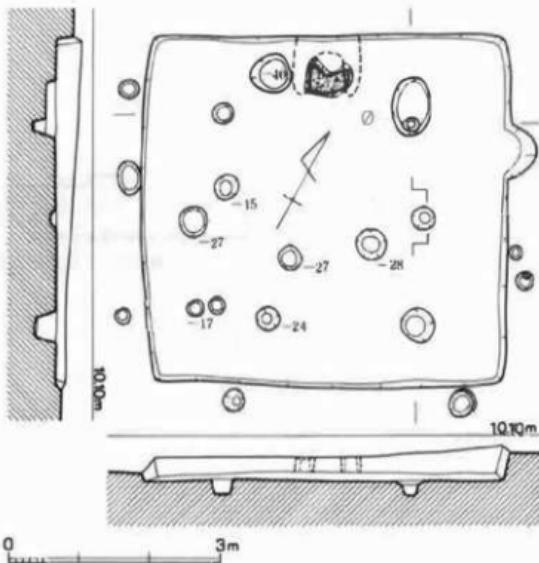
壹は5～7がある。5は6よりも新相を呈するが、頸部内側の縫は不明瞭である。6・7は円滑りで、7は鉢形土器の可能性がある。

鉢形土器は8がある。半球形の体部を有すが1/4の現存である。

2号堅穴住居跡（第5図）

南斜面で検出した
堅穴住居で、平面形
状は方形を呈する。
規模は4.50m×5.10
m、深さは北壁で
38.0cm。床面積は
24.76m²である。支
柱は4本であるがい
ずれも浅い。北壁の
中央にはカドを付
設する。支柱軸から
主軸方位はN 29°W
を示す。

遺物は埋土中から
少量の土器片と砥石
片が出土したが、現
示可能な土器はない。



第5図 2号堅穴住居跡実測図(1/80)

出土遺物

石器（第6図）

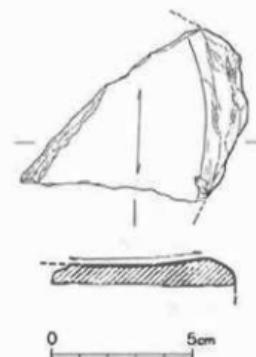
練泥片岩製の砥石片がある。現存での研面は1面で、石皿を再利用した可能性がある。埋土中

からの出土である。

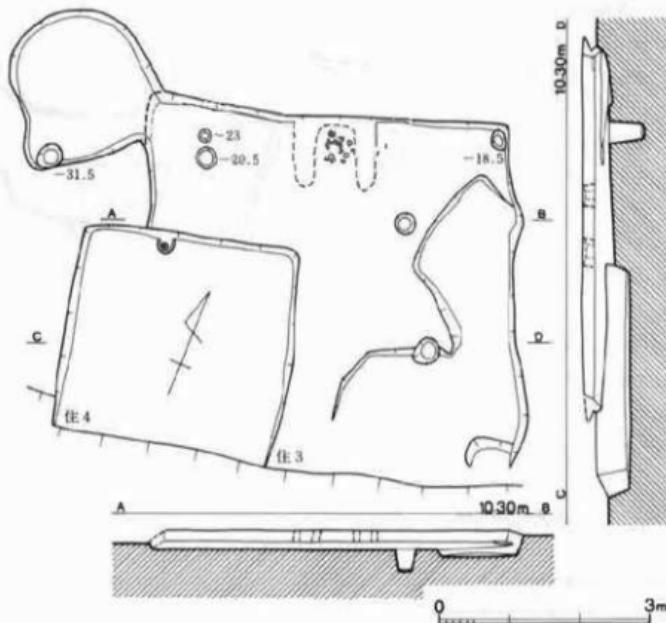
3号竪穴住居跡 (第7図)

調査区の南斜面で検出した竪穴住居跡で、4号住居と重複する。南壁は削平され遺存しないが、平面形状は方形であろう。規模は北壁のみ計測可能で5.20mを測る。支柱は現況で2本を検出したが、本来は4本である。北壁の中央には「U」字状のカマドを付設しており、カマド内には鉢の小片が散在していた。

出土遺物は土師器の甕・鉢、須恵器の坏身・高杯がある。



第6図 2号竪穴住居跡出土石器
実測図(1/3)



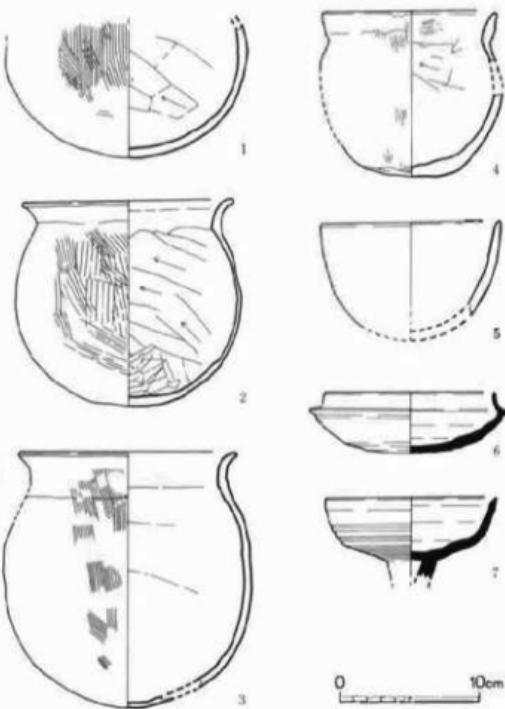
第7図 3号、4号竪穴住居跡実測図(1/80)

出土遺物

土器 (図版32 第8回)

土器類には1～4がある。1～3は同タイプの小型甌で反り気味に外反する口縁に球形の体部を有する。調製は外面が荒いハケ、内面は左廻りの荒い鉈削りで仕上げ、頸部内面は削りによる後をなす。2の口径14.8cm、3は15.5cmを測る。3は二次加熱を受けた。4は粗い作りの小型甌で、全体に二次加熱を受ける。口径12.4cm、器高11.7cm。3は半球形の鉢で二次加熱を受け赤変する。カマド内の支脚として再利用されている。復原口径12.8cm。

須恵器 6はほぼ完形の环身で口径12.1cm、器高4.25cmを測る。7は高杯の杯部で脚部を欠失する。口径12.1cmを測る。



第8図 3号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

4号竪穴住居跡 (第7回)

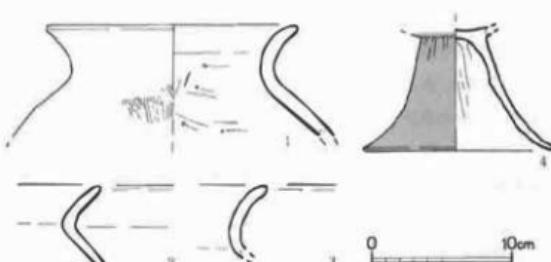
3号を切った状態で出土した小型の竪穴住居跡である。平面形態は南壁が削平され不明。規模は北壁が3.10m、深さ30.0cmを測る。床面上には柱穴その他の遺構は見当らず、詳細は不明である。

出土遺物は甕、高坏がある。

出土土器

土器(第9図)

4号竪穴住居出土
土器は3号住居との
混入が考えられる。
甕形土器3個と高坏
とがある。鋭く外反
する1・2と、反り氣
味に外反する3のタ
イプがある。1の復
原口徑18.0cmを測る。

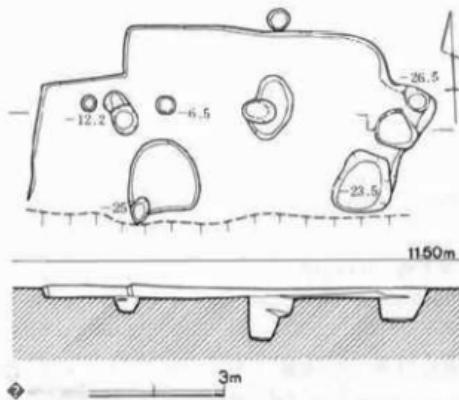


第9図 4号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

4は高坏で精製された土器である。坏部を欠失している。外表面は丹塗り磨研で、基部径13.6cmを測る。

5号竪穴住居跡(第10図)

3号住居の北側に位置する
竪穴住居跡で、約1/2を耕作
による段差で削平されている。
支柱は断面で示した内
の1本が深さ60.0cmを測り、支
柱の1本であることから、南
北に柱間を有す2本柱と考え
られる。北西壁の屈折部分は
ベット状遺構の一部であろう
か。その他詳細は不明で、出
土遺物も無いことから時期も
不明であるが、支柱2本であ
ることから弥生時代に比定で
きよう。



第10図 5号竪穴住居跡実測図(1/80)

8号堅穴住居跡(第11図)

南斜面の7号住居の東側に隣接して設けた堅穴住居である。平面形状は前壁が削平され、規模は北壁のみ計測でき4.60m、深さ25.0cmを測る。その他不明な点が多い。

出土遺物は把手付の輪ぬり、古より時代後期に比定できるか、カマドの付設は不明である。

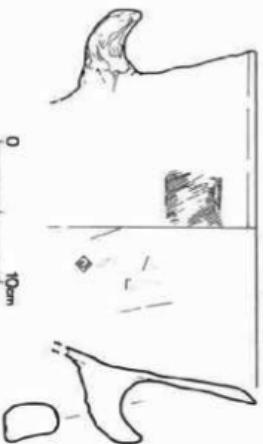
出土 遺 物

土 器 (36124)

実測可能な土器に把手付微片がある。外部から口縁部にかけては直線的で、脇部に扁平な把手を貼付している。赤褐色の色調を持ち、復原口径25.0cmを測る。

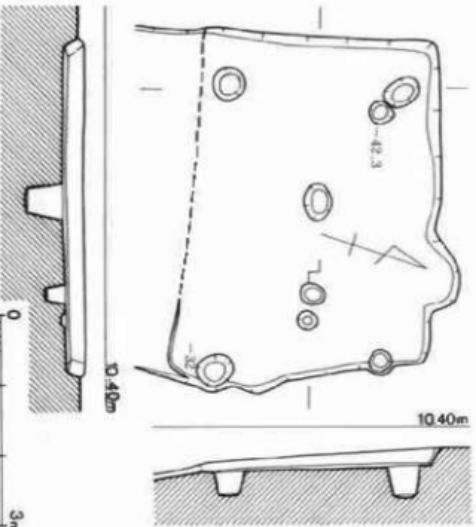
9号堅穴住居跡

(複版 2-(1)・(2) 第1308)



第12図 8号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)

南斜面の10号住居 隣接した堅穴住居跡である。南側壁は遺存しておらず、平面プランは明確でないが方形であろう。北壁の規模は4.20m、深さ20.0cmを測る。支柱は4本であろう。現在ではカマドの付設はみられず、床一面に灰土、炭化材が散在しており、火災に遭遇したことが判明する。



第11図 8号堅穴住居跡実測図(1/80)

出土遺物は土器器の甕・壺・高杯・盤、瓦
瓦器の瓦蓋・瓦身がある。

出 土 ◆ 物

土 器 (調査32 第14號)

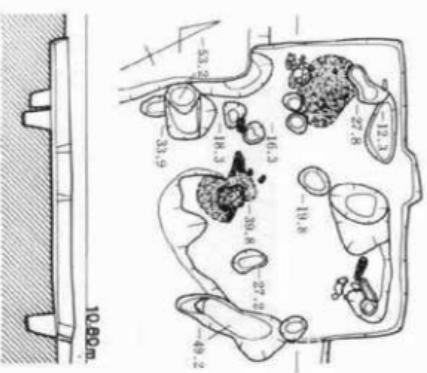
土器器 1は甕の口縁部で反り乍ら外反する。復原口径20.0cm。住居の東側落込みから出土。

2は高い高地の坪原川で内外面に内を金包する。復原口径12.0cmを測る。精製された土器で3の高杯と同一個体の可能性がある。

3は高杯の瓣部片で2と同様精製品である。器表面が摩耗し内壁りか否かは不明。

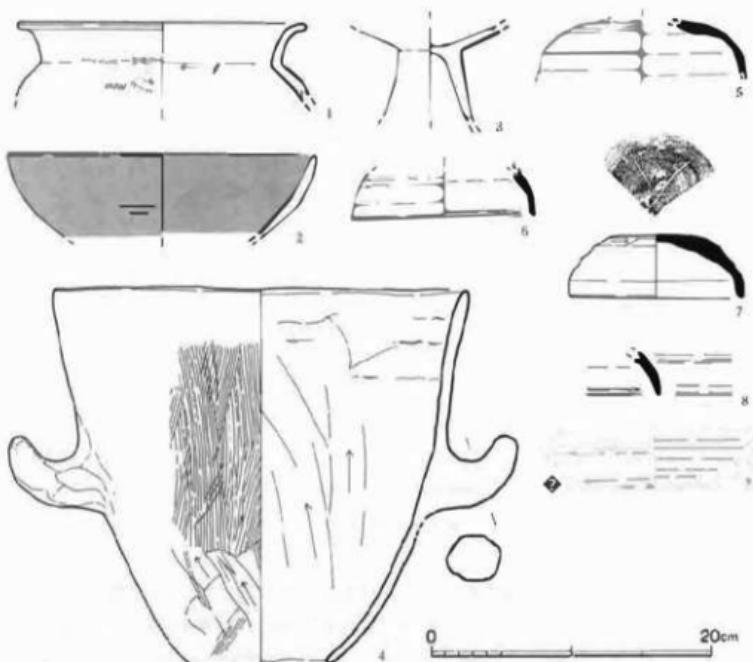
4は2は完形の把手付陶である。柄部は長いハケと籠解りで仕上げ、内面に粘土帶の接合面が残る。口径26.6cm、底径10.0cm、器高26.3cmを測る。

須恵器 瓦器には瓦蓋と瓦身がある。5～8は瓦蓋ですべて破片である。形態的には5・6が古くⅢ式、7・8はN.A型式となる。6の復原径13.0cm。7は器體が厚く天井外面にはヘラ記印を刻む。復原口径12.4cm、器高1.4cmを測る。9の瓦身も瓦片で2/3残存する。5の瓦身になるであろう。復原口径13.4cm、器高4.05cmを測る。



第134図 9号堅穴住居跡(1/80)





第14図 9号竖穴住居跡出土土器実測図(1/4)

10号竖穴住居跡 (図版 2-(i)・(z) 第15図)

9号住居より新しい住居跡で南側約1/2を欠失する。規模は北壁で5.0m、深さ10.0cmを測る。西壁際には焼土が残り、不整形ピットの部分はカマドが付設されていたと思われる。その他の付属施設は明らかでない。主軸方位はN56°Wを示す。

出土遺物は甕・塊がある。

出 土 遺 物

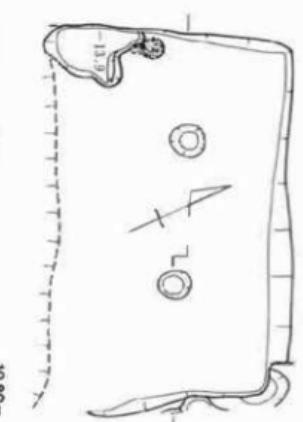
土 器 (第16図)

1号は小形の甕で、口縁部の外刃度は鋭い。調査は荒いハケと箒削りで仕上げる粗製土器である。口径2.4cmを測る。

2・3号は壺の破片で、2号の復原口径12.4cmを測り、内面に擦か付着する。

12号竪穴住居跡

(昭和3年(1928)1月16日調査)



調査区の南西隅で掘られた竪穴住居である。5号・6号周防状遺構を引っており、5号土壙に切られてい るため全容は把握できない。平面形

状は方形を呈し、復原径は9.0m ×

10.0m、深さ10.0mを測る。現況での

床面積は14.94m²である。支柱は

4本のうちの1本が残る。北壁壇の中央には遺存状態の悪いカマド

が残る。その他井戸は不明である。

遺物は住居の南側から出土して いるが、調査した土器は5号土壙 の土器も混入してより時期がある。器種は甕・壺がある。

出 土 遺 物

甕 瓶 (第1886)

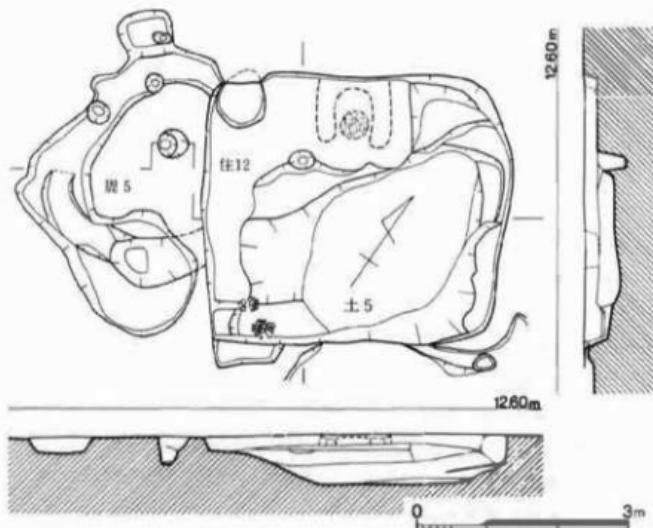
数多くの甕の破片が出土しているが、時期差が認められ竪穴住居と5号土壙が完全に重複することから、改上げ時に混入した可能性がある。5号土壙からみると1～5、8～10、13が共存すると考えられ、7世紀中葉の墳塚の時期が示えられる。これらの土器は、5号土壙に伴うと考えられる。

12号竪穴住居に伴う土器群は、6、7、12、14、15であろう。これらは6世紀60年代～終末期に比定できよう。

第15図 10号竪穴住居跡出土土器実測図(1/80)



第16図 10号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



第17図 12号堅穴住居跡、5号周溝状遺構、5号土壤実測図(1/80)

1、2は同タイプの甕で、短點に鋭く外反する口縁部を有す。復原口径20.0cm、19.0cmを測る。3は鋭く外反する口縁に張りのある肩部を有す。4・10は肥厚する口縁を有し、5、7、8、9は3と同様な口縁形状でありながら肩部の張りは鈍い。6、11、14は器體が薄く前者の一群に比較すると口縁部の外反度は鈍い。調整は全て荒いハケと箇削りで仕上げる。

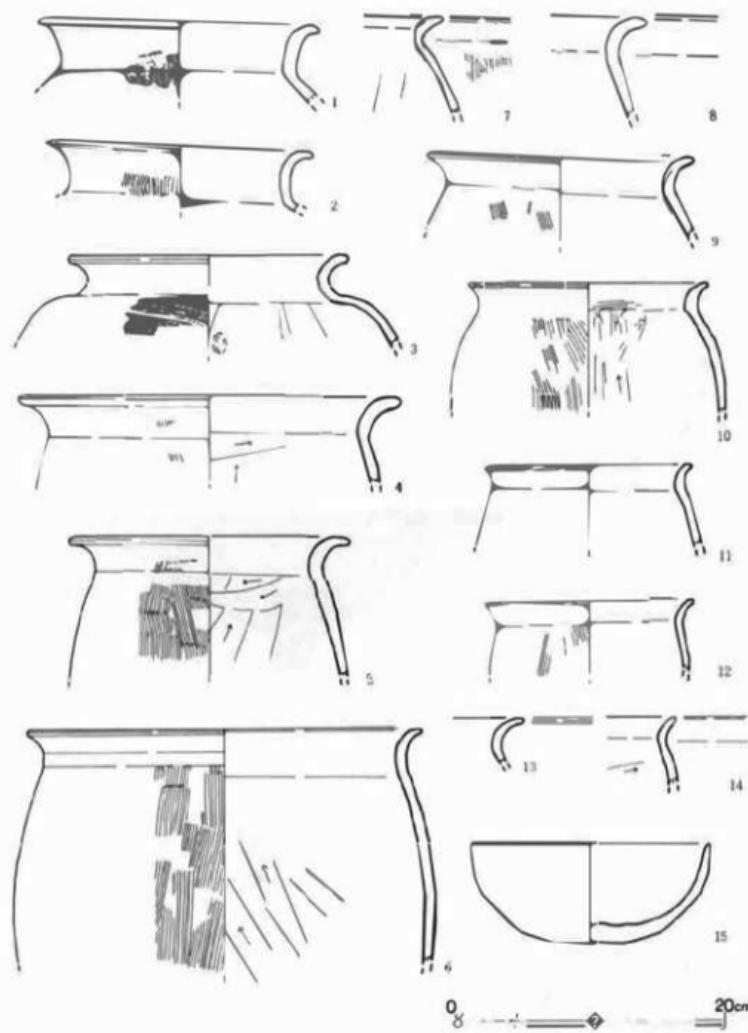
15は器體の厚い甕で、復原口径17.0cmを測る。住居の埋土中からの出土である。

13号堅穴住居跡(図版3-(i) 第19図)

調査区の南西側で検出した堅穴住居で、4号獨立柱建物と重複する。平面プランは方形を呈し、南北壁3.10m・2.80m、東・西壁3.20m・2.90m、深さ10.0cmを測る。床面積は8.70m²を測る。床面は貼床部分を掘ったため2/3が一段深くなる。出土土器からカマドが付設される時期であるが検出できていない。その他詳細は不明。

遺物は甕・瓶の破片がある。

出土 遺 物



第18図 12号整穴住居跡出土土器実測図(1/4)

土 器 (図版20)

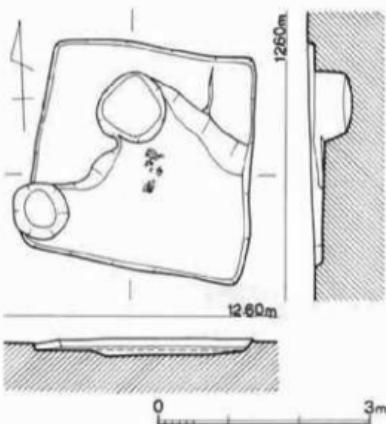
1は小型変の小片で鋭く外反する口縁部を有す。胎土には砂粒の他、赤褐色粒子を含む。調整はハケと箒削りで仕上げる。休面から出土した。

2は楕の小破片で住居跡の埋土中から出土である。

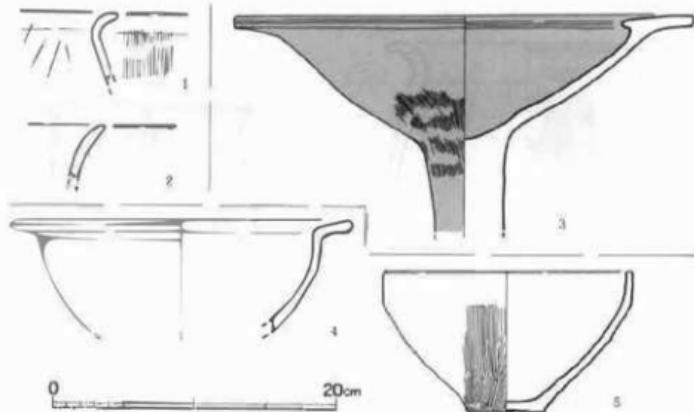
14号竪穴住居跡出土遺物

土 器 (図版32 第20)

3の高杯がある。脚根部を欠失する。口縁部は鋸先状を呈し、体部の丸味は少ない。現存での脚部はスマートな柱状を



第19図 13号竪穴住居跡実測図(1/80)



第20図 13号-15号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

なす。調整は内外面とも丹塗り磨研であるが一部外面に極細のハケが認められる。胎土には微砂粒を多く含む。角閃石と赤褐色粒子も少員含んでいる。口径32.6cm。屋内土壤内からの出土である。

15号坑（住居跡）（図版3-（1） 第21図）

3軒の堅穴住居と
の重複がある。15号
は17号住居より古
く、104号住居より
新しい。平面形状は
長方形を呈する。北
壁は人半が施道によ
り削平を受けている
ため、規模の推定が
できない。支柱は2
本と思われるが、南
側の1本は検出でき
ていない。床面中央
にはH40.0cm、深さ
5.0cmの切を掘込ん
でおり、底面には焼
跡が残る。東壁寄りには開口長方型の層内土壙を設けてい
る。長辺85.0cm、短辺66.0cm、深さ
25.0cmを測る。

遺物は陶片・鉢が入る。

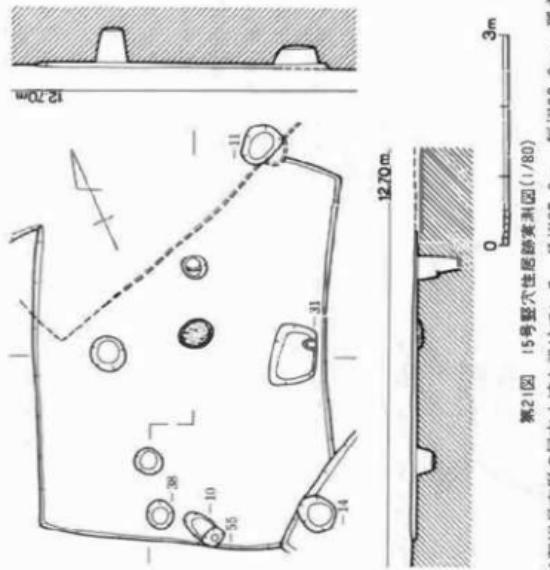
出土 遺 物

土 器（第20回）

4は高杯の外腹片で、内側する逆「L」字状の口縁部を有し、腹部は半球形状を呈する。胎上
は萬杯には多く含み、煮味槽色を呈する。復原口径24.2cmを測る。
5は直口鉢で細味の底部を行す。調整は外側がハケ、内面はナデで仕上げる。外面に二次加熱
を受け焼く赤変する。口径17.6cm、底径5.7cm、深さ9.8cmを測る。

16号堅穴住居跡（図版3-（2） 16 2022回）

調査区の西側で検出した堅穴住居跡で、平面形態は長方形を呈する。北側は細い施道で擾乱さ

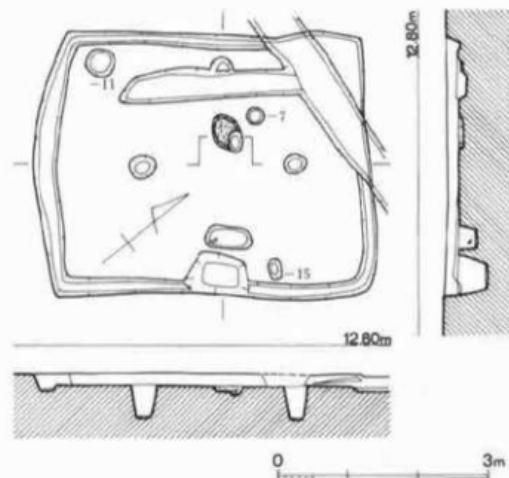


黒21図 15号堅穴住居跡（図1/80）

れている。規模は長辺4.20・4.50m、短辺は3.64・3.80m、床面までの深さ15.0cmを測る。床は硬く踏締められ、面積は16.19m²である。支柱は2本で18.0～50.0cmを測り、柱間は2.20mである。支柱間には梢円形の浅い炉を掘込み、中は赤く焼痕が残る。長壁の際には長軸80.0cm、短軸56.0cm、深さ42.0cmの屋内土壇を掘り、幅広の周溝と繋がる。屋内土壇の傍には深さ26.0cmの梢円形の土壇を掘込んでおり、中から流れ込んだ状態で砾石が出土している。西側の床面には周溝に並行して幅40.0cm、深さ10.0cmの溝が掘られているが、この上面は貼床を施していた。主軸方位は2本の支柱からN39°Eを示す。

遺物は土器、石器があり、器種は甕・小型丸底・高环・环の他、砾石が出土している。

出土遺物



第22図 16号整穴住居跡実測図(1/80)



第23図 16号整穴住居跡出土土器実測図(1/4)

二 磨 (国版32・33 第2386)

1・2は所蔵在内式の變形土器であるが、最大径が壺中央から下半に於る。在内式特有の「く」字状に外反する口縫部を有し、頸部内面の縫は明顯である。調査は1の外面が叩き真と不定方向のハケが擦かれており、前面は頸部付近に擦ハケ、脣部は磨剣を施す。口縫外面には指跡片痕を残す。2は外面が横方向の細い印記、前面は擦ハケと磨剣を併存する。両者ともが褐色色鉱を多く含む。1の復原口径19.0cmを測り、埋土中からの出土である。

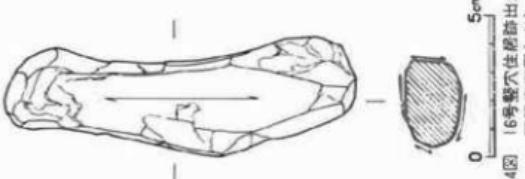
3・4は小型丸底形である。3は他の土器よりも新相を呈し、親人(5世紀初頭～前後)の可塑性が強い。口縫部は僅かに内側し、擦褐色を呈する。復原口径12.0cmを測る。埋土中からの出土である。4は在内式變に共存する小型丸底で、直線的に口縫部は延び、体部は肩部頸部を屈する。該部は尖り底である。調査は外面がナテ。体部内面は細いハケを施す。口径13.7cm、器高10.1cmを測る。

5は前項で杯部は浅い丸底を呈する。脚部は無いスカート状で、1/4の浅存在ため明らかでないが、穿孔は3ヶ所であろう。調査は2以前が磨耗しているが鬼神形と考えられる。口径15.5cm、復原復原径10.0cm、器高9.9cmを測る。埋土中からの出土である。

6は6・7がある。6は

つくりが机く外面前底部付近
は磨剣を施す。7はやや
小縁の环で磨削まで仕上げ
ている。外面には黒繪り
(漆?)が残る。前者の復

原口径13.6cm、器高4.3cm
を測り、貼床中からの出土。
である。後者は復原口径
10.0cmを測り、埋土中から
の出土である。



第24図 16号墳穴住居跡出土



第25図 18号墳穴住居跡出土石器実測図(1/3)

石 器 (国版33 第2498)

手持ちの仕上げ砥石が1点ある。石材は片岩質砂岩で、刃面は4面である。全長12.5cmを測り、4面とも研込まれ凹面状を呈する。附土層に隠蔽するビット内から出土した。

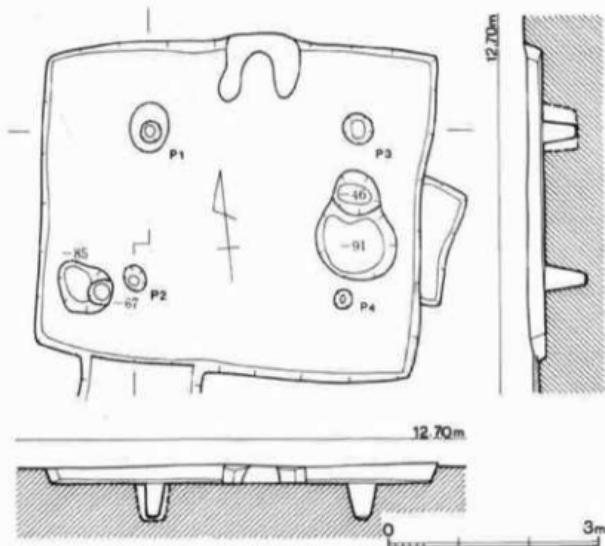
18号堅穴住居跡出土遺物

石 器 (図版33 第25回)

大小の砥石が3個出土している。1は粘板岩質砂岩で、研面は2面を使用している。現存長11.0cm、厚さ3.0cmを測る。仕上げ砥石である。2は砂岩の砥石で2面を使用している。荒砥である。3は便賈砂岩製の仕上げ砥石で、研面は3面でかなり使用され研ぎ減りが認められる。現存長15.0cm、厚さ2.0cmを測る。

19号堅穴住居跡 (図版4-(1)・16-(4)・17-(1) 第26回)

33号堅穴住居を切った状態で検出した堅穴住居で、平面形状は歪な長方形を呈する。規模は南・北辺5.40m・5.50m、東・西辺4.60m・4.10m、深さ20.0cmを測る。床面積は23.05m²である。支柱は4本を数えるが、住居の柱間空間が平面プランに沿った形状を呈する。柱間はP₁-P₁が2.14m、P₁-P₂が3.00m、P₂-P₃が3.00m、P₃-P₄が2.40mを測る。



第26回 19号堅穴住居跡実測図 (1/80)

北壁の中央には「ひ」字状のカマドを設けている。カマドは黄褐色粘土と黒灰色土で構築し、中央には黄褐色の粘土の高まりの上に土製支脚を立てている。支脚は横めて長い、二次加熱を受け非常に脆く取上時に破壊した。

主軸方位は支柱の南北線上でN12°Eを示す。遺物はカマド周辺から出土しており甕、鉢、手捏ね土器の他、不明石器、土製品がある。

出 土 遺 物

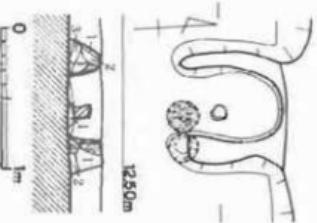
土 器 (80版33 3928號)

甕には1、2の2タイプがある。1は反り気味に外反する、

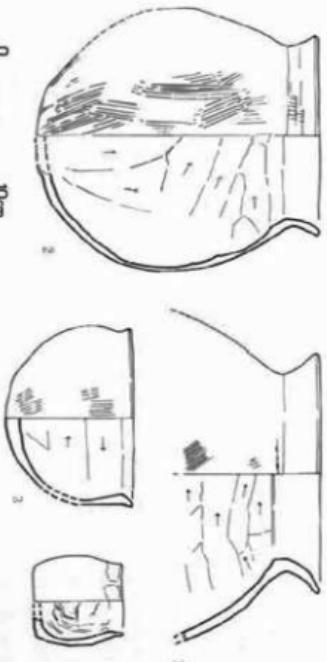
細狭の口縁を有し、肩部はやや脹らみ、一見壺の形状を呈する。2は純く外反する口縁部を持ち、肩部は微削で腹部から下半にかけ2は丸味を有す。両者とも調整は内面が無い窓削り、外面が無いハケで仕上げる。2の器底は複い。1は里土中からの出土で、口径17.0cmを測り、2は口径14.2cm、器高18.7cmを測り、カマド左側傍から出土した。全体に二次加熱を受けた変する。

3は平底形狀の鉢で、口縁部は肥厚させ僅かに外反する。調整は窓削りとハケで仕上げ、外面上に二次加熱を受ける。口径12.4cm、器高9.05cmを測る。カマド右側から出土。

4は手捏ね土器で約1/2壺形。平底を呈し、腹径11.5cm、底径5.0cm、器高6.2cmを測る。



第2図 19号窓穴住居跡 カマド
実測図(1/40)



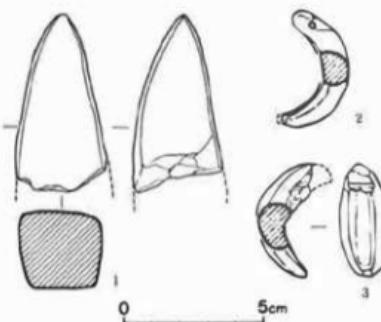
第28図 19号窓穴住居跡出土土器実測図(1/4)

石器 (第29図)

1は方柱状の不明石器である。一方は尖る。表面が風化し灰白色を呈する。石材は安山岩質である。埋土中から出土した。

土製品 (図版33 第29図)

2、3は土製の勾玉である。2は細味のつくりで内側を扁平にする。全長4.1cmを測り、胎土・焼成とも良い。カマド右傍から出土。3の勾玉は2よりも粗いつくりで、内側は凹面をなす。胎土・焼成とも2同様良い。全長4.0cmを測り、カマド内から出土した。

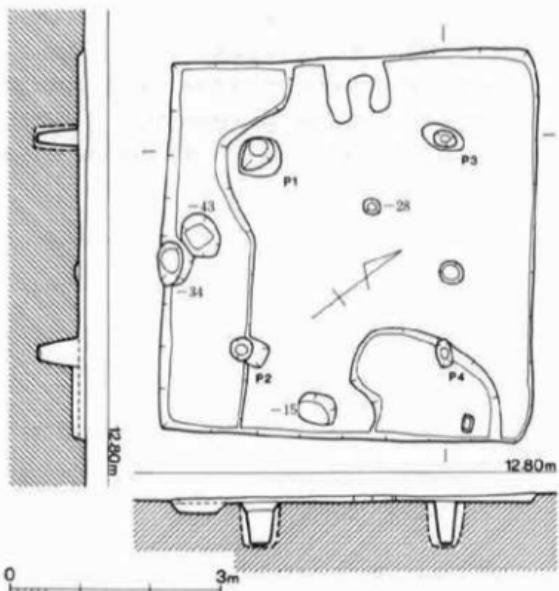


第29図 19号竪穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2)

21号竪穴住居跡

(図版3-(2) 第30図)

31と32号竪穴住居跡（殆ど遺存しておらず実体不明）と重複した住居跡である。平面プランは方形を呈し、規模は一辺5.20（北壁は5.60m）mを測る。床面までの深さは10.0cm弱で遺存状態は悪い。床面積は26.29 m²である。前西壁沿いは住居の掘削時に深く掘り、後に貼床を施している。支柱は規則



第30図 21号竪穴住居跡実測図(1/80)

性のある4本柱で、柱間はP₁—P₂は2.90m、P₁—P₃は2.65m、P₂—P₄は2.90m、P₃—P₄は3.05mを測る。

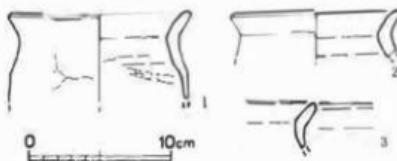
カマドは北西壁に付設するが、住居自体の遺存状態が悪いため不明な点が多い。カマドの付設する方向は、12号住居と同一方向をとる。住居の主軸方位はN 53°Wを示す。

出土遺物は少なく小型の甕がある。

出土遺物

土器(第31図)

1～3の小型の甕がある。いずれも破片で粗い作りである。口縁部は厚く、しかも「く」字状に緩く外反する。全て二次加熱を受ける。1の復原口径13.0cm、2は12.2cmを測り、埋土中からの出土である。



第31図 21号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

22号竪穴住居跡出土遺物

石器(第32図)

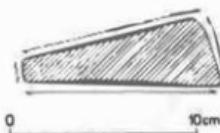
砂岩製の砥石が1点ある。研面は4面で、荒砥として使用したものであろう。現存長10.5cmを測る。屋内土壤からの出土である。



23号竪穴住居跡出土遺物

石器(図版33、第33図)

大小の砥石が3点出土している。1は大型の花崗岩質砂岩製の砥石で、表面の2面を研面とする。周縁は自然面を残す。2面とも使用頻度が高く凹面をなす。現存長22.3cm、厚さ4.0cmを測る。床面からの出土である。2は手持の仕上げ砥石で、現存での研面4面を残す。灰白色を呈し、花崗岩質砂岩製であろう。側面には鋭い研痕がある。埋土中からの出土である。3は全長4.5cmの小型の仕上げ砥石で断面は三角形を呈する。石材は鉛型に使用されるもので、花崗岩質砂岩かアブライド



第32図 22号竪穴住居跡出土石器
実測図(1/3)

製であろう。研面は3面である。住居のビット内からの出土である。

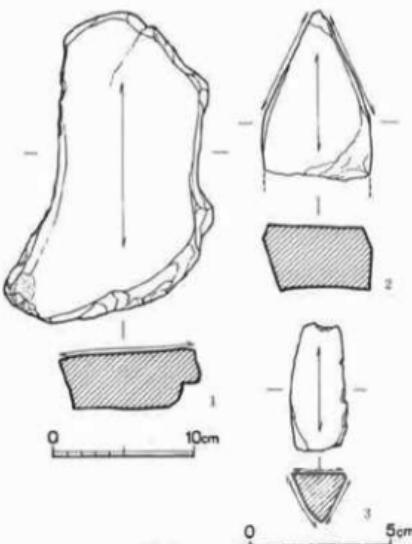
24号竪穴住居跡出土遺物

石 器 (図版33 第34図)

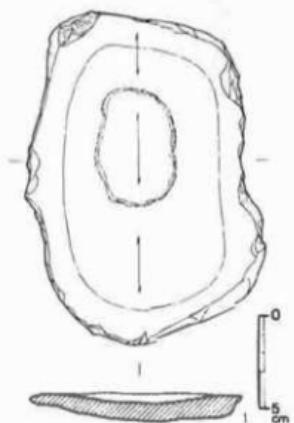
1は綠泥片岩製の石皿があるが、砥石として使用した可能性もある。凹状の平滑な面は表のみで他は自然面を残す。周縁は欠失している。これに伴う摩石は出土していない。現存長17.5cm、厚さは中央部で1.0cmを測る。屋内土壇からの出土である。

2は輝緑岩製の石庖丁片で2/3を欠失する。刃部の研ぎ出しは鋭く、背は丸くつくられる。床面からの出土である。

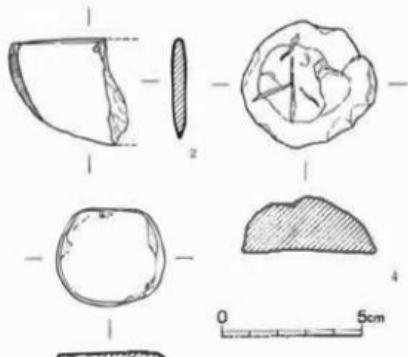
3は雲母片岩の石製円盤である。周



第33図 23号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2 · 1/4)



第34図 24号竪穴住居跡出土石器実測図(1/3)



第35図 24号竪穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2)

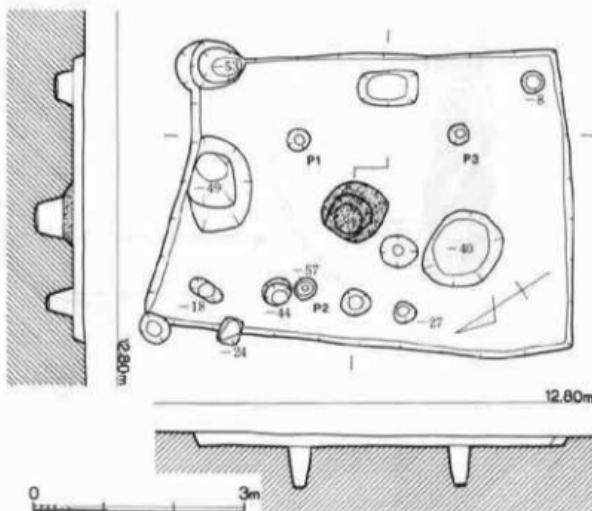
縁は丁寧な面どりをしている。径は3.9cm×3.5cm、厚さ0.5cmを測る。重さは15.6gである。

土製品（図版33 第35回）

4の蓋状土製品がある。断面形は鉗状を呈する。胎土はやや粗く、焼成は良い。径は4.8cm×4.5cmの不規則形を呈する。厚さは2.0cmを測る。屋内土塙からの出土である。

27号堅穴住居跡（第36回）

21号住居の南西に位置する住居跡で31、32号住居と重複する。平面形状は長方形を呈するが北壁は歪む。規模は長辺が5.20m×6.10m、短辺3.90m×4.30m。床面の深さ15.0cm前後を測る。床面積は20.49m²である。支柱は4本で、この内の1本は検出できていない。柱跡はP₁～P₄



第36回 27号堅穴住居跡実測図(1/80)

が2.10m、P₁～P₂ 2.30mを測る。東壁沿いには楕円形の屋内土塙を掘っている。床面中央部のピットは弥生時代後期のもので、炉址と重複していた。炉の周囲には炭化材が床面上に接しており、焼失住居であることが判る。

遺物は壺・甌・瓶・高杯・支脚・手捏ね土器の他、砥石がある。

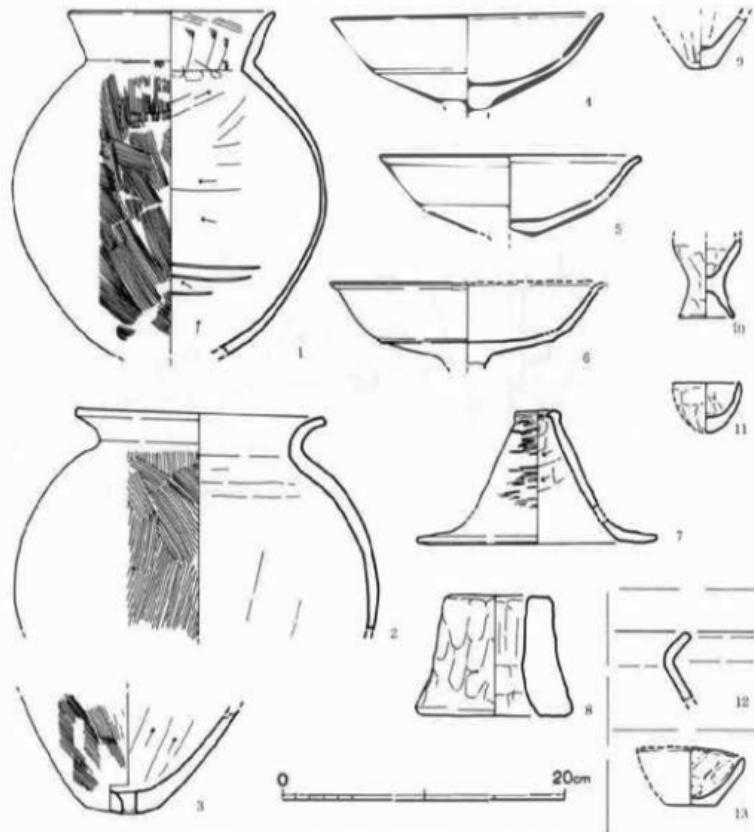
出土遺物

土器（図版33・34 第37回）

1、2の壺がある。1は「く」字状に外反した口縁部に球形の体部を有した壺である。調査は

外面がやや細かいハケ、胴部内面は箝削りで仕上げ、器壁を薄くする。二次加熱を受け外面に煤が付着する。口径14.6cm、胴部最大径22.2cmを測る。屋内土壙内からの出土である。2は鋭く外反する短い口縁部に張りのある球状胴部を有す。調整は外面が1に比較して荒いハケ、内面は箝削りで仕上げるが1よりも器壁が厚い。胎土、焼成とも1より劣る。口径17.7cmを測る。埋土中からの出土である。

3は楕円尖り気味の丸底に焼成前の孔を穿つ。調整はハケと箝削りで仕上げる。おそらく砲弾



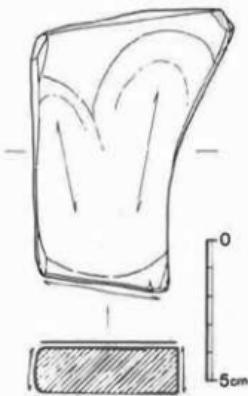
第37図 27号-29号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

状の瓶であろう。

高杯は4～7がある。4・5は同タイプの杯部で、6の底部は平坦で体部は丸味を有す。口縁部は絶じて緩く外反し、6は外反度が強い。4の口径19.2cm、5は18.5cm、6は復原口径19.6cmを測る。7の脚部はスカート状に聞く柱状部を有し、裾部で強く屈折する。調整は外削横方向の細い跡、内面は横方向の剃削りで仕上げる。精緻な高杯である。裾部復原径17.0cm。全て埋土中からの出土である。

8は器高の低い支脚で器壁を厚くつくる。調整は指頭圧痕とナデで仕上げる。全体に二次加熱を受け赤変する。口径7.6cm、底径11.2cm、器高8.4cmを測る。

手捏ね土器は9～11がある。10は口径4.0cmの脚台が付く。全て埋土中から出土した。



第38図 27号竪穴住居跡出土石器
実測図(1/2)

石 器 (図版34 第38図)

砂岩質の中底がある。すべての面を研面とし、使用頻度が高く凹面をなす。現存長10.0cmを測る。住居内のピットからの出土である。

28号竪穴住居跡出土遺物

土 器 (図版37)

12は「く」字状に外反する口縁部を有す甌である。焼成は良く、胎土に砂粒の他、赤褐色粒子を若干含む。埋土中からの出土である。

29号竪穴住居跡 (図版4 第39図)

弥生時代後期の105号住居と完全に重複した竪穴住居跡で、28号住居を切っている。平面形態は歪な長方形を呈し、規模は長辺5.66m・5.20m、短辺3.20m・4.40m、床面までの深さは10.0～20.0cmを測る。床面積は20.05m²である。支柱は4本であるが、その内の1本は不明である。柱の配置も平面プランに沿った位置に掘込んでいる。

一方の長辺壁には「U」字状のカマドを付せるが、調査時に破壊した。カマドを付設する位置は柱間からみると片寄っている。住居の主軸方位はN44°Wを示す。

出土遺物の図示可能なものは手捏ね土器があるが、弥生時代の土器であり混入であろう。住居

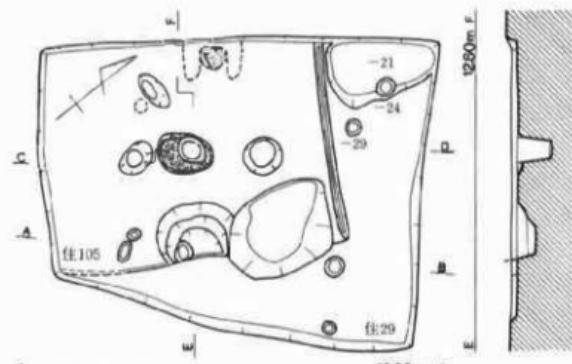
の時期はカマドの付設状況から12号、21号住居と同一時期であろう。

出土遺物

土器

(図版34 第37図)

13の手捏ねの鉢がある。復原口径7.6cm、底径3.5cm、器高4.1cmを測る。住居内のピットからの出土で泥入である。

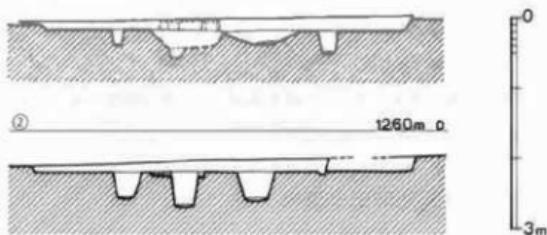


30号竪穴住居跡出土遺物

土製品 (第40図)

二次加熱を受けた土器片再利用の土製円盤がある。周縁の面取りは粗く、一方

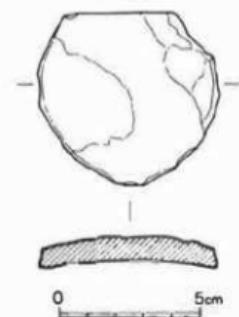
は直線的に磨る。6.4cm × 6.0cmを測り、重さ38.3gである。埋土中からの出土である。



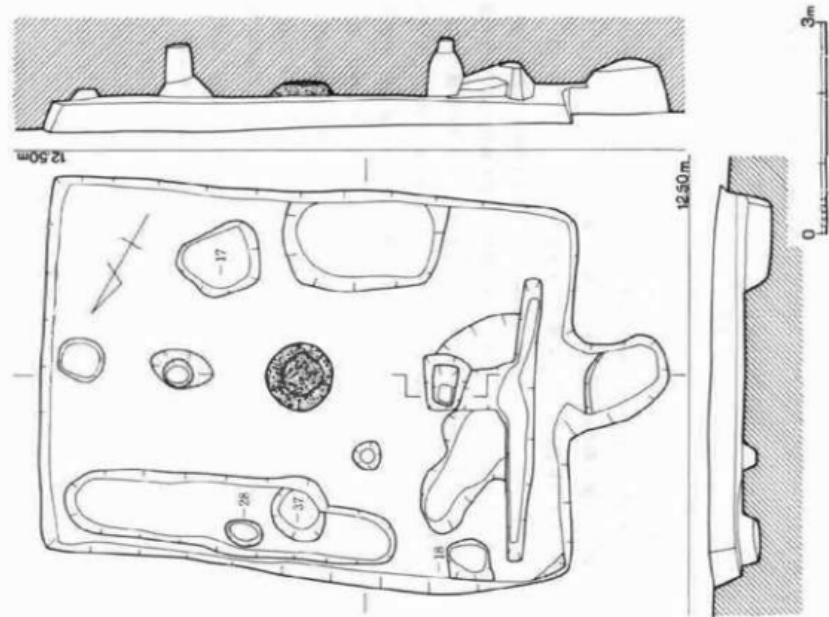
第39図 29号、105号竪穴住居跡実測図 (1/80)

34号竪穴住居跡 (図版5-(1)・17-(2)(3) 第41図)

調査区の南側で検出した大型の竪穴住居跡である。平面プランは長方形を呈する。規模は長辺7.50m、短辺5.10m・5.30m、床までの深さ45.0cmを測る。床面積は37.33m²である。支柱は2本で、西側の柱穴は方形を呈する。柱間は3.80mを測る。柱間の中央には円形の炉を設け、内面は焼痕が著しい。北壁沿いには長円形の掘込みがあるが上面は貼床を施していた。南壁際には長軸2.26m、短軸1.40m、深さ38.0cmの屋内土壙を備えている。さらに、西側壁と支柱間に長さ4.0m、幅30.0



第40図 30号竪穴住居跡出土
土製品実測図 (1/2)



第41図 34号室住居跡実測図(1/80)

cm～40.0cm、深さ50.0cmの構を掘込んでいる。この構の機能を考える上で脇邊に突出した削込み部を出入口とすれば、この構は一種の廻廊を明込む構と考えることもできよう。住居の主軸方位は北偏東を採用すればN65°Eを示す。
遺物は多く、床面直上の剝土中に収容された状態で出土した。器種は砂・壺・鉢・瓶・杯・器台・手舟ね土器の他、砾石がある。

出土遺物

土器(図版34・35 第42・43・44・45図)

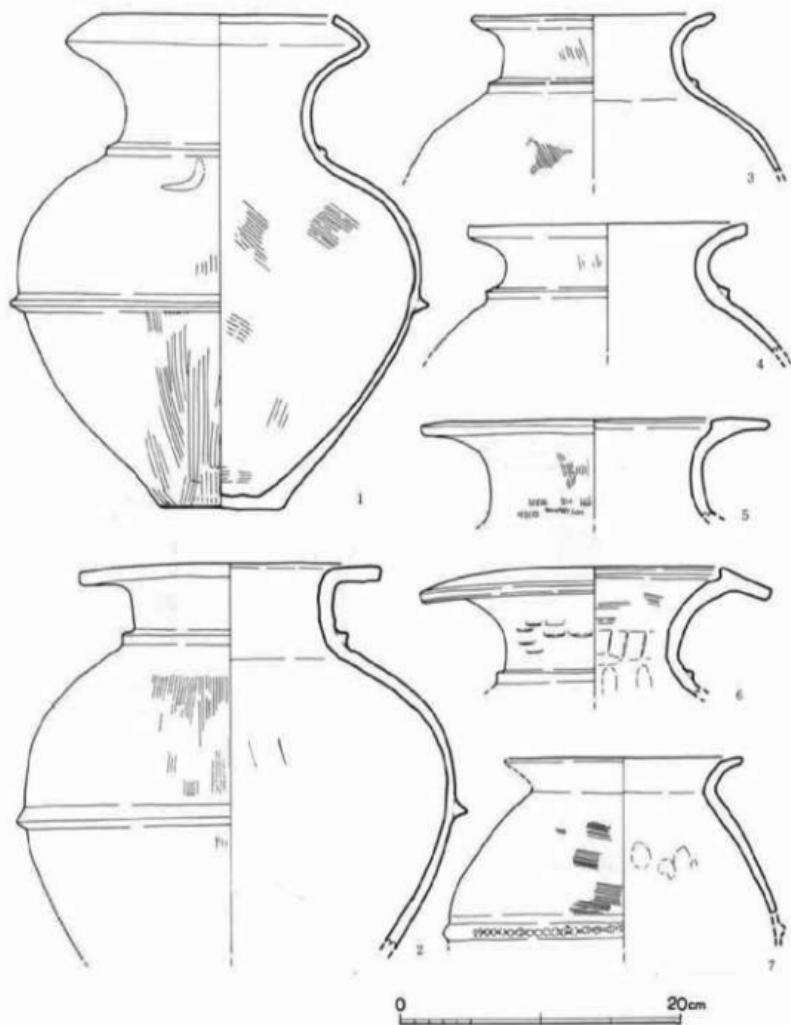
壹は1~10がある。1は所謂袋状口縁壹で口縁内外に不明瞭な棱をなす。頸部は短かく、肩部は大きく張る。肩部に三角凸沿、胴中央部には台形凸沿を貼付する。復原口径16.6cm、底径8.9cm、器高35.1cmを測る。埋土中からの出土である。2は鋤先口縁壹の系譜を引く壹で、鋤先部は退化する。肩部と胴部に三角凸沿を貼付する。外面は二次加熱を受ける。復原口径21.4cm、胴径32.0cmを測る。埋土中からの出土である。3、4は2から発達した壹で形態的には新相を呈する。3の口径17.4cm、4は20.0cmを測る。両者とも埋土中からの出土。5、6は鋤先口縁壹で、6の口縁上面は外傾する。5は二次加熱を受ける。前者の口径24.8cm、後者は25.0cmを測る。7は外反度の鈍い口縁の壹で肩部は撫肩である。胴部には低い三角凸沿に株状の刺み目を配する。復原口径17.0cm。8は鈍く外反する口縁部を有し、直口壹に近い。胴部は大きく張り、最大径が胴中央部にある。肩部の凸沿は剥離する。口径16.9cm、底径8.8cm、器高32.9cm、最大径30.9cmを測る。9、10は口縁部は欠失する。両者とも胴中央部に台形凸沿を貼付する。9の胴部は張りがあり安定感がある。壹の調整は總じて外面ハケ、内面ナデで仕上げる。全て埋土中からの出土である。その他、口縁に円形浮文を貼付する大型壹がある。

壹には11、13~17がある。13、15は同タイプの壹で「く」字状に外反する口縁部を有すが、頸部内面の棱は不鮮明である。肩部は張りがある。13の口唇部は沈線が廻る。両者とも二次加熱を受けている。13の口径33.0cm、底径9.7cm、器高41.7cm、15は口径32.0cmである。14は低い脚台付の完形品で13に比べると口縁は立ち、頸部内側の棱も明瞭である。肩部は張り、胴下半は細まる。口径36.0cm、底径12.9cm、器高47.7cmを測る。11、16、17は小型の壹で11の底部は大きく安定感がある。16は二次加熱を受け赤変する。17は逆「L」字状の口縁に扁平な胴部を有すタイプで丹塗り土器として使用される壹であるが、17の壹は調整を荒いハケで仕上げる。口径15.2cm、底径7.3cm、器高13.9cmを測る。調整は總じて外面ハケ、内面はハケとナデで仕上げる。全て埋土中からの出土である。

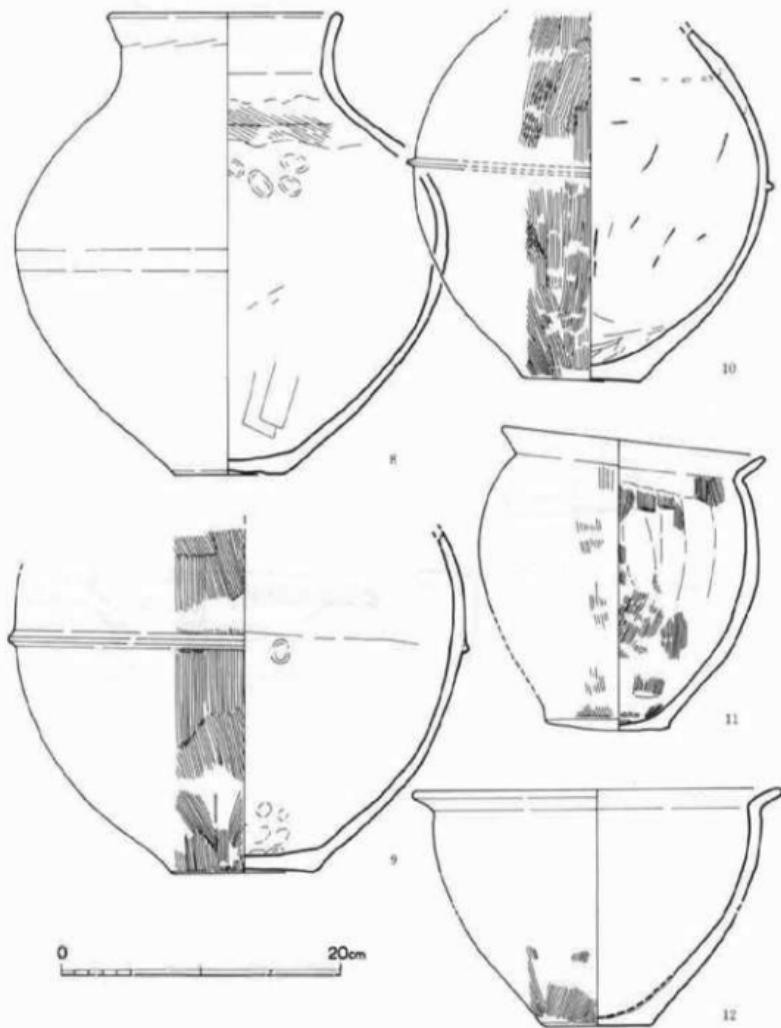
鉢は12、18、19がある。12、18は同タイプの鉢で短く「く」字状に外反する口縁部を有す。12に対して18の胴部は丸味を持つ。18は内面に赤橙色の化粧土を塗布する。12の口径26.5cm、底径8.2cm、器高16.8cm。18の口径23.8cm、底径7.8cm、器高17.7cmを測る。19は器底の厚い小形の鉢でつくりが粗い。復原口径12.4cm、底径3.3cm、器高10.0cmを測る。すべて埋土中からの出土。

高杯は20の脚部がある。柱状部は上部が中実となる。調整は荒くハケで仕上げて器壁も厚い。器部径16.9cmを測る。

21は均整のとれた器台である。最小径が上半にあり、調整はハケとナデで仕上げる。外面は二次加熱を受け赤変する。口径14.0cm、複部径20.3cm、器高21.3cmを測る。埋土中からの出土。

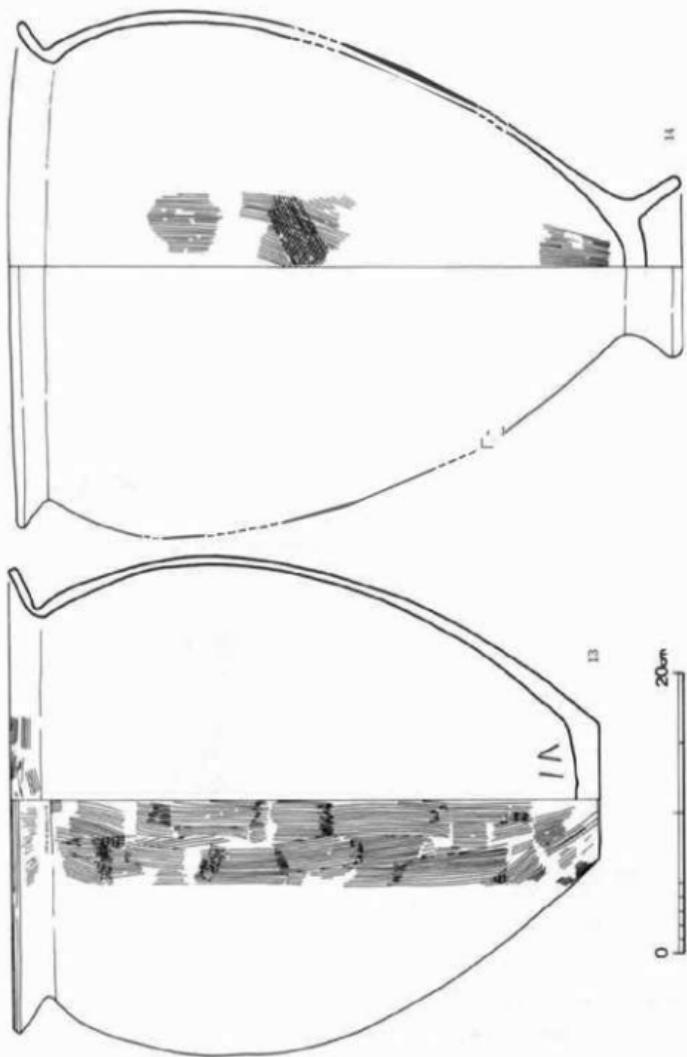


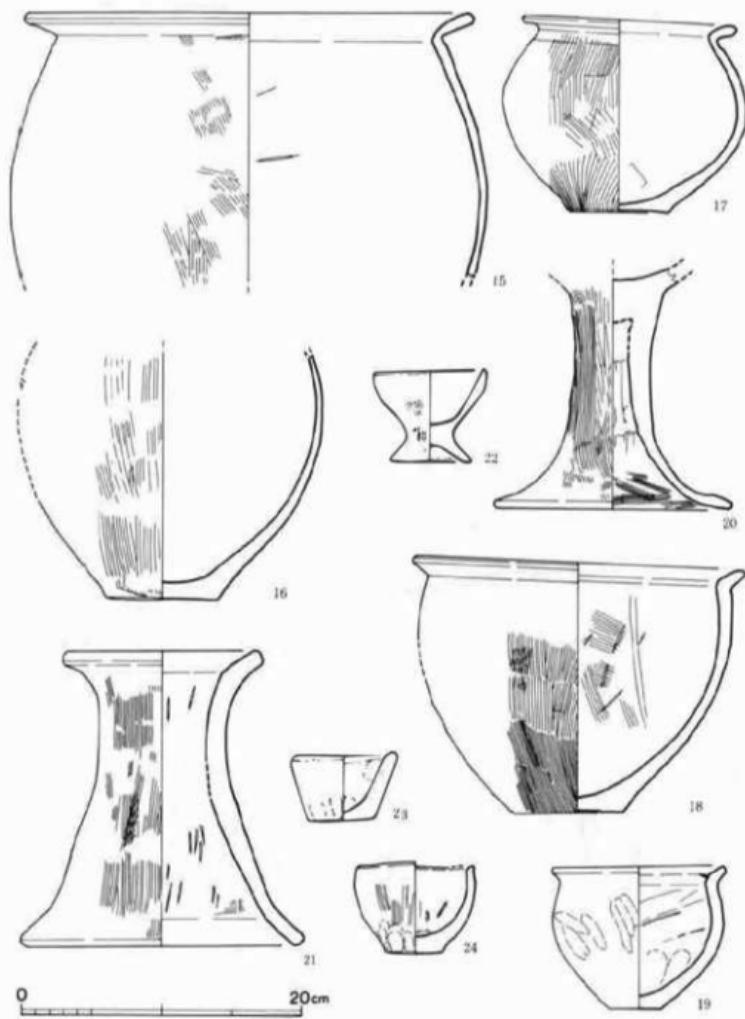
第42図 34号竪穴住居跡出土土器実測図その1(1/4)



第43図 34号竪穴住居跡出土土器実測図その2 (1/4)

第44図 34号竪穴住居跡出土土器実測図その3(1/4)





第45図 34号竪穴住居跡出土土器実測図その4(1/4)

手標42号土器には22~24cmある。22は側面透か戸を付の跡を残している。23は側面透か戸を残し、開部に刻痕がある。そなれ味のある体部に不安定な底部をなす。22は口径8.0cm、底径5.9cm、器高6.5cm、23の口径7.5cm、底径4.8cm、器高4.7cm、24の口径8.3cm、底径4.0cm、器高6.5cmを測る。すべて埋土中から出土。

石 工 (図版36 30-46・47)(6)

大小の砥石が4点ある。1は海土中から出土した雲母片岩の石材を使用した中へ船底石口である。研削面は2面で他は自然面である。表面の4・5に研削痕を残す。砥石としての質は良くない。現長17.5cm、2.6cmと云ふ特徴的の形である。外面は3面で加熱を受け柔軟する。現長19.7cm、3

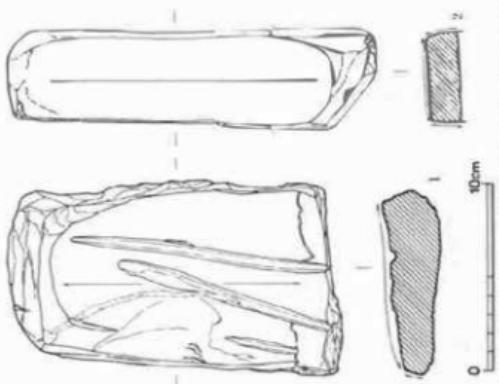
は砂岩製の瓦頭で、加熱を受け柔くあわせまる。4は1/2程度欠失した砂岩製の瓦頭で4面の切面を持つ。中風である。手標42号土器の出土。

35. 住居跡

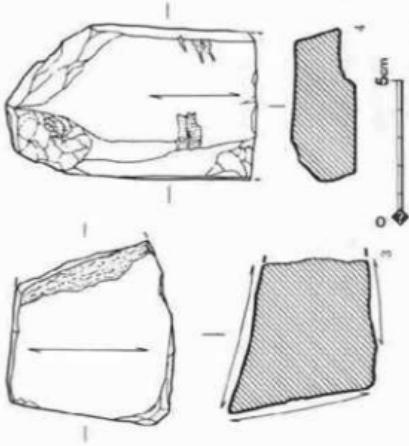
(図版5-(1)・17-(2) 37-38)(6)

36号住居に火災が倒された跡穴住居跡で、全容は殆ど把握できない。北壁と西壁が遺存するのみで、前者が3.70m、後者は3.80mを前り、ほぼ円形を呈する。地高は15.0cm前後である。その3箇所は不明である。

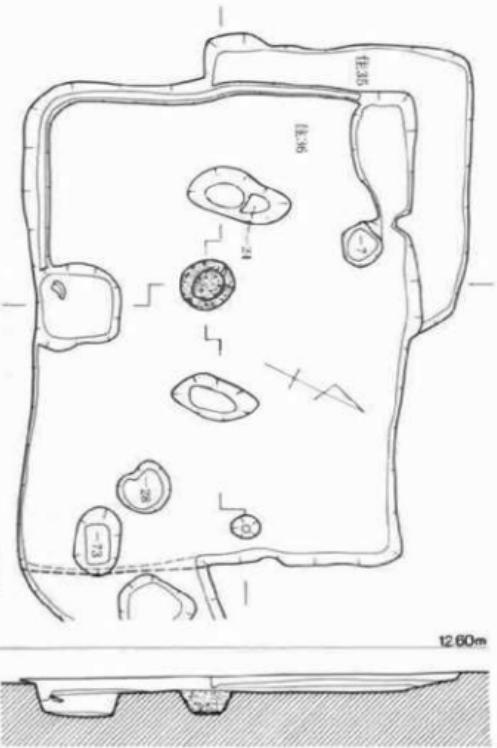
出土遺物は皆無であるが、後回初頭の36号住居より古い住居である。



第46図 34号堅穴住居出土石器実測図その1(1/3)



第47図 34号堅穴住居出土石器実測図その2(1/2)

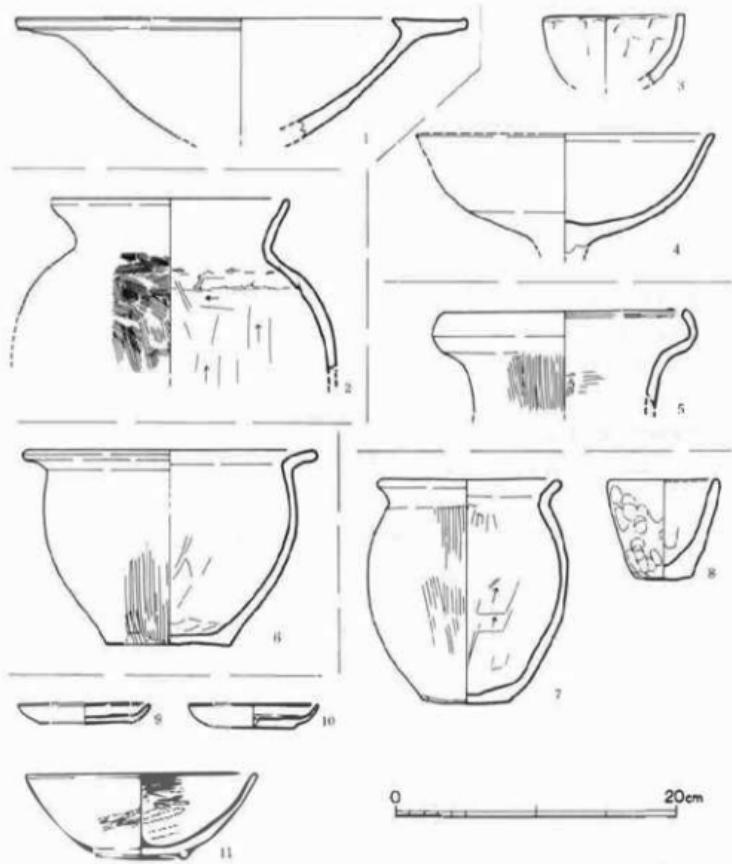


第48図 35号、36号壁穴住居測図(1/60)

36号壁穴住居跡 (図版 5-(1) 第186c)

34号の東側に隣接して營まれた壁穴住居で、34号(二工...エニコニ)にてられていている。平面形態は長方形を呈し、東壁の1/2が他の不規形遺構で割り切られている。規模は、南北が約7.00m、東西、東・西壁が5.50m、東西20.00mを測る。床面積は31.50m²で34号住居よりは小型であるが大型住居の範疇に入る。柱孔は2本で、柱間は3.00mを測る。柱間に円形の窓を備え、櫛き出しのためか深さ34.0mm深い。構造部には1.10m×1.20m、深さ30.0cmの窓孔が複数の壁内に残る。

出土遺物は柱間軸からN64°Eを示す。
主軸方位は柱間軸からN64°Eを示す。
出土遺物は極めて少なく覺る。→有機物可能な遺存があるのみで、移動時に露出したと考えられる。



第49図 36号～40号、43号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

出 土 遺 物

土 器 (第49図)

鋸先状口縁の高環の壺部片がある。胴部の丸味は少ない。胎土は緻密で、明るい橙色を呈する。摩耗しているが円滑りの可能性がある。復原口径32.0cmを割る。屋内土壤からの出土である。

37号竪穴住居跡出土遺物

土 器 (図版36 第49例)

2は直線的に広がる口縁部を有し肩部は弧曲。調整はハケと簾削りで仕上げ器壁を薄くつくる。肩部内面は粘土帯の接合部が明瞭に観察できる。口径16.9cmである。

石 器 (図版36 第50例)

1は便質砂岩製の砥石で1/3を欠失する。研面は5面で使用頻度が著しく凹状を呈する。

2は輝緑岩灰岩製の石庖丁であるが、出土土器とは共伴しないことから馳入である。刃部付近は使用痕（擦過痕）がみられ平滑になる。径1.0mmの孔は一方から穿つ。



第50図 37号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2)

38号竪穴住居跡出土遺物

土 器 (図版36 第49例)

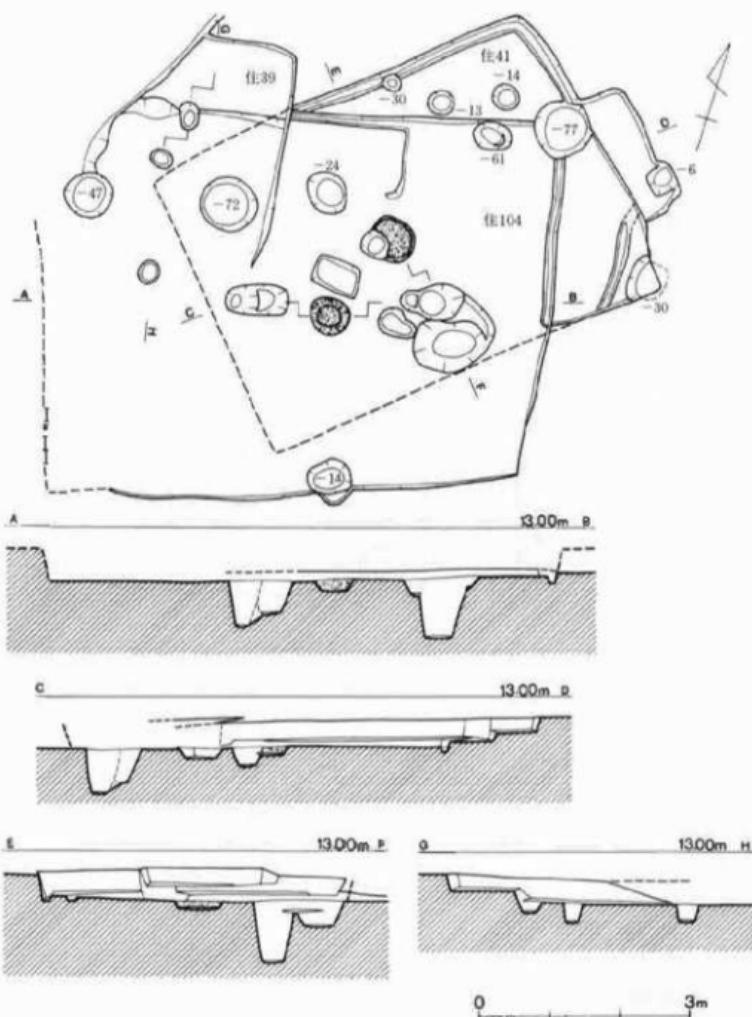
3の塊と4の高杯がある。3は塊の破片で胎土には砂粒と赤褐色粒子を含む。復原口径11.0cm。

4の高杯杯部は底部から胴部にかけての屈折は不明瞭で丸味を有す。胎土は緻密で砂粒が少ない。復原口径21.2cmを測る。

39号竪穴住居跡 (図版5-(2) 第51例)

当時住居は4軒の重複がある。40号住居より古く、41号・104号住居より新しい。大半が40号住居と農道で削平を受け全容は把握できない。平面形状は長方形であろう。支柱は2本で、柱間には床面が薄く赤変した箇所がある。東壁際には円形(径80.0cm、深さ72.0cm)の屋内土壙を設けている。北側は高さ18.0cmのベット状造構を付設する。その他詳細は不明である。

出土遺物は漆がある。



第51図 39号、41号、104号整穴住跡測図(1/80)

出 土 ◇ ◇

土 器 (第49號)

5の袋状口縁部の破片がある。袋部の縁は不明瞭で短い。調査はハケとナデで行なわれ、袋口部18.0cmを測る。

40号堅穴住居跡(調査5-(2) 第52號)

調査区の西端で検出した堅穴住居で39号住居を切っている。

平面形態は長方形で、規模は長辺5.31m・

5.00m、幅23.30m

・3.70m、壁高40.0

cmを測る。床面積は20.35m²である。支柱

は2本で、柱間に4

径34.0mmの穴を備え

ている。屋内上構は東壁からやや離れて

不整斜円形のピット

が相当すると考える。

住居の主軸方位はN

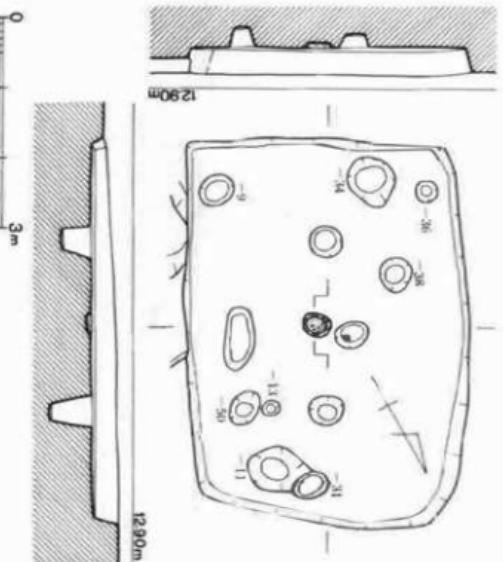
29°Eを示す。

遺物は小片の他、図示した跡がある。

出 土 ◇ ◇

土 器 (第49號)

6の外がある。逆「L」字状の口縁部を有し、上面は内傾する。肩部から胴部にかけては丸味を持ち、大き目の試部をなす。焼成は良好で、内外面に二次加熱を受けなく赤焼する。復原口径9.0cm、底径9.0cm、器高14.0cmを測る。



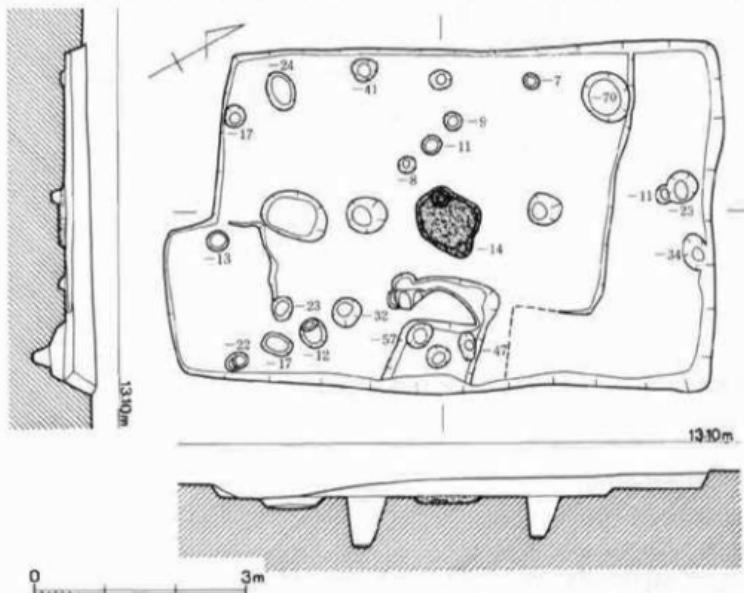
41号竪穴住居跡 (図版5-(z) 第51図)

104号と大半が重複し、調査時点で切合いで気付かず発掘したため新旧関係を明確に捉えていない。東壁のみ遺存しており4.40m、壁高32.0cmを測る。北壁と東壁沿いの一部には周溝が廻っている。104号の床面には2箇所の炉址を検出しており、一方が41号住居の炉である。その他詳細は不明である。

出土遺物は無い。

43号竪穴住居跡 (図版5-(z)・6-(i) 第53図)

調査区の西端に位置する竪穴住居で、44号(A・B)の一部と重複する。平面形状は長方形を呈し、南壁には突出し部を有す。突出し部の両端には柱間1.70mの柱穴が掘られており、しかも有段をなすことから住居の出入口と考えられる。規模は長辺6.80m・7.50m、短辺4.90m・4.62m、壁高は40.0cm前後を測る。床面積は34.17m²とやや大型の住居である。支柱は2本で柱間に



第53図 43号竪穴住居跡実測図(1/80)

径90.0cm前後のものを説いている。東壁中央には不整形の屋内土塙を付設する。土塙内の周囲には2個の柱穴を配する。北壁と東壁沿いの一帯にはベット状遺構を説いている。住居の主軸方位は柱間軸でN29°Eを示す。

出土遺物は鐵・手錠ね土器・石庖丁・石ノミ・磁石・絆石の他、埠土中から中世の小皿と高台付塊(瓦當)があるが、墳土中に中世の遺構が存在した可能性もある。

出 土 遺 物

土 器 (國版36 第1996)

7、8の男生土器と隣人の土器

9、10. 武器11がある。712号小型の甌で「く」字状に外反する口縁部に彫りのある胴部を有す。武部はレンズ状を呈し不安定である。調査は内面擦過、外面荒い、ハケで仕上げる。復原口徑13.0cm、底径6.5cm、器高15.8cmを削る。

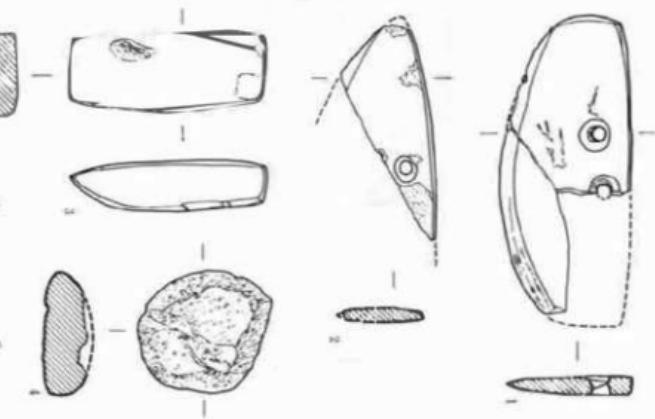
8は鉢を模した手摺ね土器である。表面には指圧痕を残す。復原口徑7.9cm、底径3.9cm、器高7.1cmを削る。

9、10は小型の甌で口徑9.3cm、9.2cm、底径6.5cm、5.9cm、器高1.4cm、1.65cmを削る。底部には糸切痕を残す。

11は瓦器の底で低い高台を貼付する。体部から口縁にかけては直線的である。調査は内外面とも横方向の窪溝を施す。口径16.5cm、底径6.9cm、器高5.9cmを削る。

石 器 (國版36 2054・55(4))

1は雲母片岩質の石庖丁で段違いに整美な径5.0mmの孔を穿つ。(円孔半周)面をなし、鋭い刃を研ぎ出す。現長10.5cm、幅4.7cmを削る。底面近くからの出土。2は輝緑岩質の石庖丁片面で、形態的には古相



第54図 43号堅穴住居跡出土石器實測圖その1(1/2)
1は雲母片岩質の石庖丁で段違いに
整美な径5.0mmの孔を穿つ。(円孔半周)
面をなし、鋭い刃を研ぎ出す。現長
10.5cm、幅4.7cmを削る。底面近くからの出土。2は輝緑岩質の石庖丁片面で、形態的には古相

を量する。孔の深さ5.0mmである。

3は真岩質の石ノミで穿孔器である。長さ7.0cm、幅2.9cm、厚さ1.7cmを測る。床面からの出土である。

4は解石で屋内土壌の粉か・出土した。骨子として使用した可能性がある。

5は解石片・岩製の砥石である。片面は2面で他は自然面をなす。長さ19.0cm、厚さ2.0cmを測る。屋内土壌からの出土である。

44号墳穴(住居跡) (図版5-(2)・17-(4) 第564)

44号住居は絶対4軒の面積があり、当初1軒の住居の構造で推定していた。出土土器を観察した結果2軒の面積であることが判明したが、ここではA・Bで説明する。

A住居跡はB住居跡よりも古いが、床面が4軒一レベルにあるため不明な点が多い。2本の支柱穴が掘られ、その柱穴間に不整形な割を設けている。南壁沿いには長幅1.80m、加幅1.00m、深さ26.0cmの横円形の屋内土壌を付設しており、底面には1個のピットを掘っている。

出土遺物は鉢・甕・高杯・鉢・手挽ね土器がある。

B住居跡の平面プランは長方形であろう。北壁は東壁に比べて異様に長く、A住居の北壁がほぼ同一場所にあったことが窺える。東壁の長さは3.74m、幅20.0cm深さを測る。東壁沿いにはベット状遺構を付せてている。床面中央には不整形の切妻を掘込んでいるが、支柱穴は不明確で前回に図示したピットは支柱穴とはなり得ない。その他詳細は不明。

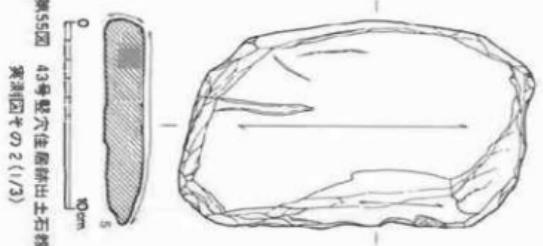
出土遺物は甕・甕・鉢・器台などがある。

A号墳穴(住居跡)出土遺物

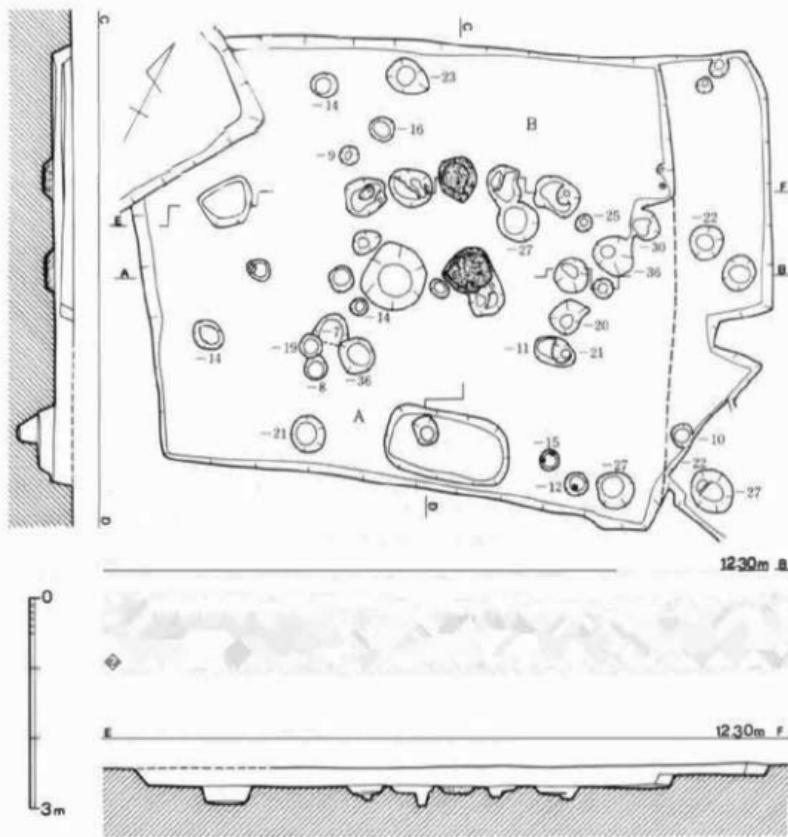
土 器 (図版36・37 第578)

44号2軒の重複があるよりで、土器に時期差がある。取上げ時に若干混入したと考えられる。

1は灰化した縦の系譜を引く甕で、肩折部の横断面はU字形である。頸部は細く、肩部に三角凸筋を貼付する。腹原口幅15.4cmを測る。



第55図 43号墳穴住居跡出土石器
実測図その2(1/3)

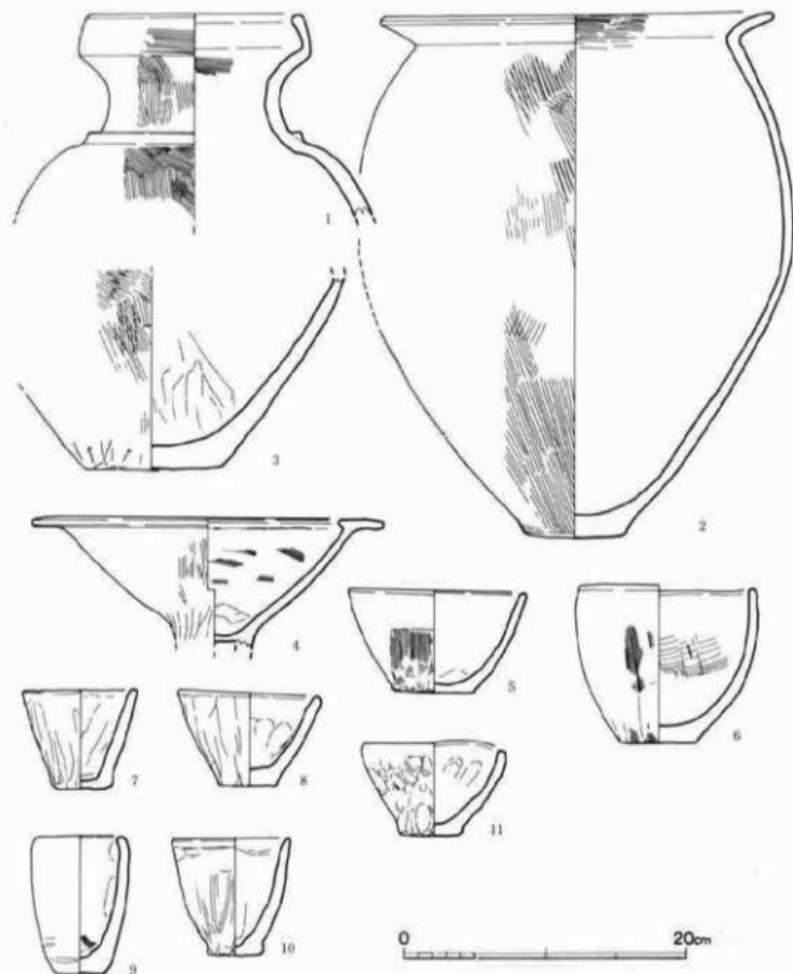


第56圖 44号(A、B)竪穴住居跡実測図(1/80)

變は2、3がある。2は「く」字状に外反する口縁部に肩部の張る變で、細味の不安定な底部を有する。内外面に二次加熱を受け赤変する。口径27.9cm、底径7.1cm、器高36.9cmを測る。

4は鋸先状の口縫部を有する高杯で、体部から底部にかけては直線的につくる。つくりの粗い高杯である。復原口径25.0cmを測る。

5・6は小型の鉢で調整はハケとナデで仕上げ、6の内面は荒いハケがみられる。5の口徑



第57圖 44號(A) 體穴住居跡出土器物圖(1/4)

12.6cm、底径5.7cm、器高7.2cm。6は口徑12.7cm、底径5.4cm、器高11.2cmを測り、二次加熱を受ける。

7～10は手握ね土器で9を除くとつくりが粗い。7は二次加熱を受けている。口徑8.2cm、底径4.4cm、器高7.0cm。8は口徑10.2cm、底径4.0cm、器高6.6cm。9は復原口徑6.5cm、底径3.3cm、器高9.7cm。10は二次加熱を受ける。口徑8.3cm、底径4.0cm、器高8.2cm。11は復原口徑10.2cm、底径4.5cm、器高6.6cmを測る。

B号窓穴住居跡出土遺物

土 器 (図版37 第58回)

1は脛の側部片で上半に三角凸沿を貼付する。調整は外面ハケ、内面は擦過のちナデで仕上げ、外面にはハケの上から丹を塗布する。

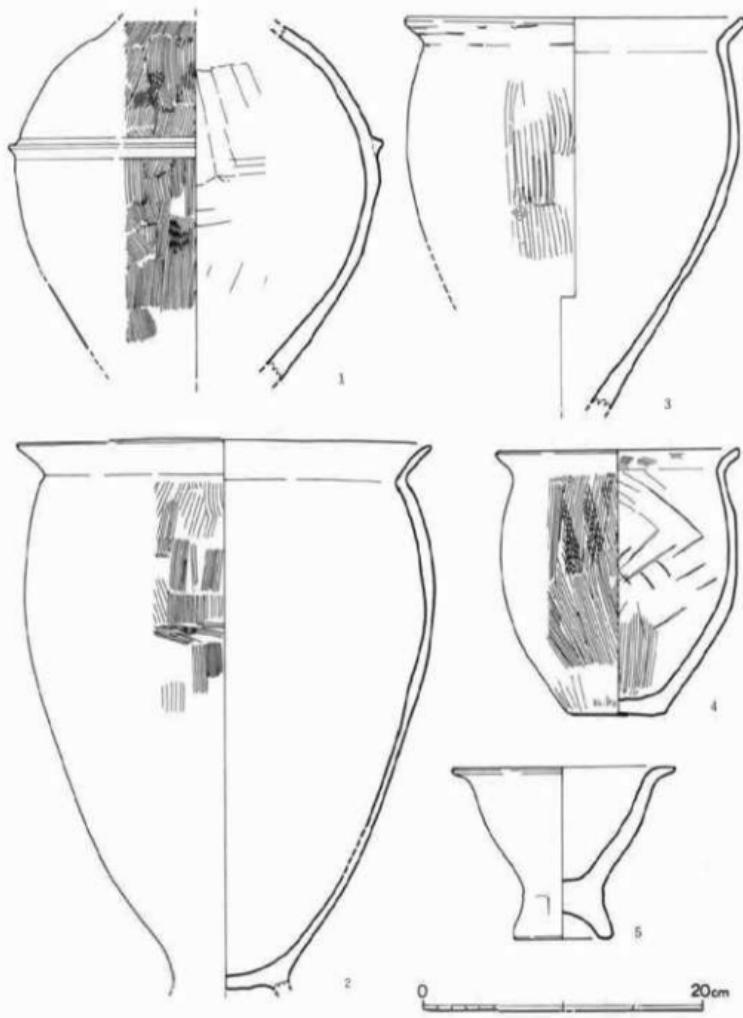
甕は2～4がある。2、3は同タイプの長脣の甕で、「く」字状に外反する口縁部に肩部はやや張る。肩下半は細まり低い脚台がつく。調整は荒いハケとナデで仕上げる。両者とも二次加熱を受け煤が付着する。4は小型の甕で「く」字状に緩く外反する口縁を有す。調整は外面が荒いハケ及び擦過、内面は擦過痕を残す。口徑17.5cm、底径7.0cm、器高18.9cmを測る。

鉢には5～8がある。5は脚台付の鉢で側部から口縁部にかけては朝顔状に聞く。外側は二次加熱を受ける。口徑15.8cm、底部径7.0cm、器高12.0cmを測る。6は体部が半球形状の鉢で小さな平底をなす。調整はナデで仕上げる。口徑17.1cm、底径6.7cm、器高10.4cmを測る。7は口縁部が短く僅かに外反する。荒いハケ調整を残す。8は小型の鉢で二次加熱を受け煤が付着する。口徑10.9cm、底径5.5cm、器高6.5cm。

壺台は9～11がある。9は粗いつくりの壺台で最小径が器体中央部にある。荒いハケと叩き痕がみられる。口徑10.0cm、底部径11.5cm、器高17.2cm。10も最小径が器体中央にある所調鼓状の壺台で荒いハケとナデで調整する。調製手法から(A)の土器と共伴する可能性がある。口徑15.0cm、底部径16.5cm、器高20.0cm。11は小型の壺台で9と同様つくりが粗い。表面には荒い叩き痕が残り、上下の口唇部は荒いハケを残す。口徑9.1cm、底部径10.0cm、器高11.1cmを測る。

45号窓穴住居跡 (図版 6-①・18-(2) 第60回)

調査区の西端で検出した窓穴住居跡で103号住居に切られている。平面形状は現存で観察する限りでは方形を呈する。規模は東・南壁が計測可能で4.50m・4.70m、壁高34.0cmを測る。床面には支柱穴が見当らず、断面に示した柱穴は支柱とはなり得ない。またガラスも検出できておらず不明な点が多い。



第58図 44号(B)整穴住居跡出土土器実測図その1 (1/4)

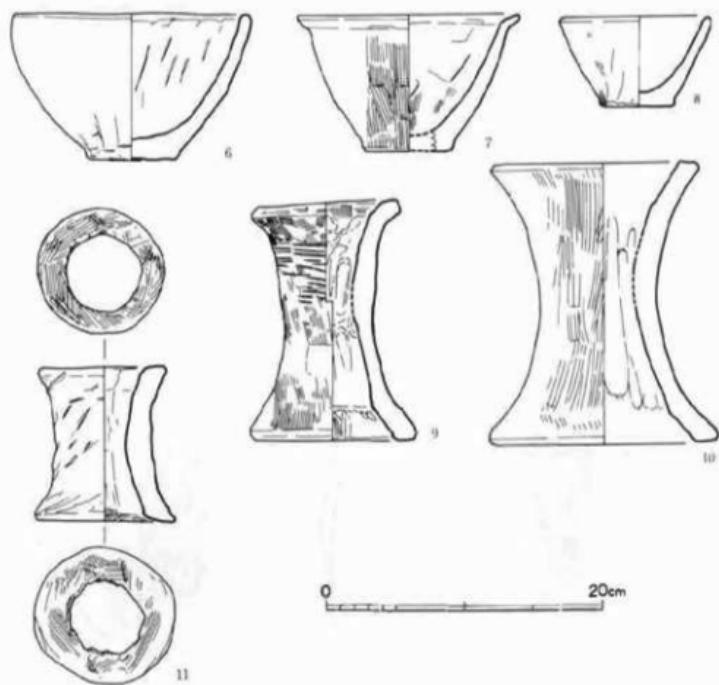


図59図 44号(B)竪穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)

出土遺物は壺・甕・鉢・両环がある。

出 土 遺 物

土 器 (図版38 第61、62図)

壺は1、2がある。1は頗稀な壺で頸部の長い直口壺であろう。肩部には三角凸帯を貼付し、直下には細い波状文を廻らす。精製品である。2は「く」字状に鋭く外反する口縁を有す壺で、肩部と胸部に三角凸帯を貼付する。底部は大きく安定感がある。調整は荒いハケとナデで仕上げ

發しているが、表裏の中央に幅1.7～2.0mの凹
窓を受けた、部分が帯状に走る。おそらく屋内
回廊——ものに巻いて併してしたものか住居の
火災や燃され筋の「へいそく」受けでない、
結果と考えられる。規模15.0mを測り、床面か
らの出土である。

50号竪穴住居跡 (367280)

調査区の南側へ突出した小型の住居跡であ
る。平面形態は長方形を呈し、規模は幅約3.50
m、西壁2.70m、東高20.0m前後を測る。復原
平面図は8.85mである。**柱**・支柱などは不明
で、附壁梁には幅約5m(75.0cm×50.0cm)の厚
内土塗を備えている。土塗を複数形で「リビット
」を配している。土塗を複数形で「リビット

出土遺物は焼けの破片が数点ある。

出 扣 置 舟

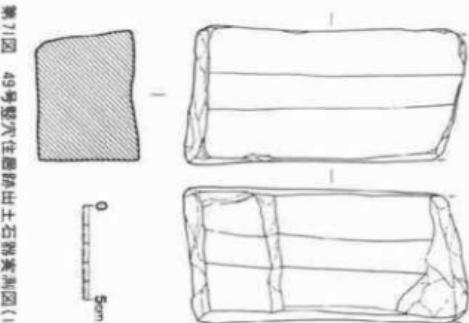
土 器 (367386)

1、3の逆「L」字状と「く」字狀に外反する口縁の甕がある。1は口縁部を斜ね上坡にす
る。復原口径6.0cmを測る。2は瓶頭型の縁が不規則で口唇部を肥厚させる。3は外削に刃を
施すし、口縫平底部に單脚火を配する。復原口径22.0cm。4は底径7.8cmの底部で径が細いこと、
ら蓋の可逆性もある。5の底径は10.0cm。すべて住居の場所から出土である。

51号竪穴住居跡 (367280)

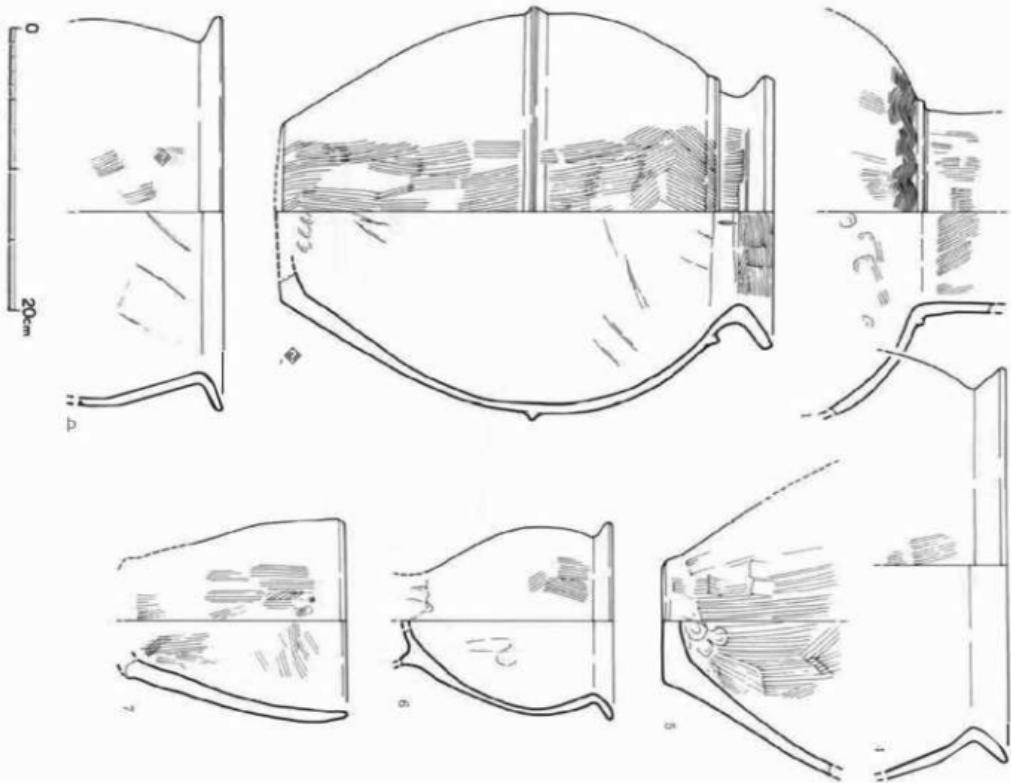
調査区の南端で検出した竪穴住居跡で3軒の重複小窓跡。51号住居は50号住居より新しく52号
住居より古い。約1/2の調査区外のため完備に至っていない。規模は一方の長辺6.40m、幅高
4.0.0mを測る。当然には不整形の屋内土塗を備えている。床面上には支持火が見当らず、床面は
便く踏絞められていた。

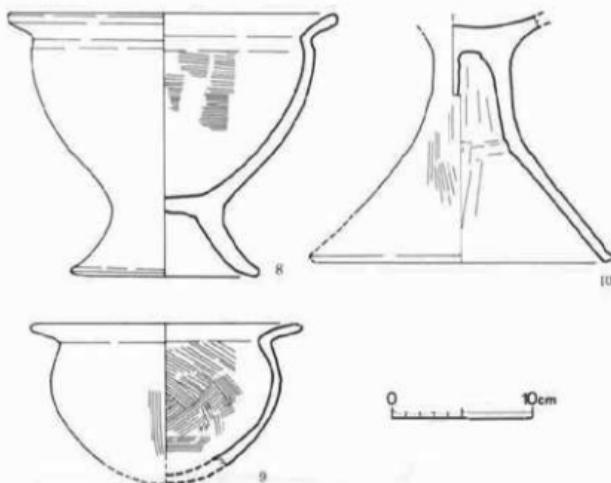
出土遺物は図示不可能な小片があく。



第71図 49号竪穴住居跡出土石器実測図(1/3)

第61図 45号墓穴性居跡出土土器実測図その1(1/4)





第62図 45号竪穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)

10は高杯の脚部で柱状部は短く屈折してスカート状に開く。胎土は砂粒の他赤褐色粒子を含む。底面径21.5cm。二次加熱を受ける。

47号竪穴住居跡（図版4-(2) 第63図）

44号A竪穴住居跡の一部と重複した住居跡である。平面プランは長方形を呈する。規模は南・北壁4.40m・4.50m、東・西壁5.90m・5.80m、壁高24.0cm前後を測る。床面積は25.12m²である。支柱は基本的に2本であるが、壁際に寄り過ぎている点が疑問視される。柱間には梢円形の炉を設けている。屋内土壤は東壁際に付設する。住居の主軸は柱間軸でN 13° Eを示す。

出土遺物は甕と鉢の破片の他、砥石がある。

出土遺物

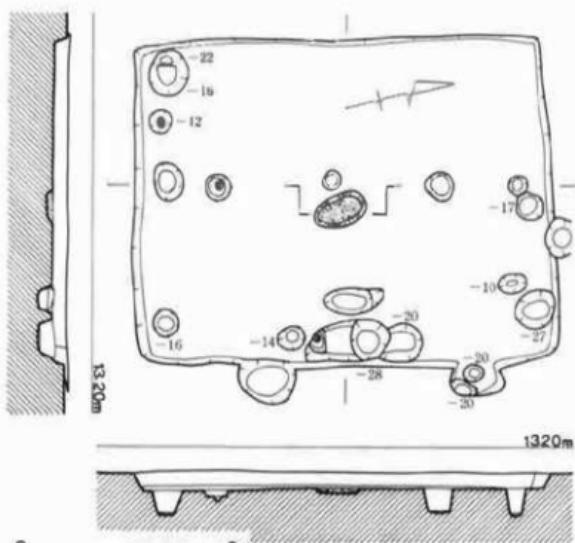
土器（第64図）

1、2は鉢で1の表面には一部丹の痕跡が残るが、丹塗りか否か不明瞭である。復原口徑15.0cm。2は小型で荒いナデ調査を施す。復原口徑9.2cm、底径4.0cm、器高5.2cmを測る。

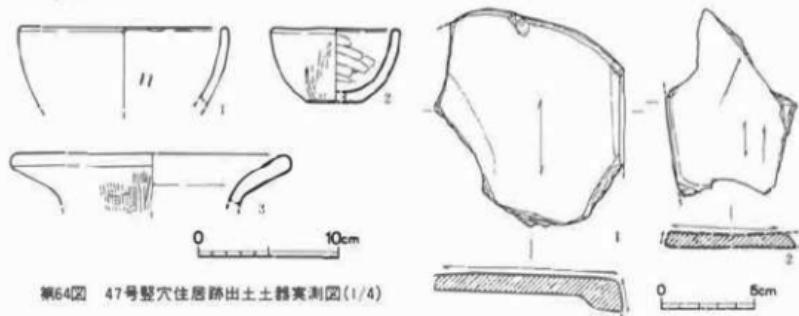
3は窓の口縁
片であろう。外
面に荒いハケが
残る。復原口徑
20.0cm。

石 器 (図版
38 第65図)

硬質砂岩製の
仕上げ砥石が2
点ある。1の研
面は3面で現存
長11.5cmで周囲
を欠失する。屋
内土壌からの出
土である。2の
研面は2面で埋
土中からの出土
である。



第63図 47号竪穴住居跡実測図(1/80)

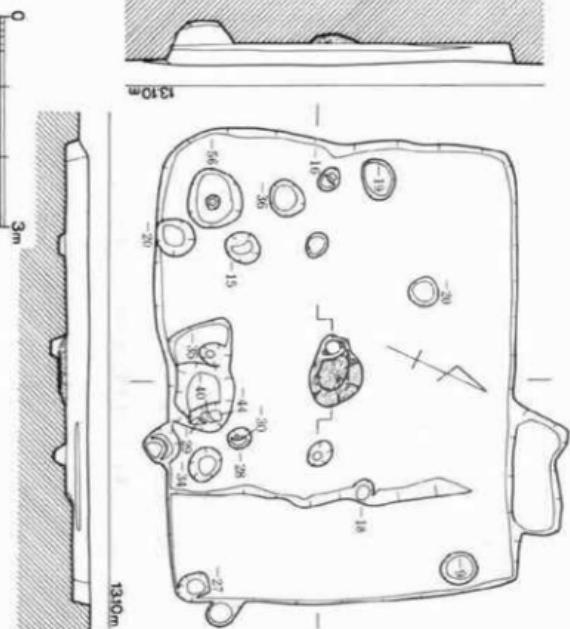


第64図 47号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

48号竪穴住居跡 (図版 4-(2) 第66図)

47号住居の南側で検出した平面プランが長方形を有す竪穴住居である。規模は長辺6.50m・
6.10m、短辺4.90m・4.80m、壁高30.0cmを測る。床面積は30.58m²である。支柱は2本である

第65図 47号竪穴住居跡出土石器実測図(1/3)



第56図 48号竖穴住居剖面図(1/80)

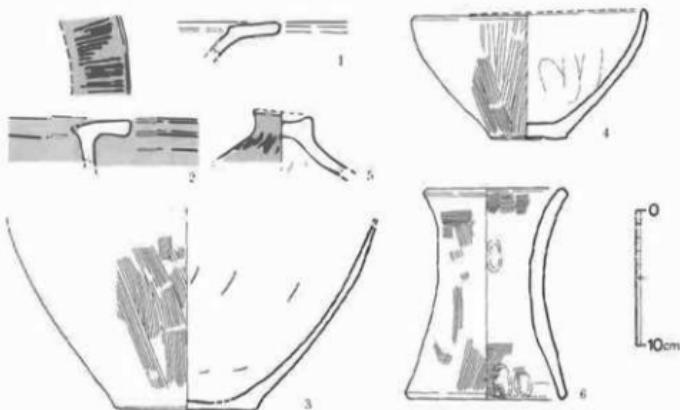
が、両者とも幅の狭い、柱間には不規則円形の浅い坑を掘込んでいる。南壁際には長軸1.55m、短軸0.60m、深さ35.0cmの梢円形状の壁内土壙を付設する。土壤内の両端には小さな斜切穴を配する。東壁には幅1.30mのベット状造構を削り出している。主軸方向はN65°Eを示す。

出土遺物は灰・甕・鉢・鏡・器台その他、磁石が1点ある。

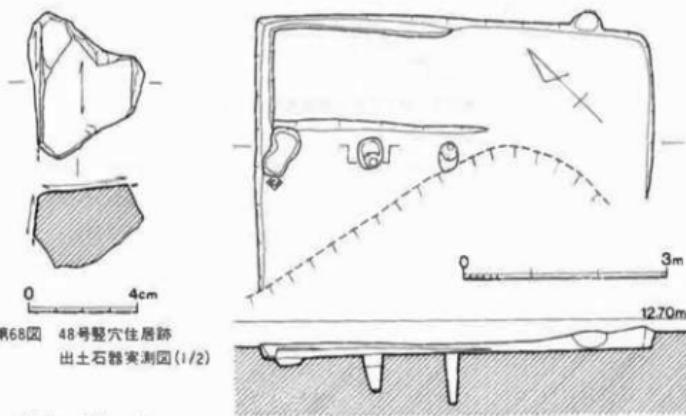
出土 ◆ ◆

土 器 (0808.38 20.6.06)

- 1は鋸先状口縁部の口縁部小片である。胎土には砂粒を多く含む。
- 2は甕である。2は「T」字型の内底面には円を施して研磨される。3は安永のある甕底部で底径14.5cmを測る。
- 4は鉢ではほぼ完形成品である。周縁は外側ハケ、内側はナデで仕上げる。口径17.3cm、底径5.6cm、高さ9.3cmを測る。



第67図 48号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



第68図 48号竪穴住居跡
出土石器実測図(1/2)

5は焼着の小片である。
挽み窓の天井は凹面をな
す。外面は円彫り磨研で内
面はナデで仕上げる。

6は鼓状の器台で完形品である。最小径が胴上半に移りつつある。ハケとナデで仕上げる。二

次加熱を受け内側器表面がひび割れしている。口径10.6cm、高さ11.9cm、底高15.6cmを有する。

石 器 (第6890)

砂岩製の荒砥の小片がある。刃面は2面で、風化著しく表面がざらつく。加熱を受け灰黒く変色している。

49号堅穴住居跡 (図版6-1) 第6990)

調査区の西側で検出した堅穴住居であるが、入半が1段で斜面を有しているため全容は把握できない。現存での状況から長方形のプランを有すると考えられる。片側の廻辺は5.70m、壁高20.0cm前後を測る。支柱の1本は中央にて通孔し70.0cmと深い。東壁にはベットを付設し、それに沿って部分的に周溝を掘らす。

出土遺物は焼土手標ね土器の他、磁石が1点ある。

出 土 遺 物

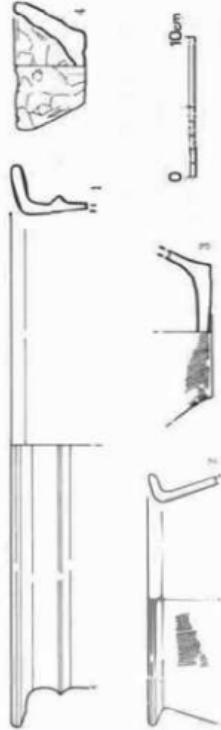
土 器 (第7090)

1～3は縦で逆「L」字状と「く」字状に外反するものがある。1の口縁下には三重凸沿を貼付する。内外面とも二次加熱を受け未燃する。腹厚口径40.0cm。2は頸部前面の縫は不明瞭である。3は底径9.4cmを測る。二次加熱で未燃する。

4は手標の完形品で以前から出土した。口径179.0cm、底径5.2cm、高さ5.0cmを有する。

石 器 (第7138 第7139)

砂岩製の荒砥が1点ある。刃面は4面で自然面(刃の下方)を除いて全面に加熱を受け灰く赤



第70図 49号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)

發しているが、表裏の中央に幅1.7～2.0mの凹
窓を受けた、部分が帯状に走る。おそらく屋内
回廊——ものに巻いて併してしたものか住居の
火災や燃され筋の「へいそく」受けでない、
結果と考えられる。規模15.0mを測り、床面か
らの出土である。

50号竪穴住居跡 (367280)

調査区の南側へ突出した小型の住居跡であ
る。平面形態は長方形を呈し、規模は幅約3.50
m、西壁2.70m、東高20.0m前後を測る。復原
面積は8.85m²である。⁵⁰・支柱などは不明
で、附壁部には柱門形(75.0cm×50.0cm)の構
内土塗を備えている。土塗を複数形で「リビット
」を配している。⁵¹・土塗を複数形で「リビット
」を配している。

出土遺物は焼けの破片が数点ある。

出 扣 置 舟

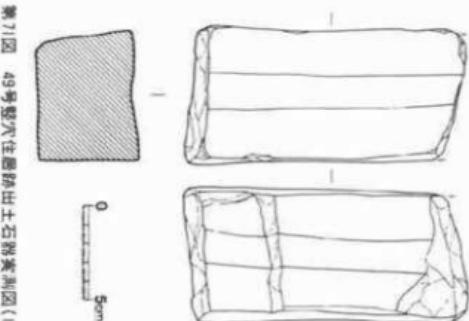
土 器 (367386)

1、3の逆「L」字状と「く」字狀に外反する口縁の甕がある。1は口縁部を斜ね上位にす
る。復原口径6.0cmを測る。2は甕頭部の縫が不規則で口唇部を肥厚させる。3は外而に竹を
籠付し、口縁半周部に串突火を配する。復原口径22.0cm。4は甕径7.8cmの底部で縫が細いこと、
ら蓋の可逆性もある。5の底部は10.0cm。すべて住居の場所から出土である。

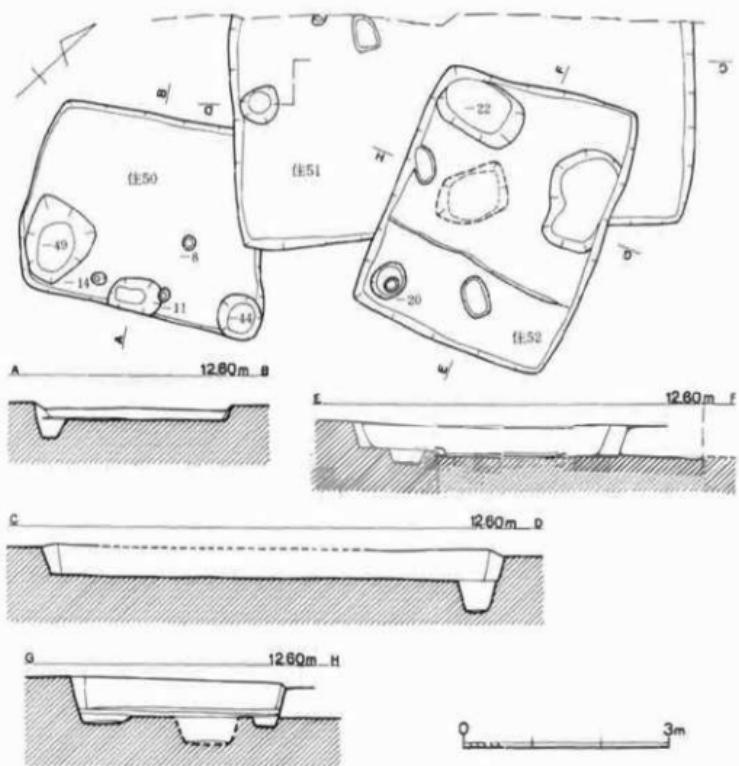
51号竪穴住居跡 (367280)

調査区の南端で検出した竪穴住居跡で3軒の重複小窓和51号住居は50号住居より新しく52号
住居より古い。約1/2の調査区外のため完備に至っていない。規模は一方の長辺6.40m、幅高
4.0.0mを測る。当然には不整形の屋内土塗を備えている。床面上には支柱穴が見当らず、床面は
便く踏絞められていた。

出土遺物は図示不可能な小片があく。



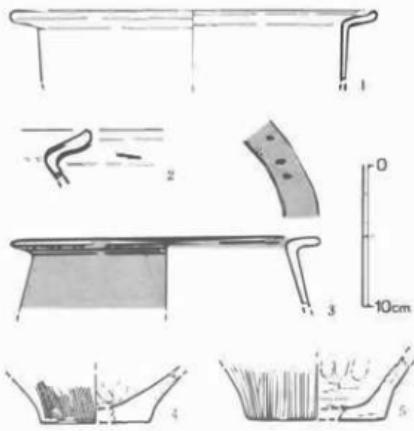
第71図 49号竪穴住居跡出土石器実測図(1/3)



第72図 50号、51号、52号竪穴住居跡実測図(1/80)

52号竪穴住居跡 (第72図)

51号住居を切った小型の竪穴住居跡である。平面プランは長方形を呈し、規模は長辺4.10m・3.70m、短辺2.90m、壁高50.0cm位を測る。床面積は11.04m²である。南壁には高さ10.0cmのベットを割り出している。ベット上には径50.0cm、深さ20.0cmのピットが在り中から壺の洞部片が出土している。



第73図 50号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

出土 遺 物

土 器 (第74図)

壺が2点ある。1は複合口縁壺で内側する口縁は短い。外面の棱線は明瞭で頸部は短い。肩部には三角凸帯を付す。復原口徑20.0cm。2は壺の胴部で球形状を呈する。底部は粗まり7.3cmを測る。調整はハケが主体である。

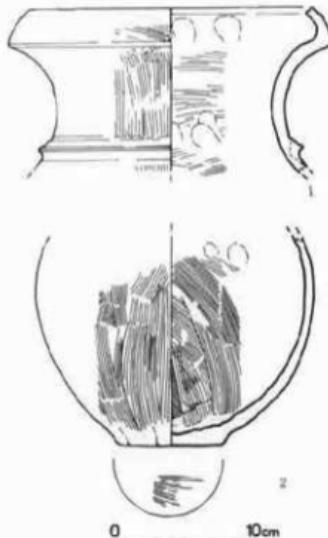
53号竪穴住居跡 (図版 6-(2)・18-(4) 第75図)

調査区の北東隅で検出したが、大半が調査区外のため一部を調査したに過ぎない。南壁の長さ6.70m、壁高50.0cm弱を測る。實際には1.20m × 90.0cmの長方形の屋内土壤を掘り、不対称な位置にピットを配する。壁沿いには細い周溝が廻る。

出土遺物は壺・鉢の他、不明土製品がある。

出 土 遺 物

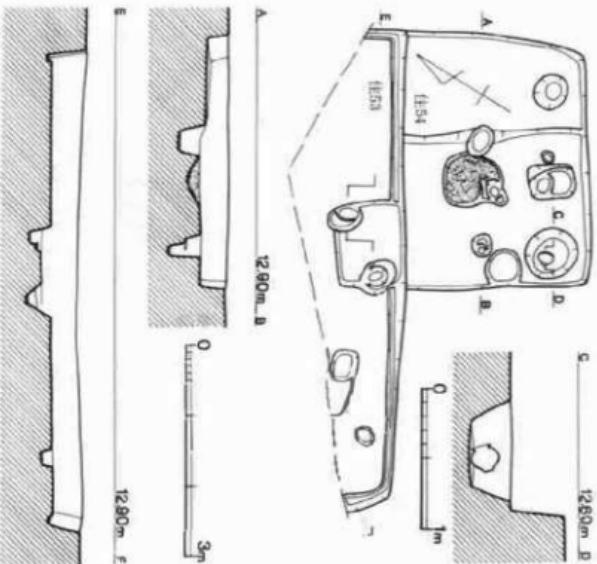
土 器 (第76図)



第74図 52号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

1は複合口縫型の
口縫片で崩壊部の縫
は明瞭である。復原
は径16.2cmを測る。
埋土中から出土し
た。

2は断面透かし形狀
を有する跡で、口縫
部は僅かに外反し
る。調整は外而が丸
いハケ、内面はハケ
のちナゲで仕上げ
る。口径10.5cm、底
径8.0cm、器高8.8cm
を測る。埋土中から
の出土である。



第75図 53号、54号 双穴住居跡実測図(1/80・1/20)

表面(図示している
部分)は削ぎ、表面微溝、V字溝があり、深いもので8.0mmを測る。屋内土壤からの出土である。

54号 双穴住居跡 (図版 6-(2)・18-(4) 第75図)

53号住居に引らわべ小型の雙穴住居跡である。平面形態は不明確である。支柱穴の配置がから
方形に近い形状を示す。面積長3.20m、壁高40.0cmを測る。支柱は2木で柱洞には不規形の切を
設けている。1マスには2枚張りの板内土壤を掘込み、南側側には厚70.0cm、深さ60.0mmの屋内
貯藏穴を有しており、中から焼形土器が出土した。東側には幅1.25mのベットを備えている。住
居の北側は柱間幅でN50°Eを示す。

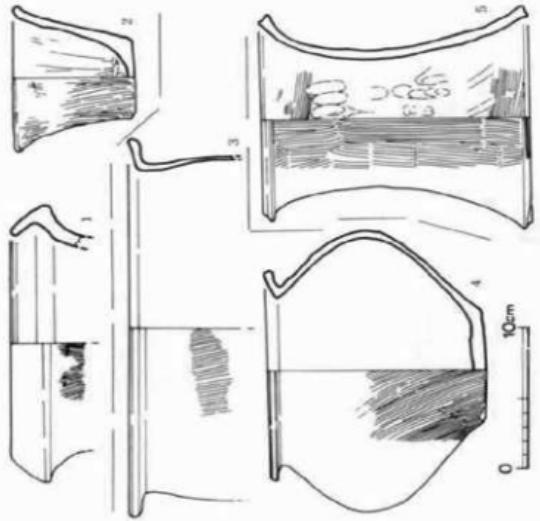
出土遺物は甕・器台がある。

出土遺物

土器

(図版38 第7686)

3・4の壺と5の器台がある。3は逆「L」字状の口縁を有し口唇部は肥厚する。腹原口径27.1cmを測る。埋土中からの出土である。4は「く」字状に強く外反する口縁を有す壺で腹部は扁平となる。堅穴住居の隕のビット(屋内防蟲穴)から出土したもので光形品である。口径15.0cm、底径8.0cm、高さ16.0cmを測る。



第7686 53号、54号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)

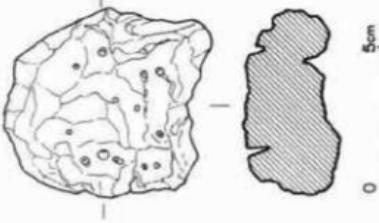
測る。

5はつくりの良い斎美な器台で器盤も薄く仕上げている。機やかに口縁が外反し、口唇部を肥厚する。圓蓋はハケとナデで仕上げる。口径14.8cm、底径16.1cm、高さ19.0cmを測る。埋土中からの出土である。

55号堅穴住居跡出土遺物

土器 (国版39 第7686)

1～4の壺がある。1、2は「く」字状に外反する口縁を有し1の肩部は張る。3の口縁の外反度は無い。3の底部はレンズ状を呈し不安定である。1の口径25.5cm、底径9.2cm、器高29.4cmを測り、二次加熱を受け焼け付着する。2は小型の壺で腹原口径18.2cm、底径7.4cm、器高18.5cmを測る。3は口徑16.2cm、底径6.2cm、器高16.6cm、調整はすべてハケとナデで仕上げ、埋土中からの出土である。4は小形の壺で脚部は張り、



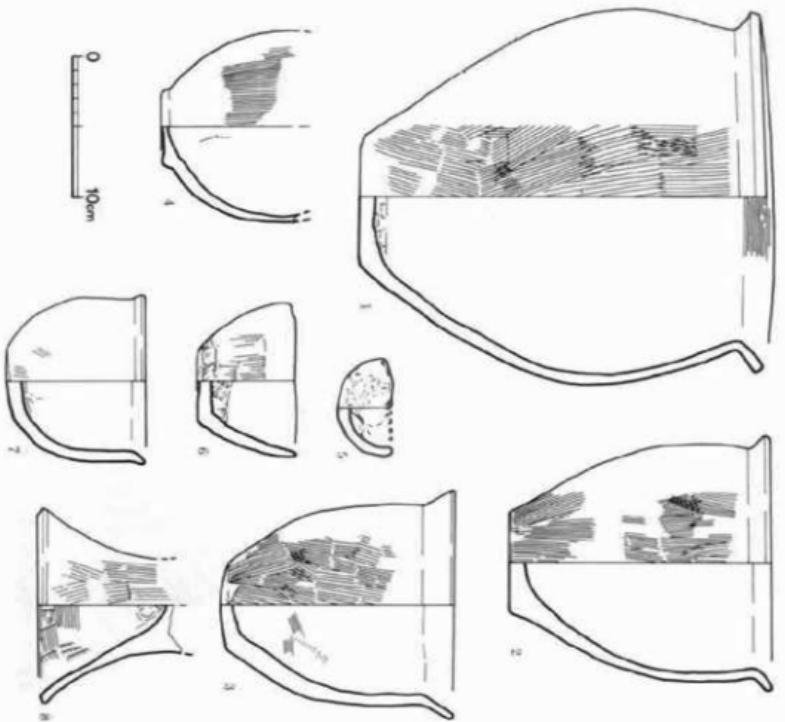
第7686 53号堅穴住居跡
出土土器実測図(1/4)

径5.5cmの底部を行す。細いハケとナデで仕上げる。埋土中から出土である。

第は6、7がある。6は手拌ね風の跡で口径10.9cm、底径5.0cm、 \pm 高7.0cmを測る。埋土中から出土である。7は口縁を僅かに外反させ底高から底部にかけて之を有する形で、1、2の要とは共伴しないことも考えられる。口径12.0cm、器高9.8cmを測る。埋土中からの出土である。

8は高杯の脚部と考えられるが、柱状部は太い。瓶頸部は僅かに肥厚する。脚部はハケが主体である。瓶頸径13.8cmを測る。埋土中からの出土である。

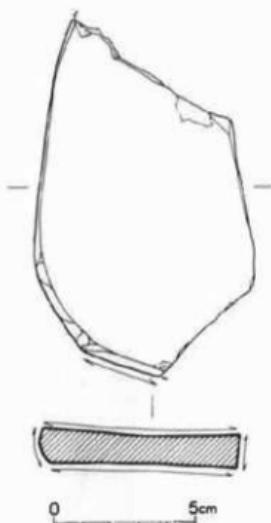
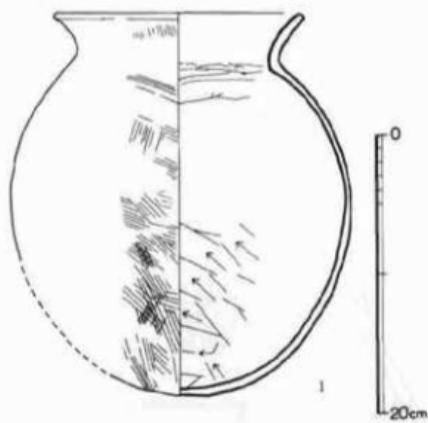
5は手拌ね土器で復原口径7.0cm、器高3.7cm。



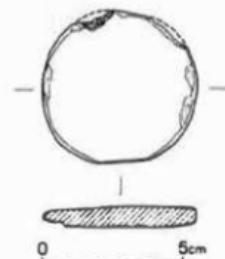
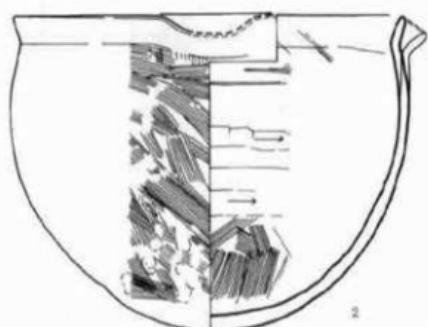
第78図 55号型穴住居跡出土土器実測図(1/4)

石器(図版39 第79図)

屋内土壇から出土した硬質砂岩製の仕上げ砥がある。約1/3を欠失する。研面は5面でかなり研込み凹面をなす。



第79図 55号竪穴住居跡出土石器
実測図(1/2)



第80図 55号竪穴住居跡
出土石器実測図(1/2)

第81図 57号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

56号竪穴住居跡出土遺物

石 器（第80図）

雲母片岩製の円盤がある。おそらく、勅錠車の未製品であろう。径は5.5cm×5.4cm、厚さ7.0mmを測り、周縁の面どりは丁寧である。重さは40gである。

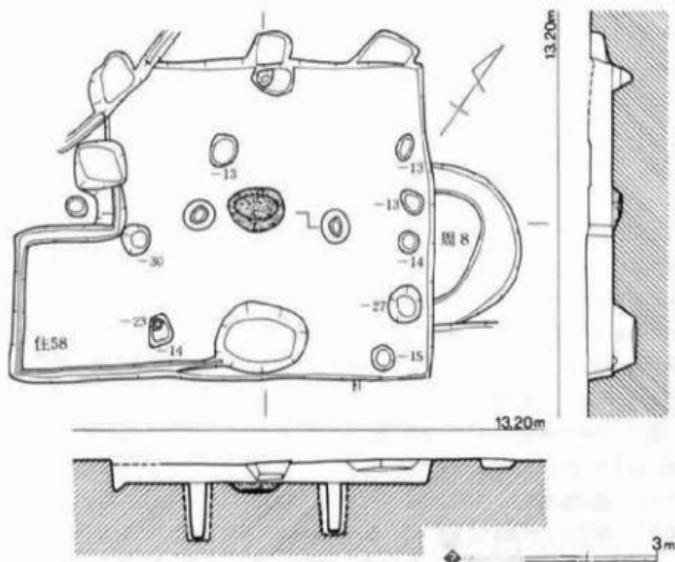
57号竪穴住居跡出土遺物

土 器（図版39 第81図）

1は口縫部が長くしかも「く」字状に鋭く外反する甕である。肩部から胴部にかけては球形を呈する。調整は外面が荒いハケ、内面は丁寧な箇削りを施し器壁を薄くする。外面は二次加熱を受け変色する。口径17.7cm、器高27.4cmを測る。

2は片口土器で半球形を呈する。調整は荒いハケと箇削りで仕上げる。胎土は良く細かい砂を僅かに含む。復原口径29.4cm、器高22.5cmを測る。两者とも埋土中からの出土である。

58号竪穴住居跡（図版6-(2)・7-(1)・19-(4) 第82図）



第82図 58号竪穴住居跡、8号周溝状遺構実測図(1/80)

調査区B-1区で検出した窓穴住跡で、8号別所状遺物を切り57号、64号に一部を切られている。平面形態は方形を保ち、南西壁の一側に造出し部を設ける。規模は4.60m、4.55m、壁高35.0cmを測り、造出し高は1.40m、2.10mである。床面積は21.37坪である。支柱は2本で、柱間には格子状の柱を備えている。構造的には前円形1.20m×1.00m、深さ31.0cmの屋内土壙を設けている。さらに造出し部の基部には柱間1.20mの2本の柱穴がみられ、3人目の上層の支柱と考えられる。東壁の4号には5本の柱穴が規則的に配されているが機能は認めない。造出し部から屋内土壙にかけての縦いすこは周溝が掘る。住居の柱間の主軸と壁とは平行せず、柱間が南北に対して東方向にずれている。

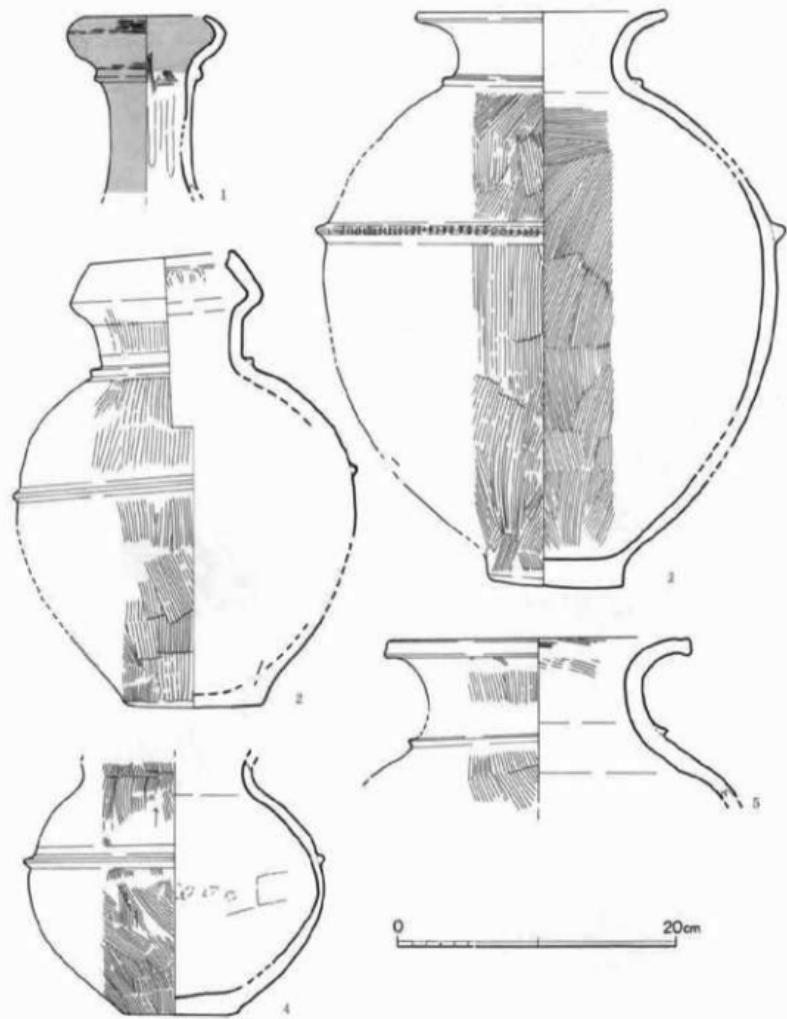
出土遺物は多く灰・焼・焼・瓦・鉢・器台支脚の他砥石があり、二次加熱を受けた土器が多く焼失住跡であろう。

出土 田 植

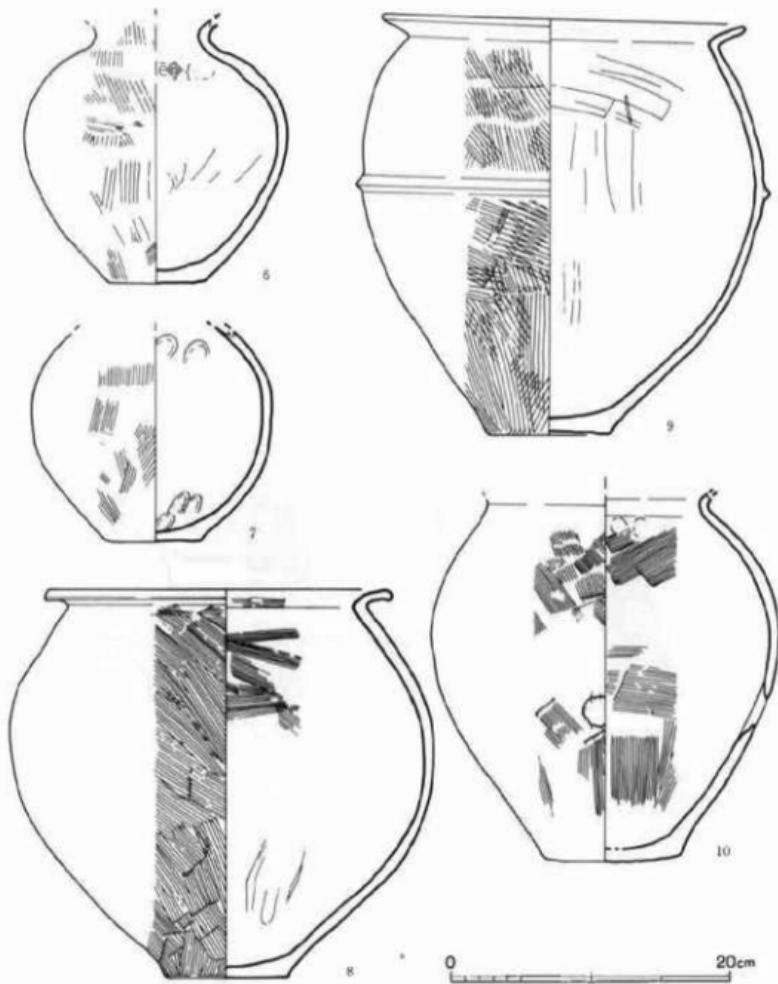
土 器 (58號39、40 第83、84、85、86號)

器は1～7がある。1は所謂袋狀口鋏底で肩部下を火損する。口縁直下には三角形印帶を付す。調整は円餘り磨研であるが表面が風化し剥落する。口径8.8cmを測る。埋土中からの出土。2は複合口縁で口唇部を肥厚させる。頸部は細まり肩部と腹部に凸沿を貼付する。調整は長いハケとナデで仕上げる。口径1.40cm、底径1.00cm、高さ2.2cm。埋土中と床面から出土した破片が複合した。3は単頭状に外反する口縁部を有し、口縁部に比較して腹部は大きく環状を呈する。肩部には三角形印帶、胴上半には刺み目を密に配する台形状凸沿を貼付する。底部は細まり不安定な平底をなす。調整は内外面ともハケで仕上げる。口径8.0cm、底径9.8cm、高さ4.8cmを測る。床面からの出土である。4は頸部上半を火く。調整はやや扁平で三角形印帶を貼付する。調整はハケとナデ。底径8.3cmを測る。5は鷲先口縁が退化したので大きく外反する口縁部を有す。肩部には鋸い三角形印帶を付す。口径2.8cm。両者とも埋土中と床面から出土した。6～7は同タイプの器では最常と類似上半を欠く。两者とともに肩部の盛りが強いため調整は長いハケ目が現る。6の上半は焼か付着する。底径は6.4cmと6.8cmを測る。床面からの出土である。

8は8～14がある。8は他の焼に比べて扁平で強く「く」字状に外反する口縁を有す。底径12.2cm、高さ8～14cmある。9は唯一腹部に凸沿を有す器で、口縁の外反度は弱い。調整は22.75cm、口径から出る。9は唯一腹部に凸沿を有す器で、口縁の外反度は弱い。調整は12.2cm、高さ8～14cmある。10は5号と同じく口縁部を後退的に打欠いたもので、腹部にも外輪から突出する。器外面は褐色色を呈して粘土の筆触が考えられる。調整は細いハケ目が現る。向かうの然引に使用された器であろう。床面からの出土。11は口縁は短く「く」字状に外反する。肩部は張り体高は高く、細目の底部につづく。二次加熱を受け内外とも



第83図 58号竪穴住居跡出土 土器実測図その1(1/4)



第84図 58号竪穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)



第85図 58号整穴住居跡出土土器実測図その3(1/4)

赤変する。口径26.6cm、底径7.8cm、器高34.7cmを測る。12・13は小振の甕で前者は口縁の外反度が強く、側部も張る。両者ともハケとナデで仕上げる。

12の復原口径21.9cm、底径6.0cm、器高22.6cm。13は口径17.4cm、復原底径5.8cm、器高21.7cmを測る。床面からの出土である。14は脚台付甕で外面は二次加熱を受けているようである。復原口径19.1cm、底径10.0cm、器高23.6cmを測る。埋土中からの出土。

15は楕で焼成前に穿孔している。埋土中からの出土。

16は完形に近い鉢で床面からの出土である。口径17.5cm、底径8.0cm、器高17.3cm。18の鉢は口縁部を僅かに内側させ上底をなす。復原口径14.6cm、底径5.6cm、器高6.9cmを測る。床面からの出土。その他20、21の鉢は小型で両者とも二次加熱を受け黒ずむ。前者の口径12.0cm、底径8.5cm、器高7.8cm。後者は口径11.6cm、底径4.6cm、器高7.0cmを測る。床面からの出土である。

17は高环の脚部で高杯にしてはつくりが粗い。柱状部は短く、裾部は大きく開く。脚と杯部の接合部は指で強くナデしている。外面二次加熱を受け黒く煤ける。器部径17.0cmを測る。抹面からの出土である。

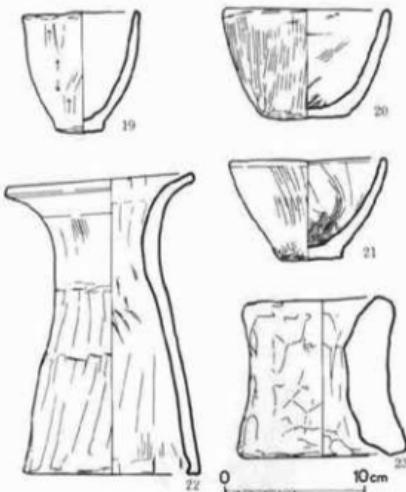
22は完形の器台で口縁は大きく朝顔状に開く。最小径が上半にあり、裾部の削きは鈍い。調整はナデと擦過で仕上げ、外面二次加熱を受ける。口径13.4cm、裾部径12.6cm、器高20.8cm。埋土中からの出土。

23は支脚形の土器で器壁は非常に厚い。調整も粗く凹凸が激しい。全体に二次加熱を受けて赤変する。口径10.8cm、底径12.2cm、器高11.0cmを測る。床面からの出土である。

石 器 (図版41 第87回)

粘板岩質の仕上げ砥石がある。完形品で研面は6面である。

現長9.0cm、幅4.4cm、厚さ2.0cmを測る。床面からの出土である。

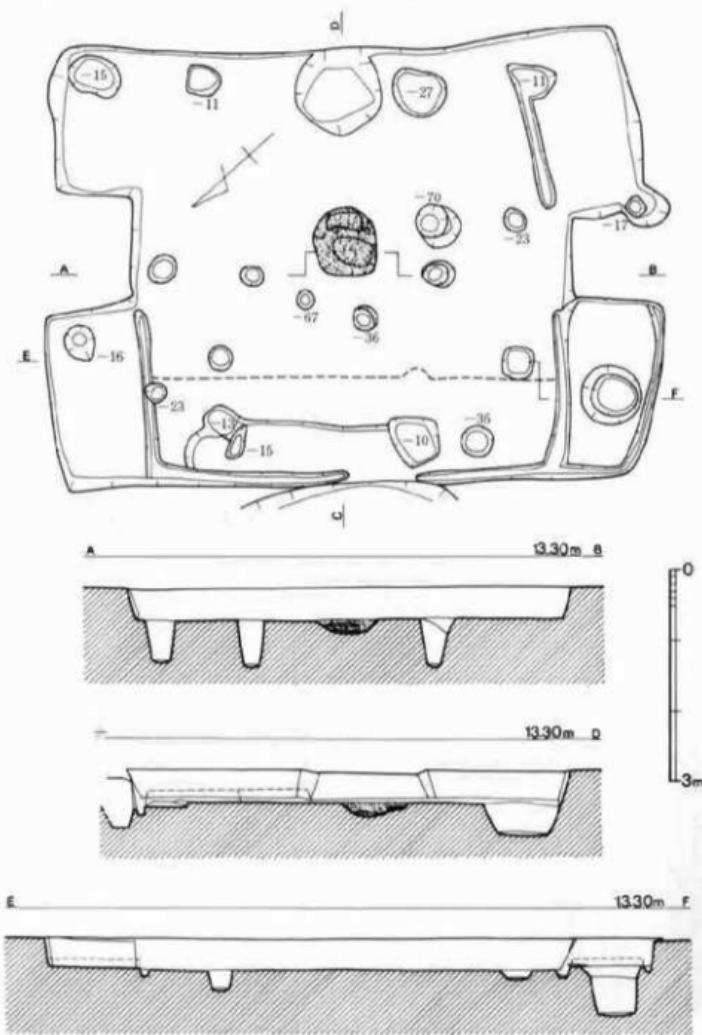


第86図 58号竪穴住居跡出土土器実測図その4(1/4)



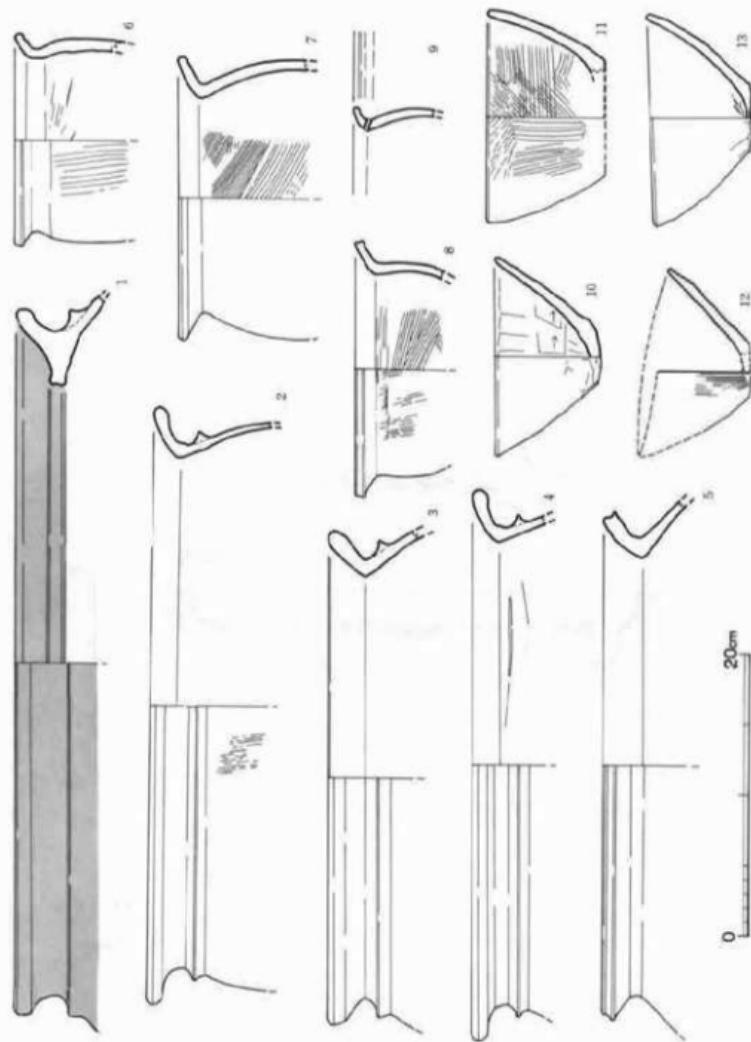
第87図 58号竪穴住居跡
出土石器実測図(1/2)

59号堅穴住居跡 (図版 7-(i)・19-(i) 第88回)



第88回 59号堅穴住居跡実測図 (1/80)

图版四十五 59号墓竹筒器物出土情况示意图(1/4)



調査区の北西で検出した大型の堅穴住居跡で、7号周溝状遺構で一部切られている。平面形態は特殊な形状を呈し、短壁の西側中央には内側に突出部を設け類稀な住居である。規模は長辺7.80m・8.00m、短辺6.30m、壁高40.0cmを測る。床面積は44.59m²である。支柱は2本であるが、東壁際に1本の支柱を立てている。支柱間は2.60mを測り、中央には壁面に焼痕を残す2段掘りの炉を備える。爐壁に平行して3箇所にベット状遺構を貼付し、それに沿って短い周溝を掘る。北壁側には幅1.35mにわたって床面が変色しており、この部分にもベット状遺構の存在が考えられる。対峙する長壁際には径1.20m、深さ50.0cm弱の屋内土壙を備えている。西壁のベット上には径82.0cm、深さ70.0cmの所謂屋内貯蔵穴を掘込んでいる。住居の主軸は支柱間軸からN42°Eを示す。出土遺物は甕と鉢の他、粘土塊がある。

出土遺物

土器(第89図)

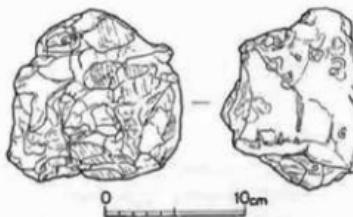
甕は1～9がある。1は中期の「丁」字状口縁の系譜を引く甕で、口縁下には三角凸帯を貼付する。器面が風化し不明瞭であるが、円が塗布されていたと考えられる。復原口径50.0cm。2～5は「く」字状に外反する口縁を有す甕で、口唇部は肥厚させる。頸部内面の後は3、5が明瞭である。5を除くと頸部に三角凸帯を貼付する。胎土はすべて砂粒の他に赤褐色を含む。2の口径42.0cm、3は35.0cm、4は39.0cm、5は36.0cmを測り、すべて埋土中からの出土である。6、7は小瓶の甕で7の口縁は説く外反する。6の復原口径15.0cm、7は20.0cmを測る。9は小瓶の甕で、外反する口縁を短くつくる。頸部には外側から2孔一対の孔を穿つ。

8、10～13は鉢である。8の鉢は口縁部を外反させ体部は丸味を持つ。調整はハケが主体。復原口径17.6cm。11は内外にハケを施す。復原口径15.1cm、底径8.2cm、器高8.4cmを測る。

10、12、13は手捏ね状の小型の鉢で口縁部と比較して底部は小さい。10は底部が丸味を持ち不安定である。10の口径14.0cm、底径5.0cm、器高7.5cm。12の復原口径15.0cm、底径4.8cm、器高7.1cmを測る。埋土中からの出土である。

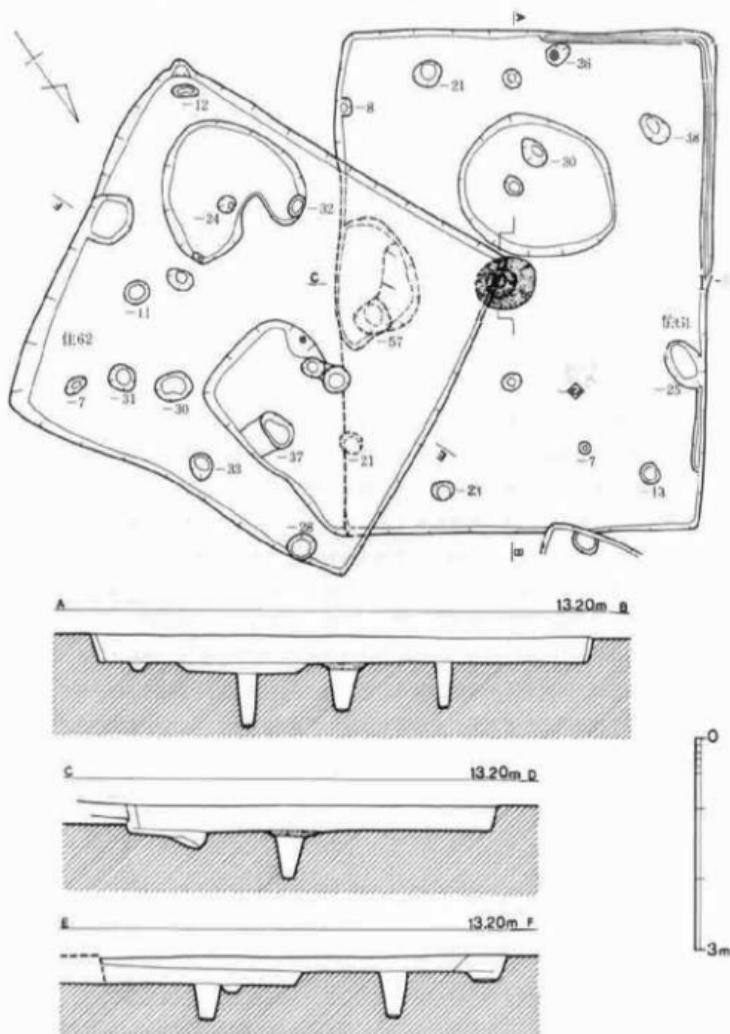
粘土塊(第90図)

埋土中から出土した意味不明の粘土塊がある。粘土塊は焼成されており、部分的に削り痕がみられることから、住居内で完略な土製品や手捏ね土器を製作するための粘土が何らかの時点で焼成したことが考えられる。



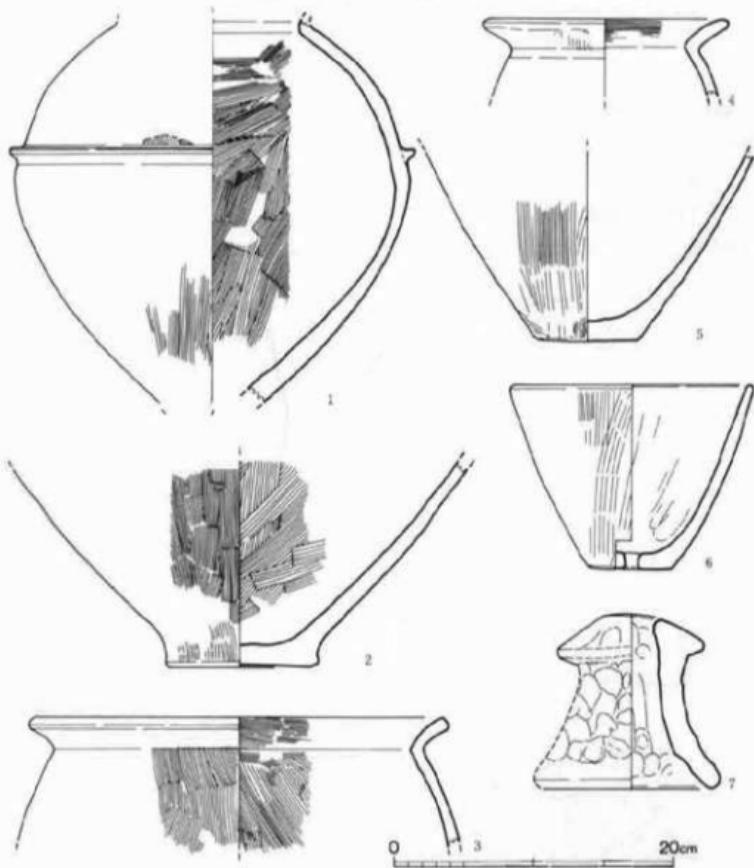
第90図 59号堅穴住居跡出土土塊実測図(1/4)

61号竖穴住居跡 (図版7-(a)・20-(i) 第91図)



第91図 61号、52号竖穴住居跡実測図 (1/80)

62号より古い住居で、床面下には住居より古い11号土壙がある。平面形状は長方形を呈する。規模は長壁が7.00m・7.10m、短壁が5.30m・5.00m、壁高30.0cm~40.0cmを測る。床面積は35.06m²である。支柱は2本で、柱間に円形の炉を備えている。炉の下層には柱穴があるが、当該住居に伴うものではない。62号住居と重複する壁際には不整規円形の屋内土壙を掘っており、土壙内に1本の柱穴を配している。周溝は南・東壁に一部残らす。住居の主軸は柱間軸からN 35° E



第92図 61号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

を示す。

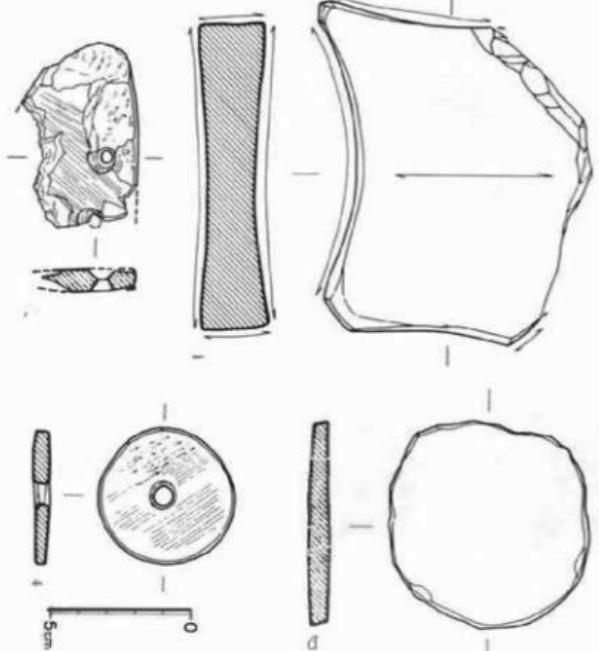
出土遺物は壺・甕・鉢・支脚の他、砥石、石塊、石塊、石塊などとの石器、土器、陶器がある。

出土 陶 器

土 器 (国版A1 第3280)

壺は1・2がある。1は側面片で上半に台形状の凹部を残す。底部近くは細まる。調整はハケとナタで仕上げる。壺内土壤からの出土である。2は壺の底部で底径10.8cmを測る。壺は3～5がある。3は「く」字状に外反する口縁部を有し、肩部は茎る。ハケで仕上げる。壺口徑30.0cmを測る。4は小瓶の甕で、壺口徑7.6cmを測る。

6は神形の壺で浅いハケとナタで仕上げる。壺口徑17.4cm、底径6.0cm、高さ13.0cmを測る。7は支脚で、口縁部は肥厚し端部は外傾する。基盤は2層くつくなり、底部は僅かに開く。調整は指頭圧痕がみられ、全面に二次加熱を受ける。口縁径10.5cm、基盤径13.3cm、高さ12.5cmを測る。



第93図 61号墳穴性層跡出土石器、土製品実測図(1/2)

石 器 (図版41 第93回)

1は砂岩製の蓋底である。約1/2を欠損する。前面は上部の欠損部を除いてすべての面を使用している。屋内土壙内からの出土である。

2は砂岩系の石材を使用した石窓丁片である。全面が強い二次加熱を受け剥離が著しい。穿孔径4.0mmを測る。埋土中からの出土である。

4は雲母片岩製の動輪車で整美なつくりである。表面は擦痕が残り、二次加熱を受け黒く変色する。径4.7cm×4.8cm、厚さ5.0mm。孔は両方向から穿つ。孔内7.0mm、孔外9.0mmで重さ19.5gである。埋土中からの出土である。

土 製 品 (第93回)

3の土製円盤がある。土器片の再利用と考えられるが、断面では弧を描いておらず、底盤か大型土器の再利用と考えられる。49.1gを計る。

62号竪穴住居跡 (図版7-(2)・20-(1) 第91回)

61号住居と重複する竪穴住居跡で61号住居より新しい。平面形状が方形を呈する。規模は南・北壁が5.45m・5.10m、東・西壁が5.30m・5.50m、壁高20.0cmを測る。床面積は28.49m²である。支柱穴は2本で、炉址及び床面上での焼痕は認められない。床面下には12号土壙があるが、上面は貼床を施している。主軸方位は柱間軸からN21°Wを示す。その他の施設については不明な点が多い。

出土遺物は甕・甌・鉢・高杯がある。

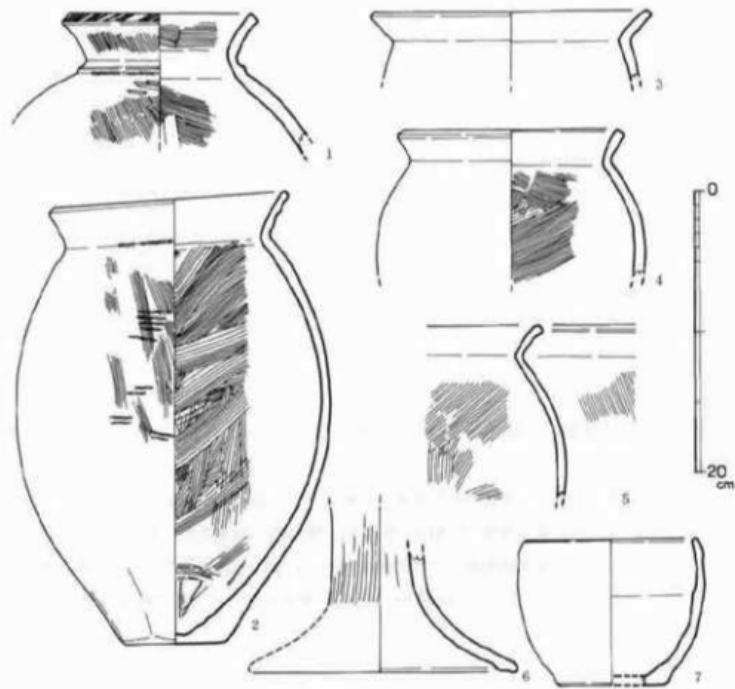
出 土 遺 物

土 器 (図版41 第94回)

「く」字状に外反する口縁部を有し、口縁部を肥厚させる蓋がある。頸部には低い三角凸筋を付せる。調整は内外面ともハケを多用する。口径13.9cmを測る。埋土中からの出土。

甌は2~5がある。2は完形品で「く」字状に外反する長い口縁を有し、長胴の体部をなす。底部はやや粗まり平底を呈する。調整は外面をナデで仕上げるが叩き痕とハケ目が残る。内面はハケで仕上げる。外泊は二次加熱を受け黒ずむ。口径17.0cm、底径7.5cm、器高32.0cmを測る。埋土中からの出土である。3の口径20.0cm。4は口縁の外反度が鈍く、肩部は張る。復原口径16.0cm。埋土中から出土。

6は高杯の脚部で端部を肥厚させる。底径19.0cmを測る。



第94図 62号竖穴住居跡出土土器実測図(1/4)

7は口縁が内彎し、体部は丸味を有す。復原口径12.4cm、底径7.9cm、器高10.3cmを測る。埋土中から出土した。

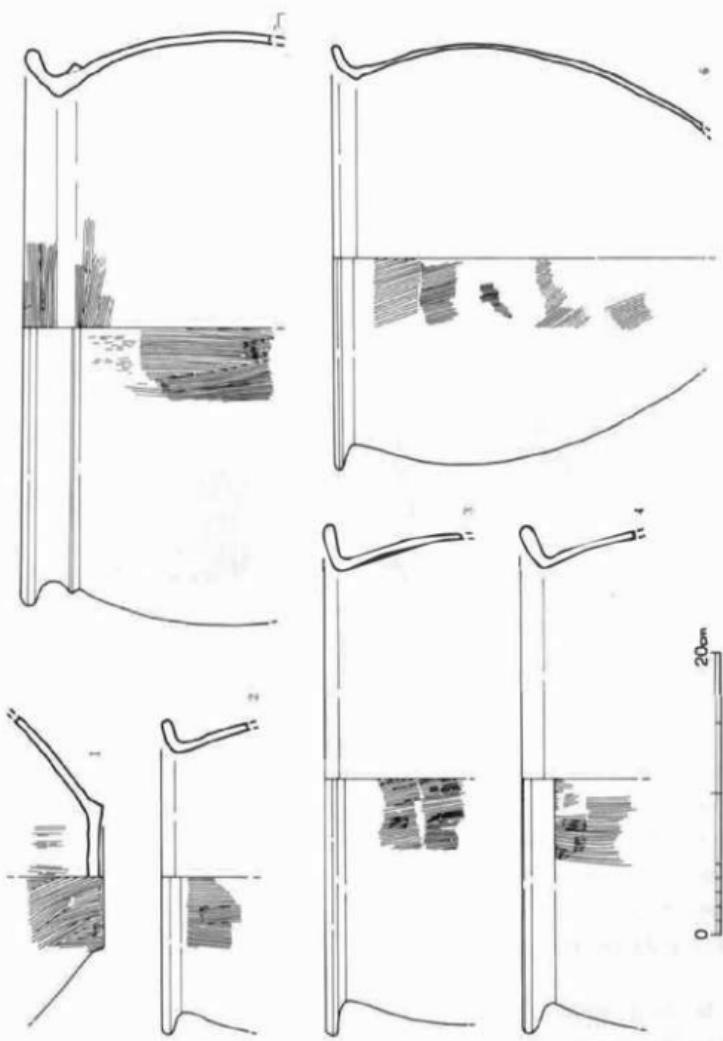
63号竖穴住居跡出土遺物

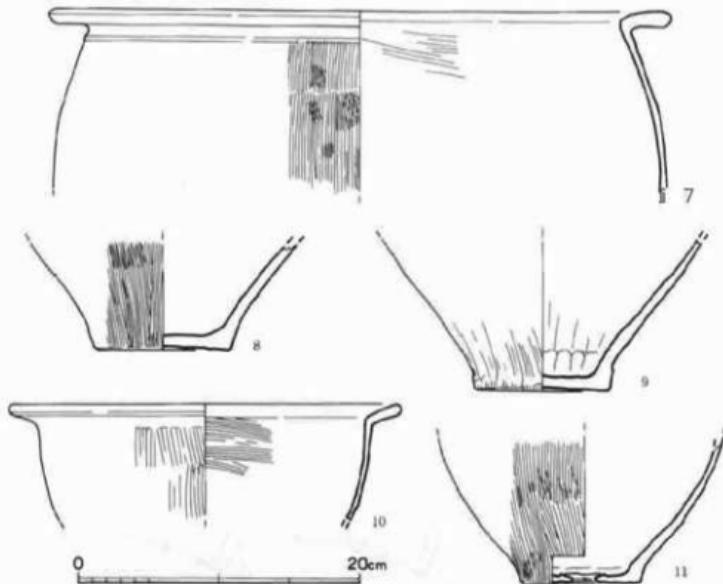
土 器 (図版41 第95・96図)

1は壺の底部で、器壁は薄くつくられる。僅かに上げ底をなし、外面ハケ、内面ハケのちナデ仕上げである。底径10.0cm。

甕は2～9がある。形状では逆「L」字状から「く」字状に移行する過渡的様相を示し、弥生

第95図 63号堅穴出縄目土器測定図の1(1/4)





第96図 63号整穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)

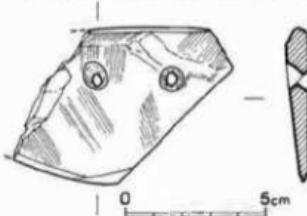
時代中期末から後期初頭の形態的変化が認められる一群である。頸部に凸沿を貼付するのは5のみである。底部はやや細まり、若干ながら上底をなす。総じて調整はハケとナデで仕上げている。4、6、9は加熱を受け赤変する。2の口径22.2cm、3は35.8cm、4は36.0cm、5は39.0cm、6は30.0cm、7は42.0cm、8の底径9.8cm、9は9.0cmを測る。

10は鉢で斜め上方に外反する口縁部を有す。ハケとナデで調整する。器面は二次加熱を受け淡く赤変する。復原口径28.0cmを測る。

11は楕に使用されたもので体部は丸味を持つ。底部には焼成前に孔を穿つ。外面には煤が付着する。底径8.4cmを測る。

石 器 (図版-II 第97図)

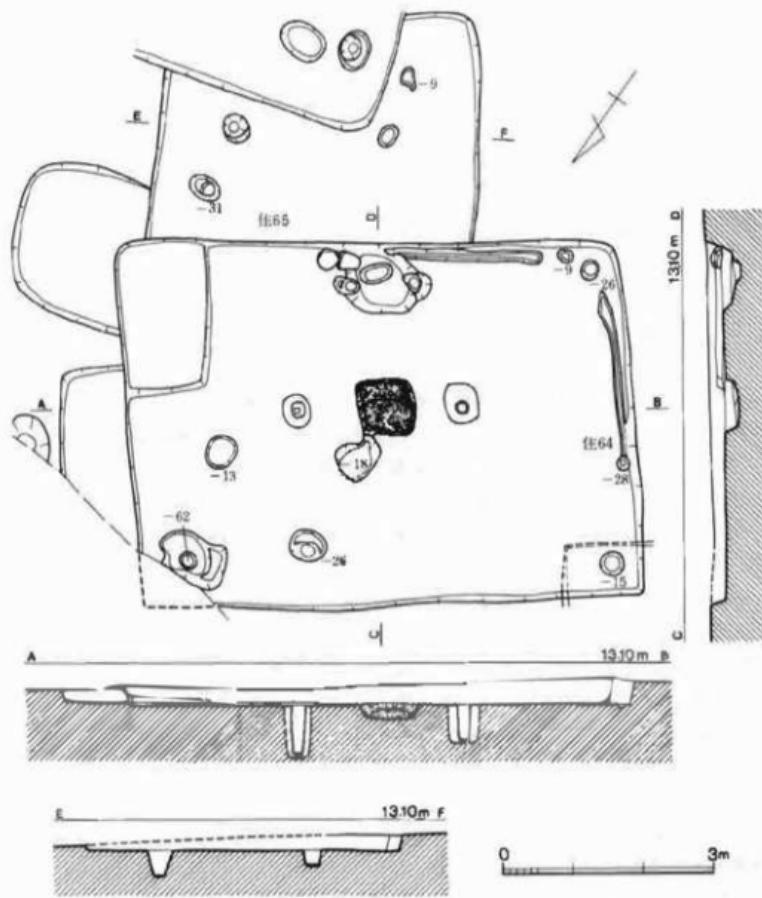
硬質砂岩製のやや大型の石庖丁片がある。両方向を欠失し、孔の部分が残る。背部は整美な



第97図 63号整穴住居跡出土石器実測図(1/2)

面取りを施し、鋭い刃部を研ぎ出す。孔は両方向から穿つが、穿孔部の位置がくいちがう。幅は5.5cmを測る。

64号竪穴住居跡（図版7-(1)・19-(3)・(4) 第98・107図）



第98図 64号、65号竪穴住居跡実測図(1/80)

3軒の住居の屋根があるがすべての住居より新しい。平面形状は長方形とする。規模は南北7.08m・7.10m(復原)、東・西壁各15.20m、5.00m(いわゆる複原)。壁厚20.0cm~30.0cmを測る。復原面積は35.31坪である。支柱は2本で柱間は2.35mである。柱間に複数の煙突口を備える。南壁の中央部には不規則形の窓内装飾を設け、南端には小さな柱穴を配する。屋内土塀の跡には河原石のけ叢台2個が置かれていた。東壁の一部には幅1.30m、長さ2.10mの

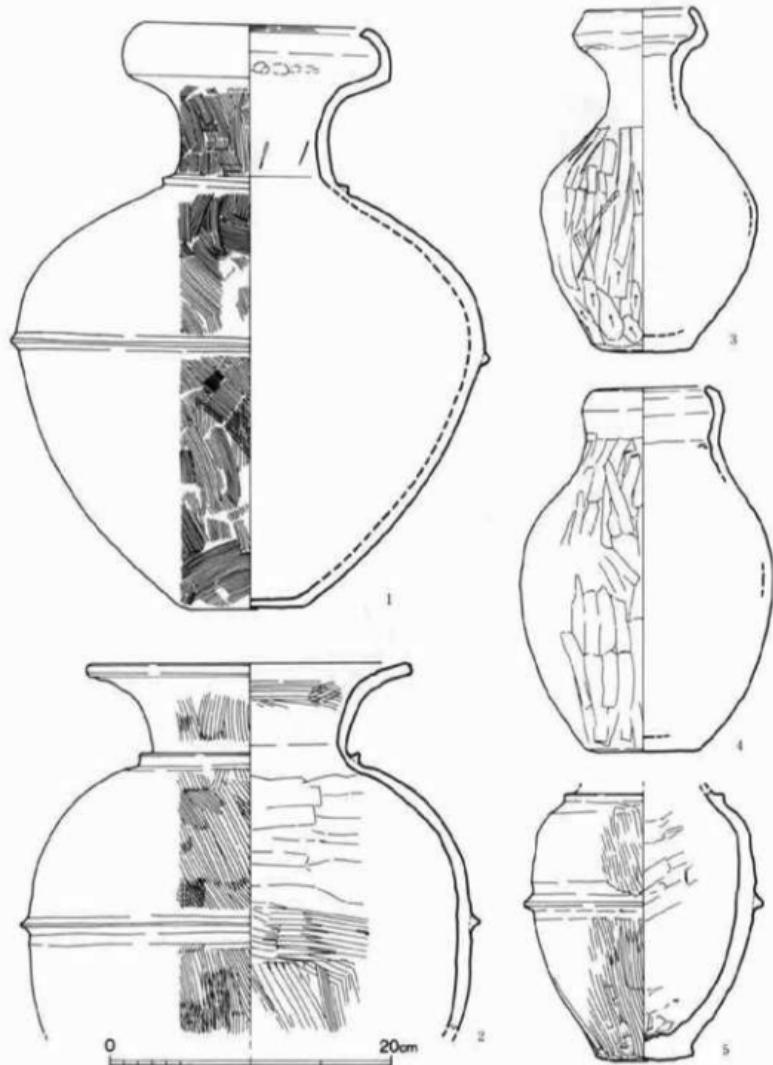
当塙原穴内周は火災に遭遇しており、床面には多量の焼土と灰化木材が散乱していた。それに伴って多数の土器が被覆層を保った状態で出土しており、既久焼は灰黒・たまたま焼色いたらしい。土器の出土状況は床面に断面するもの、焼土上にあり床面よりやや上側に転倒するものなど様々に一見でわかった。

焼失住居のため出土遺物が多く、当時の「軒の住戸内」の器種構成が見えられる。遺物は壺・甌・博形土器・鉢・器台・支脚・手すり等上器・土製瓦等その他、砥石・柱状片列石斧・不明石器等が出土した。

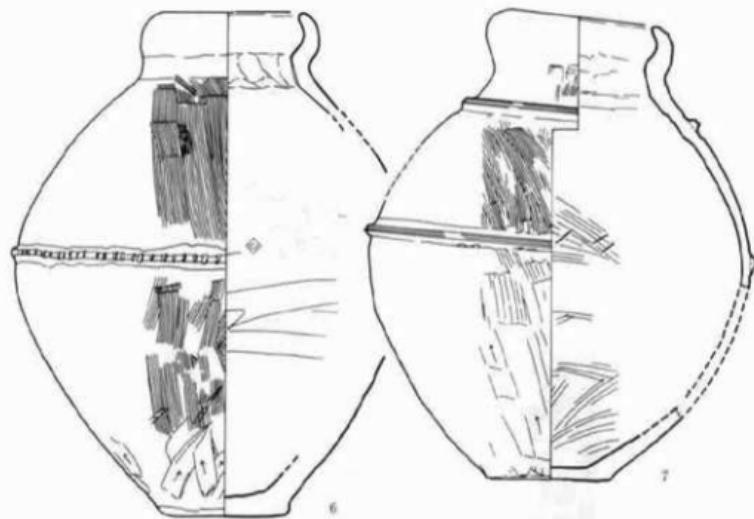
出土遺物

N 標 (岡版41・42・43・44・45 299・100・101・102・103・04・05・106・107回)

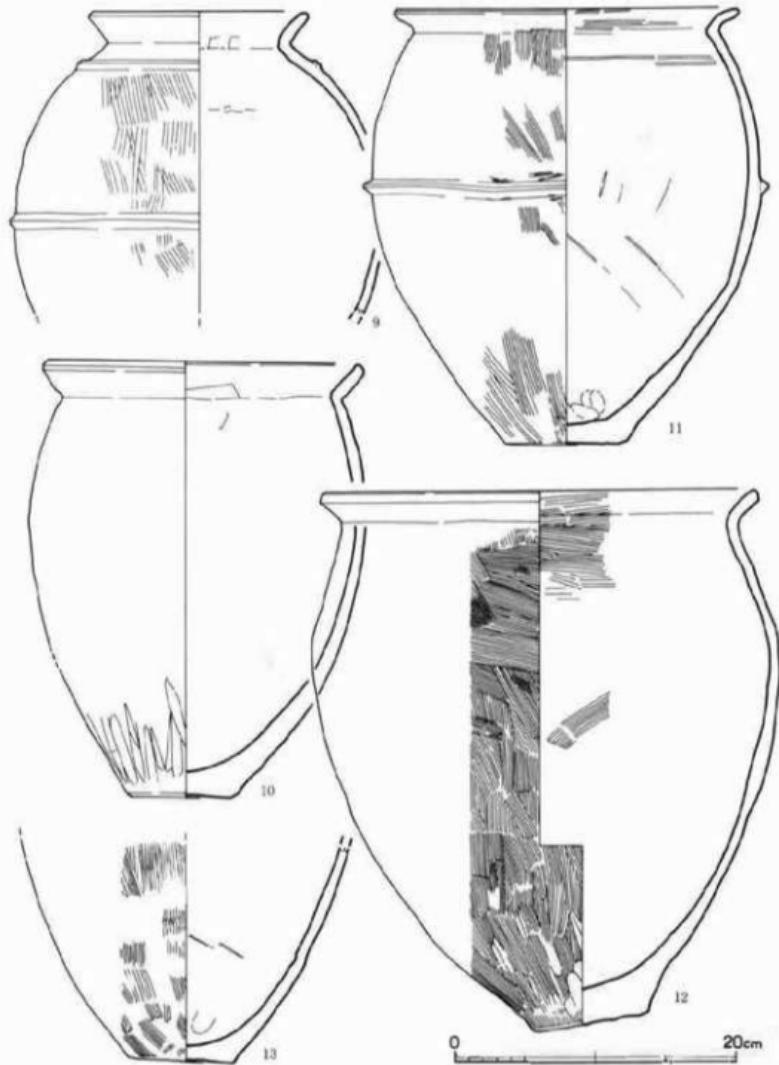
度は1~9があり完形品が多い。すべては一次加熱を受けている。1は袋状口縁の系縄を引くもので口縁は丸く内側する。腹部は短くしかも細い。肩部から体部の張りは大きく、肩部と胸中には三角及び台形の凸縁を付す。調整はハケとナードで仕上げる。口径15.8cm、底径8.2cm、高さ41.3cmを測る。底面から出た出上である。2は口縁部が細長状に開く所謂袋狀口縁の系縄を引くもので、肩部から脚部にかけての張りは著しい。肩部と胸部上半には三角凸縁を貼付する。調整は荒いハケが主体である。腹囲口径23.1cm、堆土中から出土した。3、4は小型の袋の複合口縁をいい。それも完形品である。卷にしてはつくりが粗い。3の割離外縁は葛状工具による擦過痕が残る。口径8.0cm、底径7.2cm、高さ24.2cmを測る。4は完全な複合口縁の形ではとらず、袋状口縁の退化した形態を示す。口縁は内側させ、削削前の縁は不明瞭である。肩部は削削で胸下半は丸味を失う。持ち不安定感がある。調整は3と同じ様である。口径8.3cm、底径8.0cm、高さ25.5cmを測る。底面から出上。5も小型の袋で腹部上半を欠く。腹部に三角凸縁、脚部に台形凸縁を貼付する。調整は厚くくつくられ相い感を受ける。調整は外側が荒いハケ、内側は擦過痕を残す。底径7.0cm、堆土中からの出上である。6、7は同タイプの器で完形品である。口縫部のつくりは1と同じである。が体部に比べ口縫が小さい。肩部は無理で胸下部に最大張がある。6は中央部に刺込みを配する。7は肩部と脚部に「M」字状凸縁を貼付する。調整はハケ、擦過、ナードで仕上げる。前者の口径9.8cm、底径9.5cm、高さ35.5cmを測る。後者は口径10.3cm、底径9.0cm、高さ33.0cmを



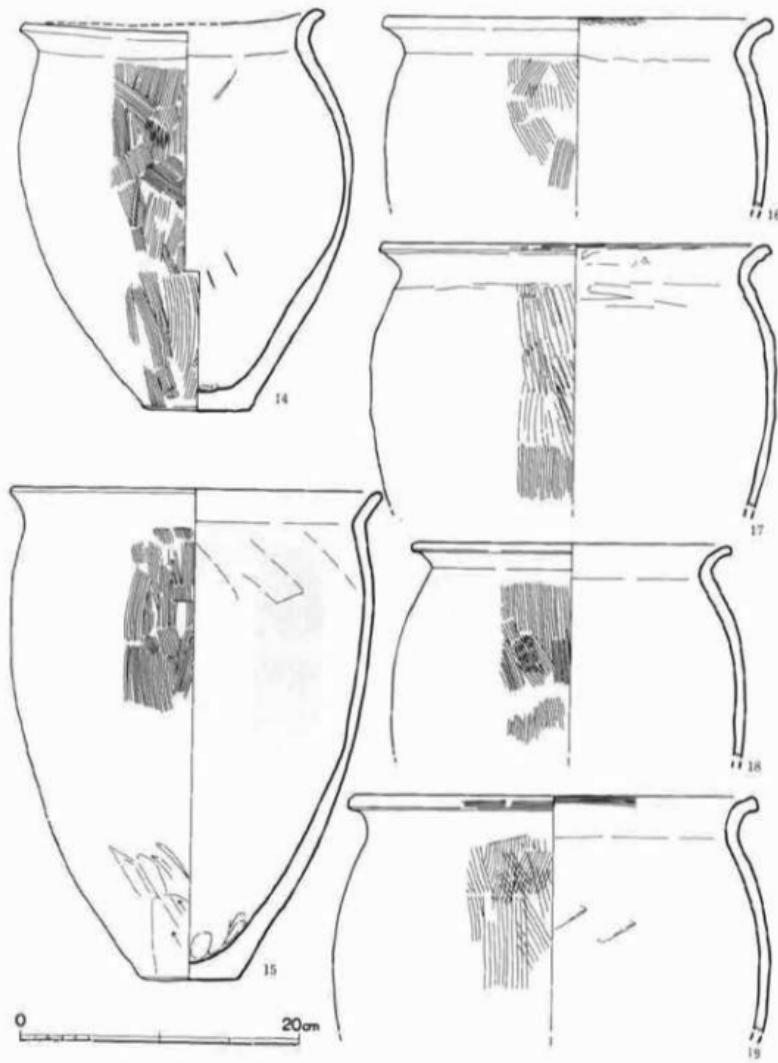
第99図 64号竪穴住居跡出土土器実測図その1(1/4)



第100図 64号整穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)



第101図 64号堅穴住居跡出土土器実測図その3(1/4)



第102図 64号住居跡出土土器実測図その4(1/4)

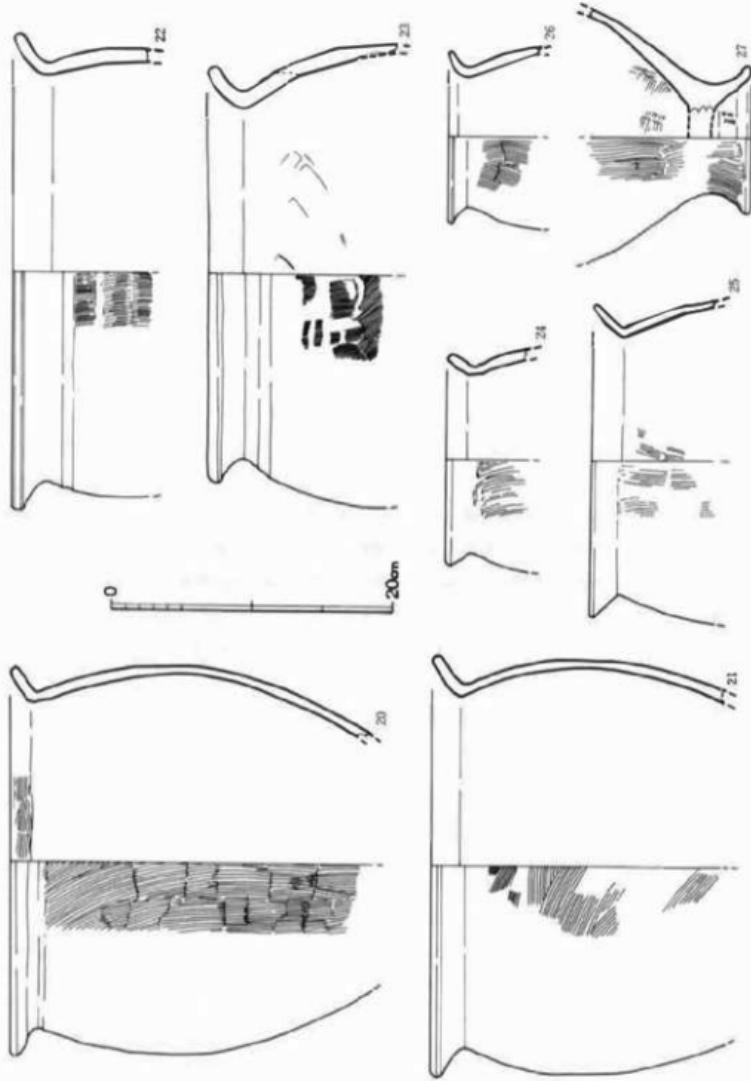
測る。床面からの出土である。8は体部に比較して小さい口縁を有する壺である。調整は擦過のちナデしている。胴部には細い沈線が部分的に残っており、凸筋を貼付する目安としている。凸筋が剥離した感は受けない。口径14.8cmを測る。9は「く」字状に短く外反させた口縁を有する壺で、胴下半を欠損する。肩部には「M」字状、胴部には三角凸筋を付す。調整は荒いハケとナデで仕上げる。口径15.5cmを測る。埋土中からの出土である。

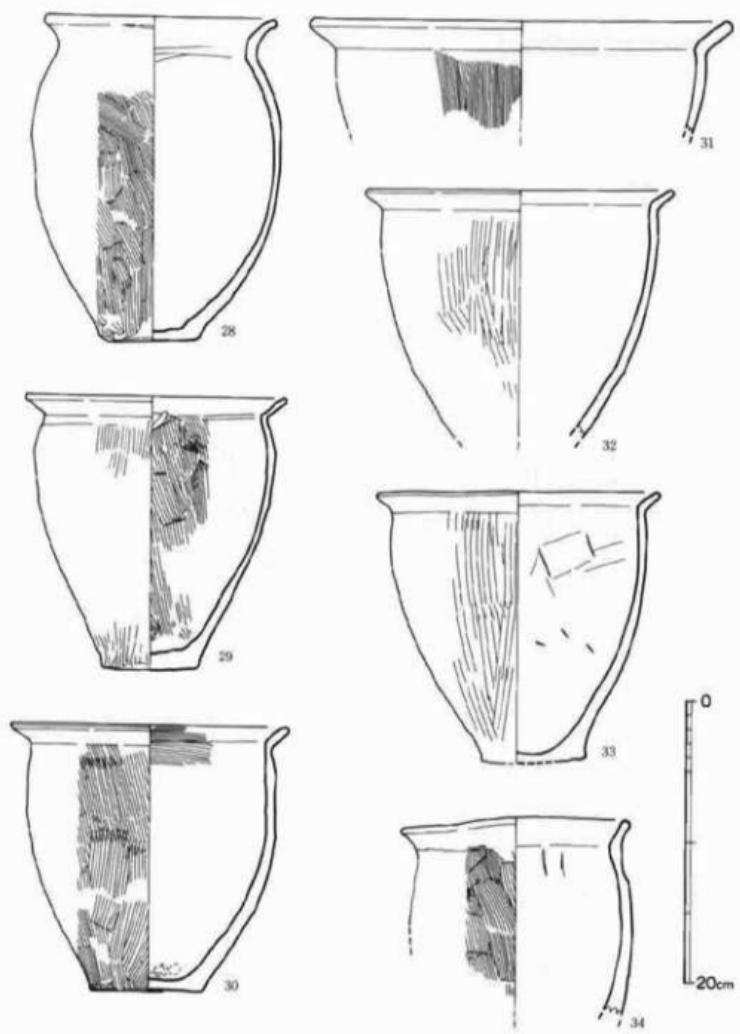
壺は胎土数が多く、10～34がある。この内、21～34はやや小振の壺である。10～23の口縁部の特徴をみるとすべてが「く」字状に外反するが、この中に胴部が球形に近く中央に凸筋を付するもの、口縁が反り気味に外反し、頸部内面に後がつかず肩部が張るもの、直線的に外反し頸部に明瞭な棱をなしや撫で肩のもの、胴部が長胴のものなどがある。調整は總じて外面がハケ、内面がナデで仕上げる。胎土は總じて荒く、砂粒、石英、角閃石、赤褐色鉱を含む。すべて二次加熱を受け、床直の埋土中と床面からの出土である。22、23の壺は肩部に凸筋を貼付していたものが剥離したと考えられる。10の口径22.7cm、底径7.9cm、器高30.9cm。11の口径24.2cm、底径8.5cm、器高30.7cm。12の口径31.0cm、底径8.4cm、器高37.7cm。13は底径7.3cm。14は口径21.4cm、底径7.9cm、器高27.7cm。15は口径26.5cm、底径7.0cm、器高35.0cm。16は口径28.0cm。17は28.2cm。18の口径23.0cm。19の口径29.4cm。20の口径27.8cm。21の口径30.0cm。22は口径34.0cm。23は口径29.6cmを測る。24～34の小振の壺も頸部内面の棱が鮮明のものとそうでない壺がある。27は低い脚台が付く。31は鉢になる可能性がある。調整と胎土は前記の壺と同様であるが、内面にハケを残す壺もある。24の復原口径15.0cm。25は復原口径22.0cm。26は復原口径12.4cm。27の基部径10.6cm。28は口径16.5cm。底径7.1cm。器高22.9cm。29は口径18.4cm。底径6.8cm。器高19.2cm。30は口径19.7cm。底径8.0cm。器高18.9cm。32は口径22.0cm。33は口径20.0cm。底径7.4cm。器高19.4cm。34は口径18.2cmを測る。すべて二次加熱を受ける。

35は梯形土器である。口縁下には台形凸筋を貼付する。外面は丹塗り歴研で内面はナデで仕上げる。復原口径30.2cm。

36～50は鉢としたが、36、39、40、41、42は小型壺の範疇と考えた方が良いかも知れない。口縁部が「く」字状になるものとそうでないもの（43～50）とがある。36は胴部に三角凸筋を付せる。36、37、40の外側は擦過痕が残る。38は板として使用されている。49、50は口縁部を逆「L」字状に外反させる。殆どが二次加熱を受け渋く赤変する。床直上埋土中か床面からの出土である。36の口径13.8cm、底径7.3cm、器高14.8cm。37は口径18.0cm、底径6.4cm、器高12.2cm。38の口径15.6cm、底径6.2cm、器高12.2cm。39の口径17.8cm、底径7.6cm、器高15.4cm。40は口径14.3cm、底径5.7cm、器高13.8cm。41は口径10.4cm、底径5.6cm、器高10.7cm。42は口径10.3cm、底径5.3cm、器高9.4cm。43の口径12.8cm、底径5.4cm、器高8.5cm。44の口径15.3cm、底径6.8cm、器高9.2cm。45の口径13.0cm、底径6.05cm、器高8.4cm。46は口径14.2cm、底径5.0cm、器高8.1cm。47は口径16.8cm、底径7.3cm、器高10.8cm。48の口径13.2cm、底径5.0cm、器高8.5cm。

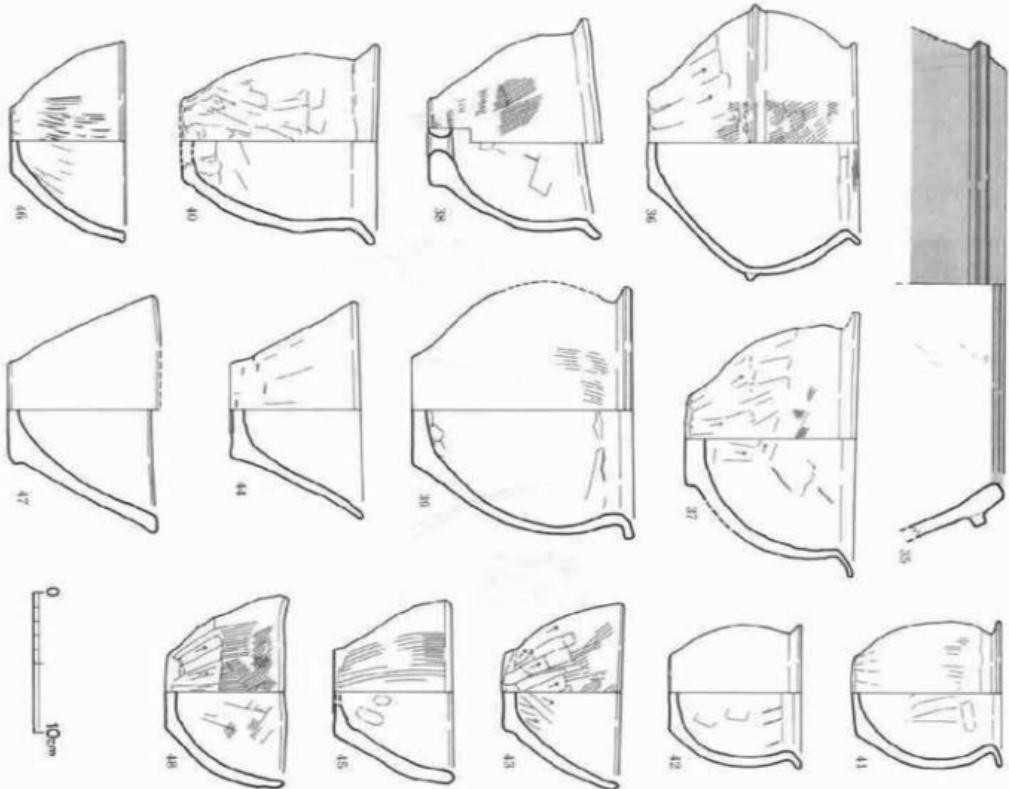
第103図 64号堅穴住居跡出土物実測図その5(1/4)

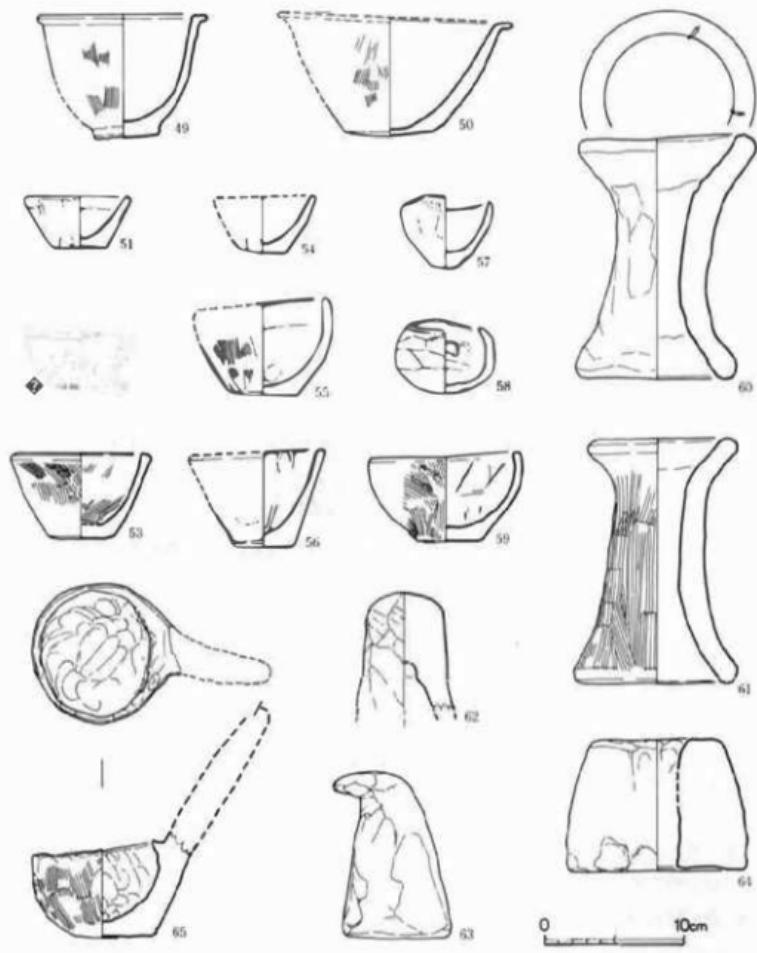




第184図 64号竪穴住居跡出土土器実測図その6(1/4)

第105図 64号墳穴庭出土土器実測図その7(1/4)





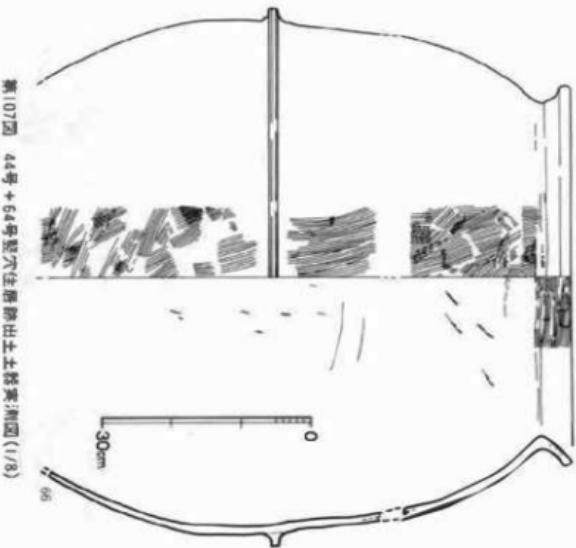
第106図 64号竪穴住居跡出土土器実測図その8(1/4)

49の口幅12.1cm、底
幅4.5cm、高さ8.6cm
を有する。
51～59は手形ね土
器で、体部から口縁
部にかけて直線的に
延びるものと内側す
るものがある。大
半が二枚加熱を受け
ている。

器台は60、61があ
る。両者ともつくり
が粗い。前者は燃過
瓶を模し、後者も土瓶
のハケを模す。両者
とも器頭に切圧痕が
数個所ある。
62～64は支脚であ
る。3個とも形態が
異なる。62は上端が丸味を持ち、瓶部がやや聞くものであらう。63は嘴状を示す支脚で器高11.6
cmを測る。64は器高が低い、支脚で器體は深い。

65は土製玉杓子で柄の部分を欠失する。形状は手形ね土器に柄をつけた様にみえる。

66は大甕の裏原実測である。「く」字状に口縁を外反させ、瓶部から瓶底にかけては弧形。瓶部
には高い台形状の凸部を複数。測量はハケとナメで仕上げる。外周は片側りの振動が強かに現
る。44号A・B住居と64号住居から出土したものが一致した。復原口幅54.0cmを測る。



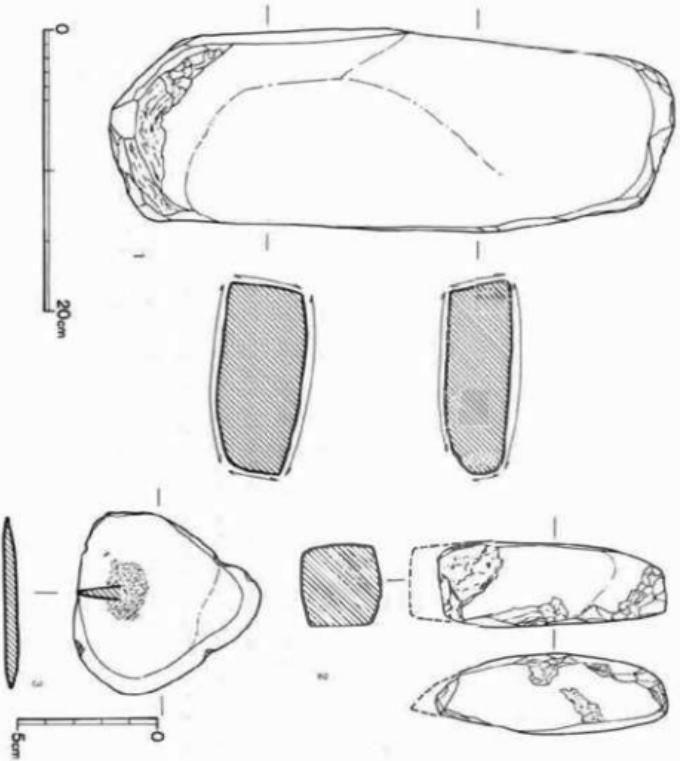
第407図 44号+64号竪穴住居跡出土土器実測図(1/8)

石 器 (図版45 第108回)

1は大型の縦視片岩製の中範行である。研削は5道で、5道とも非常に平行となる。現長40.3
cm、最大幅14.0cm、厚さ6.0cmを測る。灰面からの出土。

2は柱状片岩石斧で強い加熱を受け全体が黒ずみ表面が墨離する。硬質片岩製か。塵土中から
の出土である。

3は縞状片岩製と思われる小形石器で、周縁を刃部狀に研いでいる。色調は淡緑色を呈するが
部分的に加熱を受け赤變する。塵土中からの出土である。



第109図 64号竪穴住居跡出土石器実測図(1/4・1/2)

65号竪穴住居跡(64號19-(4) 第9886)

64号・65号竪穴住居跡に引られた住居跡であるが、竪穴の削平を受け全容は不明である。図示した柱穴も支柱とはなり得ない。既高は20.0cmを測る。
出土遺物は土器片少數の他、石製刀鎌形がある。

出土品等

埋土中から出土した雲母片岩製の鉢類がある。つくりは丁寧で表裏に煤が付着する。周縁の面とりは丁寧でよく磨っている。径は5.2cm×5.3cm、厚さ8.0mmを測る。穿孔外径1.1cm、内径7.0mmで重さ34.5gを計る。

66号竪穴住居跡出土遺物

土 器 (図版45 第110・111図)

1、3は蓋で1は大きく弧状に外反する口縁を有し、胴部は玉砕状を呈する。調整はハケとナデで仕上げる。口径17.3cm。埋土中からの出土である。3は短い口縁を「く」字状に外反させ、肩部から胴部にかけては大きく張る。調整は外面がハケ、内面はナデで仕上げる。全面に二次加熱を受ける。復原口径16.2cm、底径8.9cm、器高23.7cmを測る。埋土中からの出土。

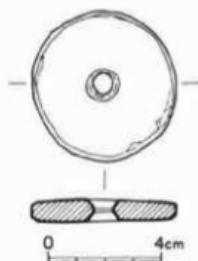
2は短い口縁を「く」字状に外反させ体部を丸くつくる甌である。調整は外面がハケ、内面はナデる。口径17.8cm、底径7.8cm、器高18.7cmを測る。埋土中からの出土である。4は脚台付甌の胴部片で全面に二次加熱を受けている。埋土中からの出土。

5は5～7がある。5は完形品で、口縁部は内向し口唇部は肥厚させる。内外面に火たすき痕が認められる。調整は外面がハケ、内面はナデる。二次加熱を受け部分的に器頂が剥離する。口径25.2cm、底径7.8cm、器高18.4cmを測る。床面からの出土である。6はつくりの粗い鉢で復原口径17.0cm。埋土中からの出土。7は鉢の底部で体部は丸味を持つ。僅かな上げ底をなす。底径7.5cm。埋土中からの出土。9は小型の鉢で胴部は下張れとなる。底部は小さくやや不安定で、底径4.9cmを測る。埋土中からの出土。

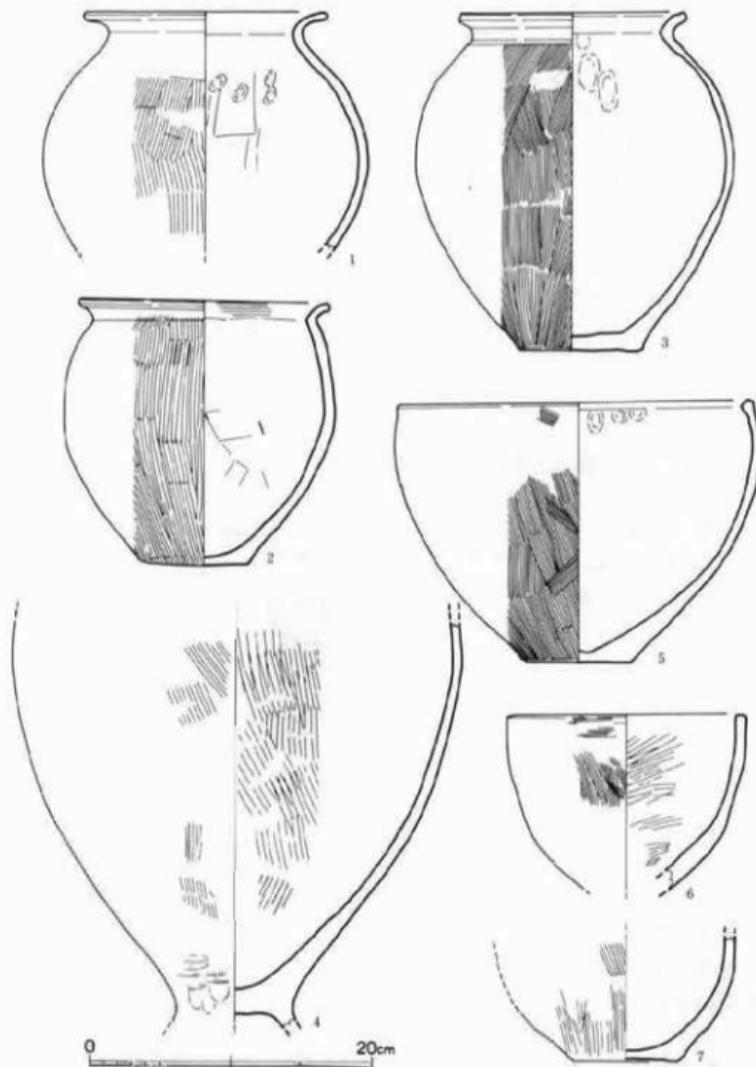
8はつくりの粗い器台で、器表面に荒い叩き痕が残る。最小径が胴中央部にある。全面に二次加熱を受ける。口径15.6cm、基部径16.6cm、器高20.0cmを測る。埋土中からの出土である。

石 器 (図版46 第112図)

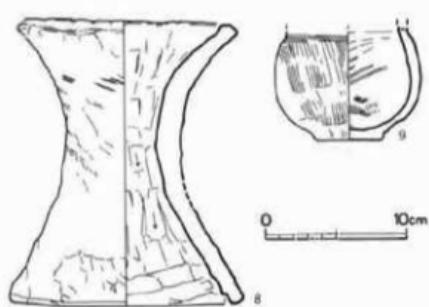
雲母片岩質(金雲母多く含む)の幅広の石庖丁がある。両端には浅い抜りを入れており、出土例が少ない。穿孔方法がやや難である。刃部は鋭く研ぎ出す。現長9.5cm、幅5.4cm、厚さ7.0mmを測る。加熱を受け部分的に赤変する。床面からの出土である。



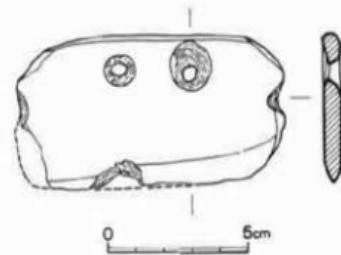
第109図 65号竪穴住居跡
出土石器実測図(1/2)



第110図 66号整穴住居跡出土土器実測図その1(1/4)



第111図 66号竖穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)

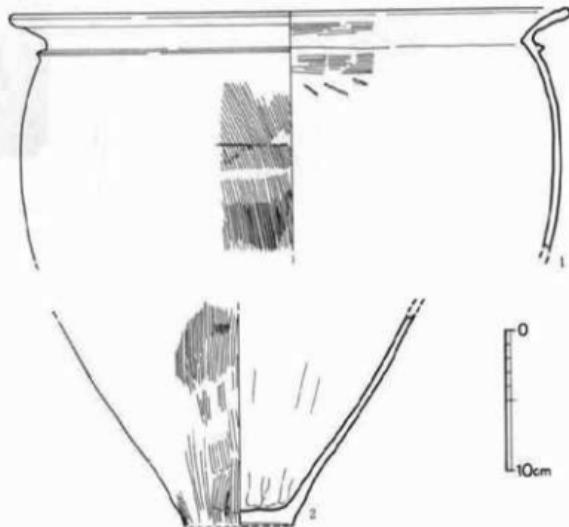


第112図 66号竖穴住居跡出土石器実測図(1/2)

67号竖穴住居跡出土遺物

土 器 (第113図)

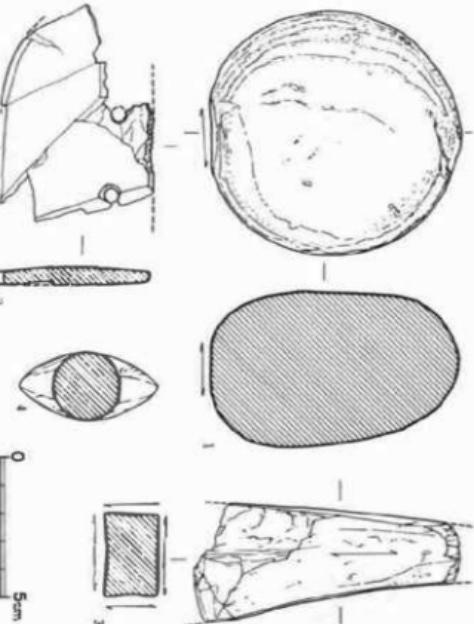
1、2の甕があるが、形状、器底の厚さ、色調などからみて同一個体と考えられる。口縁部はやや長く「く」字状に外反させる。頸部内面の稜線は明瞭で肩部はやや張る。胴下半から底部にかけては細まり、径の小さな底部をなす。調査は外面がハケ、内面はナデる。全体に煤が付着する。復原口徑40.0cm、底径7.7cmを測る。



石 器 (図版46 第114図)

1は屋内土壤から出土した磨石で全体が平滑と

第113図 67号竖穴住居跡出土土器実測図(1/4)



第114図 67号竖穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2)

なる。特に一方の側面は単純している。加熱を受け全体が黒く変色する。

2は大瓶の石庖丁片で鍛造砂岩製である。製作途中に破損したらしく、刃部の折れ出しは認められず、刃部を形成しない部分もある。作部には鋭利な刃物頭が残り鋸い「刃」をなす。私は(4)荒削し立穿つが、中央部の鉋はみられない。

3は砂岩製の砥石である。全面に強い加熱を受け砥石自体がもろい。研削4面を残す。

土製品 (国版46 第114図)

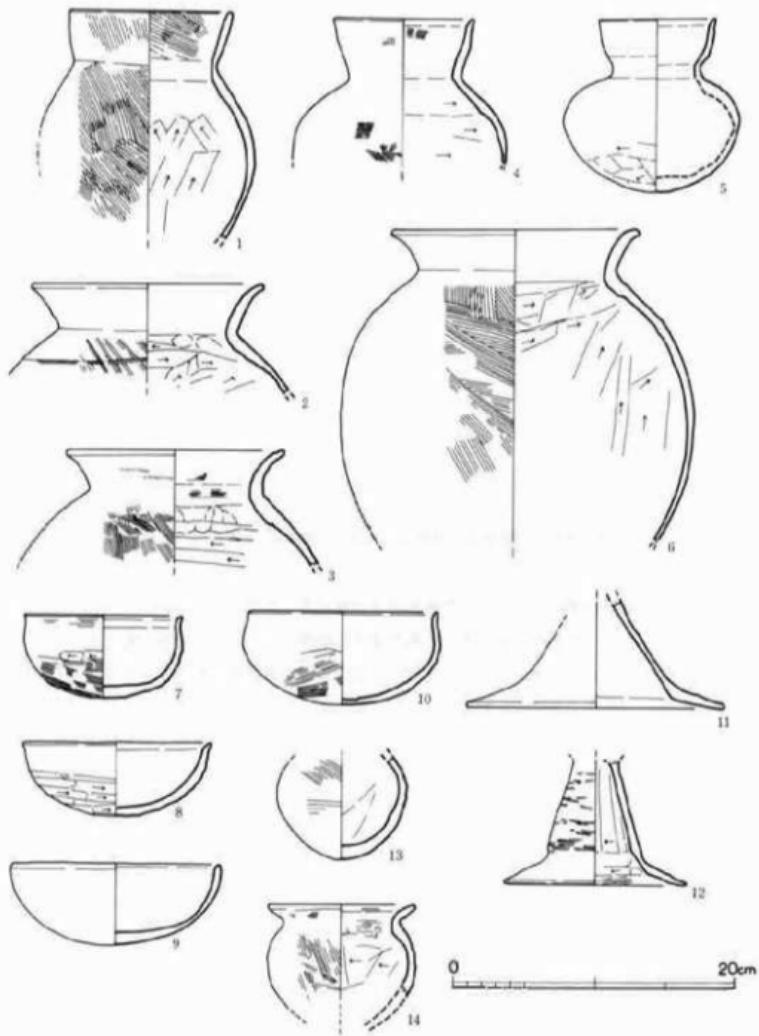
丁寧なつくりの技術がある。胎土は良質で陶器石を含む。長さ4.9cm、中径2.4cmを測る。重さ20.8kgである。壁土中から出土した。

68号堅穴住居跡出土遺物

土 器 (国版46 第115図)

1は小瓶の姿で外面がハケ、内面は鏡で削る。口径1.6cm。

2、3、6は圓タイプの甌で、反り気味に口縁が外反し、肩部から腰帯にかけては球形を呈する。測定は外面がハケ、内面は荒削りで仕上げる。2の口径16.5cm、3は15.5cm、6は17.6cm



第115図 68号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

測る。

4、5は小噸乳戻し器で前者とも口縫を内側させ、口唇部は側方に外反する。後者は正巻状を呈する。調節は外面はナテ、5の底面は器で削る。4の内面は窓開りで5は窓の内ナテである。4の腹戻口径10.0cm、5は先形で口徑8.3cm、高さ12.1cmを測る。

6は7～10がある。腹部から肩部にかけて内角させ、口縫部を側方に外反させる7、10と器高が低く口縫部を外反させる8及び半幅半球状を呈する9の3形態がある。調整は内面から腰上半は横ナデ、下半は腹開り及び窓の上から、腰を離す。腰上は起じて強く膨脹である。7の口徑11.2cm、高さ5.8cmである。8は口徑13.4cm、高さ5.1cm、9は復原口徑15.0cm、高さ5.7cm、10は二次加熱を受け未変する。口徑13.4cm、高さ6.8cmを測る。

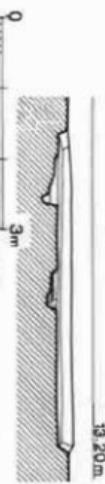
13、14は小型の器で手理れ風である。

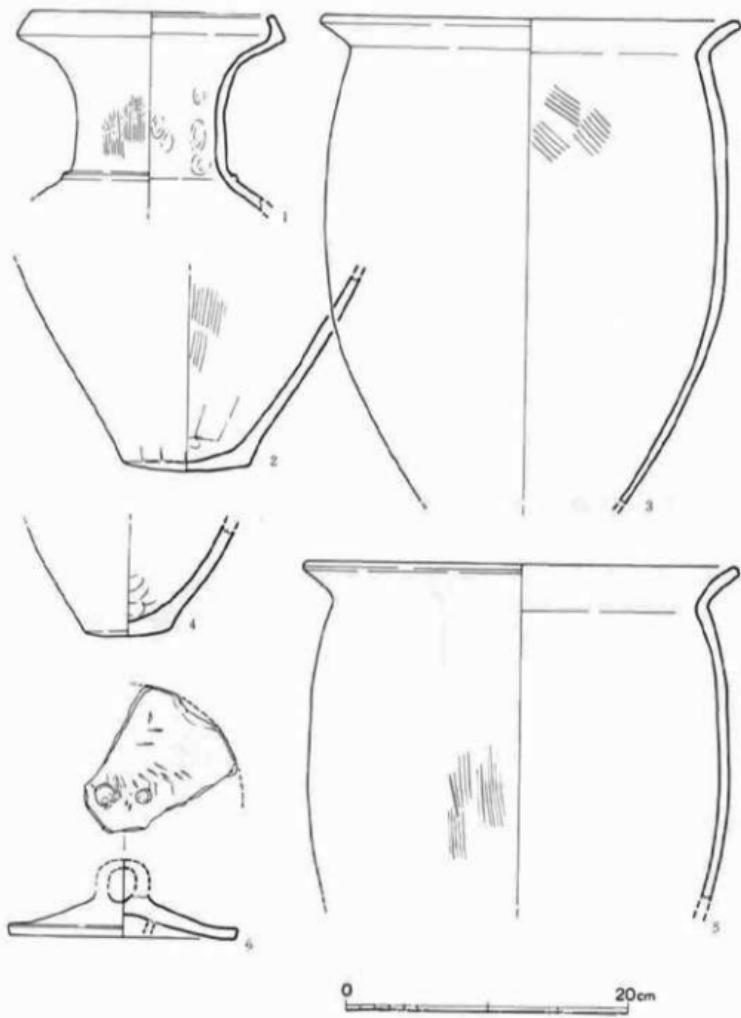
高杯は11と12の脚部がある。両者とも精製されたものである。11の脚部はノヘ1へ狀に開き器高は14.4cmで、さらに開く。高杯径18.4cm。12は口状部の開きは狭く、底部で強く屈折する。調節部は横方向の窓開きと内面窓開りで仕上げる。高杯径13.0cm。

69号竪穴住居跡 (3011680)

調査区のE-1区で検出した竪穴住居で、平面プランは方形を呈する。規模は南・北壁4.30m、東・西壁4.00m・4.50m、徹高15.0mを測る。支柱は4本検出され、床面中央には不整形の窓がある。床面標は17.43坪である。雨蓋部には直径70.0cmの不整円形の構内土壠を備えている。

出土遺物は鏡・甕・盃・灰土器があり、蓋は斜側の少ない形状を呈する。





第117図 69号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

1は複合口縫合で11縫合部は短い。屈折部の後級は直角で、前部は細くて長い。肩部には低い三内凸部を付す。口併約2cmを測る。

2は2~5がある。2、4の底端はレンズ状を呈し、二次加熱を受ける。3、5は同タイプの茎で「く」字形に縫合部を外反させ、長脚をなす。縫合部は摩耗し消失。おそらく二次加熱を受けているのであろう。胚士は紺糸、赤褐色の子を多く含む。3の口併30.0cm、4は30.8cmを削る。

6は茎—100cm、中心部に環状三みをつける。

内面中央には低い脚状部があつたと思われ、剥離部が残る。剥離部はナデでハケの起点が残る。胚土は搗製され得り、最高

高さ16.2cmを測る。

70号堅穴住居跡

(2011890)

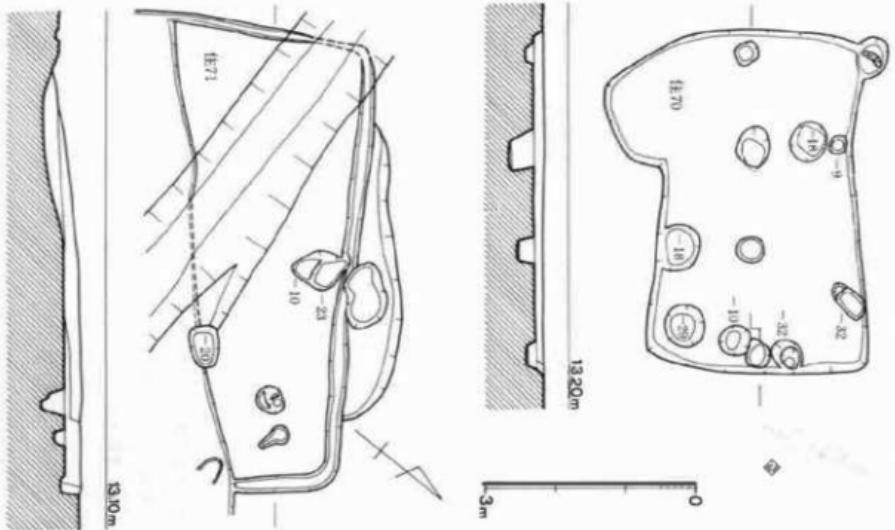
調査区のD-3区へ輸出した堅穴住居跡である。平面プランは長方形を呈し、南壁は引の途端と重複し変形している。規模は長辺約4.70m、

4.30m、短辺3.15m、

2.80m(復原)、壁高

10.0cmを測る。床面積は13.56m²である。現況での支柱は2本であるが、

抜いたため支柱となり得たか疑問が残る。その他の詳



第118図 70号、71号堅穴住居跡実測図(1/60)

細は不明である。

出土遺物は甕の破片が少數ある。

出 土 遺 物

土 器 (第19號)

1は体部が扁平な甕である。口縁部は「く」字状に外反させ、頂高内面の縁は鋭明である。調査は摩耗し不鮮明、胎土は砂粒を多く含み赤褐色粒子は含まれない。

復原口径38.0cmを測
②。2は小型の甕で古朴の「T」字状口縁が残る。口縁上面は僅かに内凹する。

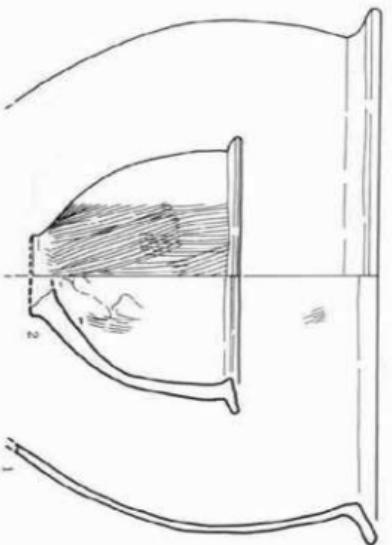
調査はやや張り気味で小さな底部を有す。調査は低いハケとナデで仕上げる。復原口径19.4cm、底径5.7cm、器高14.8cmを測る。

71号堅穴住居跡 (西版3-(2)・4-(2)・15-(3) 第118號)

D-4区で検出した堅穴住居であるが、廣道と耕作による削平で遺存状況は悪い。23号・42号との重複がある。現況では北壁のみが判別でき8.40m、壁高20.0cmを測る。その他詳細は不明で、出土遺物も無い。

72号堅穴住居跡 (西版16-(3) 第120號)

73号住居に朝られた住居であるが、調査時に既に供用が継続しており、全容は捉えることが出来ない、床面中央部に小さな円形の既成がみられる。北壁の規模は4.00mで、北壁のピットは



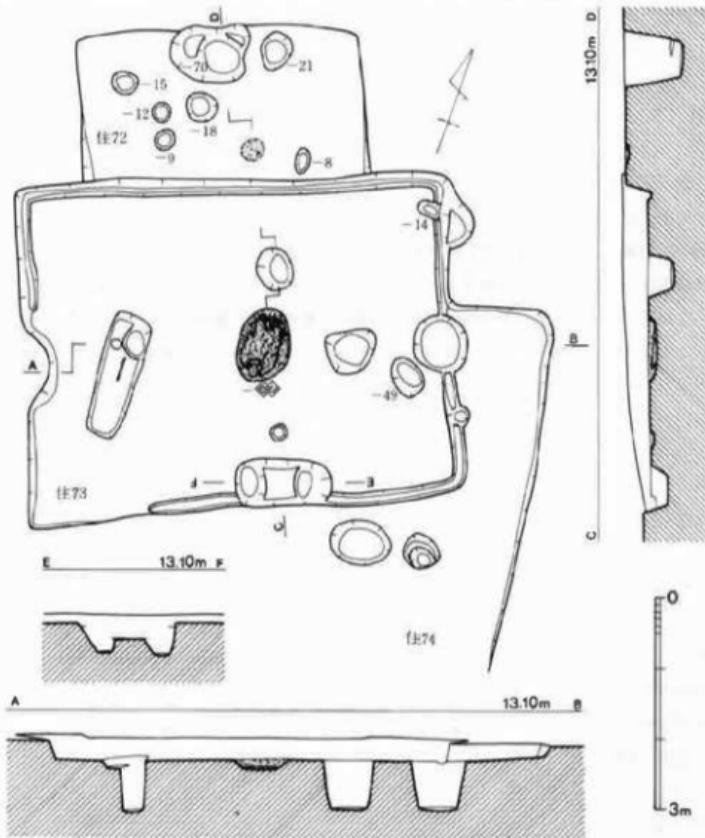
第19図 70号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)

当該住居に伴うか否か不明。

出土遺物は無い。

73号堅穴住居跡 (図版 3-(2)・4-(2)・16-(3) 第120図)

72号、74号堅穴住居を切った住居で、平面形状は長方形を呈する。規模は南・北壁が6.20m・



第120図 72号～74号堅穴住居跡実測図 (1/80)

6.15m、東・西壁が4.55m・4.80m、壁高30.0cm前後を測る。床面積は26.69m²である。西壁の中央は内側に突出しており、出入口の可能性がある。支柱は2本であるが、西側の支柱穴は住居の廃棄後中世の土壤層に切られている。柱間は3.00mを測り、床面中央には楕円形の炉を設けていた。炉の中からは図示した甌・鉢・杯などが出土しているが、住居の形態やその付設する遺構内容は弥生時代に流行した形を採用していることから出土した土器との時期的な整合性は認め難い。南壁際中央には楕円形の屋内土壤を掘り、両端にピットを配する。壁沿いには細い周溝が廻る。

出土遺物は古墳時代の土器の他、石庖丁の未製品がある。

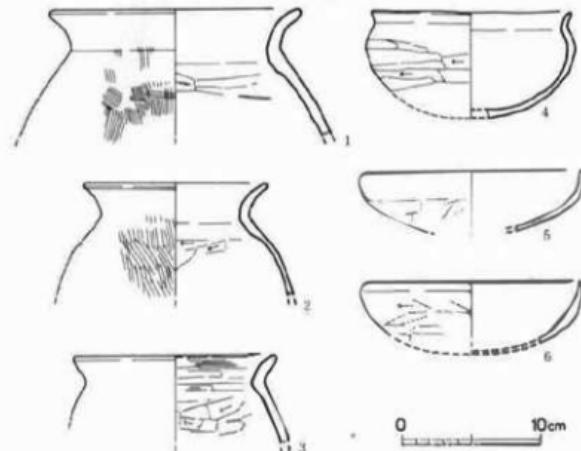
出土遺物

土器 (第121図)

図示した一群の土器は、支柱穴間の中央ピット〔炉址〕から出土したもので、前述したように住居内部の形態などから当該住居には伴わない可能性があるが、炉跡内からの出土であることから73号住居の出土遺物として説明する。

1～3は甌で、1の口縁は反り氣味に外反させる。肩部はやや撫肩で荒いハケと範削りで往上げる。2も同タイプの甌であるがやや小振である。3は「く」字状に口縁を外反させ、つくりが粗い。すべて二次加熱を受けている。1の口径17.8cm、2の口径13.0cm、3は口径14.4cmを測る。

4は鉢で口縁部は僅かに外反する。肩部は張り扁平な肩部を有す。調査は外面が範削り、肩部から内面はナデる。口径13.9cm、壁高7.5cmを測る。

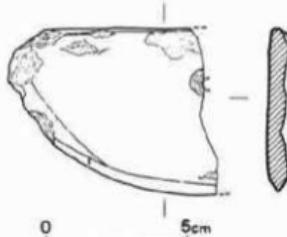


第121図 73号竪穴住居跡混入土器実測図(1/4)

5、6は杯でいずれも破片である。口縁は内凹し体部は扁平となる。5の口径15.6cm、6は口径15.4cmを測る。胎土は精製されている。

石 器（第122図）

緑泥片岩質の石庖丁の未製品がある。刃部の研ぎ出しが鋭い。表面には穿孔痕が残るが、孔を穿つに至っていない。穿孔時に破損したと考えられる。片面は剝離が著しい。出土した土器には共伴しない。



第122図 73号堅穴住居跡
出土石器実測図(1/2)

74号堅穴住居跡

(図版3-(2)・16-(1) 第120図)

73号に切られた堅穴住居であるが、農道及び耕作による削平で実体は不明である。

出土遺物は無い。

75号堅穴住居跡 (図版20-(3) 第123図)

76号堅穴住居跡に切られた住居である。平面形状は直な長方形を呈する。規模は明らかでないが2辺の壁が計測でき5.30m、4.80m、壁高15.0cmを測る。断面に図示した深さ80.0cmの柱穴は支柱の1本であろう。東壁沿いに若干の朱の痕跡がみられた。

出土遺物は小型壺と手握ね土器がある。

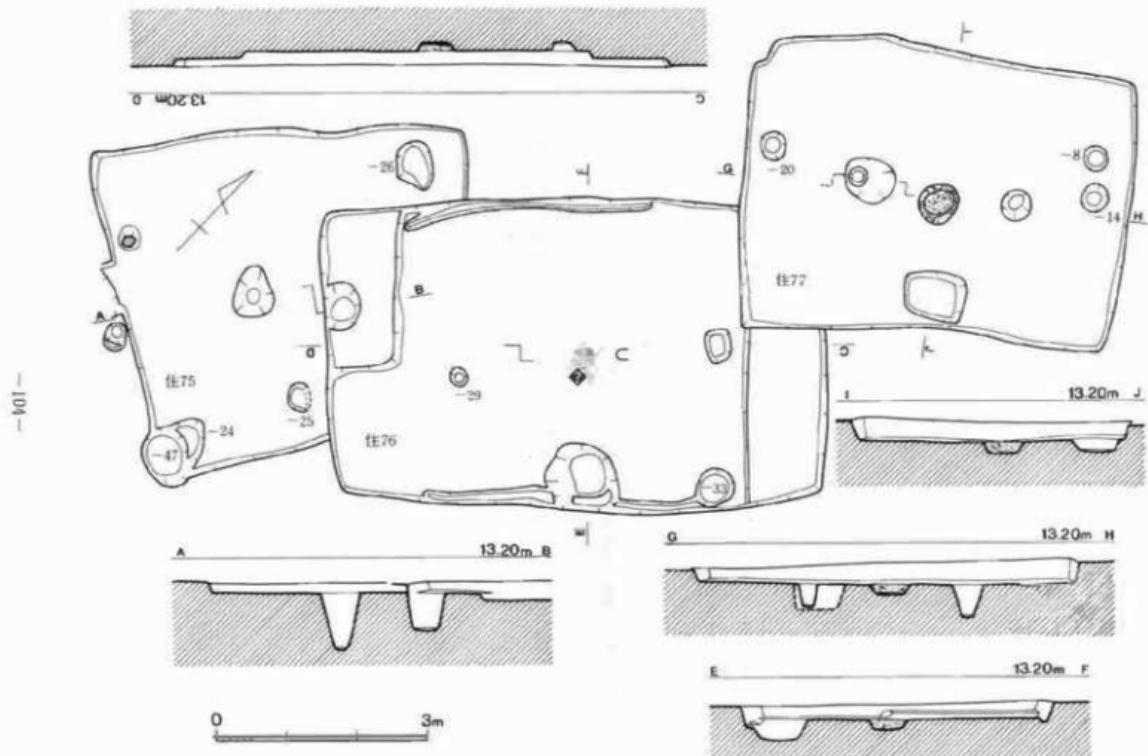
出 土 遺 物

土 器 (図版46 第124図)

1は小型の壺である。短い口縁部は僅かに内凹する。頸部は短く、胴部はやや扁平球状を呈する。調整はハケの上をナデているが、粗い調整である。口径5.7cm、底径5.1cm、器高11.0cmを測る。2は手握ね土器で口径5.5cmを測る。

76号堅穴住居跡 (図版8-(1) 20-(3) 第123図)

3軒の重複があり、75号住居より新しく77号住居より古い。平面形状は長方形を呈し、規模は



第123図 75号～77号整穴住居跡実測図(1/80)

計測可能な長壁6.85m、短壁4.00m、壁高20.0cmを測る。復原床面積は29.21m²である。床面上には支柱は見当らず、図示した柱穴は支柱になり得ない。床面中央には径50.0cmの焼痕の残る炉を備えている。南壁には不整円形の2段掘りの屋内土壙を付設し、壁沿いを廻る周溝と直結する。両短壁には貼床のベットを付せる。

出土遺物は少なく鉢・手捏ね土器がある。

出 土 遺 物

土 器 (図版47 第124回)

3の鉢がある。口縁部は「く」字状に外反させ、胴部は張り玉態状を呈する。底部は小さく不安定感がある。調査はナデが主体で一部ハケが残る。口径14.2cm、底径5.5cm、器高12.2cmを測る。

4、5は手捏ね土器で、形態を異にする。5は薄手づくりである。

77号堅穴住居跡 (図版8-(1) 20-(3) 第123回)

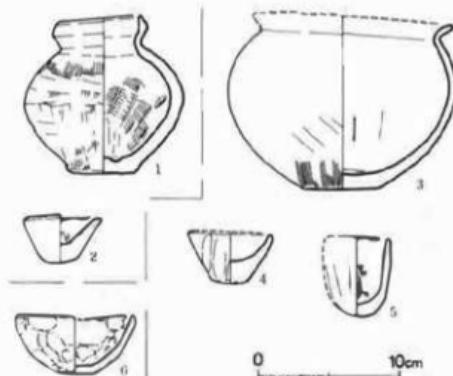
78号を切った状態で検出した堅穴住居跡である。平面プランは長方形を呈する。規模は長壁で5.20m・5.50m、短壁3.90m・4.10m、壁高20.0cm~30.0cmを測る。床面積は20.52m²である。支柱穴は2本検出した。柱間は2.30mで、中央には径55.0cmの炉を掘込んでいる。片方の長壁の中央には長方形の屋内土壙がある。柱間軸はN 55° Eを示す。

出土遺物は図示可能な手捏ね土器がある。

出 土 遺 物

土 器 (第124回)

6は手捏ね土器である。底部は小さな平底をなす。調査は指頭ナデで仕上げる。復原口径8.4cm、底径2.6cm、器高4.05cmを測る。



第124回 75号-77号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)

78号竪穴住居跡 (図版8-(i) 第125図)

E-3区で検出した小型の竪穴住居跡である。平面プランは長方形を呈する。規模は長軸で5.00m、4.55m、短軸で3.30m、3.40m、壁高20.0cm前後を測る。床面積は16.47m²である。支柱は2本で、柱間は1.50mである。柱間中央には不整形の焼痕著しいがを設けている。屋内土壌は南東壁際に掘込んでいるが、やや南側に片寄っている。両端には2本のピットを配している。柱間軸の方位はN51°Eを示す。

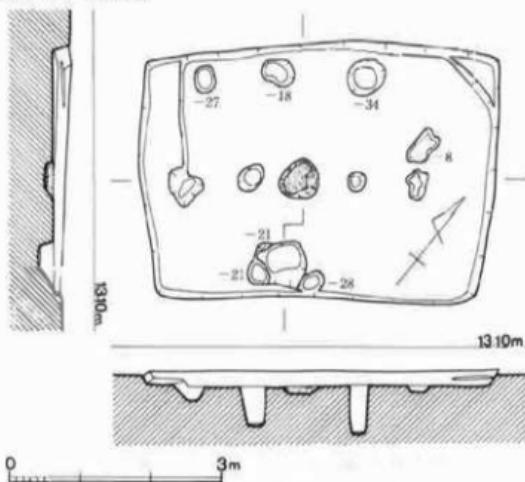
出土遺物は壺・鉢がある。

出土 遺 物

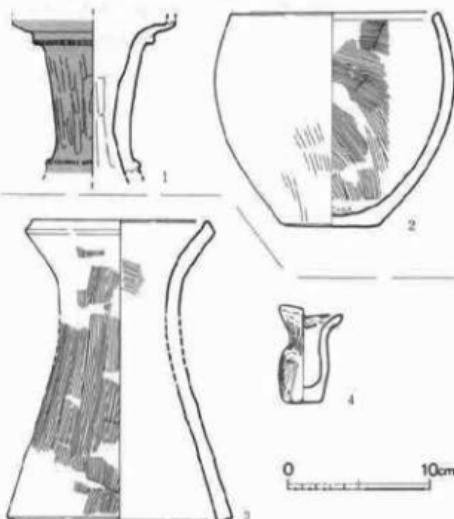
土 壷 (図版47 第127図)

1は袋口縫合の頸部片である。口縫下と頸部下には密な刻み目を配す低い凸帯を貼付する。調整は外面丹塗り磨研。内面はナデで仕上げる。胎土は精製され、二次加熱を受け淡い茶褐色を呈する。

2は鉢の復原実測で1/2が残存する。口縫部を内窓させ脚部



第125図 78号竪穴住居跡実測図(1/80)



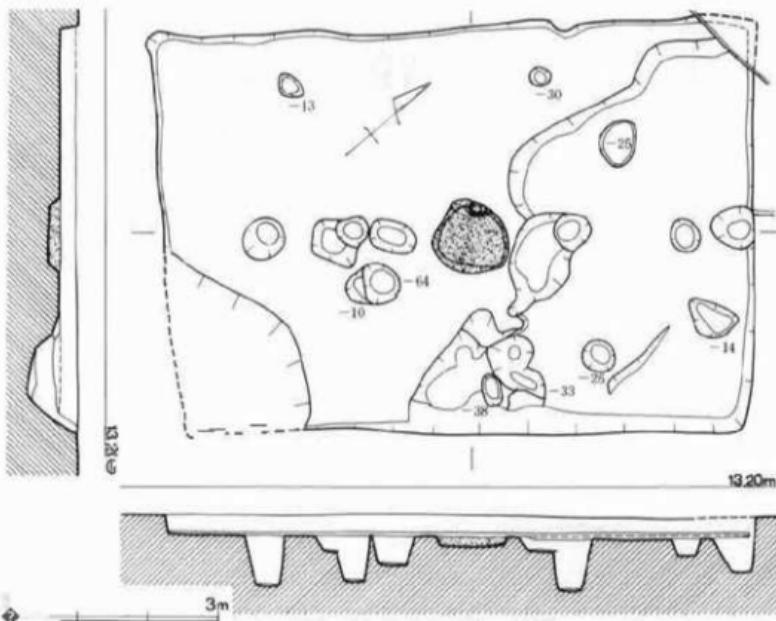
第126図 79号竪穴住居跡実測図(1/80)

は丸味を有す。調整は外面がハケのちナデ、内面はハケで仕上げる。復原口径14.9cm、底径6.9cm、嵩高15.0cmを測る。

79号竪穴住居跡 (図版8-(1)・20-(4) 第126図)

E-2・3区で検出した大型の竪穴住居で3軒が重複する。80号住居より古く、81号住居より新しい。南側の一部は新しい搅乱を受ける。平面形態は長方形を呈し、規模は長壁8.00m・8.60m、短壁5.90m・5.80m（いずれも復原）、壁高25.0cm前後を測る。復原床面積は46.39m²である。支柱は基本的に2本で柱間軸の延長線上にさらに2本の隔次的な支柱が認められる。支柱間には不整円形のがれを掘込んでいる。南東側の壁際には不整形の屋内土壤を設けている。北側の広範囲の落込みは貼床部分を掘下げた結果による。柱間軸の方位はN40°Eを示す。

出土遺物は器台・手捏ね土器の他、砥石、土製円盤、投掷がある。



第127図 78号、79号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

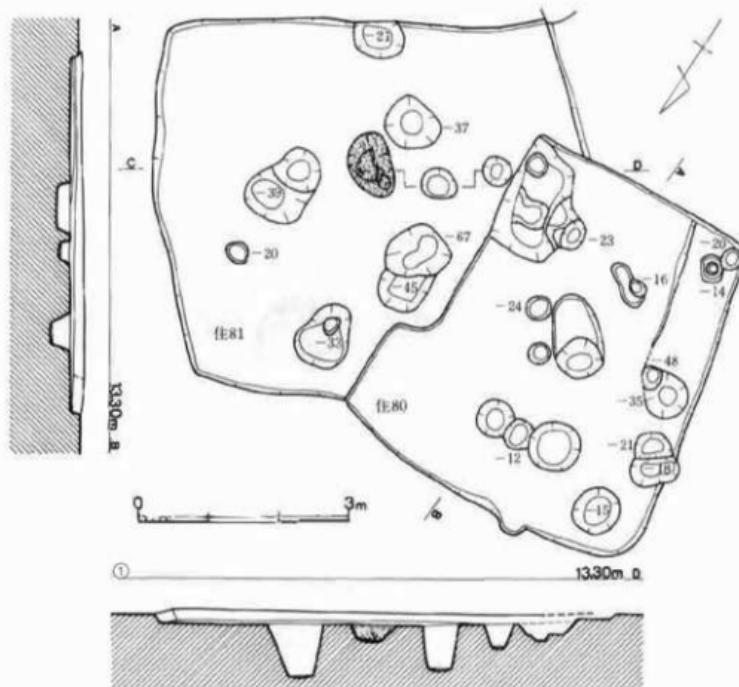
出水遺物

土器(第127図)

3の器台がある。最小径が上半部にあり、口縁部は緩く外反させる。口唇部は肥厚する。調整はハケとナデで仕上げる。復原口径13.4cm、基部径15.9cm、器高21.2cmを測る。

4は手捏ね土器である。かなり歪な土器で、粗いハケとナデで仕上げる。口径4.3cm、底径2.6cm、器高6.9cmを測る。住居の支柱穴内から出土した。

80号竪穴住居跡(図版8-(1)・20-(4) 第128図)



第128図 80号、81号竪穴住居跡実測図(1/80)

F-2区で検出した竪穴住居跡で、79号住居と81号住居を切っている。平面プランは長方形で、東奥は南・北壁が3.40m・4.00m（複数）、東・西壁が4.80m、壁厚15.0cmと複数。支柱は住居形態から2木であるか検出できない。屋内土壇は103号住居と同様南東隅に付設されており、長軸1.50m、短軸1.00mを測る。

出土遺物には圓形不規則他な土器片少量の他、砾石、土製品がある。

出土遺物

石 器（図版87 第129図）

11は婆母片岩製の小型の砥石である。現存でての研削面は2面で表面前は研込んで凹面をたす。風化し表面がさらつく。現存長7.5cmを測る。

土 製品（図版47 第129図）

2は土器片再利用の土製円盤がある。前面に二次面取りは悪く不整円形をなす。内面に二次削無を受ける。

3は屋内土壇内から出土した枚状で長さの側面には僅か大きく、スマートさを失く。胎土は精良で、焼成はあまり、長さ4.6cm、最大径2.6cmを測る。重さは24.7gである。

81号竪穴住居跡（図版8-(1)・2D-(4) 第128図）

重複する2軒の住居に切られた竪穴住居跡である。F-2区で検出した。平面形状は長方形を呈すると思われる。複数での計画面積は約1.90m、壁高10.0cmを測る。支柱は2本で、柱間は2.00mを測る。柱間にには横円形の窓跡を濁している。その他詳細は不明である。

出土遺物は焼・鉢・器台の他、石砲子と砥石がある。

出土遺物

土 器（図版47 第130図）

1～5は焼である。口縁部が逆「L」字状から「く」字状に移行する段階のものである。1、

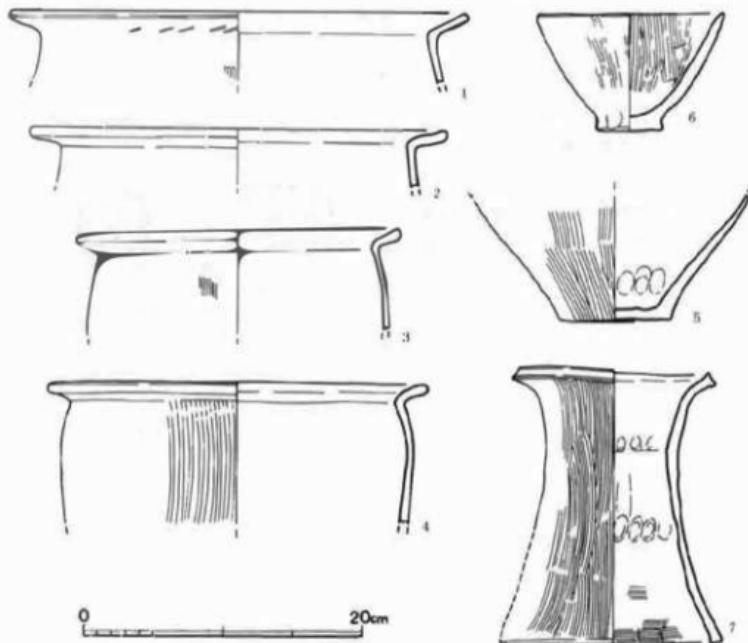
3、4は口縁上面の内傾が2に比較して強くなる。2は逆「L」字状に近く形態状は中期的の様相を呈する。すべて最大径が口縁部にあり、胴上半に最大径が移る直前の様である。1の口縁外側には刺突状痕を配する。總じて器壁は薄い。1の復原口徑33.0cm、2は30.0cm、3は23.2cm、4は27.1cm、5は底径7.95cmを測る。

6は鉢の完形品で、体部から口縁部にかけては直線的である。底部は粗まり厚くつくる。外面には模がみられる。口徑13.5cm、底径4.8cm、器高8.4cmを測る。

7は器台で2/3残存する。最小径を上半に有し、口唇部を肥厚させる。調整はハケとナデで仕上げる。外面二次加熱を受け淡く赤変する。口徑14.6cm、底部径16.0cm、器高19.4cmを測る。

石 器(国版47 第131・132図)

1は石庖丁の完形品である。輝緑岩灰岩製であるが、不純物が多く材質は不良である。孔は段



第130図 81号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



第132図 81号竖穴住居跡出土石器実測図その2(1/2)

第131図 81号竖穴住居跡出土石器
実測図その1(1/3)

丸いに穿ち、内孔径4.0mmを測る。刃部は使用頻度が高く摩耗し丸くなる。長さ13.5cm、幅4.1cm、厚さ5.5mmである。

2、3は大小の砥石である。2は雲母片岩製の砥石で風化し表面がざらつく。現長7.5cm、幅4.0cmを測る。3も雲母片岩製の砥石で中砥であろう。現存での研面は2面で裏面は自然面を残す。現長15.7cmを測る。

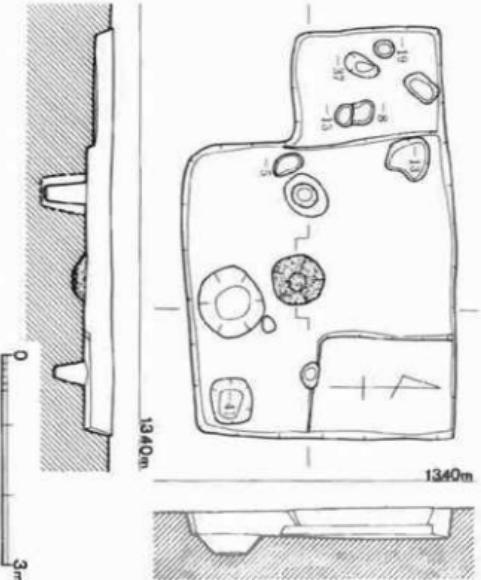
82号竖穴住居跡(図版21-(1) 第133図)

E・F-1区で検出した小型竖穴住居跡で火災に遭遇している。平面プランは長方形を呈する。規模は南・北壁が4.00m・4.30m、東・西壁は3.70m・3.60m、標高35.0cm~40.0cmを測る。西壁側には奥行1.50m、幅2.00m、床面からの高さ10.0cmの造出しを備えており、住居の出入り口と考えられる。床面積は17.35m²である。支柱は2本で、柱間に幅70.0cmの軒を掘っている。柱間幅は2.55mを測る。造出し部にはピットが散見できるが、規則的な配置はみられない。南壁際には幅1.00m、深さ30.0cmの屋内土壙を削込んでいる。東壁沿いには幅1.35m、長さ2.00mの貼床ベットを付設する。柱間軸の方位はN 88° Eを示しはば東西に主軸をとる。

出土遺物は壺・甕・高环・器台の他、砥石、投弾がある。

出土遺物

第133回 32号壁穴住居跡実測図(1/80)

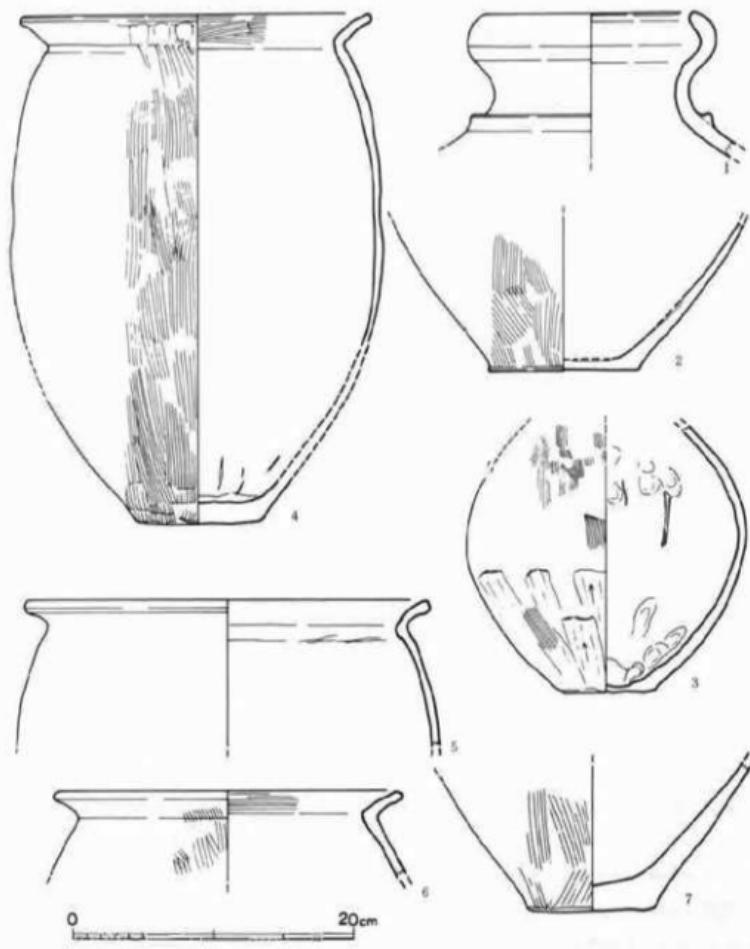


土 器 (第47・48 22134・135回)

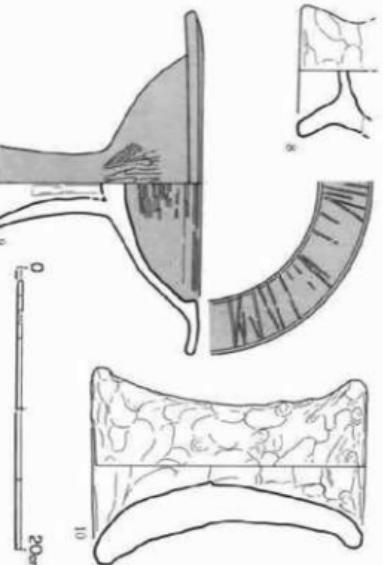
度は 1 ~ 3 である。1 は袋状の巣室を引く度で泥打窓の範囲はない。頭部は短く、肩部に三筋筋肉を斜行する。後脚は径 15.0cm を測る。2 は棒つくりの底座でハッカとナチで仕上げる。底径 10.8cm。3 は頭部上半を欠く。脚盤は外面が細かいハケと下半部の粗造感が異なる。内面はナ

焼は1～8がある。口縫幅2～4で「く」字状に外反し、頬部の縫は直線である。肩幅は張り成人形を胸間に持つ。5の口縫は反り気味につくられ、口輪部は肥厚する。8は底い脚台をつけた。頭部はハケとナデが主体である。4、5、8は二次加熱を受ける。4は口徑25.0cm、底径9.2cm、背高35.3cmを測る。5の後原口徑29.0cm、6の後原口徑24.8cm、7の底径9.2cm、8の背高9.3cmを測る。

9は円錐り磨研の精製された高純度である。ロジウムは鏡先状を保す。胸からみ底屈にかけては曳くつくる。脚部状態は細く下垂を失く。内外面には丁寧な磨削を施し、口縁上部には不規則な浮文を配する。全周に二次加熱を受けた銀く変色する。ロッド24.0mmを削る。



第134図 82号竖穴住居出土土器実測図その1 (1/4)



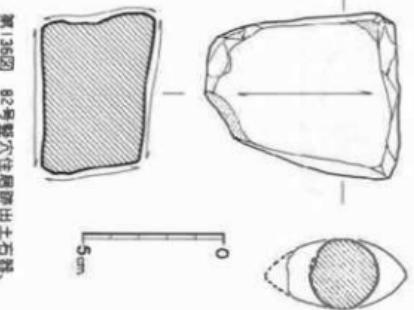
第135図 82号竪穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)

石 器 (第136図)

砂岩製の灰口のへる。柄高は4.0cmで、加熱を受けて焼く所である。現存長6.9cmを測る。

土製品 (第136図)

鉢形内から川土した模様がある。胎土は精製されているが焼成はあまり。復原長5.0cm、径2.4cmを測る。鉢内分の土は模様を住居内の灰で焼成していたことを窺わせる。

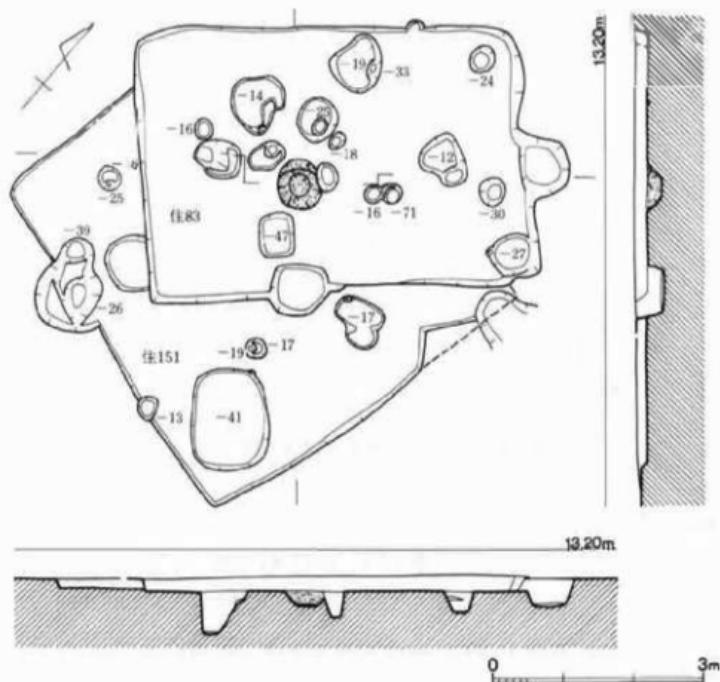


第135図 82号竪穴住居跡出土土器実測図(1/2)

83号竪穴住居跡 (鉢形) - (2) 第137図

G-1区で検出した竪穴住居跡や時期不明の151号住居を引っている。平面形態は長方形を基し、規模は長邊が5.60m・5.35m、短邊が3.50m・3.70m、壁厚2.0cm前後を測る。底面積12.191m²である。支柱は2本である。その内の1本は深さ30.0cmと浅く、開口した—71.0cmの柱穴が支柱となり得るが、住居壁に対してもかなりのずれが生じる。柱間には幅65.0mmの扉を開える。屋内土壤は雨露に浸込んでいるが、壁から突出しており屋内土壤として機能したか否か疑問である。

出土遺物は鐵・鉄の他、土製投擲器がある。



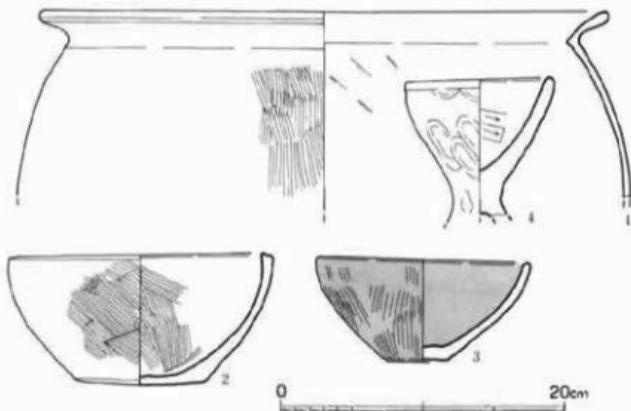
第137図 83号、151号竪穴住居跡実測図(1/80)

三 二. 遺 物

土 器 (図版48 第138図)

1は壺の破片で、「く」字状に外反する口縁部を有し口唇部は肥厚する。肩部の張りは強く、器壁は薄くつくる。調整はハケとナデで仕上げる。復原口徑40.0cmを測る。

2、3は鉢で口縁から肩部にかけては丸味を持つ。口唇部は肥厚する。調整は内外面ともハケを施す。口徑18.8cm、底径9.2cm、器高9.1cmを測る。3は小振の鉢で肩部から口縁部の丸味は少ない。調整は外面が荒いハケ、内面はナデで仕上げ、内外面に丹を塗布する。口徑15.2cm、底径4.5cm、器高7.1cmを測る。2、3とも屋内土蔵内からの出土である。4は脚台付の鉢で一見手捏ね風のつくりである。口徑10.6cmを測る。



第138図 83号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

土製品(第139図)

投掷がある。約1/2を欠失する。胎土は精製され、焼成も良い。長さ5.7cmを測る。

84号竪穴住居跡(圖版8-(2)・21-(3) 第140図)

調査区の日-1・2区で検出した竪穴住居である。20号土壤より新しい。平面プランは方形を呈し、規模は北東壁・南西壁が5.70m・5.80m、北西壁・南東壁が6.40m・5.90m、壁高10.0cm前後で遺存状況は良くない。床面積は34.48m²である。支柱は規則的な4本柱で、各柱間はP₁-P₂が3.05m、P₁-P₃が2.90m、P₂-P₄が2.70m、P₃-P₄が2.90mを測る。

出土土器を観察する限りカマドの付設が考えられるが、カマドは付設していない。筑後地方でのカマド出現期直前の住居と考えられる。北東壁際の不整形土壤は屋内土壤の可能性がある。

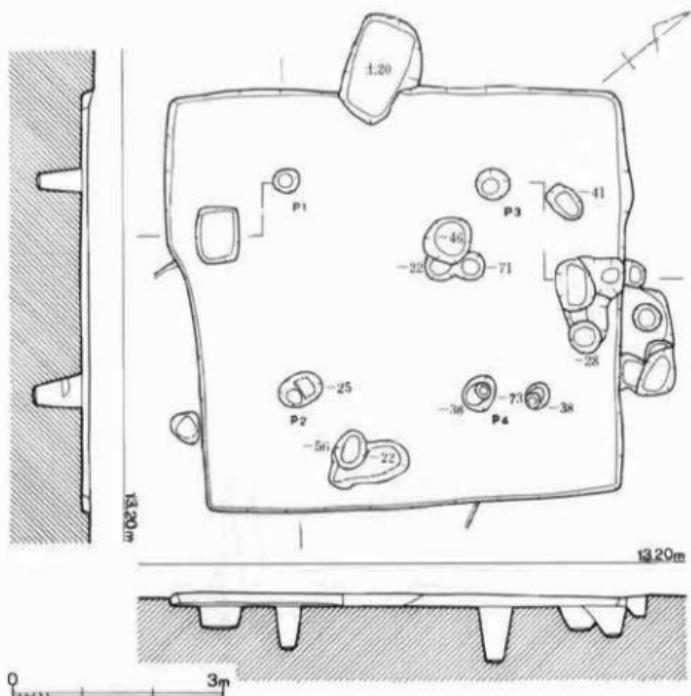
出土遺物は甕・壺・杯がある。

出土遺物

土器(圖版48 第141図)



第139図 83号竪穴住居跡
出土土製品実測図
(1/2)

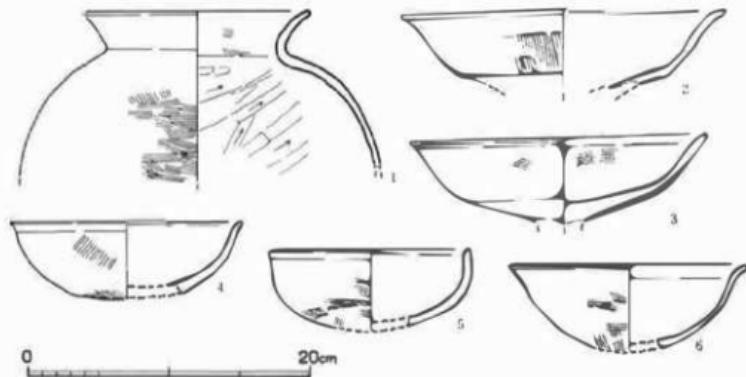


第140図 84号竖穴住居跡実測図(1/80)

1は壁で胸下部を欠損する。口縁部は鋭く外反し、肩部の張りは強い。胸部には横ハケが認められ、内面は鎧で削り漆壁を薄くする。口径16.0cmを測る。

高杯は2～3があり、同形状をなすものである。底部から肩部の屈折は明顯で口縁部外反する。杯部は浅くつくられる。調整は横ナデで若干ハケが残る。2は復原口径23.0cm、3の口径21.0cmを測る。

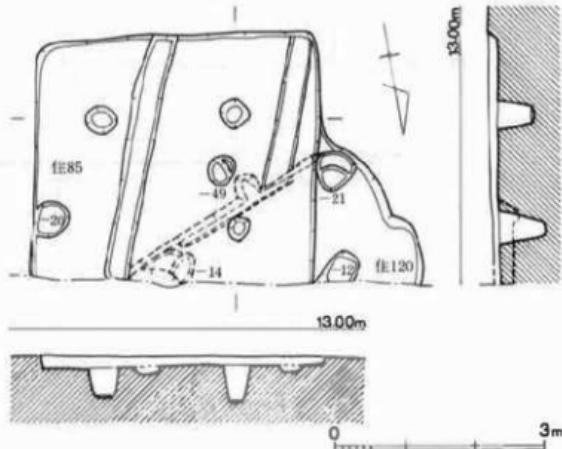
4～6は杯である。口縁部を緩く外反させ胸部の丸味の少ない4、6と口縁の外反度は純く胸部に張りのある5がある。調整は外面にハケが残り、内面はナデで仕上げる。4は復原口径16.7cm、器高5.4cm、5は口径14.4cm、復原器高5.8cm、6の口径17.0cm、器高6.1cmを測る。



第141図 84号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

85号竪穴住居跡 (第142図)

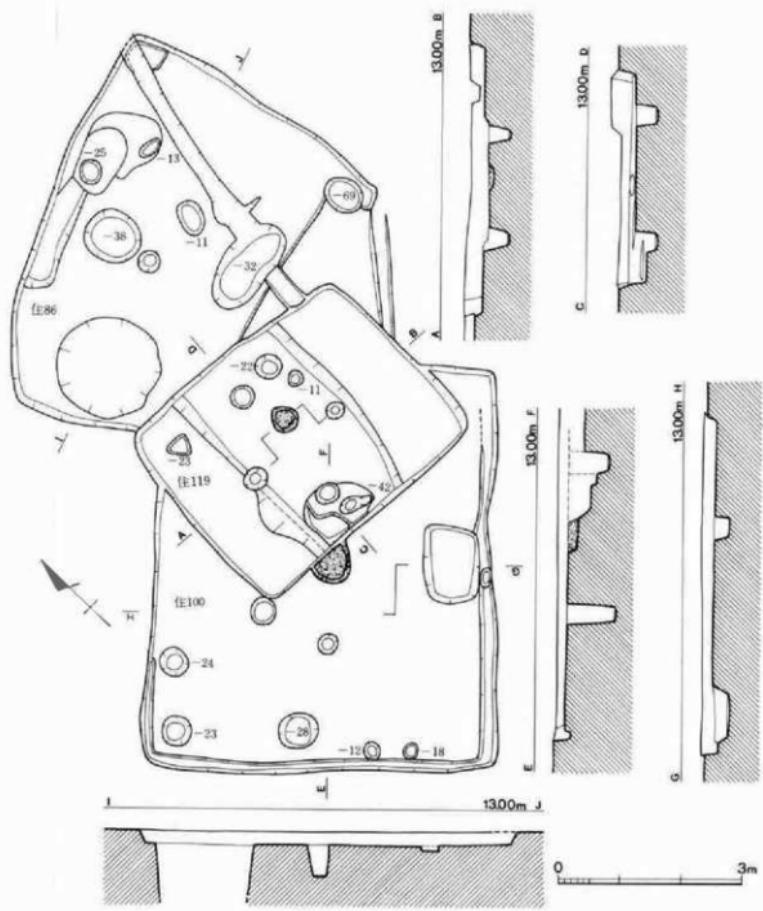
I-1区で検出した竪穴住居で、120号住居を切っていいる。約1/4が調査区外のため規模などは不明であるが、支柱の配置（4本柱）から方形であろう。南壁は3.90m、壁高は10.0cmと浅い。4本の支柱の内の1本は検出できていない。



第142図 85号、120号竪穴住居跡実測図(1/80)

柱間は1.90m・1.60mを測る。カマドは調査区外に存在すると思われる。床面には新しい融溝2本が走る。柱間の主軸はN9°Eを示す。

出土遺物は皆無に近いが、99号と同一時期であろう。



第143图 86号、100号、119号竖穴住居跡実測図(1/80)

86号竪穴住居跡 (図版9-(ii)・22-(2) 第143回)

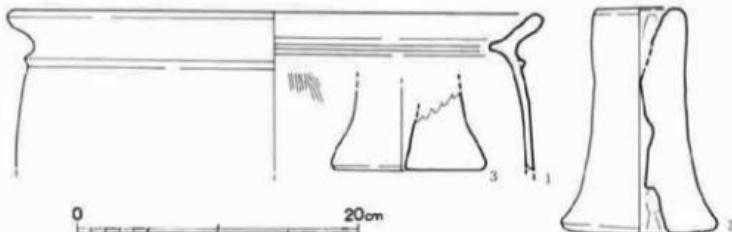
119号住居に切られた竪穴住居跡で、床面は新しい井戸で一部擾乱を受けている。平面プランは長方形を呈する。規模は北壁6.30m、東壁4.00m(復原)、壁高20.0cmを測る。支柱は2本と思われるが明瞭な柱穴は見当らない。南壁際には梢円形(1.56×77.0cm)の屋内土壙を備えている。出土遺物は甕・支脚がある。

表三：遺物

土器 (第144回)

1は「T」字状口縁から発展した形状の甕で、腹部内面は突出する。肩部はやや張り三角凸帯を附する。復原口径38.0cm。

2、3は支脚で内面は僅かに空中をなす。二次加熱を受けている。3位1体で使用されるものである。2の上端径6.6cm、底径11.0cm、器高16.3cm。3の底径11.0cmを測る。1、2は屋内土壙からの出土である。

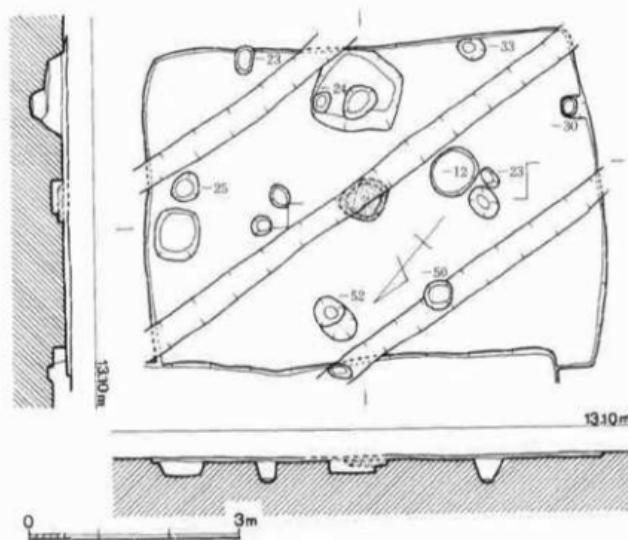


第144回 86号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

87号竪穴住居跡 (図版9-(ii)・22-(2) 第145回)

100号竪穴住居に切られた住居跡で、平面形態は長方形を呈する。規模は長壁が5.90m・6.20m(復原)、短壁は4.80m、壁高7.0cm前後を測る。復原床面積は29.14m²である。支柱は断面に表示した2本であるが浅い。柱間は3.10mで、柱間にには舷溝に切られたがが僅かに残る。南東壁の中央には不整形の屋内土壙が設けられている。

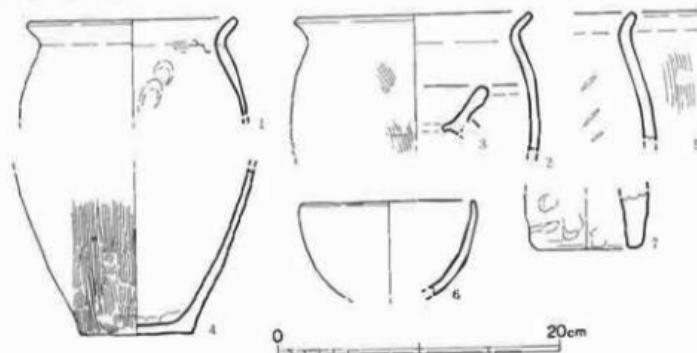
出土遺物は甕・鉢・支脚の他、砥石、石庖丁がある。



第145図 87号竪穴住居跡実測図(1/80)

出土遺物

土器 (第146図)



第146図 87号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

標は1～5がある。1、2は同形状の甌で口縁は緩く「く」字状に外反するが、頸部内面の縫は不鮮明である。調整は摩耗して不明瞭である。2は二次加熱を受ける。3は86号住居出土の1の甌と同タイプである。4は大き目の底部を有す。5は口縁が短く口縁の外反度は緩い。1の口径は15.0cm。2は16.8cm。4の底径8.0cmを測る。

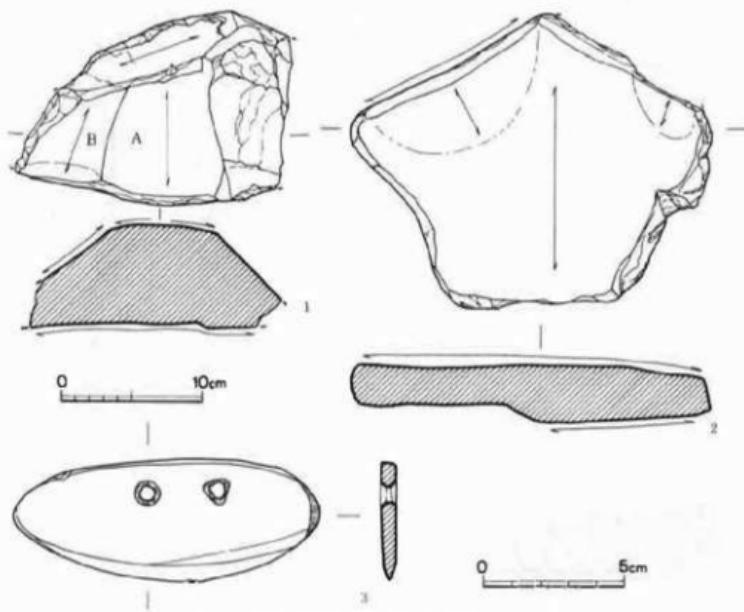
6は鉢で半球形を呈する。調整はナデ。復原口径12.4cmを測る。

7は支脚片である。外面は二次加熱を受ける。底径8.0cmを測る。屋内土壙からの出土である。

石 器 (図版48 第147回)

1、2は大型の砥石である。両者とも花崗岩質砂岩である。1は研面から5面を数え、使用されていない面は1面のみである。特にAとB面は使用頻度が高く平滑となる。2は仕上げ砥石で研面3面である。表面は3方向に研痕がある。1、2とも屋内土壙からの出土である。

3は長円形の完形の石庖丁である。砂岩製の石材を使用し、雲母類が嵌入する。孔は丁寧に



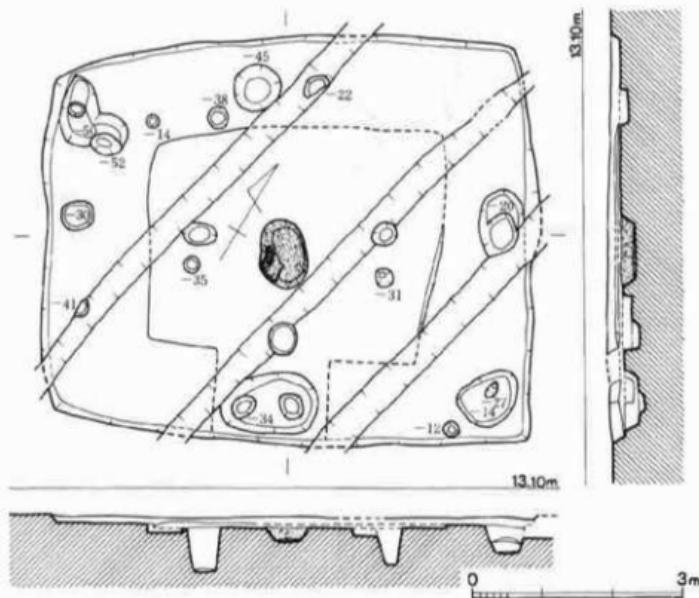
第147回 87号整穴住居出土石器実測図(1/4, 1/2)

穿っているが、一方は三角形を呈し内径5.0mmを測る。表面は平滑となり、刃部は鋭く研出する。長さ10.8cm、最大幅4.4cm、厚さ5.5mmを測る。

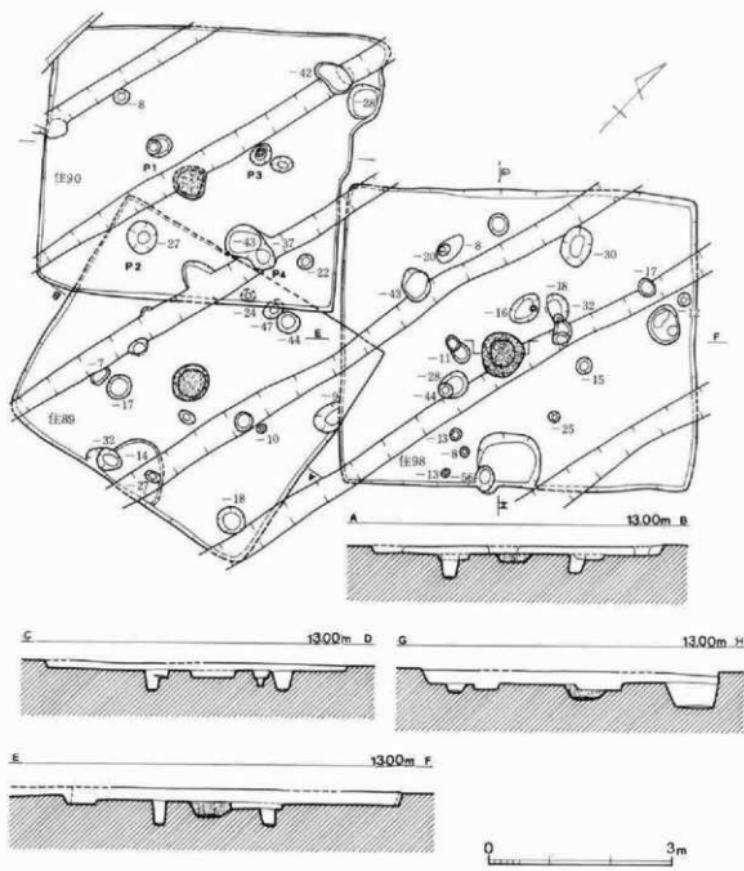
88号竪穴住居跡（図版9-(1)・22-(2) 第148図）

I・J=3区で検出した竪穴住居跡で、重複関係はない。平面プランは崩張り長方形を呈し、規模は南・北壁が6.80m・6.50m、東・西壁は5.60m・4.70mを測る。床面積は35.75m²である。支柱は2本で、支柱間には楕円形(98.0cm×66.0cm)のがれを掘っている。南壁沿いの中央部には1.40m×0.88m、深さ20.0cmの屋内土壇を掘込み、両端には小ピットを配する。ピット間は70.0cmを測る。屋内土壇部分を除く周囲の壁沿いには幅1.20m～1.40mのベット状遺構を貼付する。柱倒軸の方針はN59°Eを示す。

出土遺物は少なく小型の甕がある。



第148図 88号竪穴住居跡実測図(1/80)



第150図 89号、90号、98号整穴住居跡実測図(1/80)

出土遺物

土器 (図版49 第149図)

小腹の突起が1点ある。口縁部は「く」字状に外反させ、胴部は球状を呈する。表面は磨耗しているが、内面は鏡面である。口径10.7cm、器高11.3cmを測る。



89号堅穴住居跡 (図版9-(1)・22-(2) 第150図)

当該住居を含め3軒の重複がある。90号住居に切られている。

平面プランは長方形を呈し、規模は南・北壁4.60m・4.90m、東

・西壁4.20m・4.00m、壁高14.0cmを測る。床面積は19.51m²である。支柱は2本で、柱間は2.10mである。柱間に幅58.0cmの炉を設けている。南壁際には不整形の屋内土壙を備え、両端にはピットを配する。ピット間は70.0cmを測る。主柱間軸の方角はN81°Eを示す。

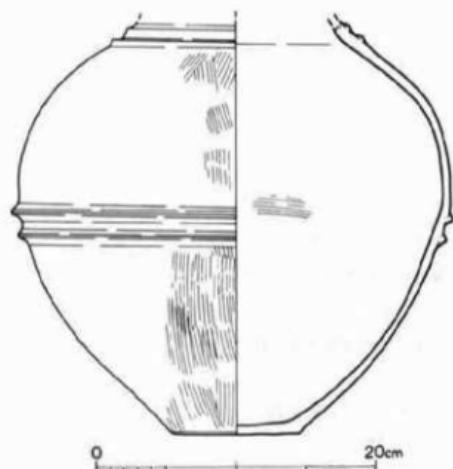
出土遺物は漆がある。

第149図 88号堅穴住居跡
出土土器実測図(1/4)

出土遺物

土器 (第151図)

頸部上半を欠損する姿がある。肩部と胴部には二条の三角凸帯を貼付する。調整は外面がハケ、内面はナデる。底径9.3cm、胴径31.7cmを測る。



90号堅穴住居跡

(図版9・22-(2) 第150図)

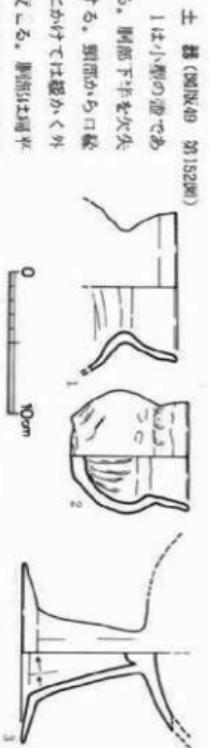
I-2区で検出した堅穴住居で89号住居を切っている。平面形態は方形に近い形状を呈している。規模は、南・北壁4.90m・5.10m(復原)、東・西壁4.6

第151図 89号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)

0m・4.20mを測る。支柱は4本で柱間は P_1-P_2 が1.50m、 P_1-P_3 が1.75m、 P_1-P_4 が2.00m、
 P_2-P_3 が1.70mを測る。柱はP₁寄りに倒されている。

出土遺物は小量で、高木がある。

出土遺物



第152図 90号窯穴住居跡出土土器実測図(1/4)

10.6cmを測る。

2は手すり状の縁で底部は未調査である。口径7.8cm、器高8.3cmを測る。

3は瓶体の脚部である。柱状部はスマートで底部で鋸く形脚とする。全体的に滑らかしているが、
つくりは良好である。口径2.6cmを測る。

91号窯穴住居跡 (図版8・21-14) 第153図

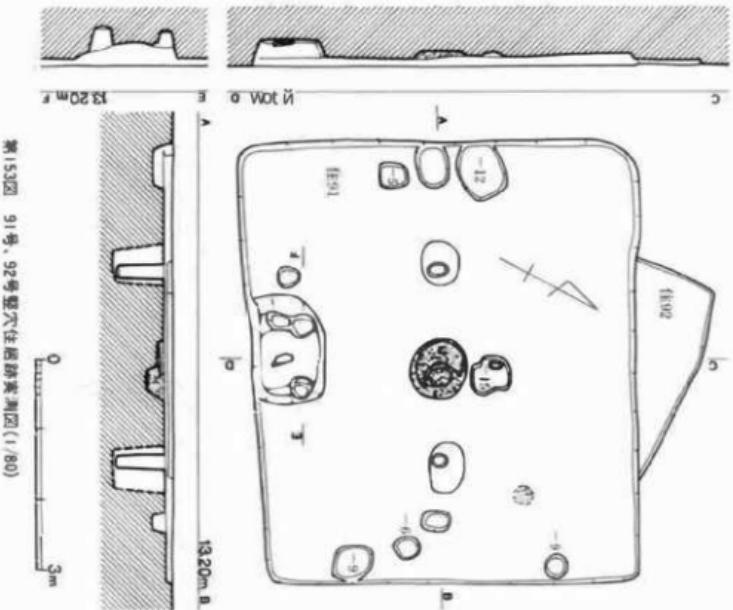
G・H-2・3区で検出した窯穴住居跡で、92号住居を切っていいる。平面形状は長方形を呈し、規模は附・北壁6.20m・6.10m、東・西壁5.30m・5.70m、壁高10.0cm前後を測る。床面積は32.02m²である。支柱は2=3m、柱間は2.70mである。柱間に幅90.0cmの軒を設けている。南北中火窓には壁幅1.55m、延長1.00m、深さ25.0cmの腰型長方形の腰内土窓を掘込んでいる。土壤内からは墨色片岩(石墨^{せき} ^{せき} ^{せき})の板石が既前から出土している。土壤の両端には2個のピットを配しており、ピット間は90.0cmを測る。柱間軒の方位はN 62° Eを示す。

出土遺物は砂・燧・鉢・瓦片・龍形器台・器台・支脚・平滑ね土器の他、鐵石がある。

出土 窯

土 器 (図版49 第154・155図)

1～3は複合口轍窓である。1・2の口縁の屈折部は明瞭な段をなし、3は不明瞭である。

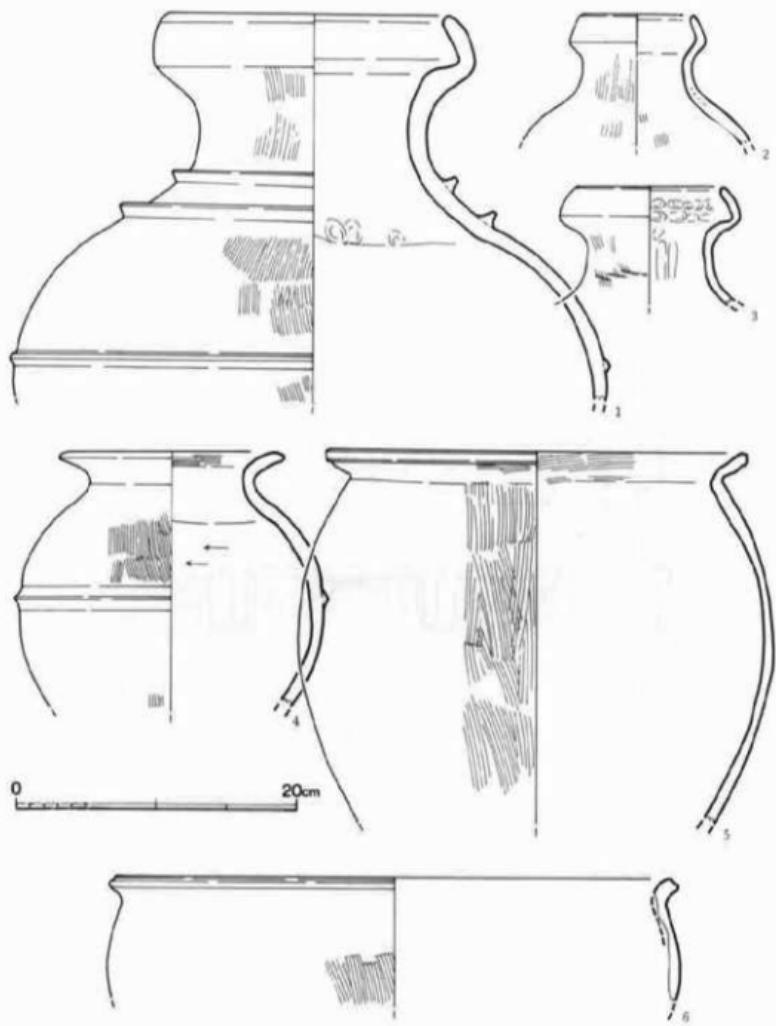


第153図 91号、92号壁穴住居跡実測図(1/80)

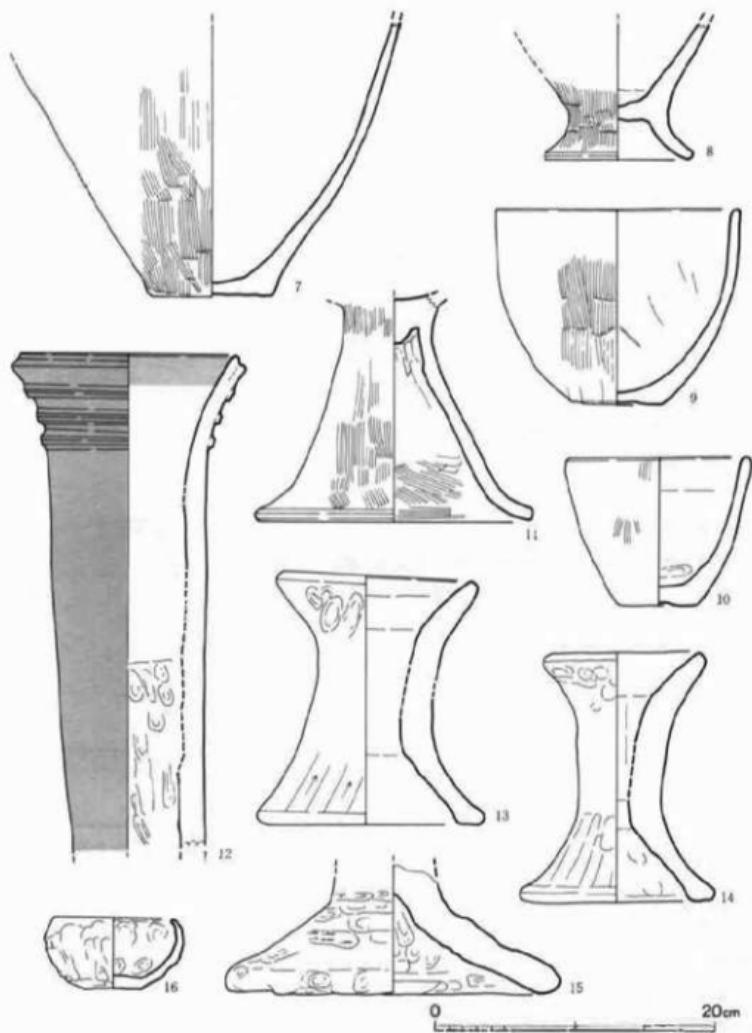
3個体とも頭部は短く、1は周囲から腹間にかけての張りは強い。脛部には2本、脚部には1本の鈍形凸部を備付する。3の口縫内面には前頭口鏡がみられる。1の口径20.0cm、2は口径8.3cm、3の口径10.9cmを測る。4は頭部から口縫部にかけて強く外反する故で体部は塊状を呈する。胸中脚部には低い三角凸部を備付す。復原口徑16.0mmを測る。

発達は5、6、8がある。5は口縫を「く」字形に強く外反させた唇部は肥厚する。周囲から腹部は強く張る。外側と口縫はハケを施し、内側はナテである。二次加熱を受け強く外反する。口縫29.8mmを測る。7は底径7.0mm、8は低い脚台がつく號で、底径1.0mmを測る。両者とも二次加熱を受けている。

6、8、9は鉢である。6の口縫部は短く、僅かに外反させる。口縫部は横ナテによる凹模が残る。復原口徑6.0mmを測る。9は口縫部が直角である鉢で体部はぐく丸味を有す。復原口徑17.8



第154図 91号竪穴住居跡出土土器実測図その1(1/4)



第155図 91号竪穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)

cm、底径7.0cm、器高13.9cmを測る。胎内土塙内からの出土である。10は小型の鉢で胴部から口縁にかけては直線状である。口径13.2cm、底径5.4cm、器高10.5cmを測る。

11は高环の脚部で、柱状部は頗る大きい。基部は僅かに外反する。調整はハケを多用する。高环にしてはつくりが粗い。基部径20.0cmを測る。

12は筒形器台で下半を失する。口縁部は緩く外反し口唇部は肥厚する。口縁下には「M」字状凸帯を三条貼付する。調整は丹塗り磨研であるが風化が著しい。内面はナデで仕上げる。外面は二次加熱を受け赤黒くすむ。現存長36.0cm、口径16.6cmを測る。

13、14は器台である。いずれも最小径が中央部にある。器壁は厚くやや鐘なつくりである。外面下部には擦過痕が残る。14の表面には划痕が残る。13の口径14.4cm、基部径16.1cm、器高18.0cm。14は口径11.7cm、基部径14.0cm、器高17.7cmを測る。

15は非常につくりの粗い土器で、器壁も分厚い。器種は明確ではないが支脚と考える。表面には凹凸があるが、叩き痕か否かは明らかでない。底径23.95cmを測る。

16は手捏土器である。口縁部は内凹する。外面は指頭でナデる。口径8.5cm、底径3.9cm、器高5.1cmを測る。

石 器 (第156図)

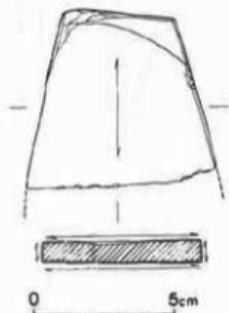
硬質砂岩製の仕上砥石がある。約2/3を失する。現存での研面は5面で、すべての面が平滑となる。床面からの出土である。

92号堅穴住居跡 (図版8-(2)・21-(4) 第153図)

91号住居に大半が削され全容は殆ど把握できない。壁高は8.00cmと浅い。

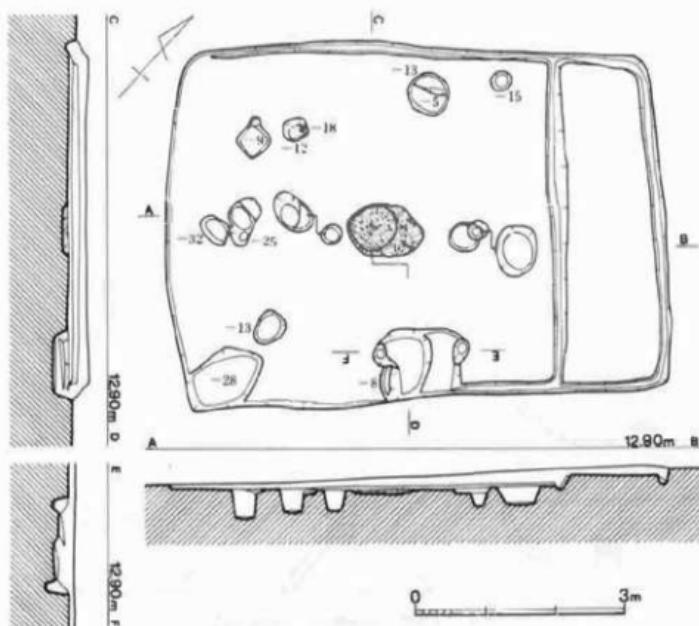
出土遺物は皆無である。

93号堅穴住居跡 (図版9-(2) 第157図)



第156図 91号堅穴住居跡
出土石器実測図(1/2)

G・H-4区から出土した堅穴住居跡で、平面形状は長方形を呈する。規模は長軸が6.90m・6.60m、短軸が5.10m・4.70m、壁高5.0cm~15.0cmを測り遺存状況は良くない。床面積は33.83坪である。支柱は断面上には數本あるが、基本的には2本柱である。柱間は2.70mを測り、中央部には梢円形の浅い炉を設けている。屋内土塙は南東壁際に在り、2段階の不整形を呈する。両端には小さなピットを配し、ピット間は1.20mを測る。短壁の一方には幅1.10~1.30mのベットを付設する。



第157図 93号竪穴住居跡実測図(1/80)

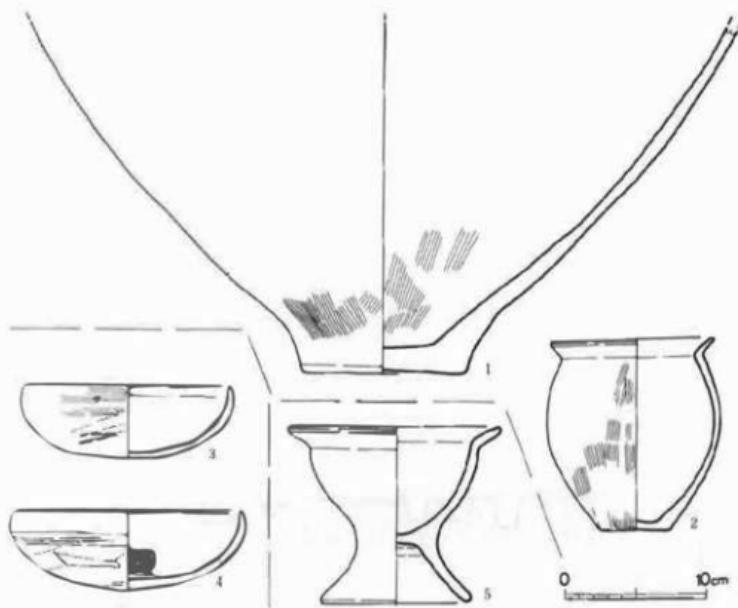
出土遺物は甕・壺の他、土製円盤がある。

出土 遺 物

土 器 (図版50 第158図)

1は大型の壺で胴下半部のみ残存する。体部の大きさの割りには底部が小さく、底径11.8cmを測る。外面は僅かに二次加熱を受け赤変する。

2は小型の壺で1/2残存する。口縁部は「く」字状に外反し、胴部中央に最大絆を有す。調整は外面がハケ、内面はナデる。復原口径11.6cm、底径5.0cm、器高13.4cmを測る。



第158図 93号-95号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

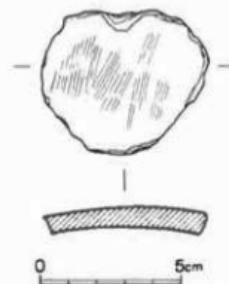
土製品（第159図）

土器片再利用の土製円盤がある。26.5 g を計る。

94号竪穴住居跡出土遺物

土 器（図版50 第158図）

3、4は同形状の杯で精製品である。口縁部は内側させ、扁平形状を呈する。調整は両者とも外面が鋸削り、4の内面は丁寧な磨きを施す。3は二次加熱を受ける。3の口径口徑14.5 cm、器高5.2cm。4は口径15.2cm、器高5.7cmを測る。



第159図 93号竪穴住居跡
出土土製品実測図(1/2)

95号墳穴住居跡出土遺物

土 器 (国版50 第158回)

脚台付の跡がある。口縁は斜め上方に外反させ、体部はやや盛り気味につくる。調査は摩耗しているが外面にはハケが残る。胎土は小砂粒が多い。復原口徑15.1cm、底面径10.6cm、高さ12.5cmを測る。

96号墳穴住居跡 (国版9-(2) 第160回)

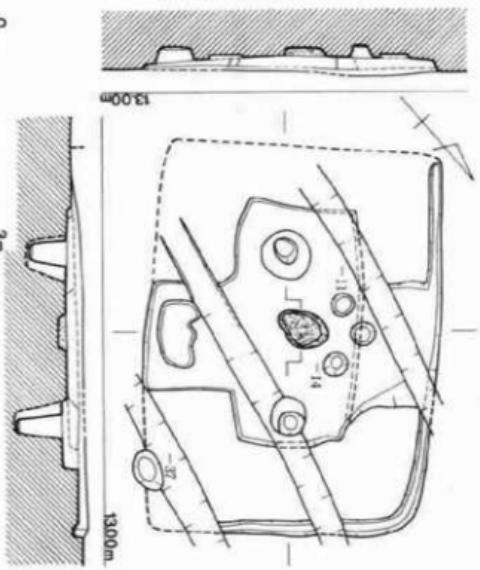
I - 4区で検出し
た小型の壁穴住居
で、平面プランは長
方形を呈する。操作
による削平が著しく
両側の壁は遺存して
いないが、土色によ
り識別できる。規模
を復原すると長邊が
5.30m・5.55mを測
る。復原床面積は2
1.61m²である。支柱
は2本で、柱間は2.
50mである。柱間に
は不整形の焼成窓
いがを設けている。

がの北側傍には柱間85.0cmの2本の柱がみられる。壁沿いには「匂」状にベットを配
し、不整形の壁内土壇を構築して備える。柱間の方位はN40°E示す。
出土遺物は鉢、高环がある。

出 土 遺 物

土 器 (国版50 第161回)

1～3以外である。1は尖り気味の底部で器壁を厚くつくる。胎土は精製され非常に良い。外



第160回 96号墳穴住居跡実測図(1/80)

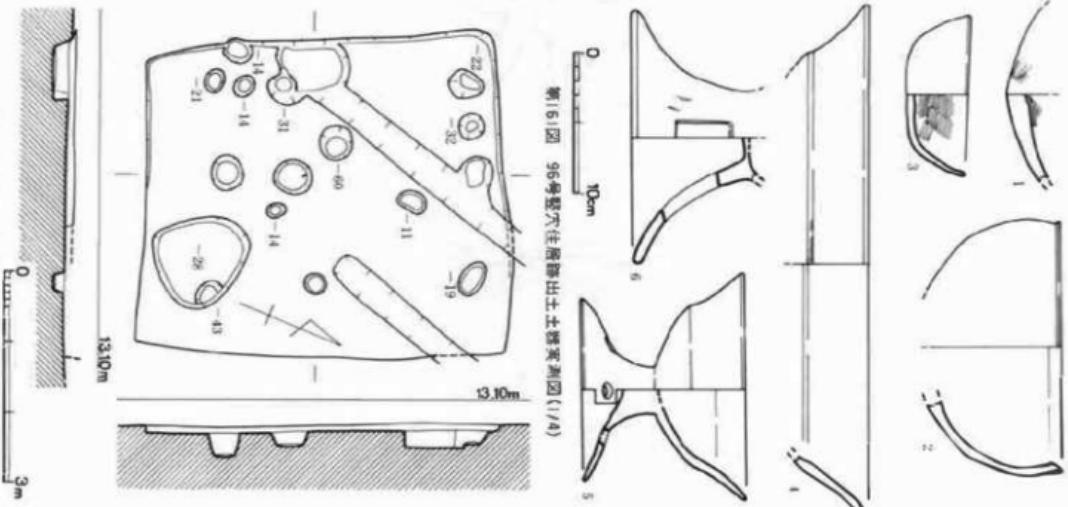
面は磨き、内面はハケとナデで仕上げ。2の鉢は口唇部を肥厚させ体部は丸味を有す。内外面ともナデで仕上げる。複厚口径18.0cmを測る。3の鉢は小型法で、ナデとハケで仕上げる。口径11.4cm、器高1.3cmを測る。器内土壤からの出土である。

4～6は壺形で大小がある。4は大型の高环状部片で崩折部は明顯で赤生的形状を残す。復原口径37.0cm。5は光器皿で縦溝され大底く開脚する。脚部には4孔を穿つ。口径16.2cm、器高13.0cm、器高11.6cmを測る。6は脚部片で三脚形に長方形の溝を配する。測量はナデである。底面径18.0cmを測る。

97号竪穴住居跡

(第16280)

88号竪穴住居の南側で検出した住居跡で、平面形状が長方形を呈する。削平が激しく東壁は遺存しない。



第1624 97号竪穴住居跡圖(1/80)

規模は東・西壁が5.30m・4.90m、南・北壁4.00m・4.60mを測る。支柱は明確な柱穴が見当たらない。屋内土壌は大半の住居と異なり西壁間に偏っている。その地質線は不明である。

出土遺物は甚ざある。



第163図 97号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

出土 遺 物

土 器 (3116396)

口縁部が強く外反する蓋で周部に三介山形を附付せる。測定は外径が荒いハケ、内径はハケとナデで仕上げる。復原寸法は19.9cmを測る。

98号竪穴住居跡 (98号 9-11, 22-2) 第15086)

89号住居に隣接の一帯を切られた竪穴住居跡である。平面形態は長方形を呈し、規模は長45.70m、幅5.470m・6.0m、壁高20.0cmを測る。二重構造は26.82mである。支柱は2本で、柱間は1.80mを測り、住居の規模の割には狭い。中央部には井戸を掘込んである。青瓦壁の内火炎には1.00m×0.9mの屋内土壌を備えている。土壌の片方に1本の斜穴を掘っている。柱間極の方位はNNE-Eを示す。

出土土器は少く、※示可能な丹繪りの小型器がある。

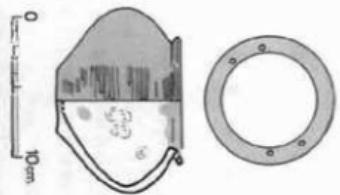
出 土 遺 物

土 器 (3116395)

小口縁の甕がある。測定は外面が丹繪り磨研、内面はナデで仕上げる。口縁部は短く、しかも「く」字状に強く外反する。同部は扁平状を呈する。底上は指製され繊密である。口径9.05cm、底径4.4cm、器高8.8cmを測る。

99号竪穴住居跡 (3116590)

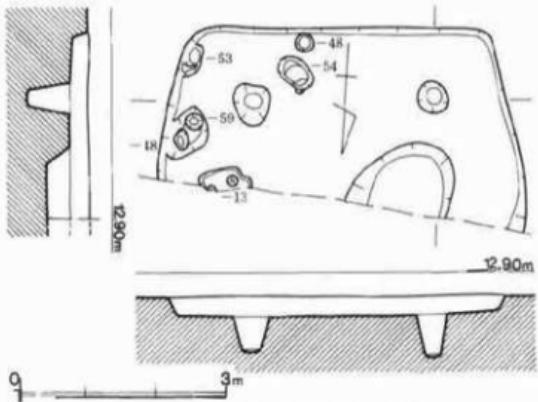
J-1区で検出した竪穴住居であるが、約1/2が調査区外



第164図 99号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

であり完備に至っていない。平面プランは方形であろう。南壁は4.20m、壁高20.0cm強である。支柱は柱穴配置から4本と思われる。2本の柱間は2.60mを測る。その他詳細は明らかでない。

出土遺物は図示不可能な甕の小片があり、内面には鉢割りが認められる。



第165図 99号竖穴住居跡実測図(1/80)

100号竖穴住居跡 (図版 8-(z)・9-(t) 第143図)

119号住居より古く、87号住居より新しい竖穴住居跡で、平面形状は長方形を呈する。規模は2辺のみ計測可能で長軸が6.50m、短壁が5.70m、壁高20.0cmを測る。支柱は2本でその内の1本は119号住居の縦内土壙下で確認した。柱間は2.50mを測り、中央には焼痕の残るがを設けている。床面上には炭化材、焼土が散在しており、火災に遭遇している。剖面図には長軸1.30m、短軸90.0cm、深さ25.0cmの長方形の縦内土壙を備えている。なお、壁沿いには周溝を廻らすが四周していない。

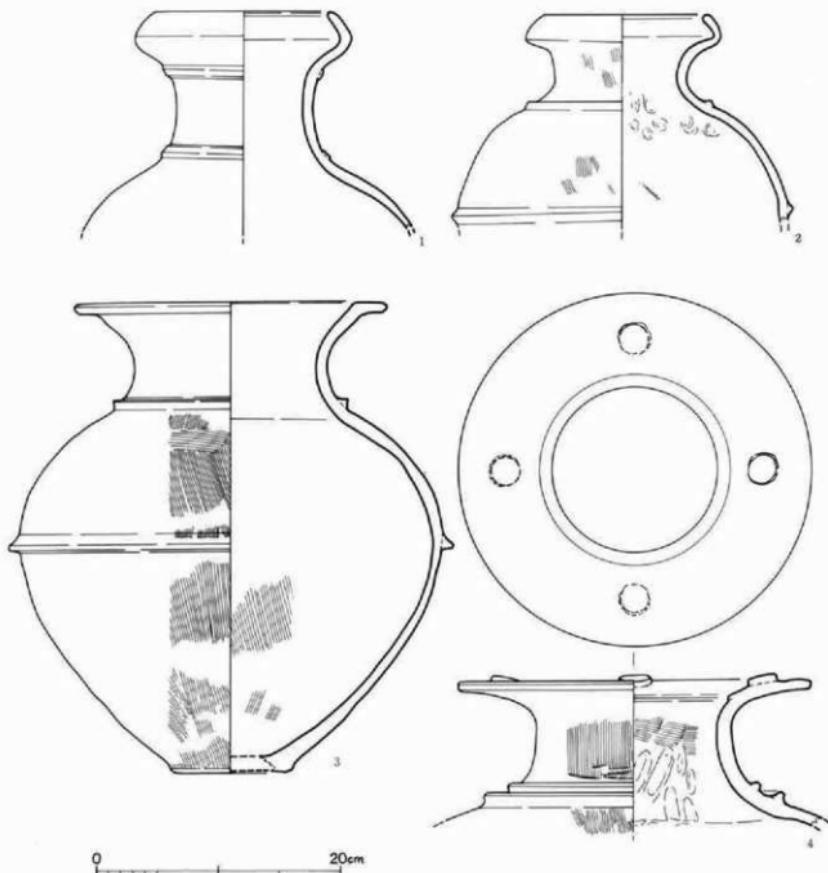
出土遺物は既往住居のため多くの土器がある。器種は甕、甌、鉢、高杯、器台、手握ね土器の他、砥石、石庖丁、敲石がある。

出 土 遺 物

土 器 (図版50・51 第166・167・168・170図)

甕は1～7がある。1・2は所調複合口甕で脇折部の後は不明瞭である。1は口縁下と肩部に低い台形状の凸帯を貼付し、肩部は張る。口径14.4cmを測る。2の頸部は短く肩部と胴部に三角凸帯を付す。口径は13.2cmを測る。两者とも器腹が風化し調整は不明瞭であるが、外面ハケ、内面ナデ仕上げであろう。

3・4は鋤先口縁が退化したもので、3は口縁部の平坦部が残る。頸部は細くしまる。肩部から胴部にかけてはやや扁平球状を呈する。肩部には三角凸帯、胴部は台形状凸帯を貼付する。調



第166図 I-66号整穴住居跡出土土器実測図その1(1/4)

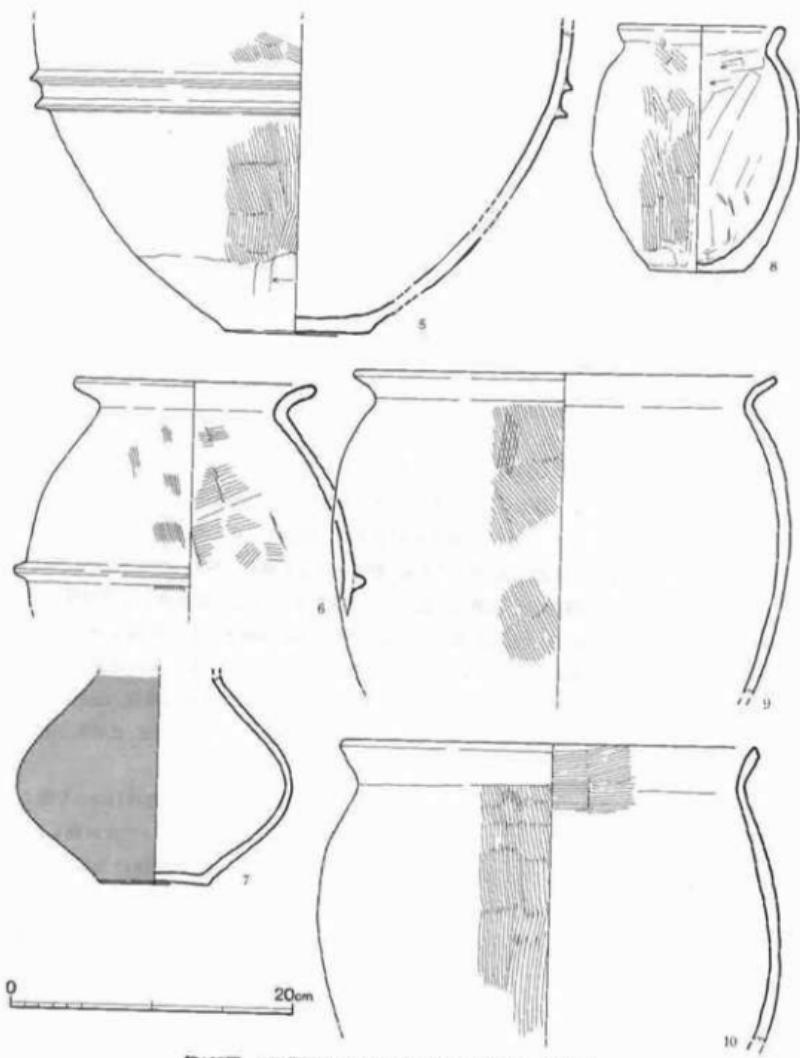
歯はハケとナデで仕上げる。復原口径25.0cm、底径10.1cm、高さ38.2cmを測る。4は鰓先口端の前部を僅かに残す。上面には口幅2.5cmの円形浮文を4個所（？）に配する。周囲には複数の滑び二条貼付する。調整はハケとナデで仕上げる。復原口径29.0cm、5は胸下半部に三隻の台形凸船を付す。外側はハケで、底脚付近は燃過頭が残る。底径10.2cm、6は「く」字状に外反する口縫を有す後で、肩部は焼削を有す。胸中央部には台形凸船を貼付する。復原口径17.0cmを測る。7は内巻き燃過頭で胸船上半を欠失する。口縫部は袋状を呈するであろう。胸部は玉葱状を呈する。底脚は上げ底をなす。精製品である。底径8.0cmを測る。

8は8～13がある。8は小型の壺でつくりが粗い。調整は外側が粗いハケ、内側は燃過頭が残る。外面は一次加熱を受ける。復原口径11.8cm、口径7.2cm、高さ17.5cmを測る。9・10は「く」字状に外反する口縫を行すが、後者は外反度が純い。前者は周縁が盛るが、後者は彌制である。調整は外側ハケ、内面はナデで仕上げる。両者とも外側に煤が付着する。9の口径30.0cm、10は29.6cmを測る。11は長脚の壺で底脚は細まりやや不安定である。全周に二次加熱を受け狭く赤焼29.6cmを測る。12は長脚の壺で仕上げる。両者とも外側に煤が付着する。9の口径30.0cm、10は29.6cmを測る。11は長脚の壺で底脚は細まりやや不安定である。全周に二次加熱を受け狭く赤焼29.6cmを測る。12は長脚の壺で仕上げる。両者とも外側に煤が付着する。9の口径30.0cm、10は29.6cmを測る。11は長脚の壺で底脚は細まりやや不安定である。全周に二次加熱を受け狭く赤焼29.6cmを測る。12は長脚の壺で底脚は細まりやや不安定である。全周に二次加熱を受け狭く赤焼29.6cmを測る。13の口縫は「く」字状に外反するが、頸部内側の後縫は不規則である。般人様が口縫部にある。調整は外側が粗いハケ、内面はナデする。外面に二次加熱を受ける。復原口径25.0cmを測る。

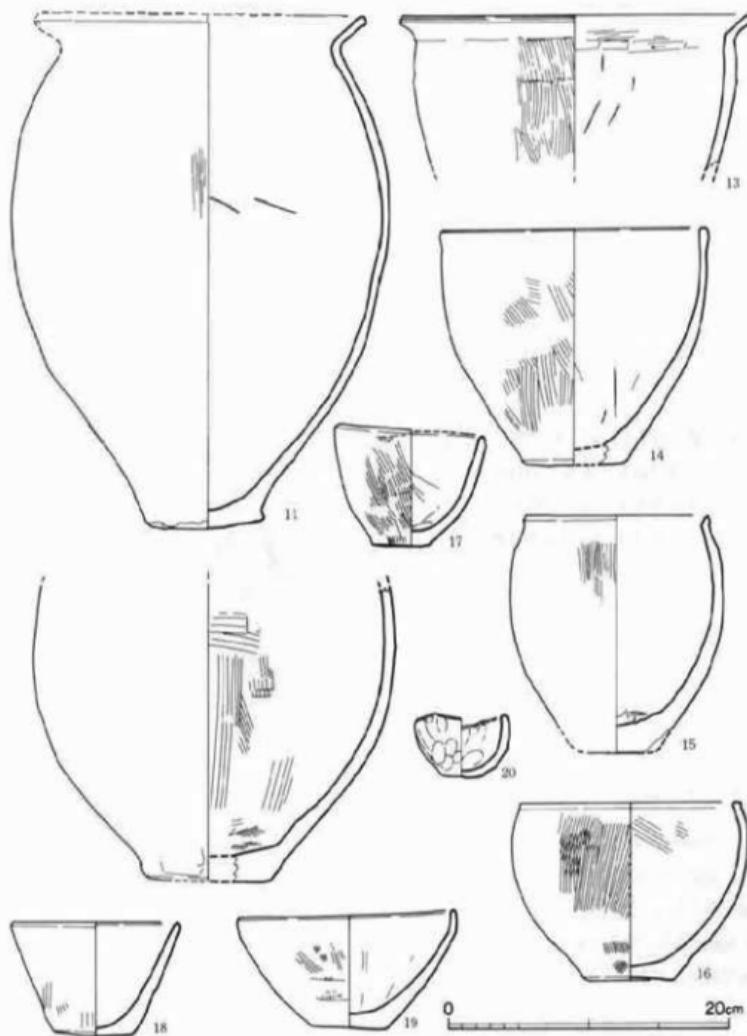
鉢は14～19がある。14は直口の鉢で口唇部を肥厚する。調整はハケとナデで仕上げる。外側に二次加熱を受ける。復原口径9.1cm、底径7.6cm、高さ16.6cmを測る。15は口縫部を僅かに外反する。肩部は僅かに張り民網をなす。調整は外側がハケであるが、下半は二次加熱を受け薄紙する。内面はナデする。口径13.2cm、底径6.0cm、高さ16.8cmを測る。16は口縫が内側し胸部は球状を呈する。上げ底の底脚をなす。復原口径15.8cm、底径6.7cm、高さ12.5cm、17の口径10.3cm、底径4.0cm、高さ8.3cm、18の口縫は周縁から口縫部にかけて直線的で逆尖形を呈する。復原口径12.0cm、底径5.6cm、高さ8.0cmを測る。19は口縫部が直口する鉢で、二次加熱を受ける。口径15.5cm、底径5.1cm、高さ7.8cm。

20は角形で杯部上半を欠失する。肩部は短い。高脚としてはつくりが粗い。高脚径14.7cmを測る。22・23はつくりの粗い高脚である。調整はナデで仕上げる。両者とも粗い二次加熱を受けた。前者は口径10.4cm、底径12.2cm、高さ18.0cm、後者は口径11.1cm、底径12.0cm、高さ18.8cmを測る。

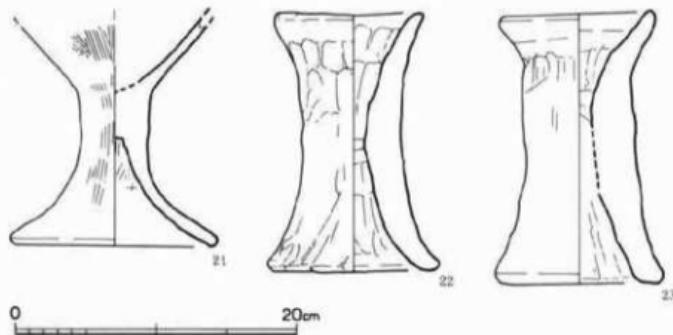
24は大型の壺で胸部にしては口縫部が短い。肩部には三角形凸船を貼付する。最大幅が胸上半にあり、下半は細まり後の小さな底脚へ続く。調整は外側が粗いハケ、内面はナデで仕上げる。口径34.1cm、底径9.6cm、高さ54.7cmを測る。



第167図 100号墳穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)



第168図 100号竪穴住居跡出土土器実測図その3 (1/4)



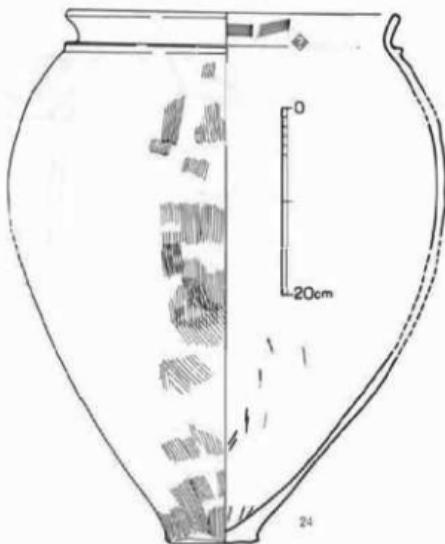
第169図 100号竪穴住居跡出土土器実測図その4(1/4)

石 器(図版51・52 第171図)

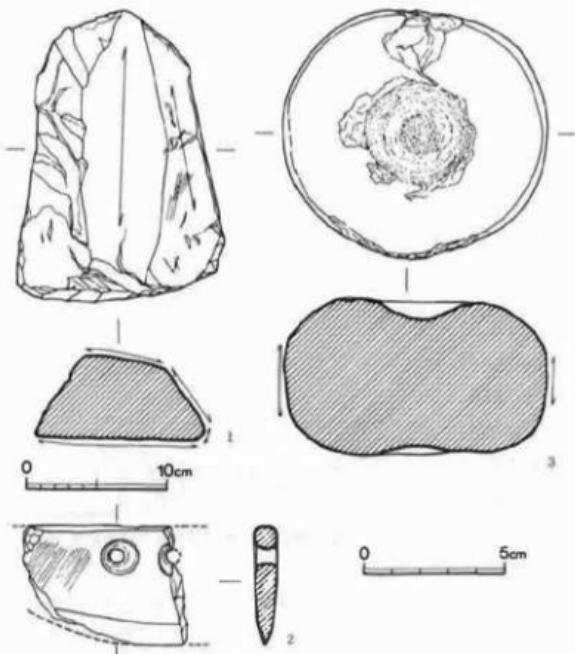
1は大型の砥石である。石材は花崗岩質砂岩で中～仕上げ砥石であろう。研面は4面で3面の自然面を残す。屋内土壤からの出土である。現長21.0cmを測る。

2は雲母片岩製の石庖丁片がある。孔は両方向から穿つが、片側は有段をなす。穿孔具の痕跡であろう。表裏面に粗い研痕が残る。外孔径1.30cm、内孔径7.5mmを測る。

3は礫石で周縁は摩耗している。表裏の中央部は凹面をなし、敲打痕が残る。凹面の径は3.0と2.8cmを測る。深さは6.0mm、3.0mmである。石材は花崗岩である。



第170図 100号竪穴住居跡出土土器実測図その5(1/6)



第171図 100号堅穴住居跡出土石器実測図(1/4, 1/2)

101号堅穴住居跡 (図版10-(1)・22-(3) 第172図)

調査区の南側F-7・8区で検出した堅穴住居跡で、耕作による削平及び102号住居の重複などで約1/3が削平を受けている。平面プランは長方形であろう。遺存する北壁は3.50m、壁高は北側で20.0cmを測る。支柱穴は検出できていない。102号と接する床面上には焼痕の残る炉が1/2残存する。屋内土壇は102号住居の隅に僅かに痕跡が残り、両端には小ピットを配する。ピット間は55.0cmを測る。

遺物の出土状況は床面中央にドーナツ状に土器を配しており、単なる投棄ではなく廃絶時の祭祀の痕跡と考えられる。

器種は壺・甌・鉢・ジョッキ形土器の他、砥石が1点ある。

出土 遺 物

土 器 (図版52 第173

・174・175圖)

壺は1～5がある。1は袋状口縁壺の系譜を引く壺で肩折部の縁は不明瞭である。頸部は短く、肩部に三角凸沿を付す。口径17.2cmを測る。2は朝顔状に開く口縁を有し、肩部から胴部にかけては球形を呈する。胴中央部には刺み目を密に配す台形凸沿を貼付する。

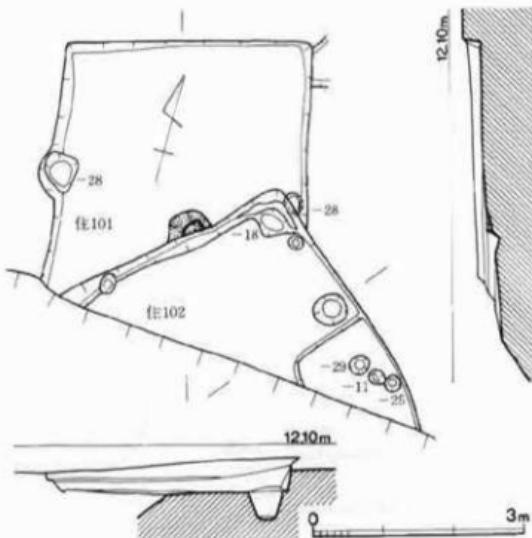
調整は粗いハケを多用する。復原口径19.2cmを測る。3は頸部上半を欠失する。肩部から胴上半にかけては大きく張り扁平を呈する。器表面の摩耗が激しい。4は無頸壺で、口縁部は大きく内窪する。体部の張りは強く扁平球形を呈する。胴部の凸沿は2と酷似する。

調整は内外面ともハケを用いる。口径14.2cm、底径8.0cm、高さ20.8cmを測る。5は壺の胴下半部で底径8.0cmを測る。1～5は埋土中からの出土である。

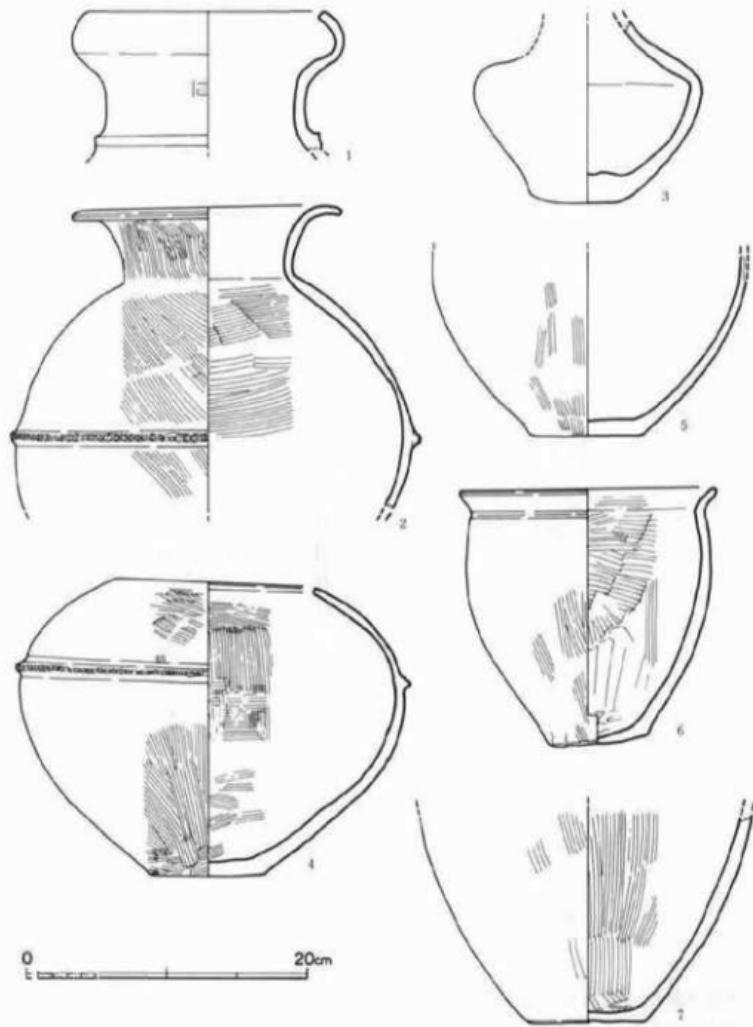
壺は6～9がある。6は小振の甕で最大径を口縁部を持つ。調整は粗いハケが主体で、内面下半は擦過痕を残す。外面は二次加熱を受ける。復原口径18.4cm、底径7.3cm、器高18.0cmを測る。床面からの出土である。7は外面に煤が付着する。底径8.6cm。床面からの出土。8は長めの口縁を有し、最大径を口縫に持つ。粗いハケとナデで仕上げる。外面は二次加熱を受け茶褐色の色調を呈する。復原口径26.0cm。埋土中からの出土である。9は頸部内側の縁が鮮明で体部は大きく張る。底径は体部に比してやや小さくつくる。口径24.2cm、底径8.3cm、器高37.2cmを測る。埋土中からの出土である。

10は鉢の破片で器壁を厚くつくる。調整はハケとナデで仕上げ、復原口径15.8cmを測る。

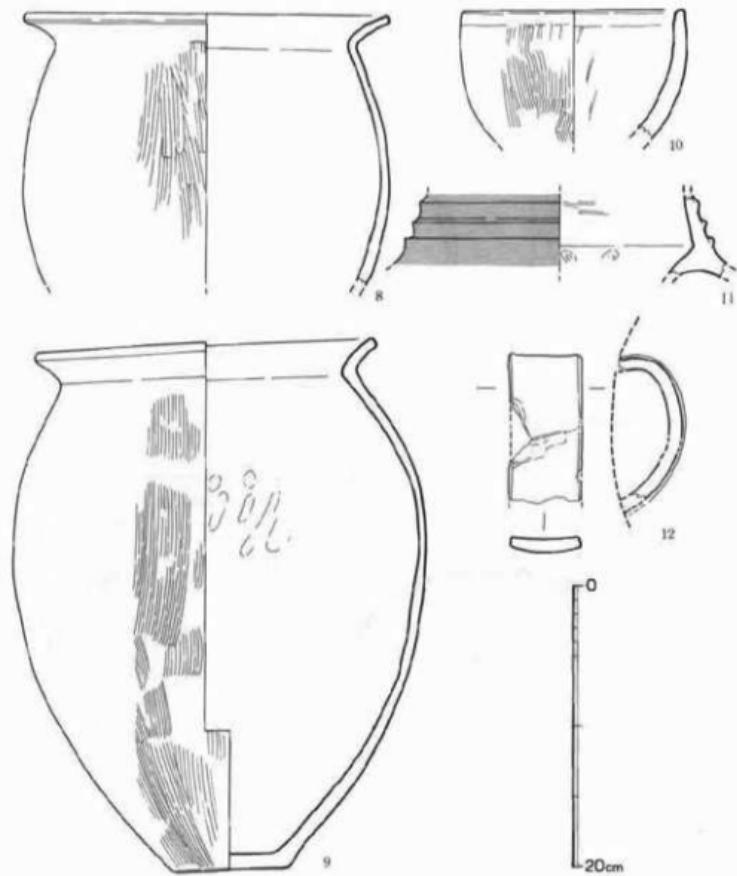
11は筒形器台の破片であるが、鈎の直上に3条の三角凸沿を貼付する。しかし、凸沿を鈎の直上に付す類例は未だ知らない。調整は外面が丹塗り磨研で、内面はナデする。埋土中からの出土である。



第172図 101号、102号竪穴住居跡実測図(1/80)

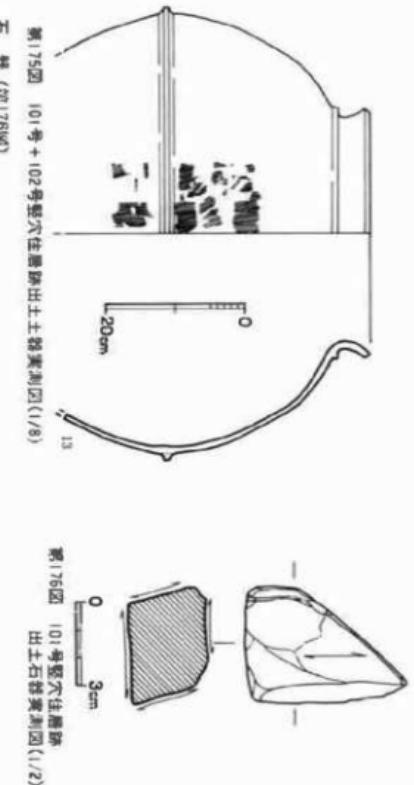


第173図 101号竪穴住居跡出土土器実測図その1(1/4)



第174図 101号堅穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)

12は大型のジョッキ形土器の把手である。把手の幅5.0cmを測る。埋土中からの出土である。
13は大型の甌で、短い口縁下には三角凸帯を貼付し、球形の胴部には台形凸帯を付す。調整は
外面が細かいハケ、内面はナデで仕上げる。復原口徑35.2cmを測る。102号住居から出土の破片と
接合したが、101号住居に伴う土器であろう。



第175図 101号 + 102号竪穴住居跡出土土器裏面図(1)(8)

第176図 10号竪穴住居跡出土石器裏面図(1)(2)

石 器 (321764)
地土中から出土した雲母片岩製の砥石がある。5mmを切面とする。風化著しく表面がざらつく。

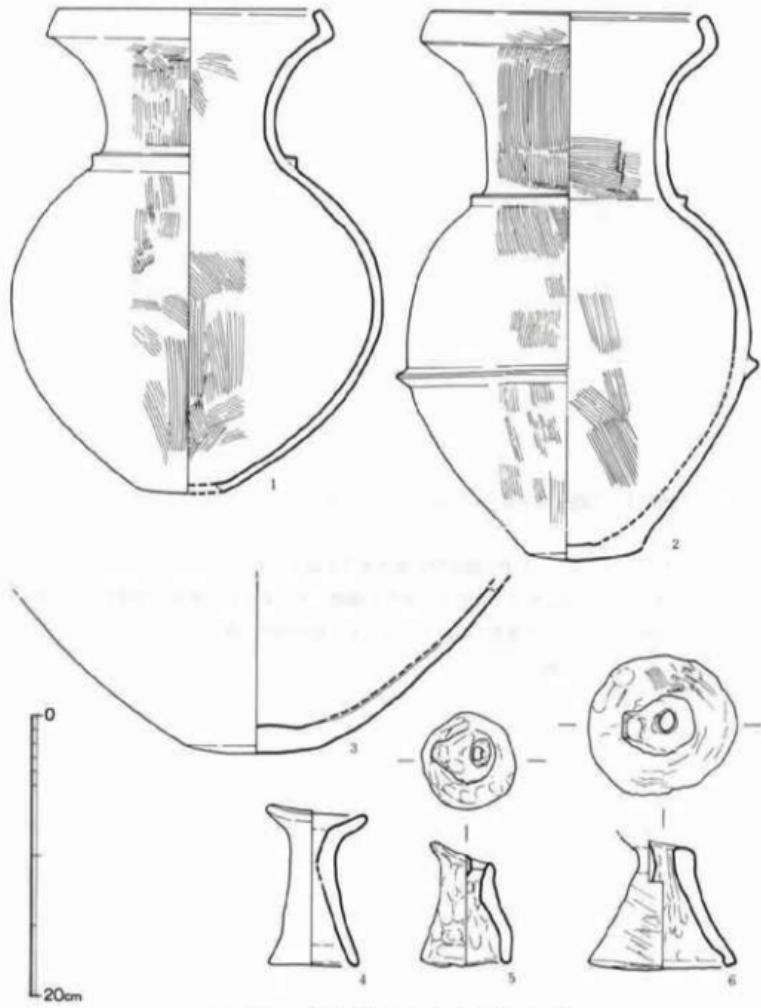
101号住居を切っているが、大半が耕作時の削平を受け遺存していない。台原内には焼土、炭化材に混ざり瓦形に近い土器が散乱しており、火災に遭遇していることが判る。北壁等いこは細い、周溝が走り、東壁にはベット状溝跡を認けている。その他詳細は不明。

出土遺物は壺・器台・支脚がある。

出 土 遺 物

土 器 (国版53 第175・1774)

壺は1～3がある。1・2とも同形状の口縫を有し、頸部は細くしまる。肩部には三筋凸筋を付し、1は脚部が堅硬を呈する。底部を欠損しているが、小さな底窓が付くであろう。2は脚部に凸筋凹筋を貼付し、底部は不安定なレンズ状を呈する。両者の調整は内外面とともにハケを多用する。内外面に二次加熱を受ける。1の口径18.5cm、高さ34.3cm、2は口径19.6cm、底径8.2cm、高さ39.1cmを測る。3は底窓付で不安定な底窓を呈する。二次加熱を受ける。すべて底面からの出土である。4は器台でやや歪なつくりである。調整はナデ、削土は砂利を多く含み組い。口径7.2cm、底径6.5cm、器高10.9cmを測る。底面からの出土である。
5・6は円形 支脚で、いずれも天井部に孔を有す。前者は背腹ナデ、後者は周底が磨められる。両者とも二次加熱を受ける。底面からの出土。

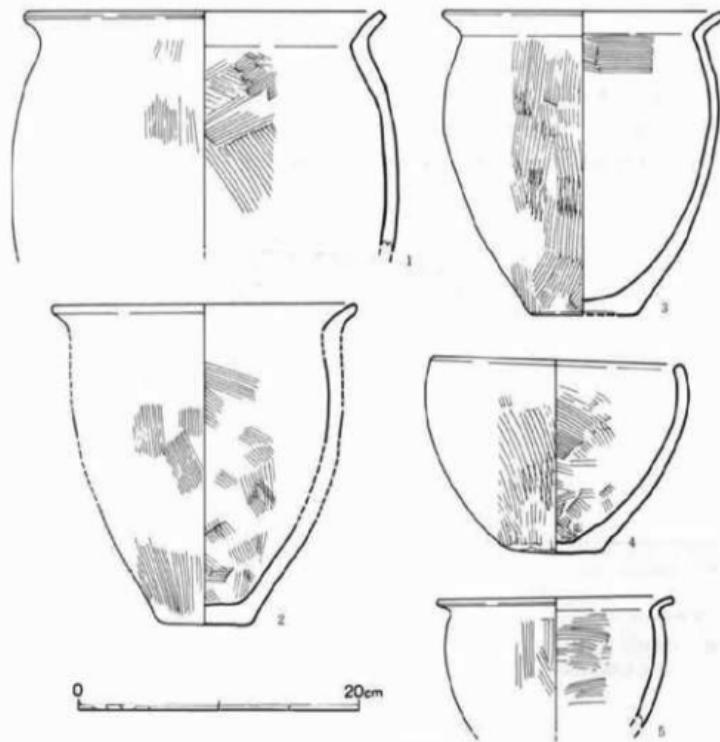


第177図 102号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

103号竪穴住居跡 (図版 6-(1)・18-(2) 第60回)

調査区の西端で検出した竪穴住居跡で、約1/2が土取りで削平されている。45号住居との重複があり、当該住居が新しい。平面形状、規模、支柱穴などは不明。壁高は遺存状況の良い箇所で40.0cmを測る。住居の南側面には80号住居と同様長軸1.50cm、短軸1.00cm、深さ22.0cmの隅円長方形の屋内土壙が掘られ、底面には灰白色の粘土塊が置かれた状態で検出し、それに伴い砥石2個、土製勾玉が出土した。

出土遺物は上記の遺物の他に、燒、鉢がある。



第178図 103号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

出 土 遺 物

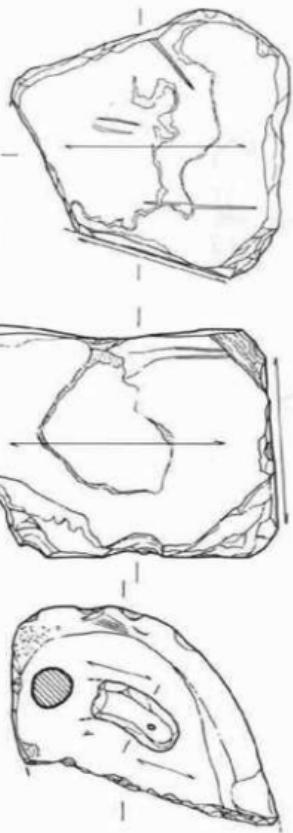
土 器 (圖版53 第1789)

1～3・5は甕である。1・3は口縁「く」字状に外反させ、2の外反度は最も強く、調整はハケヒナデで行なう。すべて二次加熱を受ける。1の口径25.8cm、2は21.7cm、底径6.5cm、高さ22.8cm、3の口径20.1cm、底径7.9cm、器高21.7cmを測る。5は小型の甕で、底部はよくしかも強く外反し、肩部は厚い。復原口径17.0cmにある。すべて埋土中からの出土である。

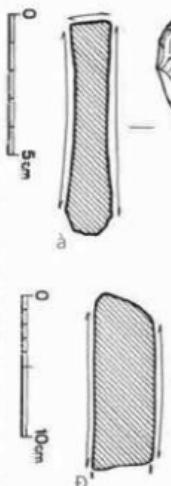
4は完形の鉢で、縁を内凹させる。調整はハケを多用する。二次加熱を受け強くが施す。口径17.8cm、底径7.3cm、高さ40.3cmを測る。埋土中からの出土。

石 器 (圖版54 第179・180)

1～3は砾石である。1・2は雲母片岩製の砾石で、両者とも石材の質がよく荒砥として使用されたものであろう。1の研磨2面、2には5面を数える。屋内土塙からの出土。3は花崗岩質砂岩の砾石で、作業台として使用された可能性がある。全面が平滑となる。屋内土塙内からの出土である。



第179図 103号竪穴住居跡
出土石器実測図(1)



第180図 103号竪穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2、1/4)

土製品（第180図）

イの土製勾玉がある。尾部を欠失する。胎土は粗く、黒雲母を多く含む。屋内土壙からの出土である。

104号堅穴住居跡（図版5-(2) 第51図）

39号、41号住居と重複した堅穴住居であるが、41号住居との新旧は明らかでない。壁面は農道と耕作により大半が削平を受ける。平面形状は長方形を呈す。支柱は2本で、柱間は2.80mを測る。柱間に幅55.0cmの炉を設けている。壁沿いの一部には周溝が残るが、若干掘過ぎの感があり残っていない。柱間軸での住居の方位はN72°Eを示す。

出土遺物は土器の調査可能なものはなく、石製劫鉢車がある。

出土 遺 物

石 器（図版54 第181図）

縁泥片岩製の劫鉢車がある。表面とも丁寧に研磨している。中央には7mmの孔を穿つ。径は4.9cm、厚さ5.5mmを測る。重さ24gである。

105号堅穴住居跡（図版4-(1)・10-(1) 第39図）

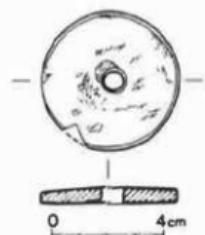
E-7区で検出した小型の堅穴住居で、古墳時代の29号住居と完全に重複していた。平面形状は長方形を呈する。現存での規模は長壁が4.00m・4.20m、短壁は3.20m・3.00mを測る。床面積は12.49m²である。支柱は2本で、柱間は1.90mである。柱間の南寄りには梢円形のが設けているが、新しい柱穴が掘られている。長壁の中央には円形の屋内土壙が付設されている。北側には細い周溝が走っており、本来ベットが布った可能性が強い。

出土遺物は少なく壺が1点ある。

出 土 遺 物

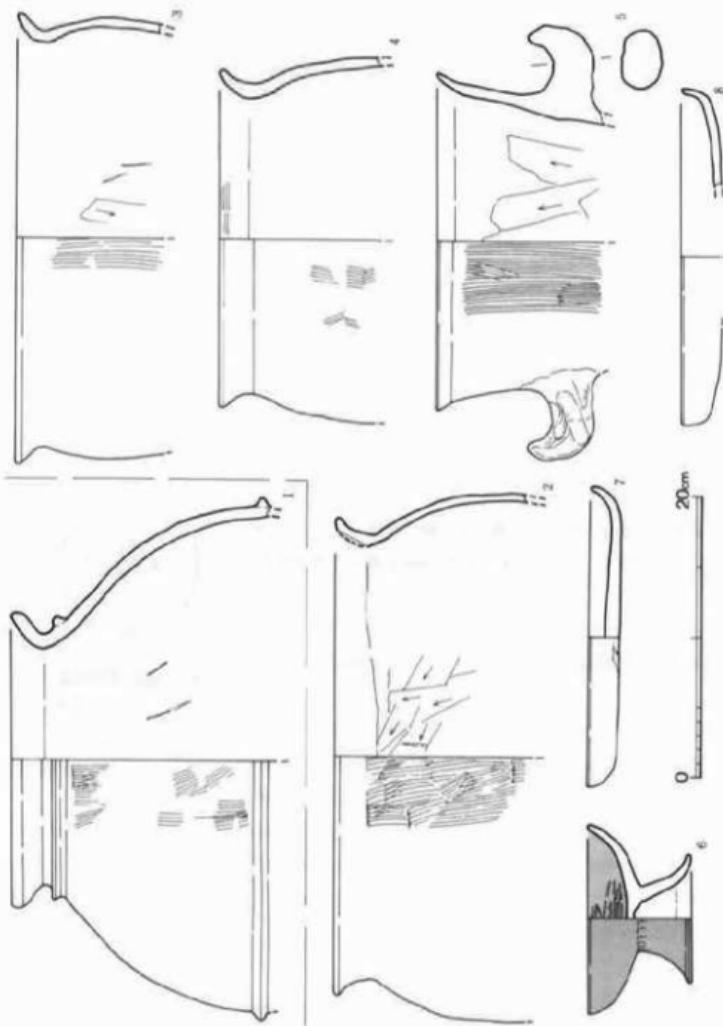
土 器（第182図）

1の壺がある。口縁部は「く」字状に外反させ、口縁直下には台形凸帯を付す。肩部から胴部



第181図 104号堅穴住居跡
出土石器実測図(1/2)

图142 105号、106号竖穴住居出土土器实测图(1/4)



にかけての張りは大きく、胴中央部には三角凸沿を貼付する。外面は二次加熱を受け煤けている。復原口徑20.1cmを測る。

106号竪穴住居跡出土遺物

土 器 (図版54 第182回)

2～4は甌である。口縁部は外反させるものの頸部内側の縁は直線でない。調整は外面が粗いハケ、内面は箝で削る。すべて二次加熱を受ける。2の口徑34.0cm、3の口徑32.0cm、4は口徑24.0cmを測る。2・3はカマド傍の土壤内からの出土である。

5は把手付の甌で、口縁部は僅かに外反させる。胸部は直線的で中央に扁平な把手をつける。調整は粗いハケと箝張りで仕上げる。二次加熱を受け濃い茶褐色に変色する。口徑24.0cmを測る。

6は精製された高杯で、浅い杯部と低い脚部を有す。杯部・脚部とも箝で磨く。表面に丹を塗布していると思われるが、二次加熱を受けくすんだ茶褐色を呈する。口徑13.4cm、脚部径9.2cm、器高7.4cmを測る。

7・8は甌であるが、形状から11世紀頃の所産と考えられ器人であろう。7は復原口徑21.4cm、器高2.25cm、8は復原口徑24.0cmを測る。

107号竪穴住居跡出土遺物

石 器 (図版54 第183回)

砂岩製の砥石片がある。現存での研面は3面である。中低であろう。現長9.2cmを測る。

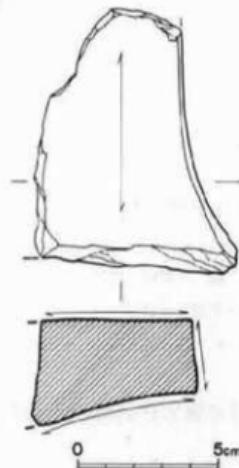
111号竪穴住居跡出土遺物

土 器 (図版54 第184回)

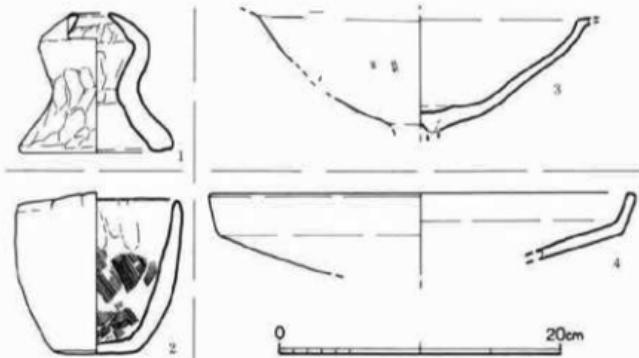
1の支脚がある。天井部には径2.0cmの孔を穿つ。全体に二次加熱を受け淡く赤變する。調整は内外面ともナデている。底部径11.0cm、器高9.8cmを測る。

112号竪穴住居跡出土遺物

土 器 (図版54 第184回)



第107図 107号竪穴住居跡
出土石器実測図(1/2)



第114図 111号、112号、115号、117号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

2は鉢で完形品である。口縁から胴部にかけての張りは鈍い。調整は外面がナデ、内面には細いハケが残る。全面に二次加熱を受け黒く変色する。口径10.7cm、底径6.1cm、器高11.25cmを測る。

115号竪穴住居跡出土遺物

土 器 (第184図)

3の高杯の杯部がある。口縁を欠失しているが、外側に肩折して平坦をなすであろう。胴部の張りは少ない。調整は、二次加熱を受け摩耗しているが、ハケとナデであろう。

116号竪穴住居跡出土遺物

鉄 器 (図版54 第185図)

鉈の基部片が床面から出土している。刃部は現存していない。両端は折曲げている。現存長5.5cm、基部幅2.5cm、厚さ2.5mmを測る。



117号竪穴住居跡出土遺物

第185図 116号竪穴住居跡
出土鉄器実測図(1/2)

土 器 (図版54 第184図)

4は高杯の杯部片である。胴部は直線的に作り、上方に肩折し口縁につづく。調整は摩耗し

不明。復原口径30.4cmを測る。

119号堅穴住居跡（図版8-(2)・9-(1)・22-(2) 第143頁）

当該住居は4軒の重複があり、90号住居に切られ、88号・100号住居を切った小屋の住居である。平面形態は長方形を呈し、規模は南・北壁で4.40m・4.20m、東・西壁が3.30m・3.50m。壁高37.0cmを測る。床面積は14.21m²である。埋土中には焼土及び炭化材が目立ち、床面からも検出されたことから焼失住居であろう。支柱は2本で、ベット際に掘込んでいる。支柱間は1.70mを測る。柱間軸から北側にずれた箇所には円形の炉を設けている。屋内土壤は南壁中央傍に掘られ、内部に2本のピットが見られるが、その内の1本は100号住居の支柱穴である。両短壁沿いには幅1.00mの削り出しのベットを付せる。柱間軸の方方位はN84°Wを示す。

出土遺物は壺・甕・鉢・高杯・杯の他、砥石が1点ある。

出土 遺 物

土 器（図版54・55 第186・187頁）

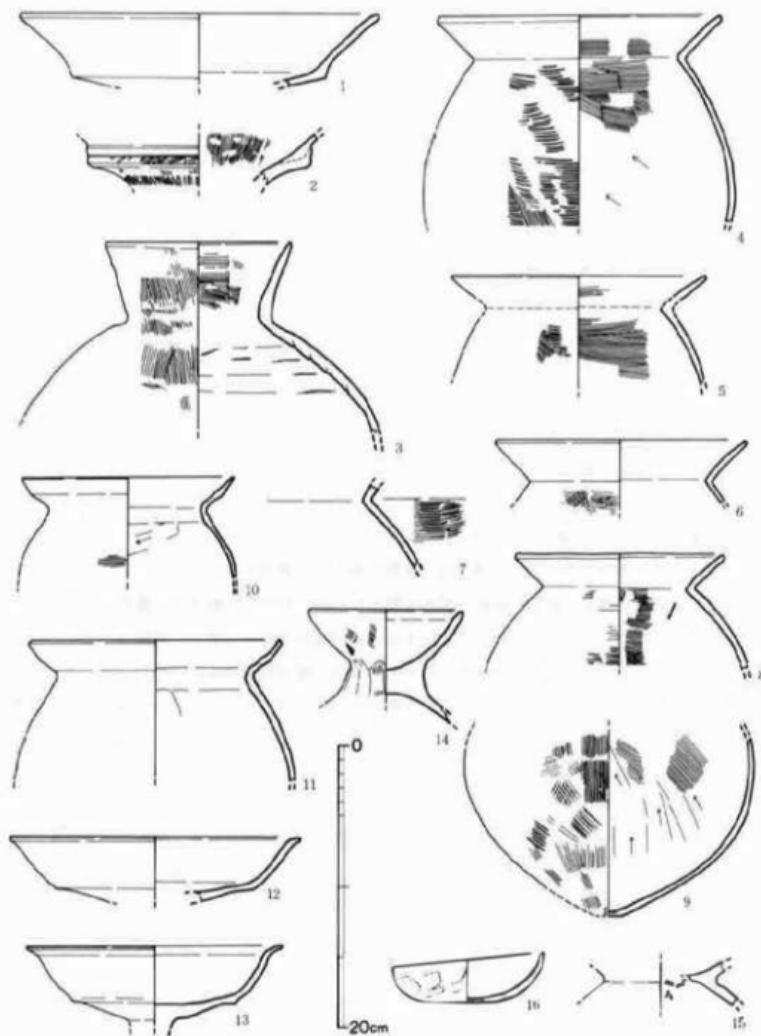
壺は1～3がある。1・2は所謂二重口縁壺である。器表面が風化している。復原口径25.6cmを測る。2は瓶口縁壺に極細の沈線と割みを配している。内外面に暗文状の範磨きが残る。两者は精製された製品である。3は僅かに外反する口縁に肩部の張りは強い。調整は外面がハケ、現存での内面はナデしており範削りは認められず、粘土帯の接合面が残る。口径13.2cmである。

甕は4～11がある。4～9は所謂庄内式の甕で、「く」字状に鋭く外反する口縁を有す。頸部内面の棱線は明瞭である。調整は外面が粗かい叩キ、内面は上半が横ハケ、下半は鋸で削る。色調は橙色と茶褐色とがある。すべてに模が付着する。4の復原口径20.2cm、5は18.2cm、6は18.0cm、8は15.0cmを測る。9は径2.0cmの小さな底部を有す。外面はハケと叩キが残る。器壁は薄い。10・11は口縁が内向する布袋式の甕で、内面頸部の一段下部から鋸で削る。色調は灰白色を呈する。10の口径15.0cm、11は18.0cmを測る。

12～15は高杯であるが、12・13は前記の土器に伴う高杯ではなく、5世紀前葉頃のものである。14・15は精製された小型の高杯である。14の杯部は小さく浅い。調整は鋸で磨く。脚部は大きく開くと思われる。

16は杯で外面を鋸で削り、内面はナデる。口径10.8cm、器高3.0cmを測る。

17は在地系の鉢の破片で、器表面には粗い叩キ痕を残す。内面はナデで仕上げる。復原口径27.2cmを測る。

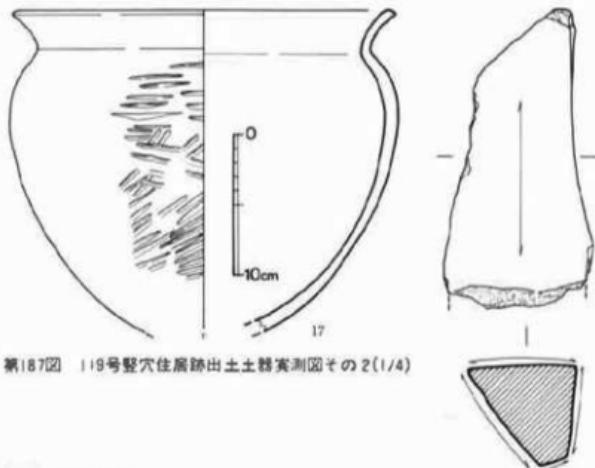


第186図 119号竪穴住居跡出土土器実測図その1(1/4)

石 器 (図版)

55 第188図

花崗岩質砂岩の住上げ砥石がある。灰白色の色調を持つ。加熱を受け淡く赤変する。表面(図示した面)は使用頻度が高く凹面をなす。屋内土壌からの出土である。



第187図 119号堅穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)

120号堅穴住居跡 (第142図)

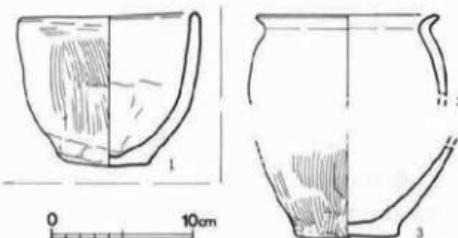
I-1区で85号住居に切られた堅穴住居であるが、大半が調査区外のため実体は不明である。僅高は30.0cmを測り、南壁沿いには短い溝溝が走る。

出土遺物は少なく、小型の鉢がある。

出 土 遺 物

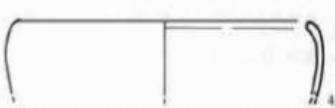
土 器 (図版55 第189図)

1の鉢がある。完形品で粗いハケとナデで仕上げる。口径12.8cm、底径6.5cm、器高10.6cmを測る。



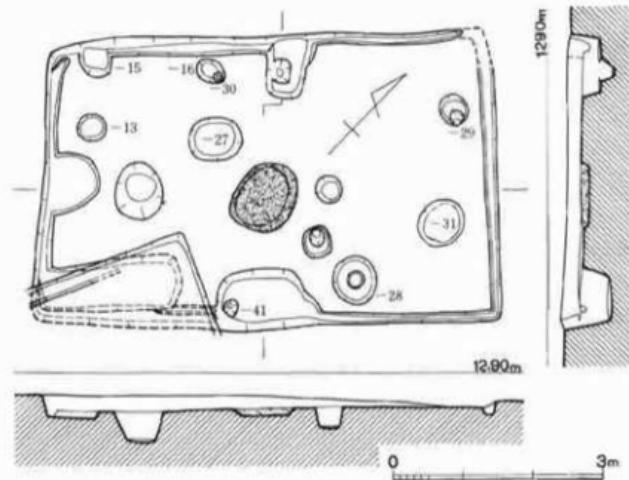
0 10cm

121号堅穴住居跡
(図版11-(1)・22-(4) 第190図)



第189図 120号、121号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)

122号、126号堅穴住居と重複



第190図 I-21号整穴住居跡実測図(1/80)

しており、122号より新しく、126号より古い住居跡である。平面プランは長方形を呈する。規模は長軸が6.62m、短軸は3.85m・4.14m、壁高は遺存状態の良好な箇所で20.0cmの前後を測る。支柱は住居形態のから2本と考えられるが、適正配置にない。床面中央には浅い炉を設けている。南壁際には1.30m×0.85m、深さ44.0cmの格円形の屋内土壙を付設しており、両端に小ピットを掘っているが、一方は痕跡が残る程度である。対峙する箇所にも2段掘のピットが在るが用途は不明である。壁沿いには周溝を廻らし、屋内土壙に繋がる。

出土遺物は小型の甕、鉢がある。

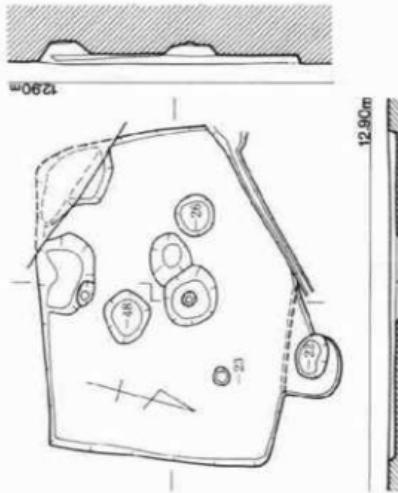
土 遺 物

土 器 (第189図)

2・3は小瓶の甕で、2の口縁は短く「く」字状に外反させる。復原口径13.1cm。3は底部にて粗いハケとナデで仕上げる。底径7.4cmを測る。

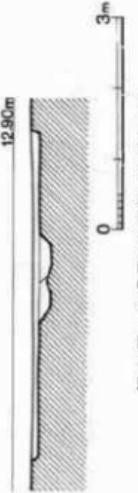
4は口縁部を内向する鉢で、口縁部は肥厚させる。表面は剥落しているが、丹か化粧土を塗布した痕跡が残る。復原口径21.6cm。

122号堅穴住居跡
(圖版11-1)・22-(4)・23-
(1) 第191圖)



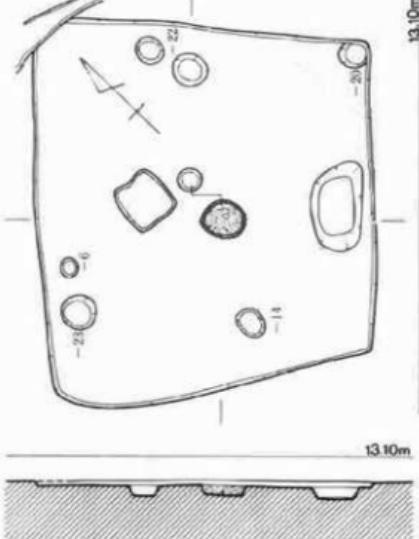
K-2-3区で検出した堅穴住居跡で、2軒の住居に切らされている。平面プランは長方形であろう。支柱穴は不明で、屋内土壇は解説紙に付載する。その他の詳細は不明で、出土遺物も皆無に近い。

123号堅穴住居跡
(3019290)

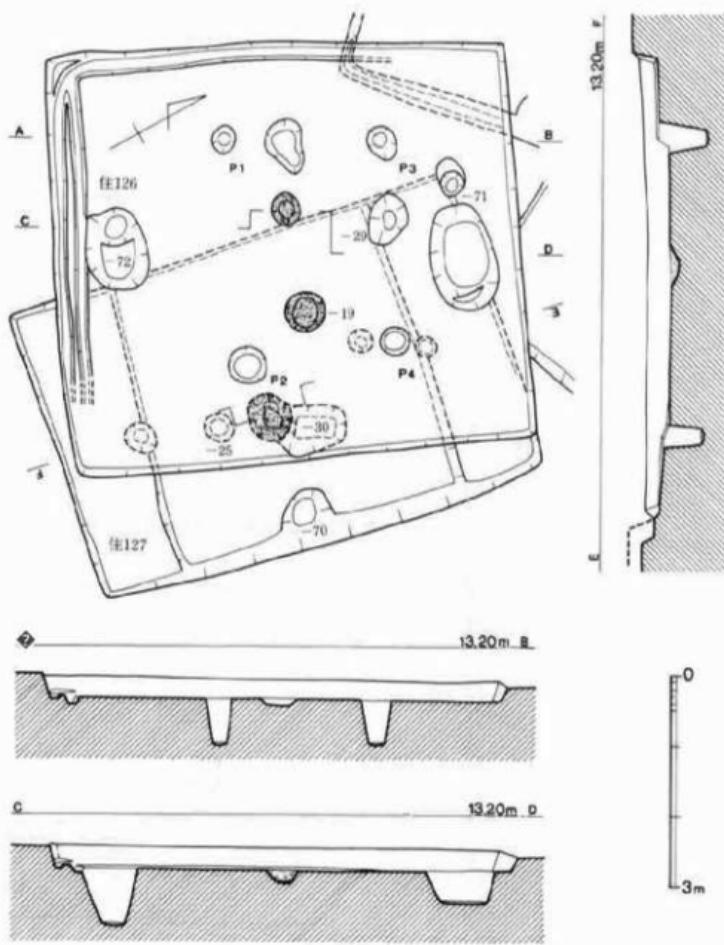


127号に住居の一
部を切りられた極めて
遺存状況の悪い堅穴
住居で壁高5.00mを
測る。平面形状は長
方形を呈し、北西
・南東壁が5.30m・
4.40m、北東・南西
壁が4.75m・4.50m
である。床面積は22.
2.87m²を測る。支柱
穴は規則性がなく、
図示した柱穴は支柱
とはなり得ない。南
東壁傍には長軸1.20
m、短軸0.70mの楕
円形の屋内土壇を
描っている。

第191圖 122号堅穴住居跡(圖版11-80)



第192圖 123号堅穴住居跡(圖版11-80)



第193図 126号、127号竪穴住居跡実測図(1/80)

出土遺物は皆無である。

126号墳穴住居跡 (図版11-(1)・23-(2) 第193回)

3軒の住居の重複がある裏穴住居で重複するすべての住居よりは新しい。平底プランは長方形に近い形状を示し、規模は南、北壁5.90m・5.80m、東・西壁6.80m・6.55m、側溝30.0cm前後を削る。床面積は36.49m²である。支柱は4本と思われるが、断面A-Bに表示した柱穴と同時にP₁-P₂が化されておらず、やや歪である。柱間はP₁-P₂が3.30m、P₁-P₃が2.20m、P₂-P₄が2.20m、P₃-P₄が2.90mを測る。4本の柱間空間内には2箇所に柱を削っており、南北壁断面ピットを2本の支柱と考え、削垣前の2本の開窓などを考慮すれば、住居の建直しを計ったと受け取られ、2本から4本へと計す時の跡の所蔵とも思える。

出土遺物は甕・高杯・片口土器の他、砥石が2点ある。

出 土 遺 物

土 器 (図版55 第194回)

1は甕で「く」字状に外反する曳り気味の口縁を有す。体部は蛇状を示す。肩部は削離し、而がハケ、内面は窪に向る。表面は二次加熱が著しい。復原口徑13.0cm、屋内土壤から出土。
2～4は高杯で同一形状を示す。杯部は浅く斜面は僅かに丸味を有す。口縁部は若干

第194回 126号墳穴住居跡出土器物測図(1/4)

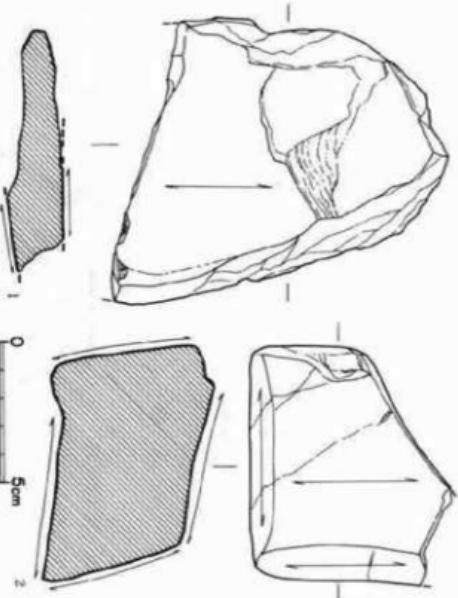
手外反させる。器部はスマートで輪溝を軽く開脚する。エヌ2のみ磨製でき、荒削りではなし。

すべて精製された高みである。2の口径18.4cm、高さ13.2cm、復原器高15.0cm。3は復原口径19.0cm。4は復原口径19.1cm、高さ14.4cm、器高15.0cmを測る。

5は片口土器で全体がやや歪である。調整は外側がハケ、内面は萬削りの後ナヂる。器壁は薄くつくる。器内面には部分的に小さな炭化物が付着する。口径23.9cm、器高14.2cmを測る。

石 器 (圖版55)

第195圖



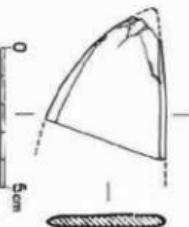
第195圖 126号竖穴住居跡出土之石器(1/2)

1・2の砥石がある。1は雲母片岩製の砥石で、現存の研削面は一面のみである。加熱を受け刻離が強く全体があ痩する。

2は花崗岩質砂岩

製の仕上げ紙とある。加熱され透明白に変色している。研削は6面である。

127号竖穴住居跡(圖版11-(1)・23-(2) 2619398)



第196圖 127号竖穴住居跡出土石器(1/2)

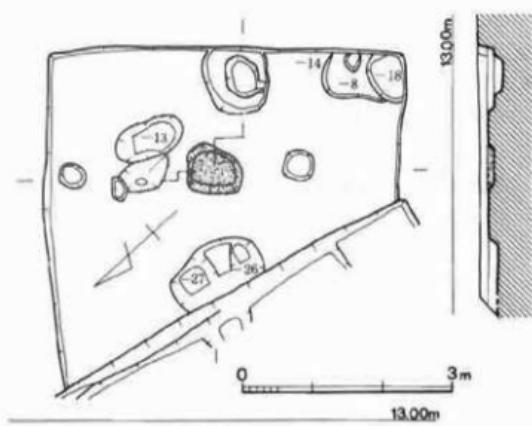
126号と広い範囲で重複した堅穴住居跡であるが、126号住居よりも深く掘削されていたため、床面は遺存していた。平面形は長方形を呈し、規模は南・北壁4.20m・4.40m、東西壁4.50mを測る。床面積は27.95m²である。支柱は2本で2本ともベット上端に埋込んでいる。柱間は4.20mを測り、主軸方位はN 11° Eを示す。柱頭部から東にややずれて円形の穴を設けている。南・北壁脇には幅1.20m前後のベットを削り出す。

出土遺物は少なく、少量の土器片と山鹿丁がある。

出土遺跡

石器(第196図)

片岩質の石庖丁片がある。刃部は表面の使用痕が著しく研面の穂が不明瞭で丸味を有し、裏面は研面が鮮明である。表面はよく研磨され平滑となる。背部は丸くつくる。損失部分は割れ口が刃物で切ったような鋭さである。

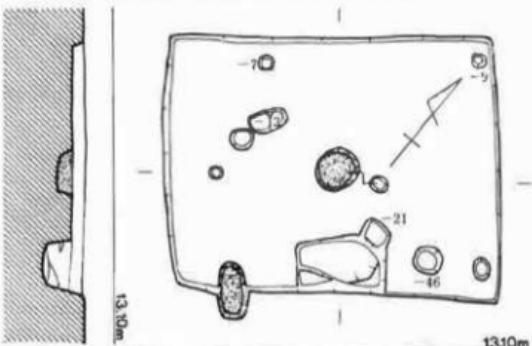


128号堅穴住居跡(国版11-(1)・(2)・23-(2) 第197図)

K-3区で検出した堅穴住居で127号住居に切られている。南北 ± 5.05 m、壁高10.0cm強を測る。支柱は2本であるが、東側の柱穴は浅い。中央には浅い炉を掘っている。南壁際には2段掘りの屋内土壇を付設する。

出土遺物は殆どない。

第197図 128号堅穴住居跡実測図(1/80)



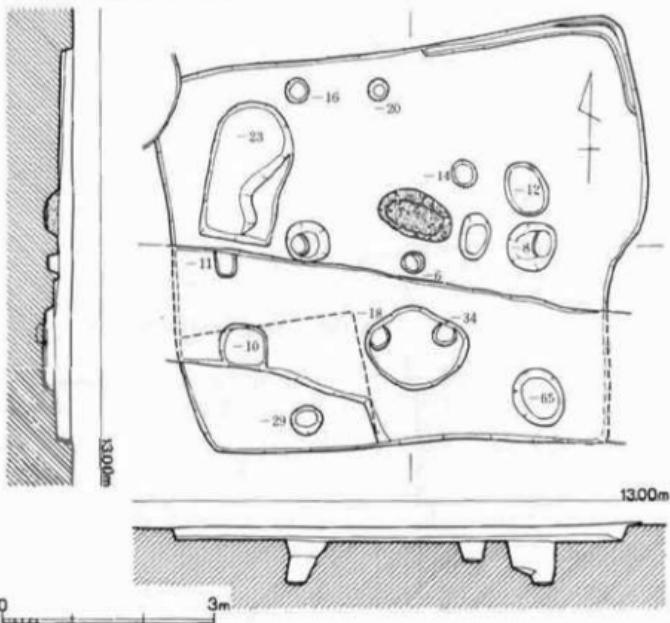
129号堅穴住居跡(国版23-(3) 第198図)

130号住居の西側で検出した堅穴住居跡で、平面形状は長方形を呈する。規模は南・北壁4.60m、東、西壁3.50m、3.75m、壁高20.0cm弱である。床面積は14.97m²を測る。支柱は検出できて

いない。床面中央部には円形のがれを掘込む。屋内土塀は南壁際に設け、長軸1.28m、短軸7.60cm、深さ40.0cmを測る。さらに、南壁には突出した形で梢円形のビットがあり、中から灰白色の粘土が出土している。当該住居に伴うから呑かは不明。

出土遺物は図示不可能な土器片が少量ある。

130号竪穴住居跡（第199図）



第199図 130号竪穴住居跡実測図(1/80)

L-4区で検出した竪穴住居であるが、住居内の南側に腰道が東西に走り、部分的に削平を受けている。平面形態は歪な方形を呈しているが、削平された部分はベットを付設していた可能性がある。現存での規模は南・北壁が5.70m・6.60m、東・西壁が5.30m・6.00m、構高20.0cmを測る。床面積は34.92m²を測り大型である。支柱は2本で、柱間は3.50mである。柱間軸から北側にずれて不整形のがれを設けている。屋内土塀は南壁のやや内側に付設し、両端に2本のビットを配する。ビット間は90.0cmである。柱間軸の方位はN 88° Eを示す。

出土遺物は甕の他、石庖丁、石製円盤、土製勾玉がある。

出土遺物

土 器 (図版56 第200図)

「く」字状に鋸く外反する口縁を有す甌で、体部の張りは少ない。頸部内側の波も不鮮明である。調査は粗いハケと内面に擦過痕が残る。復原口径16.8cm、底径6.1cm、器高21.8cmを測る。

石 器 (図201図)

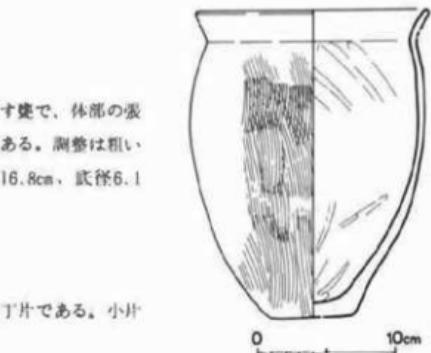
1は雲母片岩の石材を使用した石庖丁片である。小片であるため全容は不明である。

2は雲母片岩製の円盤で、表面が風化しそうつく。径6.2cm×5.6mmを測り、47.7gを計る。

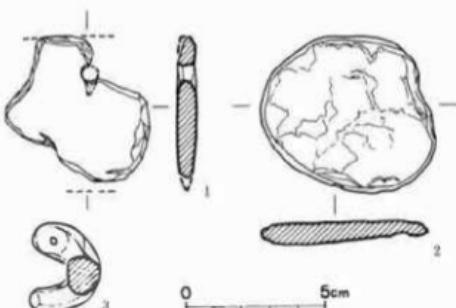
土 製 品 (図版56 第201図)

3は埋土中から出土した土製勾玉であるが、当該住居に伴うか否かは不明。体部断面はやや扁平で、表面が剥落している。

頭部1.2cm、尾部9.0mm、長さ3.2cmを測る。



第200図 130号竪穴住居跡
出土土器実測図(1/4)



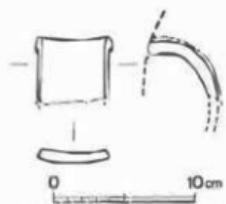
131号竪穴住居跡

(図版11-(2)・12-(1) 第202図)

第201図 130号竪穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2)

M-4区で出土した小型の竪穴住居で140号住居に一部を切られている。平面プランは長方形を呈し、規模は南・北壁で3.30m、東・西壁で3.80m、壁高10.0cmと浅い。復原床面積は12.81m²である。支柱は2本で、柱間は1.50mを測る。柱間にには径70.0cmの2段掘りの炉を設ける。東壁際には2段掘りの屋内土壙を付設し、片側にピットを掘る。床面には北壁から西壁にかけて「L」字状の浅い溝を床面下に掘っている。柱間軸の方はN4°Eを示す。

出土遺物はジョッキ型土器の把手片がある。



第203図 I31号竖穴住居跡
出土土器実測図(1/4)

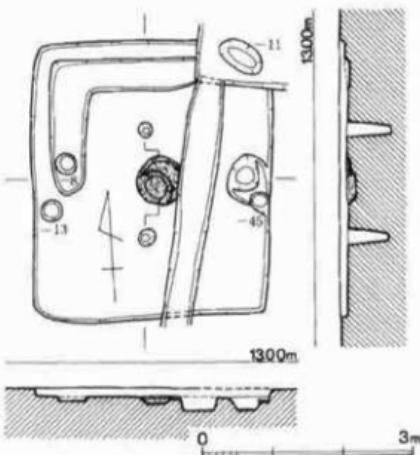
出土 遺 物

土 器 (第203図)

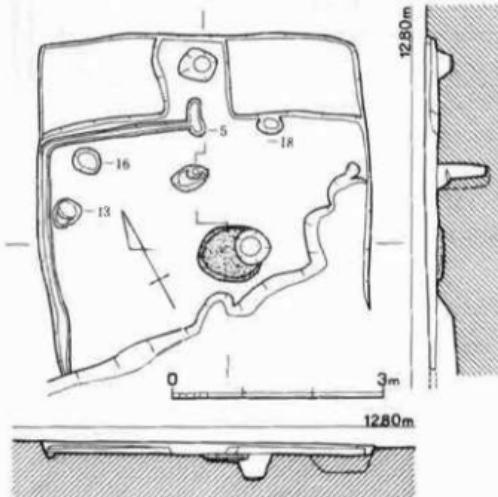
101号住居跡から出土したジョッキ型土器と同タイプの把手片がある。胎土には粗砂粒を多く含む。白黄色の色調を呈する。幅は5.0cmを測る。

132号竖穴住居跡(圖版12-(i)-24-(i) 第204図)

M-4・5区で検出した竖穴住居であるが、約1/2が耕作による削平を受けている。現存する北壁は4.50m、壁高20.0cm弱である。支柱は現況で判断する限り2本であろう。床面中央には炉を設ける。北壁には幅1.10mのベットを備えるが、中央部が途切れその間に浅いピットを掘っている。周溝はベット沿いと西壁沿いに廻らす。その他詳細は不明で、出土遺物も無い。



第202図 I31号竖穴住居跡実測図(1/80)



第204図 I32号竖穴住居跡実測図(1/80)

133号堅穴住居跡出土遺物

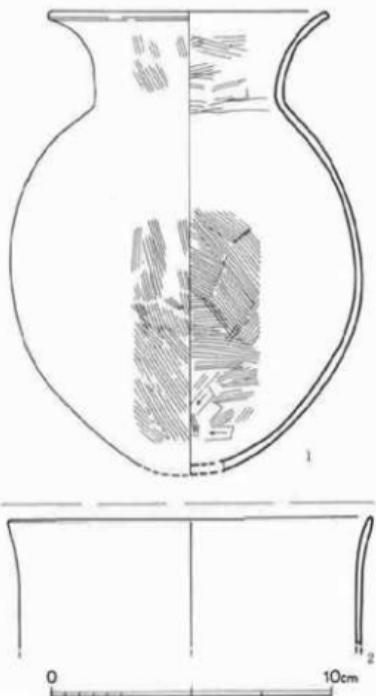
土 器 (図版56 第205回)

1の壺がある。ほぼ完形に近く、口縁は朝顔状に外反する。胴部は卵形を呈し、底部は丸底となろう。調整は部分的に磨耗しているが、ハケを多用する。内面一部に箆削りがみられ、器壁を薄く仕上げる。胎土は細砂粒、赤褐色粒、雲母を含む。口径20.0cm、器高32.8cmを測る。

134号堅穴住居跡出土遺物

土 器 (第205回)

2は不明土器の破片である。口縁部は僅かに外反し、一見楕円にみえるが楕にしては器壁が薄い。調整はナデで通常の楕はハケと箆削りで仕上げることから器種は明らかでない。胎土は微砂粒と赤褐色粒子を含む。赤橙色の色調を持つ。復原口径26.0cmを測る。

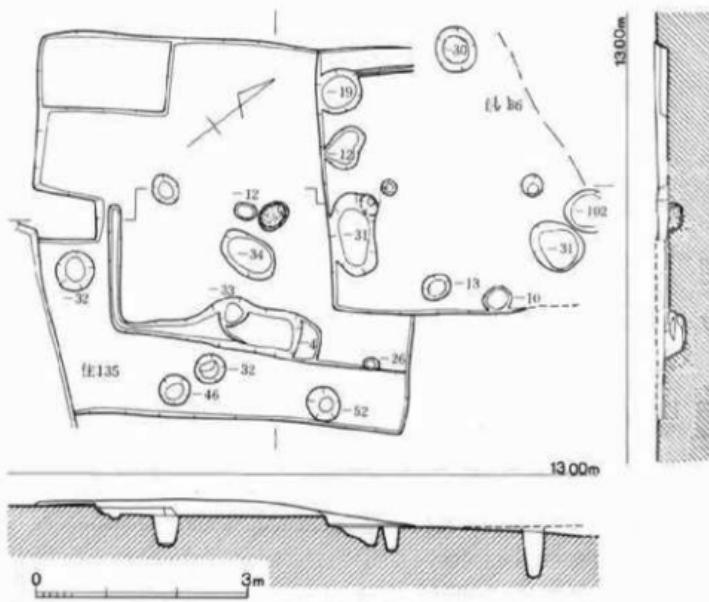


第205図 133号、134号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)

135号堅穴住居跡 (図版11-(1)・(2)・24-(2) 第206回)

L-2・3区で検出した堅穴住居であるが、当該住居跡周辺は住居が密集するため、調査時に困難を極め不明な点が多くある。135号もその内の1軒で、タイプとしては造出し状の出入口を備える住居であろう。しかし、造出し部にベット状の高まりを設けることに疑問を感じる。東壁は一見ベット状にみえるが、屋内土塙が内側の壁際にある。しかも、130号住居との重複では130号住居が新しくなる。出土土器は当該住居が新しいことなどの要因から外周の高まりは別の住居跡と考えた方が適当であろう。支柱は2本でその内の1本は136号住居の床面下にある。床面中央には小さな炉を設ける。周溝は南壁から屋内土塙へ繋がる。

出土遺物は甕・壺・支脚・臺台の他、石庖丁の破片がある。



第206図 135号、136号整穴住居跡実測図(1/80)

出土 遺 物

土 器 (図版56 第207図)

1は甌の底部片で、レンズ状の不安定な底部をなす。調整は二次加熱を強く受け残らない。復原底径6.0cmを測る。

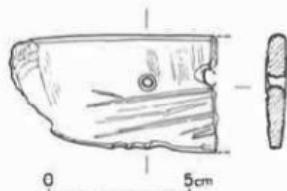
2は甌であるがつくりが稚である。丸底をなし、器表面には指圧痕が残る。口径14.8cm、器高7.6cmを測る。

3は支脚の光形品である。天井部は傾斜をなし、脚部は若干圓く。孔は穿っておらず、内面中央部が凹状をなす。二次加熱を受け調整不明。天井径7.4cm、脚部径9.9cm、器高9.7cmを測る。

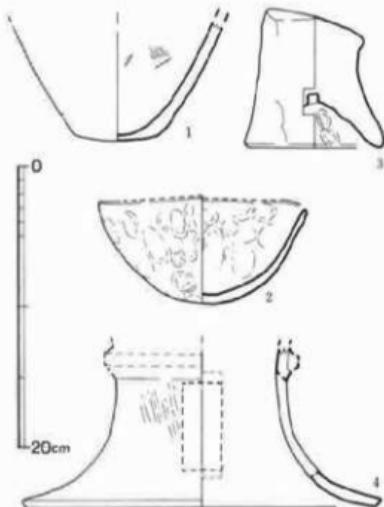
4は出土例の少ない器台の破片である。脚基部の開きは大きく、長方形の透しを4箇所に配すると考えられる。透しの直上には凸帶の痕跡が残るが、復原した台形凸帶を付すか否かは明らかでない。調整は外面磨き、内面はナデている。基部径25.6cmを測る。精製された土器である。

石 器 (図版56 第208回)

郵便局火岩の石材を使用した石削丁片がある。石材は質が劣り薄い紫色を呈する。背は丸く面取りを施すが、刃部の研ぎ出しあはみられず、穿孔具様の凹面が3箇所みられる。表面には粗い擦痕が残り、孔は段違いに穿つ。製作途中で破損した可能性が高い。埋土中からの出土で混入であろう。



第208図 135号堅穴住居跡出土土器実測図(1/2)



第207図 135号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)

136号堅穴住居跡 (図版24-(2)-(4) 第206回)

1. - 2 区で検出した堅穴住居であるが、約1/2が茶畑の耕作で削平されている。埋土中から床面にかけては焼土及び炭化材が散見でき焼失住居であることが理解できる。床面上では確実な支柱を1本検出した他は主だった支柱穴は見当らない。

出土土器から当然カマドを付設する時期であるが、その痕跡すら認められない。完全に削平されたのである。

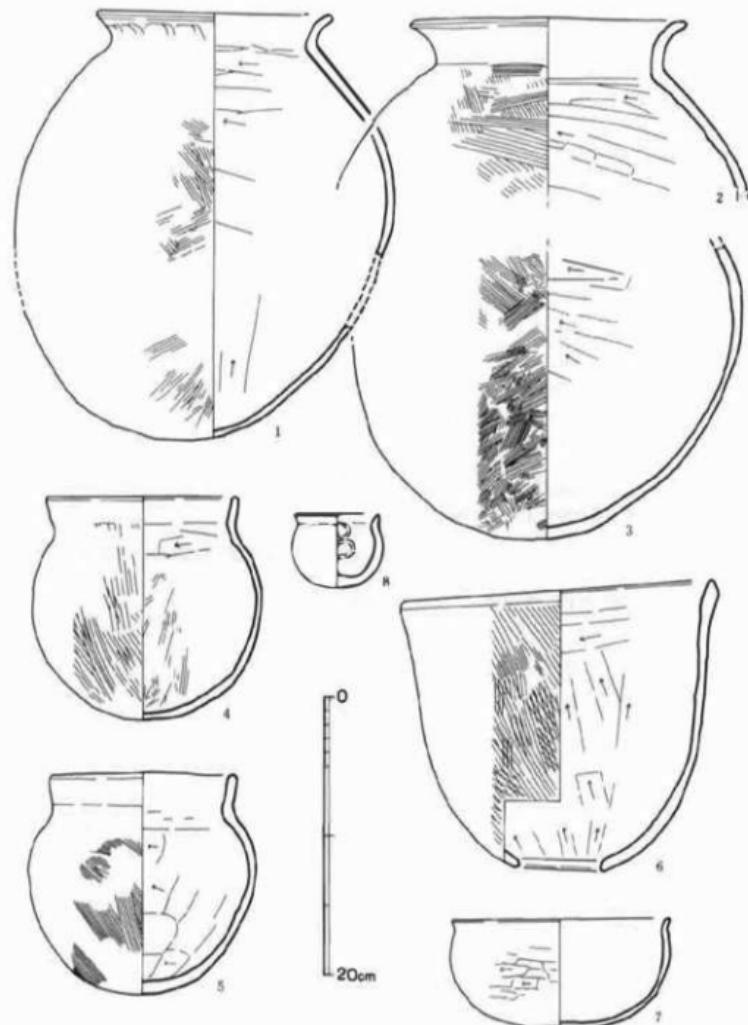
遺物の出土状況は焼失した当時のままの状態で発見され原位置を保っている。特に环は重ねた状態で出土した。

出土遺物は土師器の壺(甕)・楕・鉢・环、須恵器の环身の他、土玉がある。

出 土 遺 物

土 器 (図版56・57 第209・210回)

土師器 当該住居跡の出土土器は全て二次加熱を受けており、床面からの出土である。壺は1～5があるが、この時期は壺と甕との区別がつけ難く、甕とすべきかも知れない。1は完形品



第209図 136号整穴住居跡出土土器実測図その1(1/4)

で短い口縁を「く」字状に外反する。体部は卵形を呈する。頸部は指圧痕が残り、外面は荒いハケ、内面は箆で削る。口径16.7cm、器高30.8cmを測る。2は頸部が立ち口縁を緩く外反する。粗いハケと削りで仕上げる。口径19.9cm。3は胴上半部を欠失する。4・5は同タイプの直口壺である。胴部は球状を呈する。4は外面に粗いハケを施すのに対し5は粗いハケを用いる。内面は両者とも削る。4の口径13.8cm、器高16.0cm、5の口径13.5cm、器高16.0cmと法量もほぼ同一である。

6は砲弾形の瓶で口縁部は肥厚する。胴部は脛む。底部には施成前に径5.8cmの孔を穿つ。調整は粗いハケと削りで仕上げる。口径22.9cm、器高19.9cmを測る。

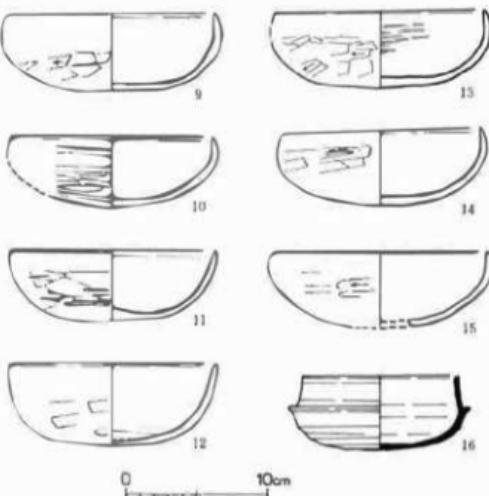
7は器壁の薄い跡で、口縁部を僅かに外反させる。胴部は張り丸味を有す。調整は外面が削り、内面はナゲる。精製された跡で、口径15.7cm、器高7.7cmを削る。

9～15は杯で精製品である。口縁部を内向させる9・10・13～15と直に立つ11・12がある。調整は磨きが残るものと箆で削るものとがある。9の口径14.9cm、器高5.4cm。10は口径14.5cm、器高5.1cm。11は口径14.7cm、器高5.0cm。12の口径15.0cm、器高5.75cm。13の口径15.0cm、器高5.4cm。14の口径14.3cm、器高5.3cm。15は口径15.4cm、器高5.4cmを測り、ある一定の法量を示している。

須恵器 完形の环身がある。口縁はほぼ直に立ち上り長くつくる。胎土・焼成とも良好で製美な环身である。口径11.0cm、器高5.2cmを測る。

土製品(第211図)

算盤玉状の形をした土玉がある。つくりは粗い。二次加熱を受け赤変する。長さ、径とも2.9cmを測る。

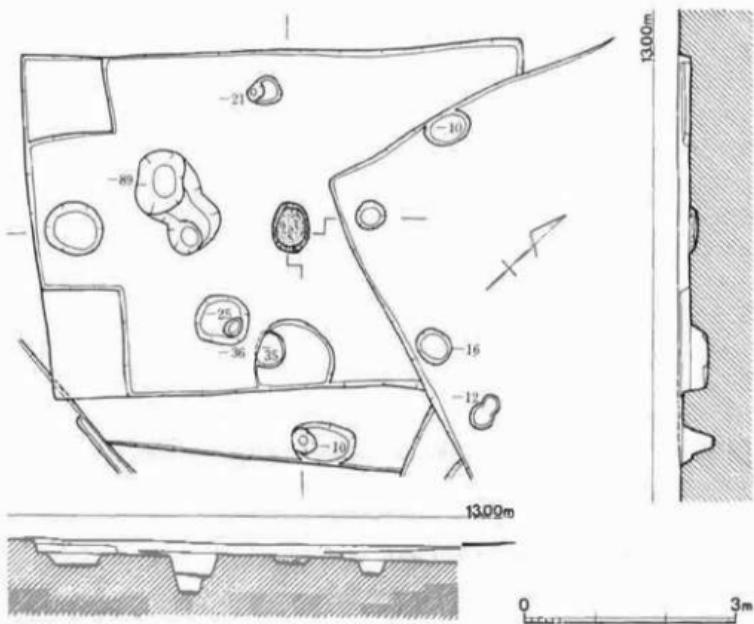


第210図 136号竪穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)



第211図 136号竪穴住居跡出土土製品実測図(1/2)

137号堅穴住居跡 (図版II-(2)・24-(4) 第212図)



第212図 137号堅穴住居跡実測図(1/80)

L-3、4区で検出した堅穴住居跡で、5軒の重複がある。この内171号、172号住居に切られ、153号、154号住居を切っている。平面プランは長方形である。南壁は4.80m、西壁は7.10m、壁高17.0cm前後である。支柱は2本と思われるが、断面に図示した内の1本は支柱とはなり得ない。床面の中央には楕円形の切口を設けている。東壁際には半円形の屋内土壙を備える。南壁沿いには132号住居と同様なベットを付設する。

出土遺物は甕・脚台付壺・鉢・支脚の他、砥石が3点ある。

出土 遺 物

土 器 (図版57 第213図)

1・2の型がある。「く」字形に外反する口縁部を有し、肩部は撫突をなす。おそらく長脚の型になろう。調整には磨拭しているが、叩き抜を施すと思われる。1・2の復原口径28.0cmを測る。

3は脚台付直口型である。口縁は短く直口させ、胸部は球状を有する。全

體はハケが若干残る。外面に三次加熱を受け浅くくすむ。口径18.2cm、器高径12.4cm、器高25.3cmを測る。

4は鉢の口縁片。正面に切口しづきが残る。復原口径17.8cmを測る。

5は底付支脚移土器である。内外面ともナデている。復原口徑6.0cm、器高10.0cm、器高7.6cmを測る。

石 器 (国鉄58 第2144号)

1～3の大振の砥石がある。1は仰岩製の荒砾である。底面は5面で、ノギサした大型の砥石を利用したもので

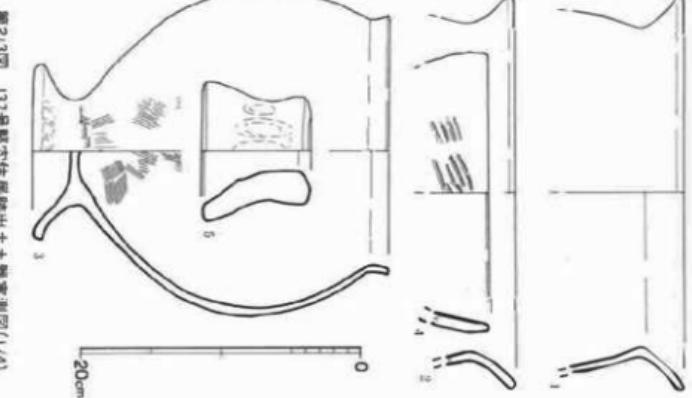
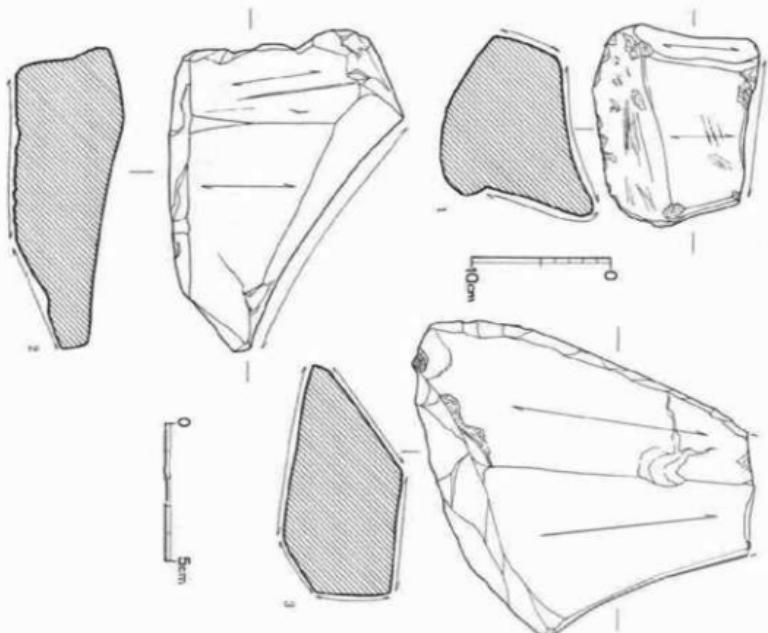


図137 石器 (国鉄58 第2144号)

2は花崗岩質砂岩製の砥石で、黄白色を呈する。研面は4面で、裏面(図示した下面)には斜利刃切き跡が複数。中～仕上げ砥石である。3も花崗岩質砂岩の砥石で、仕上げ砥石であろう。研面5面を数える。3個とも使用歴痕が深く、研面が凹面をなす。すべて屋内土塊からの出土である。

138号堅穴住居跡 (国鉄11-(2)・25-(1)・(2) 第2158号)

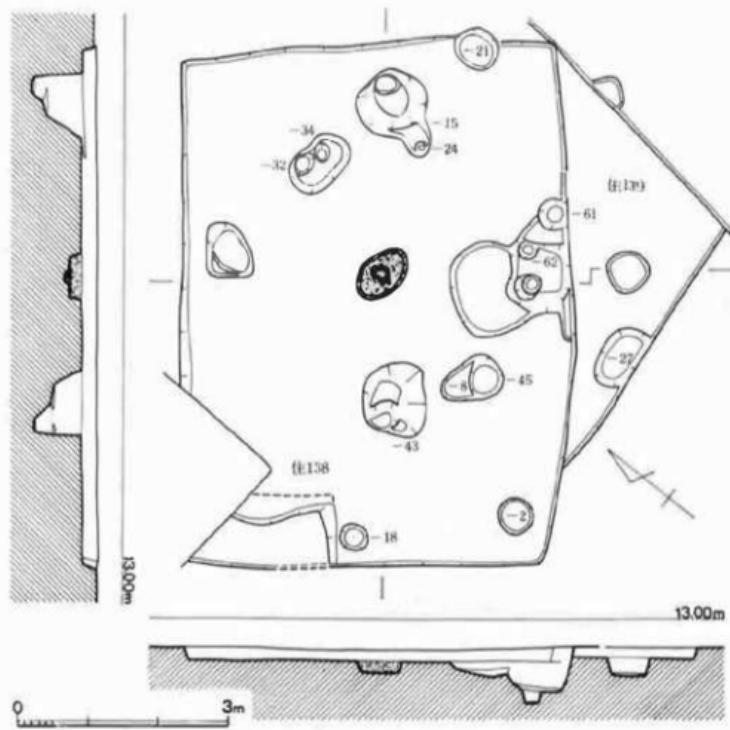
M-3区で検出した堅穴住居で5軒の重複がある。当該住居は139号、141号、155号住居より新しく、172号住居より古い。平面プランは長方形を呈する。規模は最もが7.45m×7.15m、柱間5.20m×5.35m、壁高20.0cmを測る。床面積は38.871m²ある。支柱は2本であるが、柱間は4.80mと長い。柱間にては幅11形の枠を嵌入する。屋内土塊は南東壁の中央に付設し、2段階を呈する。土壙の両端には小ピットを設し、ピット間は55.0cmを測る。西側の壁面は147.0cmの高さり



第214図 137号室穴性居跡出土石器実測図(1/4, 1/2)

があり、柱間にベットを有していたことが考えられ過ぎた可能性がある。柱間軸の方針はN
51°Eを示す。
出土遺物は甕・ミニチャニア土器の他、砥石、石削丁片がある。

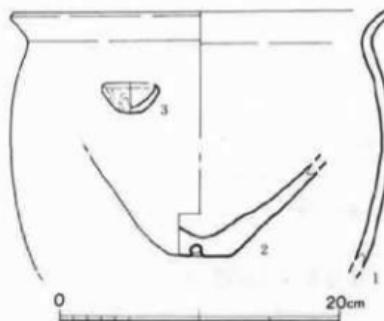
出 土 ◆



第215図 138号、139号竪穴住居跡実測図(1/80)

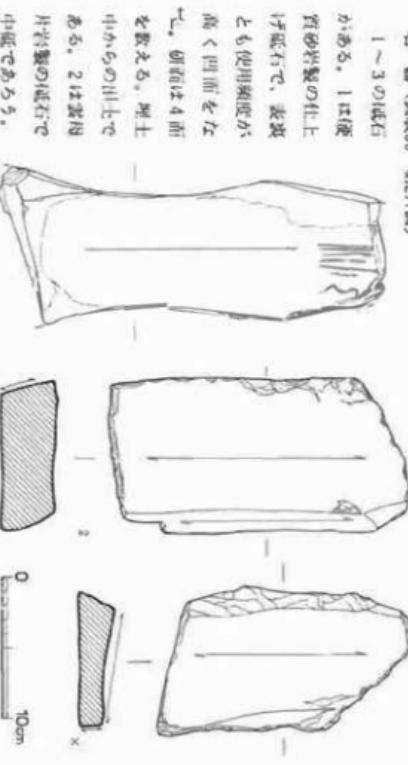
1・2は甕である。1の口縁は「く」字状に外反するが、頸部内側の縁は不明瞭。復原口径26.8cmを割る。2は小さな平底をなす。底部外面には焼成後の穿孔途中の孔がみられる。調整は摩耗しているが、外面底部付近は器で削る。底径4.7cmを割る。

3はミニチュアの完形品で、口径4.1cm、器高2.2cmを測る。



第216図 138号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

石器 (38858 32174)



1～3 の砾石
がある。1は便
質砂岩製の仕上
げ砥石で、表裏
とも使用頻度が
高く凹面をな
す。研面は4面
を数える。地土
中からの川上で
ある。2は表用
片岩製の砥石で
中底であろう。
表面と右側面は
研ぎ込み半削と
なる。4面の研
面を数える。柱
穴内から出土。
3も変形片岩製
の砥石で前面は
2面で成る。加磨され粗く状ける。

第2174図 138号豊穴住居跡
出土石器実測図その1(1/3)



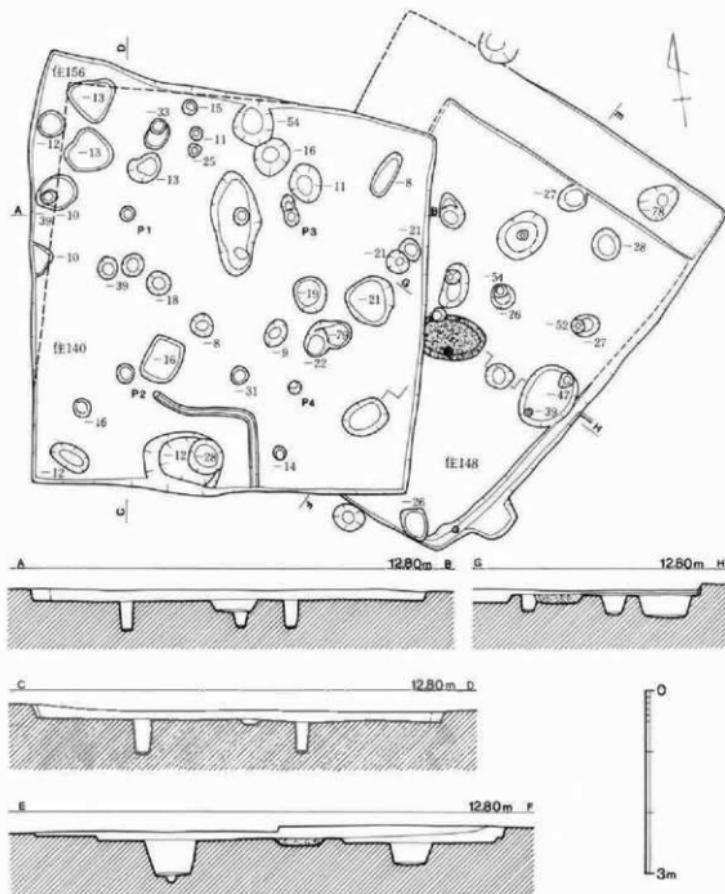
138号住居に⑤が削平され表側は不明な点多い。支柱は2本で、両者とも138号住居の床面
下で削した。柱間軸と壁とが平行より引いて右側に軸は南北窓に振り掛「」形を呈
する。柱間軸は75°Eを示す。
出土遺物は無い。

139号豊穴住居跡 (38851-(2)・25-(1) 321560)

138号住居に⑤が削平され表側は不明な点多い。支柱は2本で、両者とも138号住居の床面
下で削した。柱間軸と壁とが平行より引いて右側に軸は南北窓に振り掛「」形を呈
する。柱間軸は75°Eを示す。
出土遺物は無い。

140号豊穴住居跡 (38852-11-25-(3) 321560)

⑤は豊穴住居の調査の調査所で4軒の重複がある。当該住居は重複しててのいたりつ



第219図 140号、148号、156号整穴住居跡実測図(1/80)

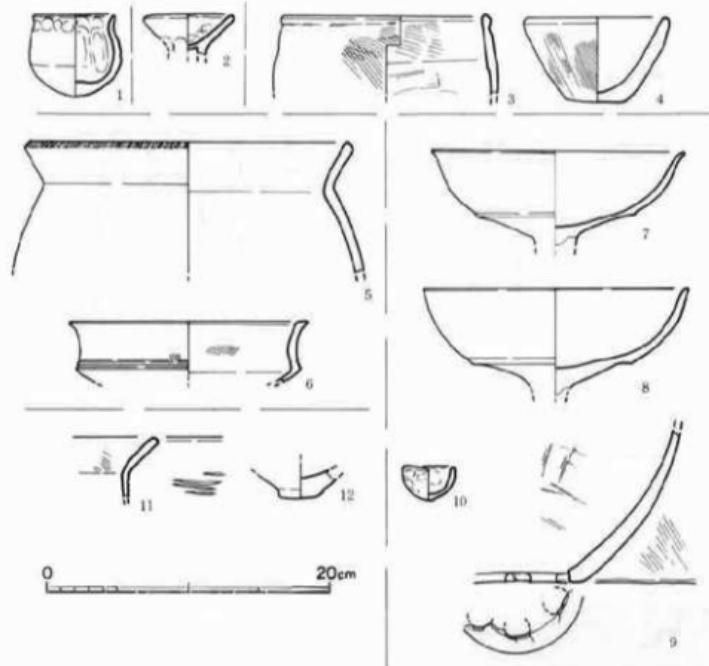
ている。特に156号住居とは完全に重なっており、調査時の識別は困難であった。平面プランは方形を呈し、規模は南・北壁が6.15m・6.05m(復原)、東・西壁5.90m・6.50m、壁高20.0cmを測る。床面積は40.13m²である。支柱は4本で各柱間はP₁-P₂が2.60m、P₂-P₃が2.70m、P₃-P₄が2.75m、P₁-P₄が2.75mを測る。炉は明確でない。南壁際には折円形の2段階の屋内土壇を付設し、周囲には「L」字状に細い溝を掘らす。

出土遺物は手捏ね状土器の完形品がある。

出土遺物

土器(第220図)

1は手捏ね状土器の完形品がある。器底には指圧痕とナデが認められる。口縁を僅かに外反さ



第220図 140号-145号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

せ。胸部は球形を呈する。口径5.9cm、器高5.8cmを測る。

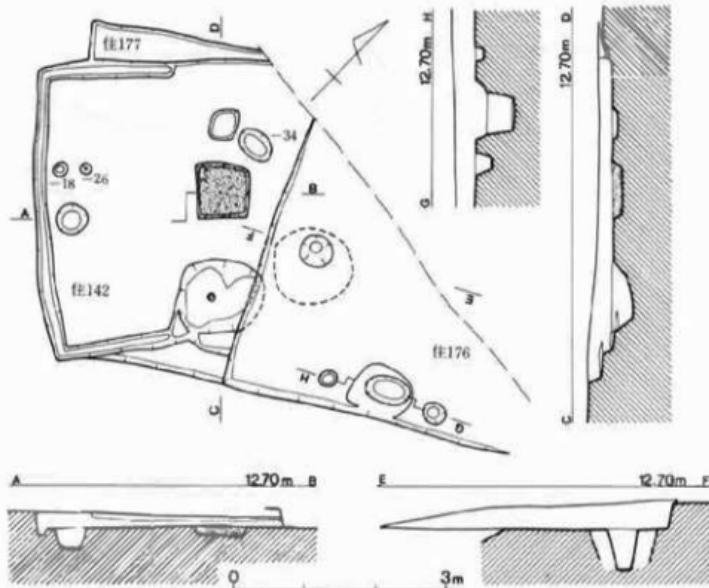
141号竪穴住居跡出土遺物

土 器 (第220図)

2の高杯形のミニチュア土器がある。脚部を欠失する。胎土は精製され、焼成も良い。口径6.5cmを測る。

142号竪穴住居跡 (図版27-(1) 第221図)

当該住居を加えて4軒の重複がある。176号→142号→177号→155号の順に新旧関係がある。平面プランは長方形であろう。南西壁は遺存し4.15m、壁高25.0cmを測る。支柱は不明確である。床面中央には75.0cm×80.0cmの方形の堀を設けている。南東壁には円形の屋内土壇を付設する。西壁から東壁の屋内土壇にかけて周溝が廻る。



第221図 142号、176号、177号竪穴住居跡実測図(1/80)

出土遺物は鉢・石器がある。

出 土 遺 物

土 器 (第22086)

3は私の口縁部で、口唇部を肥厚させる。調整は粗いハケで仕上げ、内面一部に整造痕が残る。復原口径15.0cmを測る。屋内土壤内からの出土である。4は小型の鉢で口径10.4cm、底径4.0cmを測る。

石 器 (陶瓶58 第22286)

裏側のために4箇所を打ち欠いた石器がある。石材は表面が風化し不明であるが、淡い灰黄色を呈する。大きさは6.0cm×5.6cm、厚さ2.5cmを測り、重さ99.48gを計る。

143号整穴住居跡 (陶瓶25-14) 第22380

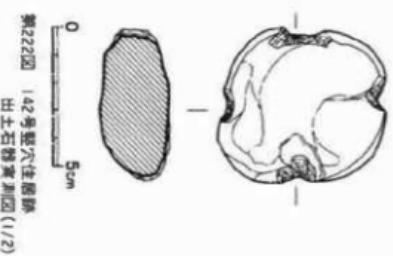
全部で4軒の重板がある。144号、176号住居間に切られ、157号住居を切った形で住居跡である。住居の北側及び東側は茶御で削平を受けている。平面形状は長方形であろう。支柱は2本でその内の1本が確認できている。東壁には不整形の屋内土壁を掘っている。西側の短壁沿いには幅1.20mのベット状遺構を付設している。西壁と柱には焼け跡が残る。

出土縦作陶器・高・曲べた。

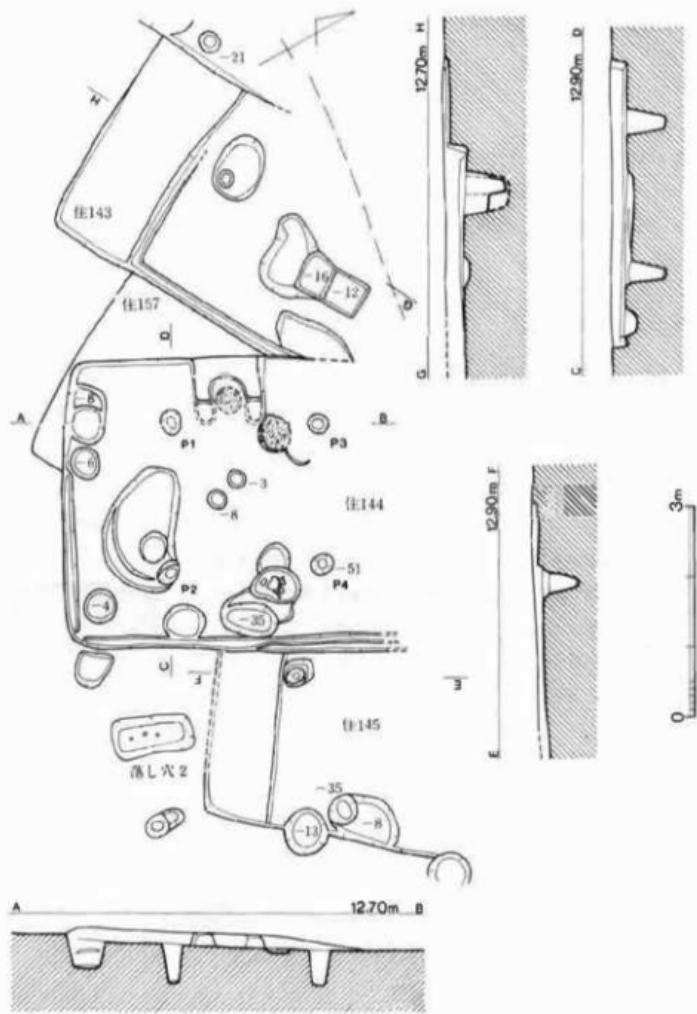
出 土 遺 物

土 器 (第22286)

5は口縁が無い外反底を示す型で体部は長削をなすであろう。口唇部は斜みを省に配する。調整は摩耗して不明であるが、川き抜を施すであろう。復原口径23.3cmを測る。6は類例の少ない土器で器形は馬蹄形でない。土器は精製され、胎土・焼成とも機めて良好である。底い脚を有す底部の可逆性がある。肩部から口縁にかけての屈折は強く、反り缺失の11枚を持つ。口唇部は尖る。底折部には二条の細い沈線を残す。復原口径17.0cmを測る。



第2224 142号整穴住居跡
出土石器実測図(1/2)



第223図 143号～145号、157号壁穴住跡実測図(1/80)

144号竪穴住居跡 (図版25-(4) 第223図)

この住居を含めて4軒の重複がある。この内3軒を切り最も新しい竪穴住居である。北東壁は削平を受け遺存しない。平面形状は支柱の配置から復原すれば長方形となる。規模は短壁が4.00m、竪高15.0cm前後を測る。支柱は規則的に配置された4本柱で、柱間はP₁-P₂が2.15m、P₁-P₃が2.10m、P₂-P₄が2.15m、P₃-P₄が2.00mを測る。

北西壁の中央部には「U」字状のカマドを付設し、カマド内床面は激しい焼痕が認められた。カマドに対峙する壁際には長軸80.0cm、短軸50.0cm、深さ35.0cmの土壙を掘込んでいた。その傍には不整形の土壙が配され、中から高杯が出土している。周溝は南東から南西壁沿いに廻る。住居の主軸はカマド方向の柱間軸でN 60° Wを示す。

出土遺物は高杯・楕・ミニチュア土器の他、砥石が2点ある。

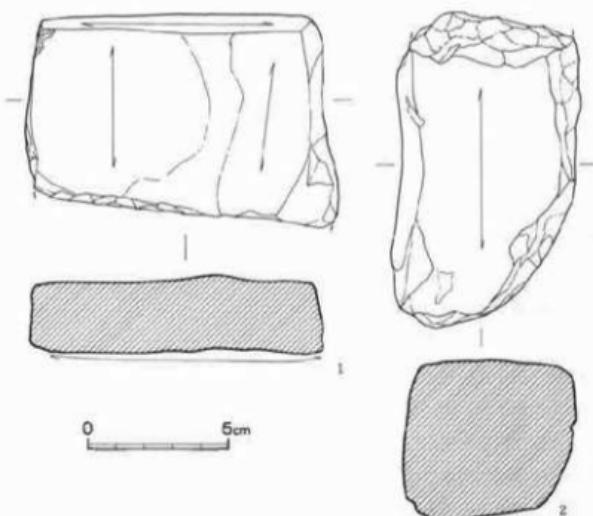
出土 遺 物

土 器 (図版58 第220図)

7・8は高杯の
环部片である。底
部から胴部にかけ
ての屈折は不明瞭
となり、全体に丸
味を有す。7の口径
17.8cm、8は
19.0cmを測る。

9は楕の底部片
で、孔部は蓮根状
を呈する。二次加
熱がみられる。外
面がハケ、内面は
ナデる。

10はミニチュア
土器で口径3.8cm、
器高2.45cmを測
る。



第224図 144号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2)

石 器 (図版58 第224回)

1・2の砥石がある。1は砾片岩製の砥石で1/2を欠失する。研面は3面であるが、裏面の使用頻度は少ない。2は花崗岩質砂岩の砥石であるが、表面が風化し研ぎ痕が不明瞭である。研面は4面を数える。黄白色の色調を呈する。

145号竪穴住居跡 (図版25-(4) 第223回)

O-3区で検出した竪穴住居跡で、144号住居に切られている。しかも、東側が削平され全容は把握できていない。短壁沿いには幅90.0cmのベット状遺構を設けている。南壁には椭円形の屋内土壇を掘り、片側にはピットを掘込む。その他詳細は不明である。

出土遺物は甕・砥石がある。

出 土 遺 物

土 器 (第220回)

1は肩部の張らない甕で、口縁は長く斜上方に開く。外面には粗い叩き痕が残る。2は甕の底部片で小さく不安定な平底をなす。底径3.6cmである。

石 器 (図版58 第225回)

花崗岩質砂岩の仕上げ砥石がある。約1/3を欠失する。研面は4面で、使用頻度が高く研ぎ込まれている。現存長13.0cmを測る。黄白色を呈する。

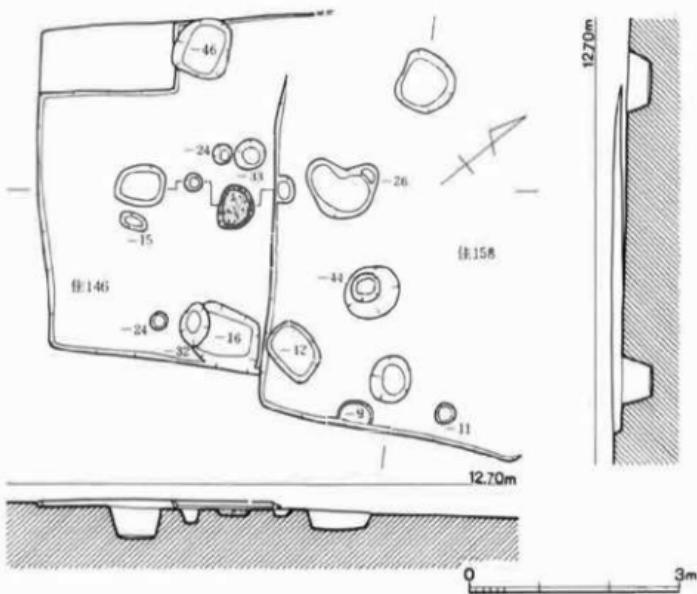
146号竪穴住居跡 (第226回)

時期不明の158号住居に切られた竪穴住居跡で、約1/2が削平を受けている。短壁が4.50m、壁高5.00cm前後を測り、遺存状態は極めて悪い。支柱は御柱を挟んだ2本と思われるが、残いたため疑問が残る。長壁の隅には幅1.00mのベットを付せる。対応する壁際には楕円長方形の屋内土壇を付設する。

出土遺物は甕・甌・鉢がある。



第225図 145号竪穴住居跡
出土石器実測図(1/2)



第226図 146号、158号竪穴住居跡実測図(1/80)

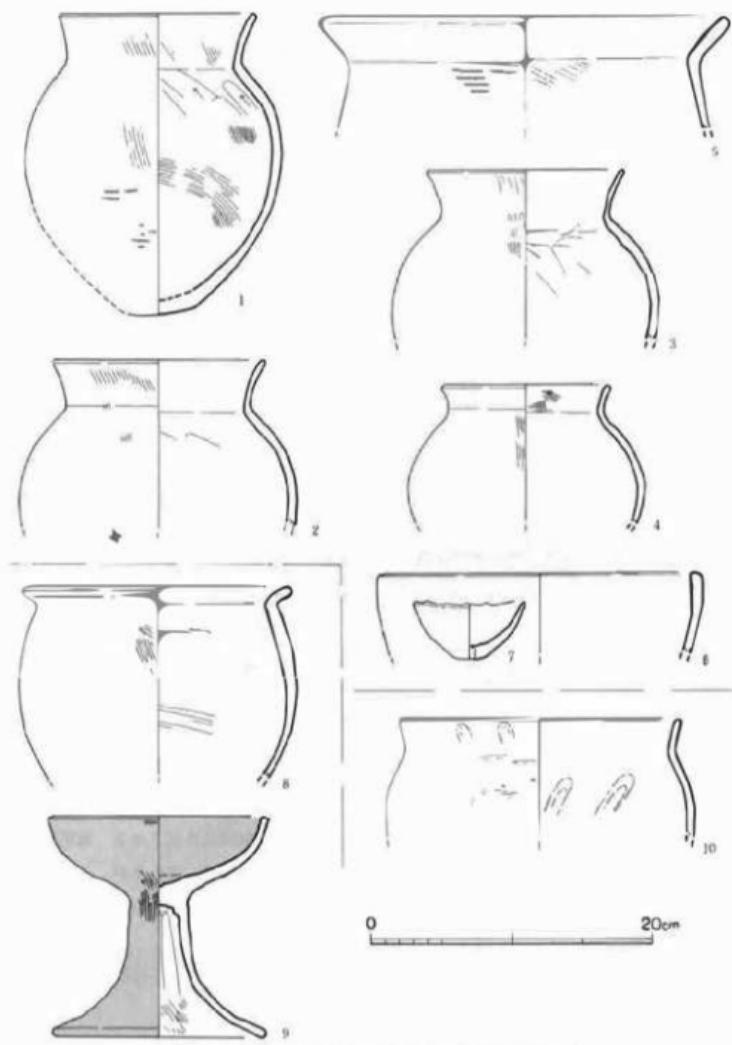
出土遺物

土器(図版58 第227図)

1～4は壺である。1～3は同タイプの壺で口縁は長く反り氣味に外反させる。肩部から胴部にかけては張り、底部は不安定なレンズ状の平底をなす。器面は擦耗しているが、1には印き痕が残る。1の口径14.0cm、底径5.0cm、器高21.1cm。2の口径15.0cm、3は14.0cm。4は前者に比べて口縁は短く、胴部は扁平につくる。口径12.0cm。

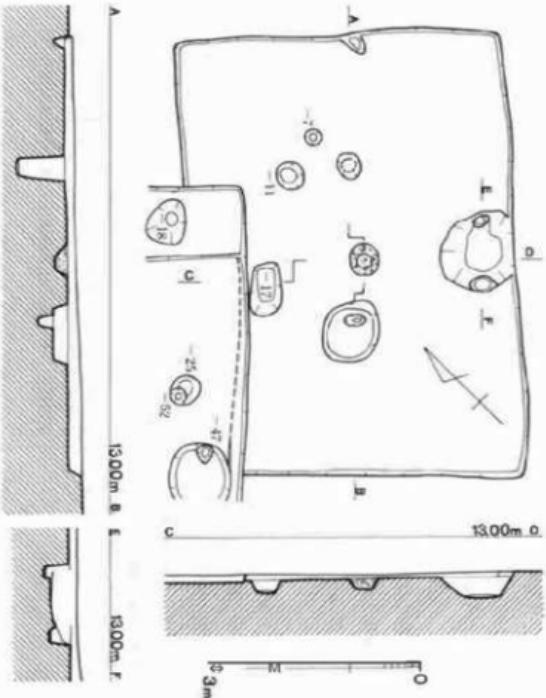
5は「く」字状に外反する口縁部を有し、長胴をなすと思われる。外周には粗い印き痕が残る復原口径29.2cm。

6は鉢で口唇部を肥厚する。復原口径23.0cmを測る。



第227图 146号—148号竖穴住居跡出土土器実測図(1/4)

147号堅穴住居跡(西版12-(1), 25-(3), 26-(1) 第228回)



第228回 147号壁穴住居跡発掘調査(1/80)

148号(住居に用ひられた堅穴住居跡で、平面プランは長方形をなす。規模は長さが6.35m・6.20m(復原)、北壁側の勾配は4.60m、垂高10.0mm~20.0mmを測る。支柱2本と思われるが、その内の1本は支柱となり得ない。中央部には深45.0mmのが設けている。南東壁には深1.10mの不整円形の室内土壙を備え、両端には小ピットを配する。ピット間は50.0mmを割る)。

出土遺物

土 器(第22796)
8の便は口縁部を「く」字状に外反させ加くつくる。脚部は張る。復原口徑19.0cmを測る。
9は精製された陶器である。底部は円形を呈し、脚柱状部はスリットである。根元部は僅く開脚する。調査者引取り辨別と思われるが、月は剥落する。口徑15.6cm、底面直徑15.0cm、器高15.6cmを測る。

石 器 (図版59 第229回)

1は緑泥片岩製の砥石であるが、中尖部が6.0cm×8.5cmの厚みがあり、当初石皿として使用したものと見て再利用したことが考えられる。現存での砥面は3面で、表面の使用頻度が高く平滑となる。現存長27.0cm、幅13.0cm。

2は頁岩製の製作途中の石器である。4面に数多くの削痕を残し、削痕の幅は6~7mmである。現存長8.5cm、幅3.9cm、厚さ1.9cmを測る。床面からの出土である。

鉄 器 (第229回)

長さ5.0cm、幅5.1cm、背の厚さ3mmの不規則な鐵器がある。2側面に刃部を研出しているが、用途は明らかでない。

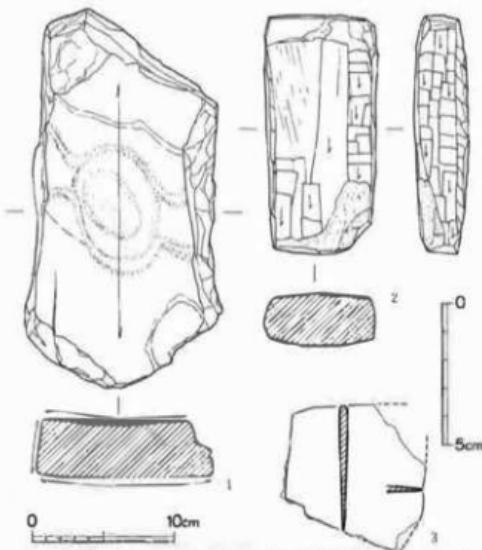
148号堅穴住居跡 (図版12-(1)・25-(3) 第229回)

N-3・4区で検出した大型の堅穴住居跡であるが、140号住居より古く、147号住居より新しい。平面形態は長方形を呈すると思われる。支柱は2本と思われるが、140号床面下で検出した柱穴は支柱穴か否かは疑わしい。床面中央には梢円形の炉を設けている。屋内土壇は南東壁際に在り、長辺1.10m、短辺85.0cmを測る。土壇の両端には小ピットを配する。ピット間は80.0cmを測る。さらに、北壁沿いにはベットを付設する。

出土遺物は脚台付鍋(?)がある。

出 土 遺 物

土 器 (第227回)



第229図 147号堅穴住居跡出土石器、鐵器対比図(1/4, 1/2)

10は口縁が僅かに外反する土器である。肩部は丸味を持つ。形状から脚台付の壺の可能性がある。外面には叩き痕が僅かに残る。復原口径20.0cm。

149号堅穴住居跡出土遺物

石 器 (第230図)

硬質砂岩製の石器がある。諸刃であることから石庖丁ではない。石剣及び石戈にしては薄く、しかも鏽が無い。刃部は鋭利に研出している。



0 3cm

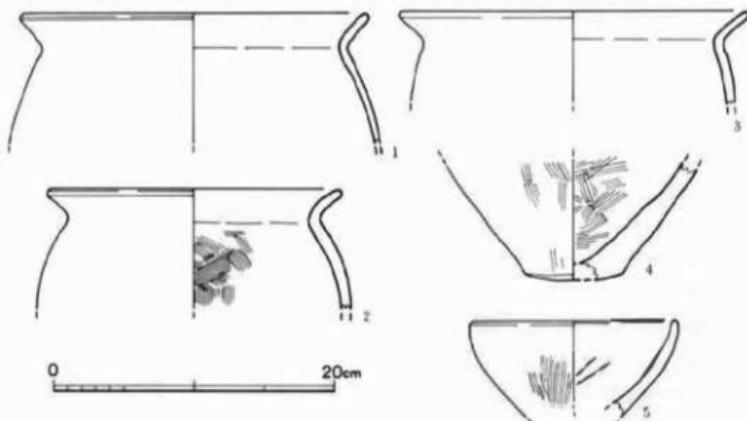
第230図 149号堅穴住居跡
出土石器実測図(1/2)

150号堅穴住居跡出土遺物

土 器 (第231図)

1～4は壺である。1・3は同タイプの壺で2に比較して器壁が薄い。2は肩部が他の壺よりも厚い。調整は2の内面にハケが残るのみで他は摩耗している。4は底部片で器壁が厚い。不安定なレンズ状の平底をなす。内外にハケが残る。1の口径25.0cm。2の口径11.0cm。3の口径25.0cm。4の底径9.0cmを測る。

5は口縁が僅かに内彎し、胴部は細まる。復原口径15.0cmを測る。



第231図 150号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)

G-1・2 区で検出した堅穴住居であるが、83号住居にちりてある。規模での平面プランは方形のようにも見える。南壁は 5.35m、北壁 15.0cm を測る。その他詳細は不明で、出土遺物も無し。

153号堅穴住居跡出土遺物

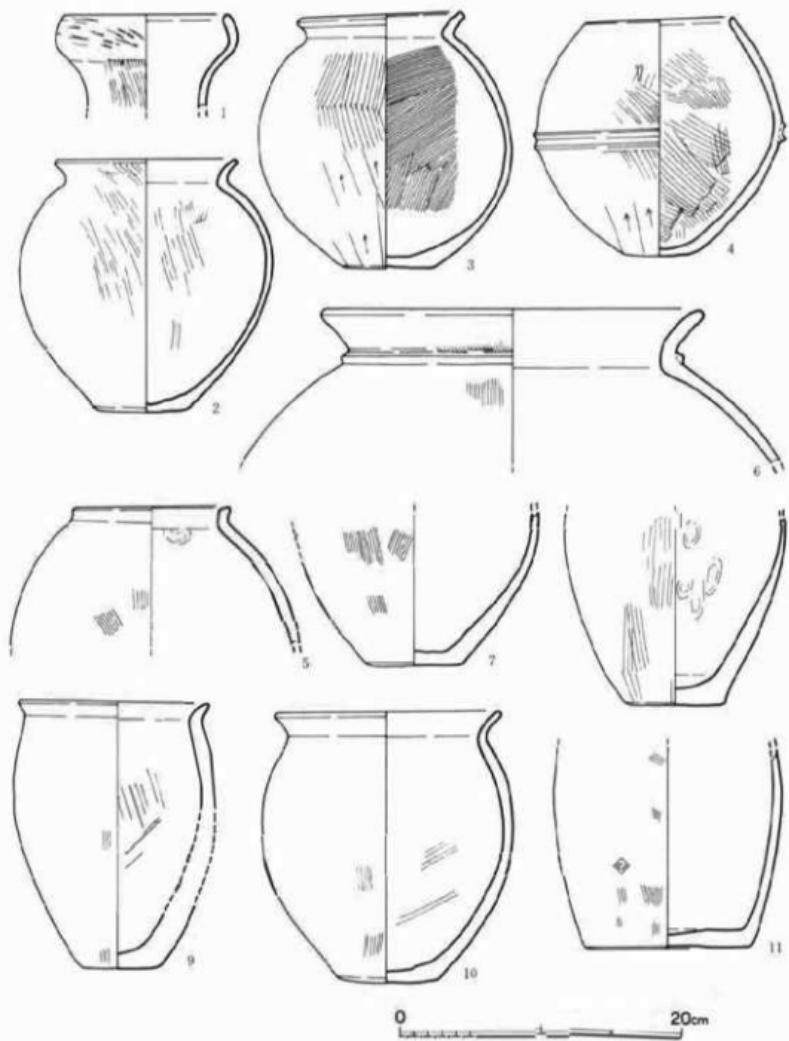
土 器 (調査 59 20232-233-22480)

堅穴 1-5 がある。すべて埴土中から出土である。1 は袋状の堅壺の口部削除して、円錐り土器が二次加熱を受け茶褐色を呈している。堅壺口径 11.8cm、2・3 は「く」字状に鋸ぐ外反する口縁を有す。2 は胴上半に最大径を有し、3 は胴下半に最大径を持ち縁部を呈し安定感がある。調整は長いハケを施し、3 の内面は細いハケで仕上げる。2 の口径 13.0cm、底径 7.0cm、高さ 17.8cm、3 の口径 11.9cm、底径 6.5cm、高さ 18.0cm を削る。4 は無堅壺の完熟品である。胴中火部には「M」字状凸凹を貼付する。調整は内外粗いハケを施し、外面下部は丸で削る。底部は小さく不安定感がある。口径 10.6cm、底径 5.7cm、高さ 16.8cm を削る。5 は直口壺の復原実測で口縁部を包む。肩部は大きく張る。復原口径 1.2cm を削る。

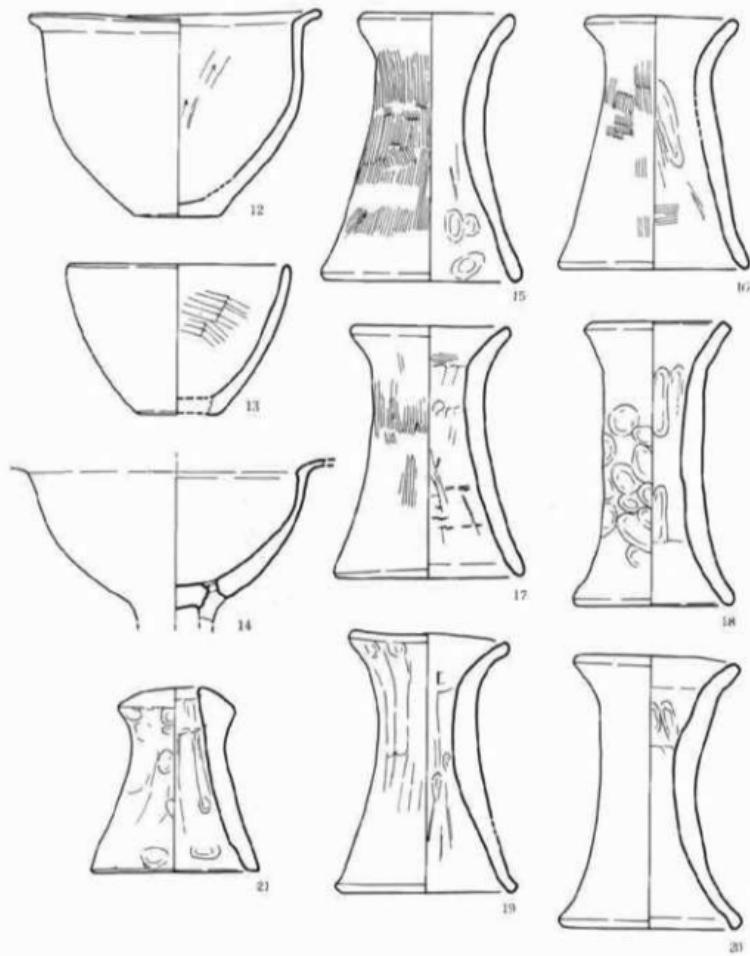
堅穴 6-11 がある。6 は人面の頭で口盤は外反弧が強く、輪當に三角凸凹を付す。肩部の張りは強い。復原口径 27.2cm、9 は厚手づくりで口縁の外反弧は弱い。体部は張らず長脚をなす。口径 13.6cm、底径 9.0cm、高さ 18.8cm。10 は最も外反する口縁に体部は丸味を有す。口径 16.1cm、底径 7.3cm、高さ 19.0cm。11 は大きな底部をなし、極めて安近した型である。表面にハケのものもある。12-13 は鉢である。12 の口縁は斜め上方に外反し、胴部は僅かに張る。口径 20.9cm、底径 6.3cm、高さ 4.3cm を削る。13 は口縁から胴部にかけて微かな張りを有す。復原口径 16.1cm、底径 5.4cm、高さ 10.7cm を削る。

14 は高杯の杯器で、逆「L」字状に外反し口縁部の上面は内傾する。胴部は丸味を持ち中期の高杯に比して深い。調整は風化し不明瞭である。底部は焼成後に内側から孔を穿ち祭祀的用途として使用している。

15-20 は器台であるが、形態、調整手法から 15-17 と 18-20 の二つのタイプに区分できる。前者は最小量が上半部にあり、口縁部が堅壺よりも外反する。調整は外面部がハケ、内面をナデ仕上げする。18-20 は最小部分が胴中央にあり、口縁と胴部が均等的につくる。堅壺も粗く、底部が残り、軸体側につくりが粗い。前者の法儀は口径 10.0cm ~ 11.5cm、最高径は 13.7cm ~ 14.5cm、高さ 17.9cm ~ 19.2cm、後者の法儀は 10.5cm ~ 11.5cm、最高径 11.5cm ~ 13.0cm、高さ 18.3cm ~ 20.4cm を削る。



第232図 153号竪穴住居跡出土土器実測図その1(1/4)



0 20cm

第233図 153号竪穴住居跡出土土器実測図その2(1/4)

22・23は支脚で口縁を内傾させ、天井部に孔を穿つ。天井部径は3.5cmと3.7cm、基部径は9.5cm、10.7cm、器高8.7cm、10.2cmを測る。二次加熱を受けている。

24~27はミニチュア土器で、粗くつくる24・27とやや丁寧につくる25・26がある。

土器製(第235図)

土質投弾がある。胎土は砂粒が多く不良。二次加熱を受け脆い。復原長4.7cm、径3.0cmを測る。

155号竪穴住居跡出土遺物

土器(第236図)

器壁の厚い甕の口縁片がある。口縁の内外面には亀裂が生じたため別の粘土で補修を施している。胎土は細砂粒を含むが良好である。

158号竪穴住居跡(第226図)

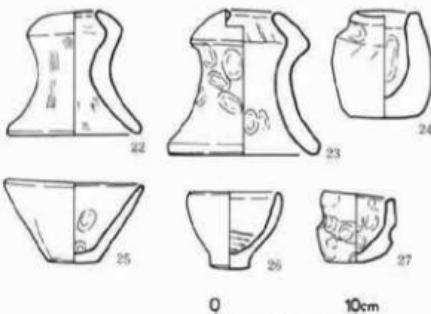
146号住居を切った竪穴住居であるが、東側は耕作による削平を受け遺存しない。支柱は深さ44.0cmの柱穴が1本検出できた他は見当たらない。その他詳細は不明である。

出土遺物は砥石が1点ある。

出土遺物

石器(第237図)

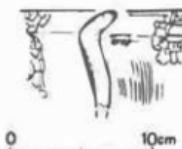
花崗岩質砂岩の石材を使用した砥石がある。現存での研面は3面を数える。黄白色の色調を有す。



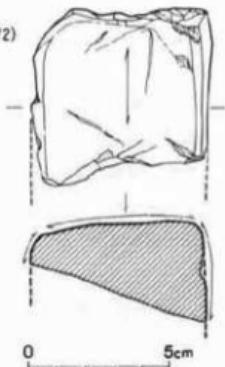
第234図 153号竪穴住居跡出土土器実測図その3(1/4)



第235図 153号竪穴住居跡
出土土器実測図(1/2)

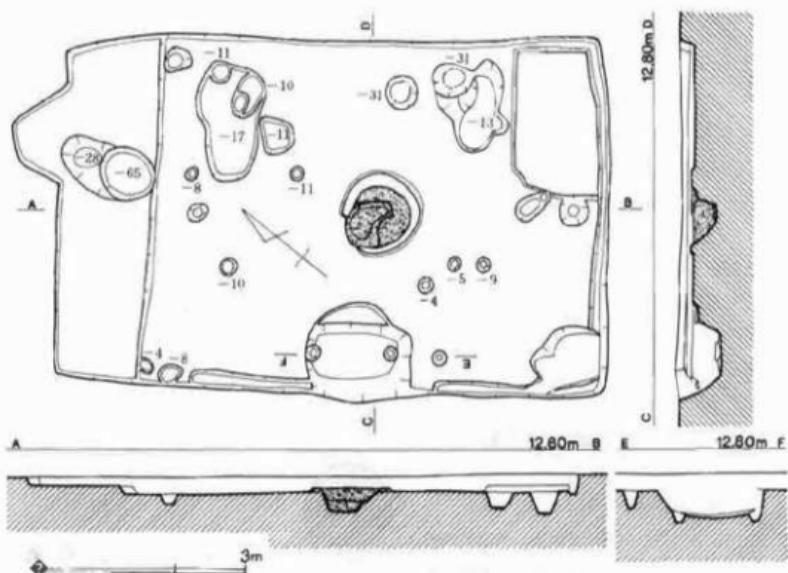


第236図 155号竪穴住居跡
出土土器実測図(1/4)



第237図 158号竪穴住居跡
出土石器実測図(1/2)

159号竪穴住居跡 (国版12-(2)・26-(3)・(4) 第23880)



第238図 159号竪穴住居跡実測図(1/80)

161号住居を切った状態で検出した竪穴住居である。平面形態は長方形を呈する。規模は長壁が7.80m・7.55m、短壁4.60m・5.00m、壁高24.0cm前後を測る。支柱は住居形態から2本と思われるが、断面に開示した柱穴は支柱とはなり得ない。床面中央には径1.20mの井を掘込み、井の周縁には5.0cm前後の低い土手を廻らすが、灰などの撒出し部ではない。中には炭化粒が充満していた。片側の長壁中央には開口長方形の屋内土壙を備え、両端に小ピットを配する。ピット間は1.10mを測る。ベット状遺構は両短壁側に付設するが、片側は部分的な設置である。

出土遺物は壺・甕の他、石瓶丁が3点ある。

出土 遺 物

土 器 (国版60 第239図)

1は小瓶の袋状口縁壺の系譜を引くもので約1/2残存する。屈折部の縫は不明瞭で、頸部は短

い。肩部は盛るが長脚である。

④ 口径 0.2m を測る。屋内土塹内からの出土である。

2は小型の甕で同上半部を欠損する。口径 0.1m にて二次加熱を受け灰く変色する。底径 6.3cm を測る。屋内土塹内から出土。

石 器 (00560 3824086)

1～3 の石削丁がある。1 は雲母片 $\frac{1}{2}$ の石削丁で光形品である。2 つの孔は大きく、内径 7.0mm、外径 1.2mm を測る。表面には幾方向の擦痕が残る。厚さ

くつらか重傷感がある。刃部は鋭く研ぎ出ず。長さ 11.4cm、幅 5.3cm、厚さ 8.0mm を測る。表面からの出土である。

2 も雲母片岩質の石削丁で半月形を有する。孔は整美に穿ち、右側の孔の下方には炭灰とも相應い焼が残る。孔の内径 5.0mm を測る。長さ 10.1cm、幅 4.6cm、厚さ 7.0mm である。3 は粘板岩質の石削丁片である。刃端を受け崩灰色に変色する。表面からの出土である。

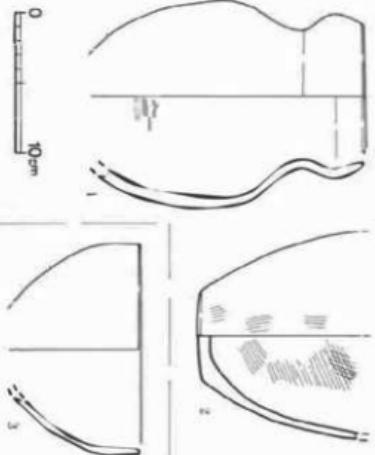
163号堅穴住居跡

(国版12-(2) 3824186)



第240図 159号堅穴住居跡出土石器実測図(1/2)

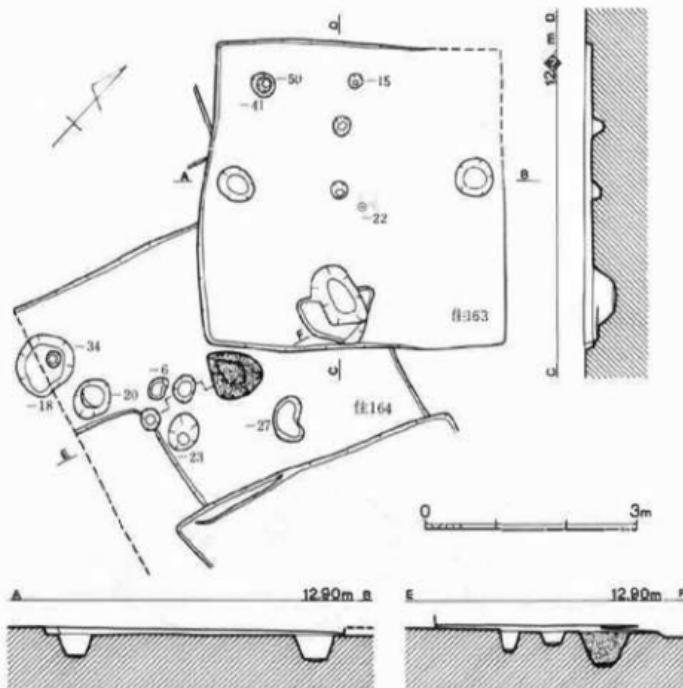
p - 3 - 4 区で検出した遺存状態の堅穴住居跡で、164号住居を切っている。北東壁は遺存しておらず土色の変化で構成の確認が可能となった。平面プランは方形を保し、規模は 4.20m × 4.25m を測る。床面断面は 17.76m である。支柱は 2 本とも既倒であり、柱間



第239図 159号、163号堅穴住居跡出土石器実測図(1/4)



1
2
3



第241図 163号、164号竪穴住居跡実測図(1/80)

は3.40mと長い。が址は確認できていない。南東壁際に不整形の屋内土壤を付設する。柱間軸の方角はN48°Eを示す。

出土遺物は少なく鉢が1点ある。

土 器 (第239図)

3の直口する鉢がある。胴下半は細まる。胎土は砂粒の他赤褐色粒子を含む。復原口径15.0cmを測る。

164号竪穴住居跡(図版12-(2) 第241図)

P-4区で検出した竪穴住居跡で、163号・178号住居に切られている。平面プランは長方形であろう。支柱は2本と思われ、その内の1本はベットに接する部分に掘られている。床面中央には深いがを設ける。掘出した結果によるものであろう。南壁沿いには幅1.00mのベットを付設する。

出土遺物はない。

165号竪穴住居跡(図版12-(2) 第242図)

P-4区で検出した住居で総数4軒の重複があるが、この中でも最も新しい住居である。平面形状は方形を呈し、規模は南・北壁長4.88m・4.75m、東・西壁長4.33m・3.95m、壁高15.0cmを測る。床面積は19.52m²である。支柱は4本で柱間はP₁-P₂が2.20m、P₁-P₃が2.30m、P₂-P₄が2.30m、P₃-P₄が2.30mを測り、規則的な配置をなす。

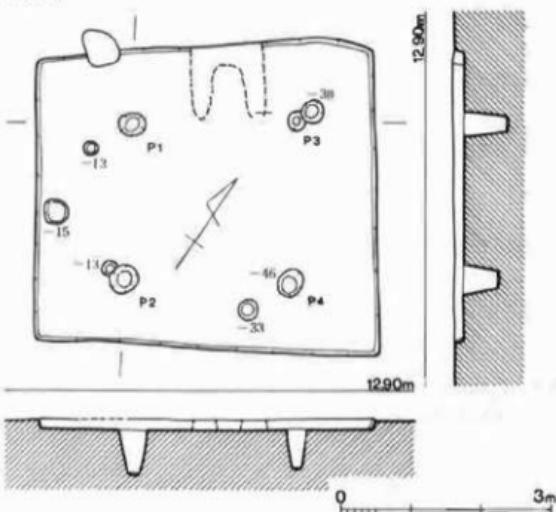
北西壁には「U」字状のカマドを付設するが、顕著な粘土の使用は見当たらない。カマド方向の柱間軸の方位はN33°Wを示す。

出土遺物は少なく須恵器の环蓋の他、砥石が1点ある。

出土 遺 物

土 器 (第243図)

須恵器 口唇部を尖らせ、腹部には低い有段をなす环蓋がある。焼成・胎土とも良く、暗灰色の色調を有す。調整はナデと回転范削りで仕上げる。復原口径14.9cm、器高4.8cmを測る。



第242図 165号竪穴住居跡実測図(1/80)

石 器 (第243図)

硬質砂岩の石材を使用した仕上げ砥石の小片がある。現存での研面は1面で、全面に加熱を受け淡く赤変する。現長5.7cmを測る。

166号竪穴住居跡 (第245図)

当該住居は総数で4軒の重複があり、163号住居より古いか、169号、231号住居より新しい。平面形状は長方形を呈し、規模は南・北壁が3.40m・3.50m、東・西壁が5.00m・5.20m、壁高8.0cmを測り、遺存状態は良くない。床面積は16.97m²である。支柱は2本で、柱間は1.70mである。柱間に円形の軸を設ける。柱間軸の方位はN28°Eを示す。

出土遺物は焚がある。

出 土 遺 物

土 器 (第243図)

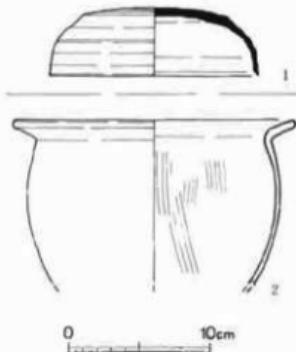
「く」字状に外反する口縁を有す壺で、最大径が口縁部にある。外面は二次加熱を受け黒く変色する。外面は磨耗し、内面は粗いハケが残る。

169号竪穴住居跡 (第245図)

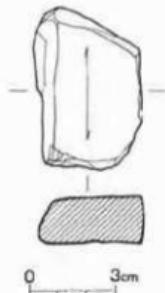
166号住居より古く、231号住居より新しい竪穴住居跡である。南側約1/3は耕作で削平を受けている。支柱は2本であるが、その内の1本は削平を受け消滅する。北壁沿いには一部ベットが残る。その他詳細は不明である。

出土遺物は土製玉杓子の柄がある。

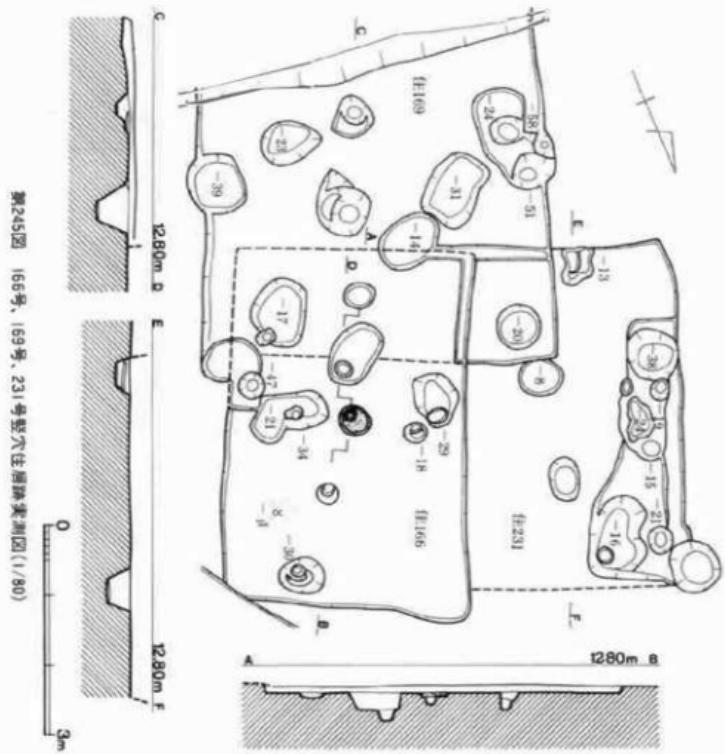
出 土 遺 物



第243図 165号、166号竪穴住居跡
出土土器実測図(1/4)



第244図 165号竪穴住居跡
出土石器実測図(1/2)



第245図 165号、169号、231号竪穴住居跡実測図(1/80)

土製品(第246図)

長楕円の柄の小判がある。丁寧なづくりで、粘土・焼成とも良い。
表面は風化しざらつき、二次剥落を受けがちである。



170号竪穴住居跡出土遺物

石器(第247図)

雲母片岩の石材を使用した石板丁片がある。2個の孔を穿っているが、特に穿孔途中の孔の痕跡がある。内孔径4.0mmを測る。表面は剥落が著しい。

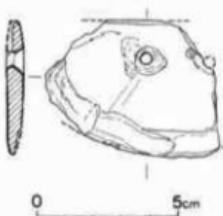


第246図 169号竪穴住居跡
出土土製品実測図(1/2)

171号竪穴住居跡 (図版11-(2)・24-(4) 第248図)

L-3区で検出した小型の竪穴住居で、172号住居と完全に重複する。平面形状は歪な方形を呈し、規模は南・北壁長3.70m・3.60m、東・西壁長2.90m・2.10mを測る。若干擲過ぎたため実体を把握することはできない。

出土遺物は土師器の甕・壺、須恵器の杯・蓋の他、石庖丁片があるが混入であろう。

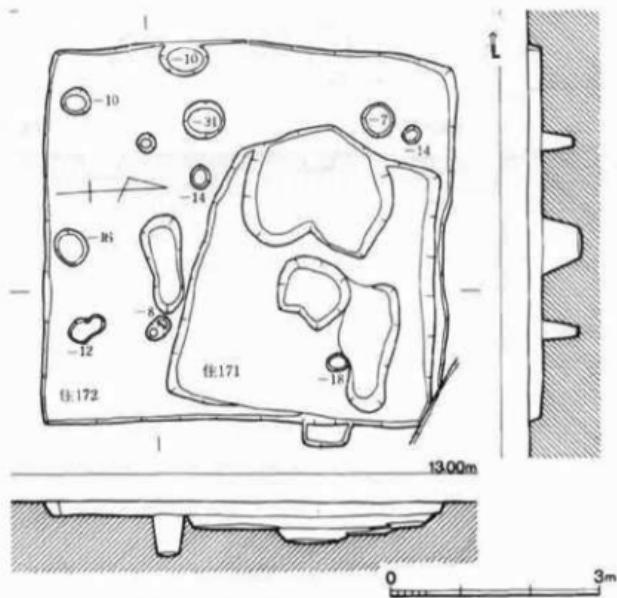


第247図 170号竪穴住居跡出土
石器実測図(1/2)

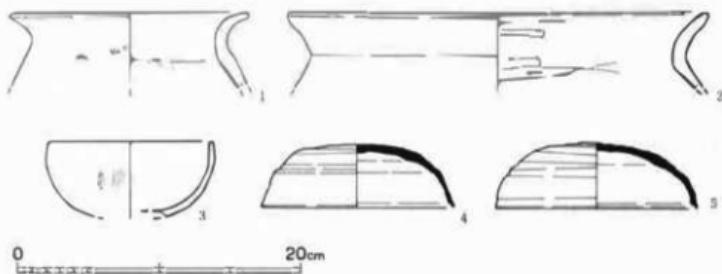
出土 遺 物

土 器 (第249図)

土師器 1・2は大・小の甕の口縁片で、口縁は反り氣味に外反させる。内面は鋸で削り、境



第248図 171号、172号竪穴住居跡実測図(1/80)



第249図 171号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

に縁を持つ。2は煤が付着する。1の復原口徑17.0cm、2は30.0cmを測る。

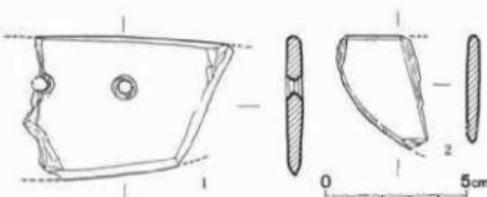
3は壺の破片で口縁を若干内側する。胴部は丸味を有す。胎土は砂粒と赤褐色粒子を含む。復原口徑11.8cmを測る。

須恵器 瓶蓋が2個体ある。両者とも口唇部は尖る。胎土は細砂粒が多く、浦灰色の色調を有す。4の口徑13.7cm、高さ4.4cm。5は口徑14.4cm、高さ4.6cmを測り、支柱穴内から出土した。

石 器 (図版60 第250図)

1・2の石庖丁片があるが混入である。1は輝緑岩灰岩製の大振りの石庖丁で中期末頃の形狀を示す。表面は平滑に研磨し、刃部は鋭く研いでいる。孔は外径8.0mm、内径5.0mmを測る。

2は硬質沙岩製の小片である。



第250図 171号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2)

172号竪穴住居跡 (図版11-(2)・24-(4) 第248図)

171号住居に約1/2を削平された竪穴住居である。平面形状は方形を呈する。規模は南・北壁長5.30m・5.10m、東・西壁長5.60m・5.70m、壁高20.0cmを測る。支柱穴は4本と考えられるが、北側の2本は削平されている。2本の柱間は2.70mである。その他詳細は不明で、出土遺物は土製玉杓子の破片があるが、混入であろう。土器は極めて少ない。住居の形状、配置状況から126

号、140号住居と同時期の所産であろう。

出土遺物

土製品（図版60 第251図）

土製玉杓子の破片がある。柄の部分は欠失する。胎土は良好で赤褐色粒子が目立つ。埋土中からの出土である。



0 5cm

173号竪穴住居跡（図版12-12）第252図

Q-4区で検出した竪穴住居跡で175号住居を切っている。平面形態は方形で、規模は南・北壁が4.20m、東・西壁が3.60m・4.05m、壁高5.0cmと浅い。床面積は16.11m²を測る。支柱は4本であるが、柱間軸が四辺と平行に配されておらず、逆である。柱間はP₁-P₂が1.60m、P₁-P₃が1.75m、P₂-P₄が1.85m、P₃-P₄が1.70mを測る。

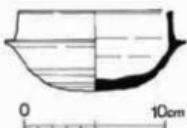
北壁の中央には「U」字状のカマドを付設するが、遺存状態が悪く不明な点が多い。主軸方位はP₁-P₂の柱間軸からN8°Wを示す。

出土遺物は須恵器の坏身がある。

出土遺物

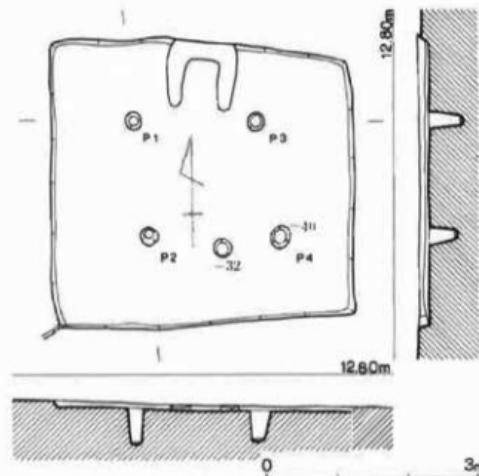
土器（第253図）

須恵器 坏身の完形品がある。口縁部は直に立ち上がり、口唇部は肥厚する。底部外面は左



0 10cm

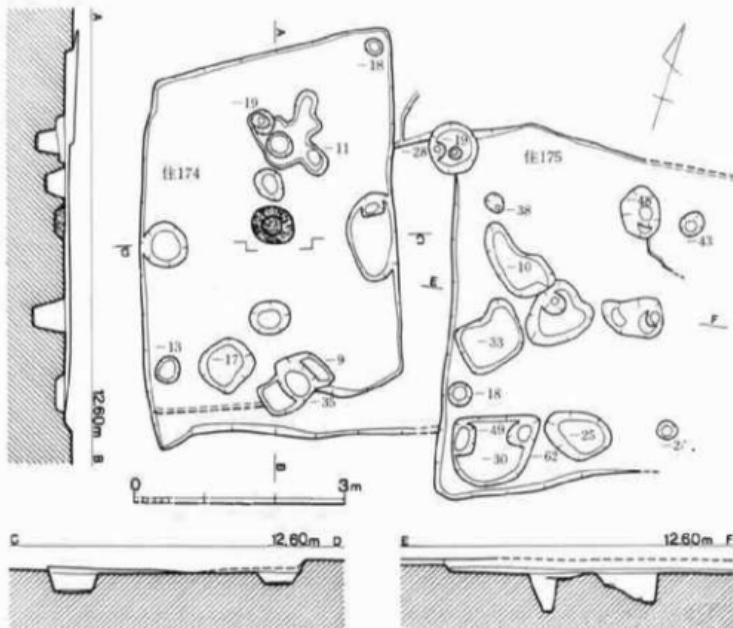
第253図 173号竪穴住居跡
出土土器実測図(1/4)



第252図 173号竪穴住居跡実測図(1/80)

廻りの回転範削りで仕上げる。外面には仄かぶりが認められる。口径11.0cm、器高5.6cmを測る。

174号堅穴住居跡(図版12-(2) 第25-180)

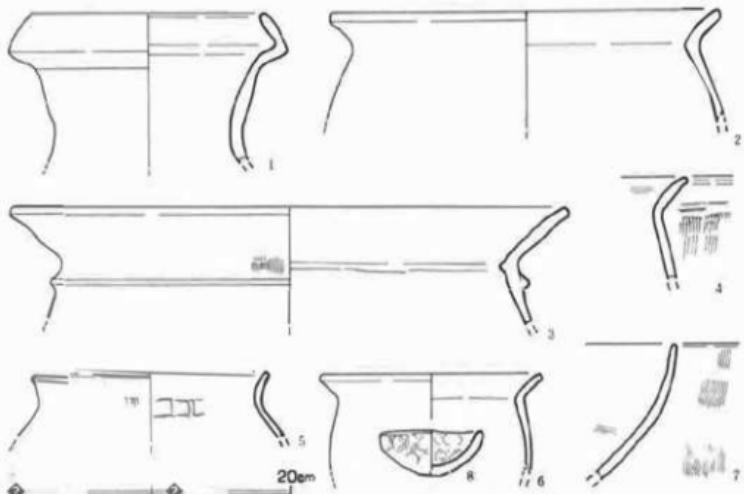


第254図 174号、175号堅穴住居跡実測図(1/80)

165号住居より古く、170号住居より新しい堅穴住居跡である。平面プランは長方形を呈するがやや歪である。規模は南・北壁が3.60m・3.40m、東・西壁が4.90m・4.60m、壁高6.0cm前後である。床面積は16.78m²である。支柱は2本で、柱脚は2.50mである。床面中央には焼痕の薄いがを設けている。東壁際には屋内土壇を備え、片側に小ピットを掘込む。柱脚軸の方位はN 13°Wを示す。

出土遺物は砂・甕・鉢・手握ね土器がある。

出 土 遺 物



第255図 174号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

土 器 (第255図)

1は複合口縫壺の復原実測である。口縫の屈折部の歯は明瞭である。頸部は細まる。復原口径16.6cmを測る。

壺は2～6がある。2の「く」字状に鋭く外反する口縫部に肩部はやや張る。復原口径28.0cm。3は長い口縫部を有し、頸部内面は僅かに突出する。頸部下には台形状凸帯を貼付する。全面に二次加熱を受け淡く赤変する。復原口径40.0cm。5は他に比べて口縫の外反度は強く、口唇部を肥厚させる。復原口径17.0cm。6は小振の壺で最大径が口縫部にある。全体が摩耗する。

7は大振の鉢の破片である。内外面にハケが残る。

8は手握ね土器の完形品である。全面に指圧痕が残る。口径7.4cm、器高3.2cmを測る。

175号竪穴住居跡 (図版12-(2) 第254図)

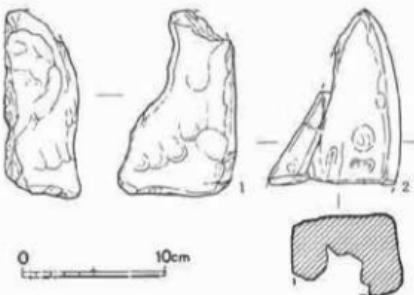
Q-4・5区で検出した竪穴住居で173号住居に切られている。耕作による削平が著しく不明な点が多い。

出土遺物は支脚片が2個体ある。

出土遺物

土製品（第256図）

支脚の破片が2個体ある。いずれも小片で全容は把握できない。強い二次加熱を受け極めて脆くなる。



176号竪穴住居跡

（図版27-（1） 第221図）

142号、143号、177号住居を切った

状態で検出した竪穴住居である。北側は削平され約1/3遺存する。支柱は2本でその内の1本は不明。南壁には椭円形の屋内土壤を付設し、土壤の外側には柱間1.60mの小柱穴を掘込んでいる。その他詳細は不明である。

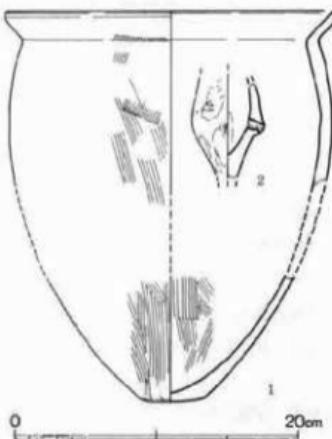
出土遺物は無い。

178号竪穴住居跡出土遺物

土器（第257図）

1は壺の復原実測である。胴の一端を欠損する。口縁部は短く内肉気味につくる。肩部から胴部にかけての張りは強く、底部は不安定な小さな平底を呈する。調整は粗いハケが残り、内面上半はナデ消す。復原口径23.6cm、底径4.5cm、復原器高27.7cmを測る。二次加熱で変色する。

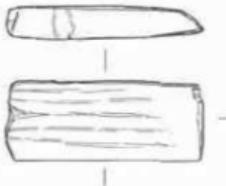
2は用途不明の小形の土器で、口縁と底部を欠失する。底盤は脚台が付く器種と考えられる。胴部には下方向に径5.0mmの孔を穿っている。祭具とも考えられる。屋内土壤内からの出土である。



石器（図版60 第258図）

第257図 178号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

整美なつくりの扁平片刃石斧の完形品がある。粘板岩の石材を使用している。長さ7.0cm、幅2.8cm、厚さ1.1cmを測る。



180号 穴穴住居跡 (岡坂13-(1)-27-(a) 第259号)

当該住居周辺も激しい調査状況を示す。181号、186号住居を切りた状態で掘り出した竪穴住居で、平面形状は長方形を呈する。規模は長壁が6.60m、短壁4.60m・3.80m、高さ15.0cmを測る。

床面積は27.78m²である。支柱は2本であるが、柱穴の掘方は方形を呈する。柱間は3.30mである。柱間の床面高さには80cm×90cmの万能の30°を掘込み、3辺に10.0cm高的土手を盛らす。中には炭化粧が光沢していた。長辺には柱の位置に対応するかの様に不整戸の屋内土壤を設けている。戸端には片側約50cmから屋内土壤にかけて剥離する。短辺には幅1.00mのベット状置構を付設し、一方のベット上には2段重りの床内貯蔵穴を備えている。

出土遺物は麻の地、石丸子、砥石、土製玉ねぎなどがある。

出土遺物

土 器 (岡坂60 第260号)

1) 甌の可製された肩部の断面がある。口縁部は長くつくられ、制限との屈折は明瞭である。口縁に対して胴部は小さく扁平である。測定は断きとハケであろう。燒褐色の色調を有す。復原口径33.0cmを測る。

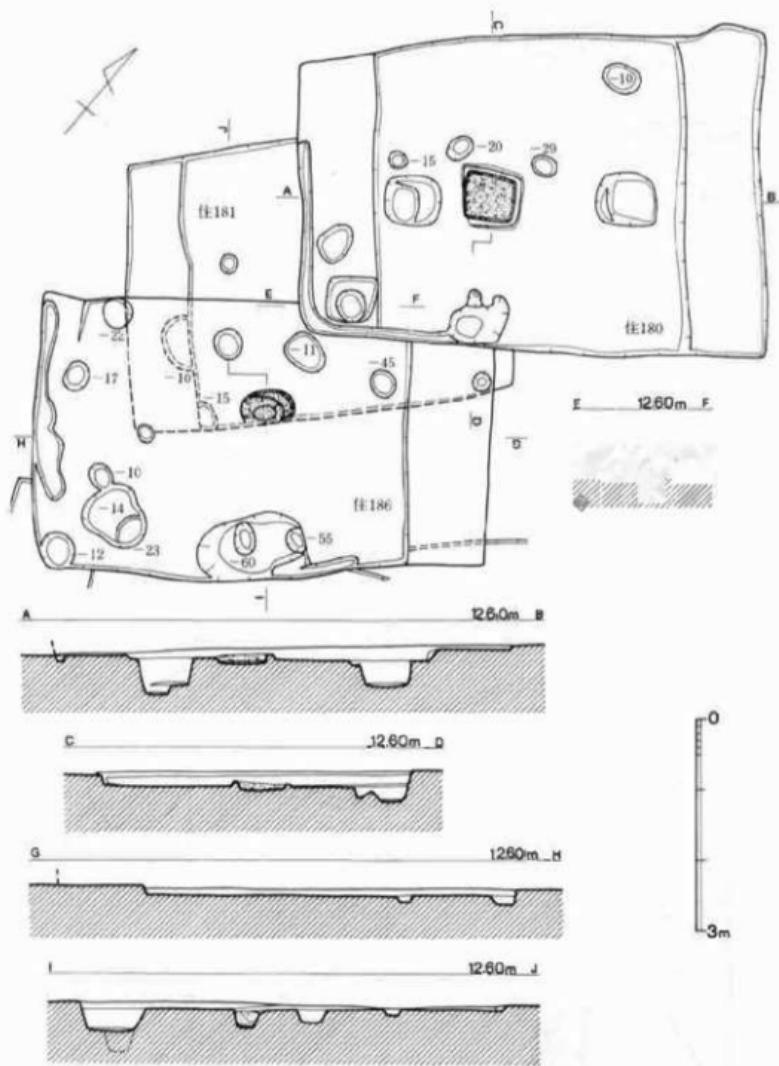
石 器 (岡坂60 第261号)

1) 甌の石泡丁片である。表面は半滑に磨いてある。出土土器と時期が符合せず假入と考える。

2) は良質砂岩を使用した仕上げ底行がある。研削は4面で、いずれの面も研ぎ込んでおり凹面をなす。現長13.2cmを測る。3) は土器片剥離が残る。この片が底行の小片である。

土製品 (第261図)

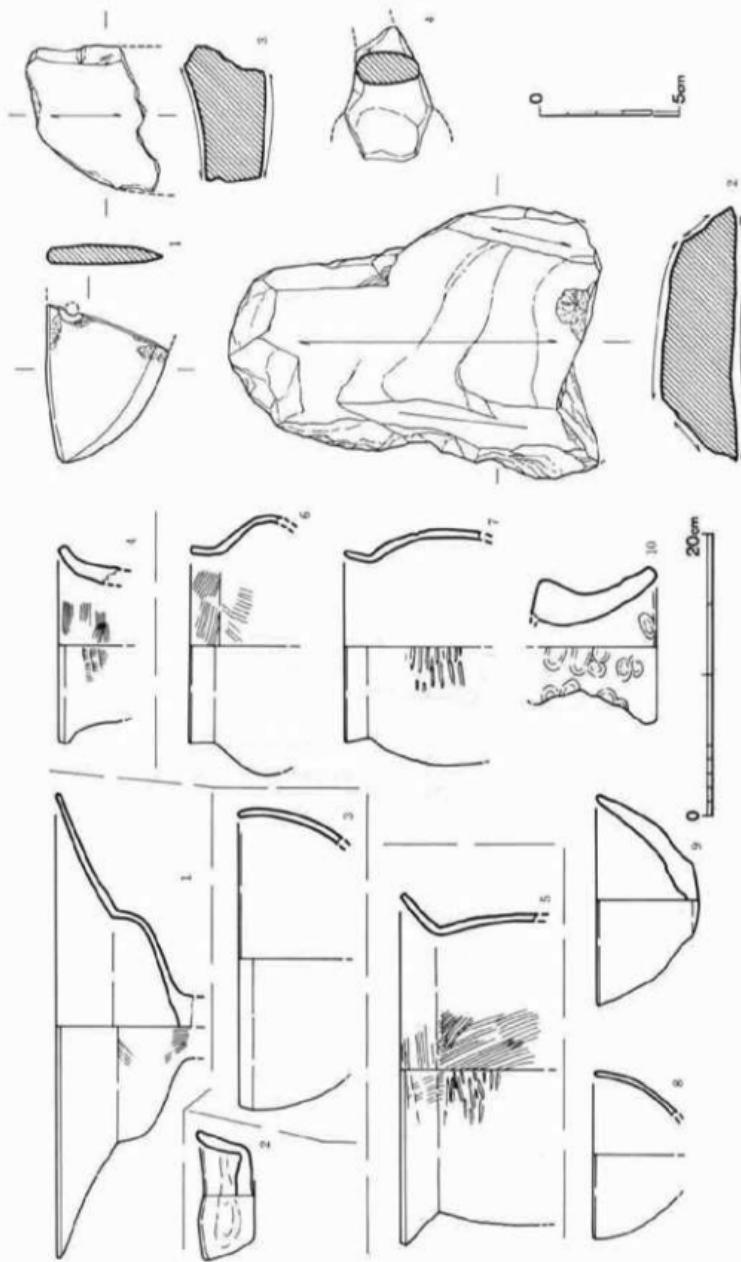
4) は土製玉ねぎの小片で焼成度があまり進んでは良くない。埋土から出土である。



第259図 180号、181号、186号整穴住居跡実測図(1/80)

圖261圖 180號堅穴住居跡出土石器、土製品測量圖(1/2)

圖260圖 180號、182號—186號堅穴住居跡出土土質測量圖(1/4)



181号竪穴住居跡（図版13-(1)・27-(2) 第259図）

180号、186号住居に切られた平面形状が長方形を呈する竪穴住居である。規模は不明確であるが、短軸3.80m、長軸が5.40mを測る。片方の短壁側には幅90.0cmのベットを付せる。床面上には炭化材の破片が若干認められ、火災に遭遇した可能性がある。その他詳細は不明である。

出土遺物は砥石、鉄器がある。

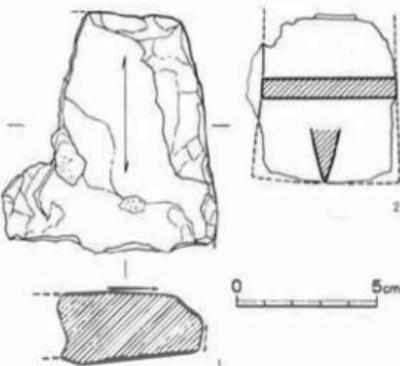
出 土 遺 物

石 器（図版60 第262図）

1は砂岩製の荒砥がある。二次加熱を受け器種が剥落し、ざらついている。現存の研面は2面であるが、研面の判別も不明瞭である。埋土中からの出土である。

鉄 器（図版60 第262図）

2は板状鉄斧の破片である。頭部と側部を欠く。刃部は鋭利に研出していいるが、銹張れが著しい。幅4.8cm、厚さ7.0mmを測る。床面からの出土である。



第262図 181号竪穴住居跡出土石器、鐵器実測図(1/2)

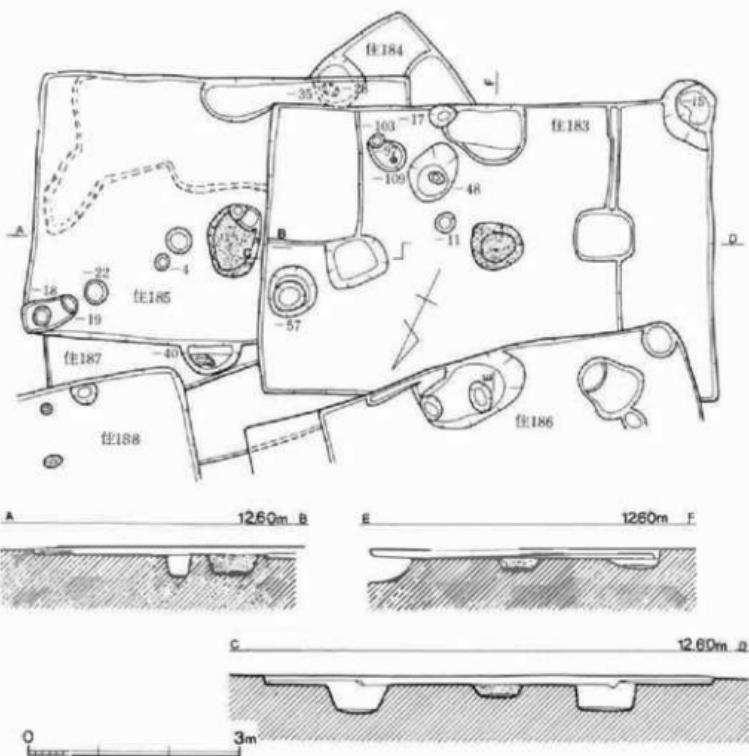
182号竪穴住居跡出土遺物

土 器（第260図）

2の鉢を模した手捏ね土器がある。器形はやや歪で、器壁は厚い。胎土は他の土器同様、細砂粒と赤褐色粒子を含む。口径9.2cm、底径6.45cm、器高3.6cmを測る。

183号竪穴住居跡（図版13-(1)・27-(2) 第263図）

5軒の重複がある。186号住居に切られている他は3軒の住居を切っている。平面形状は長方形を呈し、規模は南・北壁6.30m・6.50m(復原)、東・西壁が4.15m・4.30m、壁高10.0cm前後を



第263図 183号～185号、187号竪穴住居跡実測図(1/80)

測る。支柱は2本でいずれもベットに接して据られている。柱間は3.60mである。床面中央には不整円形の炉を設ける。南壁中央には楕円形の屋内土壤を付設する。短壁には幅1.25mのベット状造構を付設し、東側のベットは1/2の設置である。柱間での主軸方位はN58°Eを示す。

出土遺物は鉢の他、石庖丁、砥石がある。

出土 遺 物

土 器 (第260図)

3は大振りの鉢の破片である。口縁部は内側し、肩部は丸味を有す。胎土は砂粒及び角閃石をやや多く含む。褐色の色調をなす。側原口径20.8cmを測る、残存は1/3である。

石 器 (図版61 第264回)

1は雲母片岩製の石盾

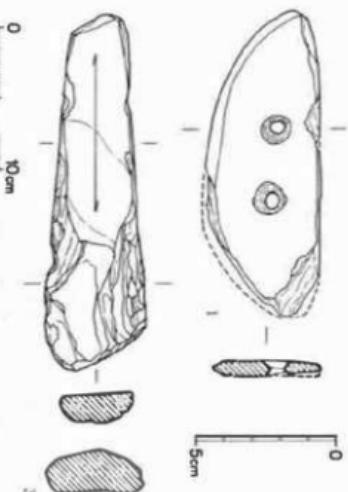
でやや破損である。孔の穿ち方も粗く、つくりも拙である。長さ10.9cm、幅4.1

cm、厚さ6.0mmを測る。

2は雲母片岩製の砥石で

完形である。砥石の一端は手で持ち易くするため丸く整形する。研面は3面を数えるが、裏面の使用は少し

なく、1箇所に鋭利な研磨が残る。長さ25.3cmを測る。屋内二段からの出土である。



第264回 183号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2, 1/4)

184号竪穴住居跡出土遺物

土 器 (2026060)

4は小片であるため断面の断定はできないが、外の口縁付であろう。口縁部は直立状に外反す。調整は内外面ともハケが残る。口径口径14.0mmを測る。

185号竪穴住居跡 (図版27-(2) 2026390)

R-2区で検出した竪穴住居で、183号住居に切らされた184号、187号住居を切っている。東壁長3.70m、壁高8.0cmを測る。住居の南側は一段深く掘削し周囲を護っていた。支柱は2本と思われるが、1本は検出できていない。床面中央には不整形の井戸を掘込んでいる。その他詳細は不明である。出土遺物は焼かがある。

出土遺物

土 器 (第260回)

5の長い口縁部を「く」字状に外反する壺の破片がある。肩部は張らず長胴をなすと思われる。調整は外面が粗い叩き、内面は粗いハケが残る。胎土は砂粒・赤褐色粒子を含む。淡い茶褐色を呈する。復原口径25.0cmを測る。

186号竪穴住居跡 (図版13-(1) 第259回)

総数6軒の重複がある。180号住居に切られ、181号から183号、187号住居を切っている。平面プランは長方形を呈し、規模は長壁が6.30m、短壁が3.80m、壁高10.0cm前後を測る。支柱穴は検出できていないが2本であろう。焼跡は181号住居内で検出した。東側の壁沿いには幅1.20mのベットを付す。片側の長壁中央には梢円形の長軸1.55m、短軸90.0cmの屋内土壙を付設し、土壙の底面には2個のピットを掘込んでいる。ピット間は75.0cmを測る。

出土遺物は直口壺・甕・鉢・支脚がある。

出土遺物

土 器 (第260回)

6は直口壺の復原実測である。肩部は張り扁平となる。外面はナデ、内面に粗いハケが残る。復原口径14.0cmを測る。

7は口縁の外反度の鈍い壺の破片である。肩部には粗い叩き痕が残る。外面には二次加熱を受け黒くすむ。復原口径13.6cmを測る。

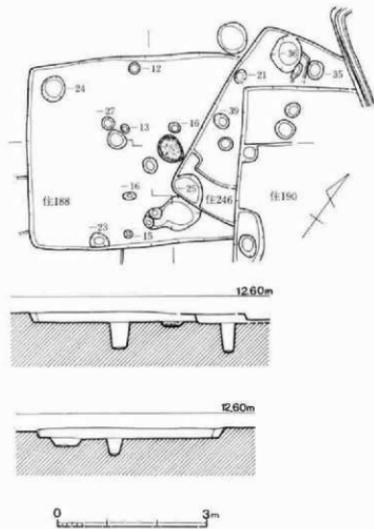
8・9は鉢で、8は器壁が薄く精製品である。9は器壁が厚い粗製で不安定なレンズ状の底部を有す。8の復原口径12.0cm、9は口径15.0cm、底径5.1cm、器高7.2cmを測る。

10は屋内土壙から出土した支脚片で1/3残存する。天井部が傾斜し孔を穿つタイプである。基部径11.0cmを測る。

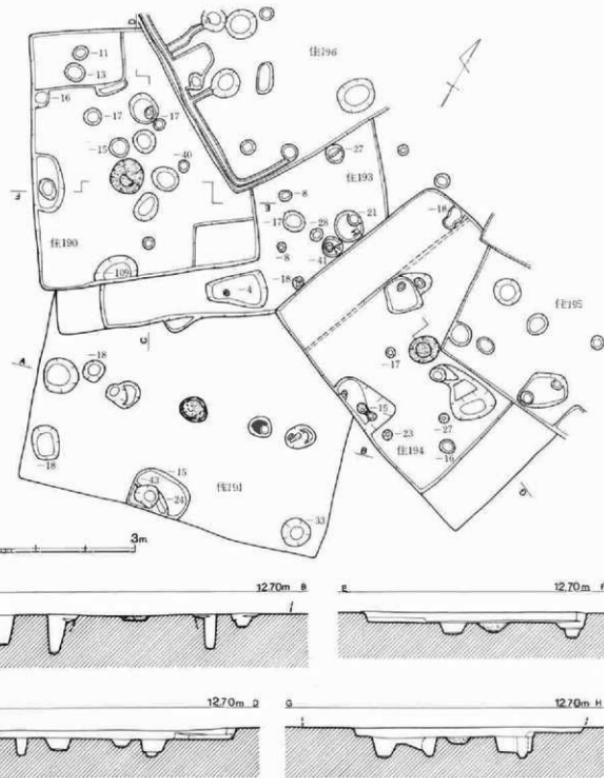
187号竪穴住居跡 (図版13-(1)・27-(2) 第263回)

183号、185号、186号、188号住居のすべてに切られた竪穴住居跡で、遺存状態が極めて悪く実態は不明である。

出土遺物は皆無である。



第265図 188号、246号竪穴住居跡実測図(1/80)



第267図 190号、191号、193号、194号竪穴住居跡実測図(1/80)

188号堅穴住居跡 (図版13-(1)・27-(2) 第265回)

R-2区で検出した堅穴住居跡で、190号、246号住居より古く、187号住居より新しい。平面形状は長方形である。西壁長3.60m、壁高18.0cmを測る。支柱は2本でその内の1本は246号床面下で検出した。柱間は2.20mを測る。柱間に不整円形の切を掘る。南壁傍には屋内土壙を備えているが、壁際ではない。

出土遺物は砥石と鉄製鎌がある。

出土 遺 物

石 器 (図版61 第266回)

1は片岩質の砥石で完形品である。研面は1面で使用度は低い。長さ12.5cm、幅4.5cm、厚さ1.6cmを測る。

鉄 器 (図版61 第266回)

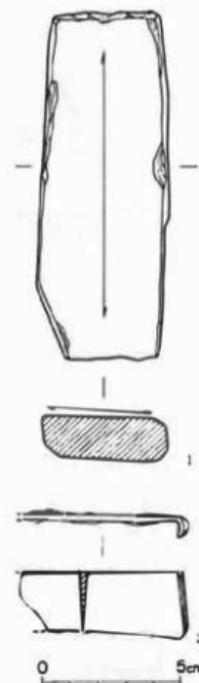
2は小振の鎌である。切先部を欠失しており、柄の着装部は幅広となり小さく折曲げている。刃部は鋭利で、背の厚さ2.0mm、幅2.1cmを測る。

190号堅穴住居跡 (図版13-(1)・27-(2) 第267回)

当該住居の周辺は著しい調査状況を示す。総数6軒の重複があり、新旧関係は196号→190号→193号・246号→188号・191号である。平面プランは長方形を呈し、西壁と南壁長は5.10mと4.40m、壁高15.0cm前後である。支柱は2本で、柱間は1.90mである。柱間軸からやや西寄りに壠跡状の切を掘込んでいる。西壁中央には椭円形の2段掘りの屋内土壙を設ける。同短壁には部分的にベットを付設するが、南壁は調査時の掘過ぎで短くなる。

出土遺物は直口壺、甕、高杯、鉢、壺台の他、砥石、土製玉杓子の柄がある。

出土 遺 物



第266回 188号堅穴住居跡出土
石器、鉄器実測図(1/2)

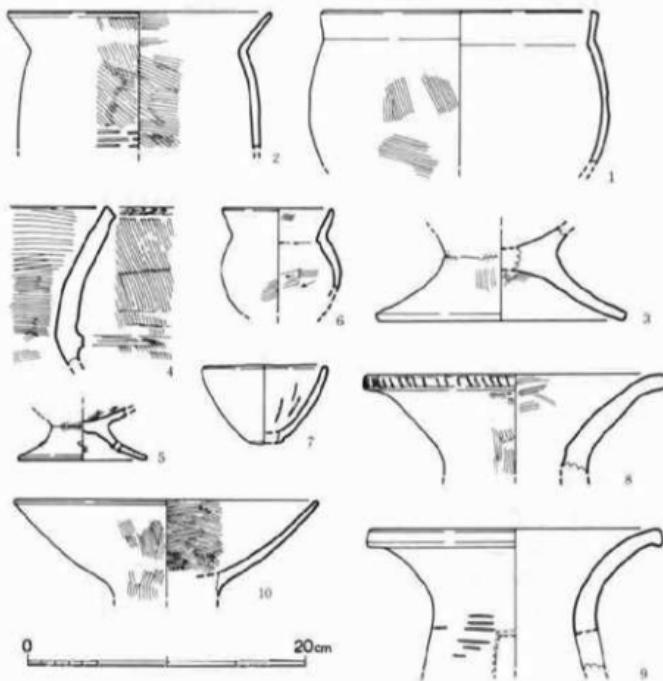
土 器 (図版6) 第268回

1は直口壺の復原実測である。口唇部を僅かではあるが肥厚する。外面にはハケが残り、内面はナデている。復原口径20.0cmを測る。

2は長い口縁に張りの鈍い肩部をなす2、低い脚台を有する3、大型の壺で口唇部に割みを配し、頸部に細い脚を有す低い台形山帶を貼付する4がある。2・4は荒いハケで仕上げている。2の口径19.0cm、3の裾部径18.0cmを測る。

5は精製された高环でつくりが極めて良い。环部は欠失し脚部のみが残る。脚部には4個の孔を穿つ。裾部径9.3cmを測る。

7は小型の鉢の破片である。底部は小さくしかも不安定な平底をなす。復原口径9.0cm、底径2.5cmを測る。



第268回 190号窪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

8・9は大型の器台の越前である。最小径が頭部にある。口縁は頭部状に開き、8の口縁部には刻みを配する。9の口縁部は肥厚する。調整は8が内外側ともハケが残る。9は外側に叩き頭部が残る。9は長方形の透しを配するが、破片であるといり様でない。8の口径は22.0cm。9の口径は21.4cmである。

10は大型の高脚か器台の底盤^{ムカシ}である。基部は丸くつられ、基礎も薄い。口唇部は前かに肥厚する。工外側にハケを用いる。復原口徑21.8cmを測る。

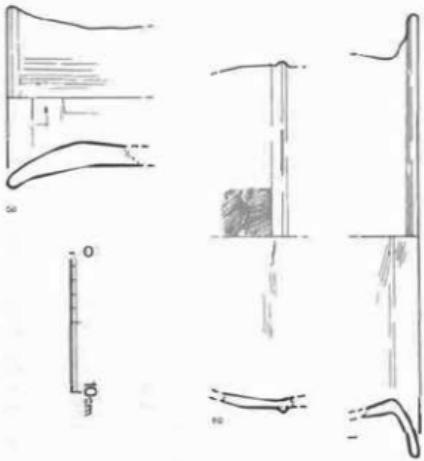
石器(闕版61 第269頁)

1は砂岩質の砥石である。火半が欠失しており、研削は2面を残す。現存長6.9cmを測る。

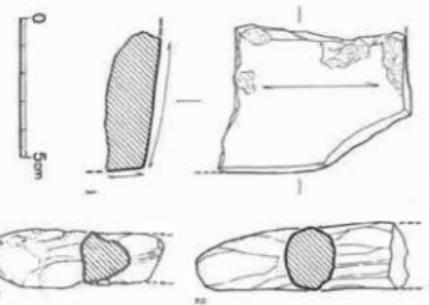
土製品(医療61 第269回)

2・3の土製瓦の柄がある。つくりは精い。
削られた粘土を使用し、山の山調子を

191号墳穴住居跡



第269図 190号竪穴住居跡出土石器、土製品実測図(1/2)



第270回 191号室～住居跡出土土器実測図(1/4)

砥石がある。

出 土 遺 物

土 器 (第270號)

1の裏の口縁は長く、しかも逆「L」字状に近い、形状をなす。張器内面の縁は明瞭である。最大径を口縁部に持つ。復原口徑31.8cm。

2は巻の脚部片で、円形或いは帯形を點打する。外面がハケ、内面はナデで仕上げる。三次加熱を受け直し、素地は傾きする。底内土礫からの出土である。

3は器台の脚部片である。端部の開きは浅い。調査は外面が丸いハケ、内面は擦過痕が残る。底部は13.0cmを測る。

第271図 191号竪穴住居跡出土石器実測図(1/4)

石 器 (国版61 第271號)
縄泥片岩製の砥石がある。中火部は径6.0cmの深い溝があり、当初は石皿として使用されていたことが考えられる。現存での研磨は2面である。底内土礫からの出土である。

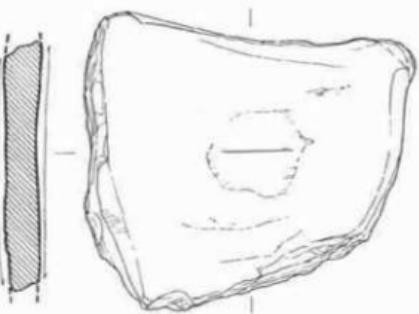
193号竪穴住居跡 (国版13-(1) 第267號)

190号、194号、196号住居に切られた竪穴住居跡で遺存部分が少ないので、全容を捉えることはできない。現存から判断すれば、平面形状は長方形であろう。兩壁沿いには不整長方形の底内土壤を備る。西壁にはベットの一端—81號できる。

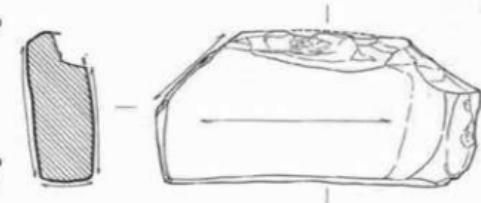
191号土器片は土器片か、食器あるが、既示可能な土器片らしい。

194号竪穴住居跡 (国版13-(2) 第267號)

S-1・2区で検出した竪穴住居跡で、195号住居に約1/3の割合を受けている。平面形状は長方形を呈し、南壁長5.70m、西壁長4.10m、壁高17.0cm前後である。支柱は2本で、柱間は±2.90mで



第272図 194号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2)



第272図 194号竪穴住居跡出土石器実測図(1/2)

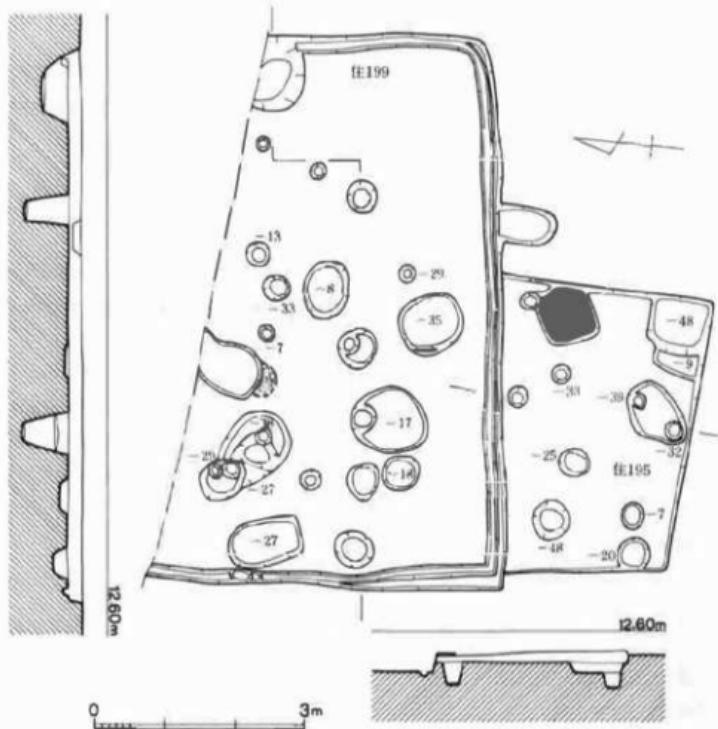
測る。床面のやや西寄りには円形の焼痕著しい焼跡が認められる。南壁際には不整形な屋内土壤を掘り、小ピットが内外に4個在る。東・西壁には幅1.00mのベットを鋪えている。

出土遺物の主だったものは磁石が1点ある。

三：土 遺 物

石 器（岡版印 第272図）

花崗岩質砂岩の仕上げ砥石がある。研面は4面を数える。研込みが激しく凹面をなす。長さ11.5cmを測る。屋内土壤の傍から出土した。



第273図 195号、199号竪穴住居跡実測図(1/80)

195号堅穴住居跡（図版13-(2) 第273図）

S-1・2区で検出した堅穴住居で、194号住居を切り、199号住居に切られ約1/2が削平を受ける。南壁長3.90m、壁高14.0cm前後である。支柱は断面Iで図示した柱穴が相当するか否か不明である。東壁には不整方形の屋内土塙を掘込む。南東隅には深さ48.0cmの土塙を備え、屋内貯蔵穴の可能性がある。その他詳細は不明である。

出土遺物は高杯がある。

出土 遺 物

土 器（図版274図）

1は長い口縁部を形づくる高杯の环形片である。胎土は緻密で、焼成は堅固である。器面が摩耗し調整は不明瞭であるが、磨き仕上げであろう。明褐色の色調を呈す。復原口径31.0cmを測る。

196号堅穴住居跡（図版27-(2) 第276図）

R・S-1区で検出した堅穴住居跡で、平面プランは方形を呈する。北壁の一部が未掘であるが、横長を復原すれば南・北壁5.50m・5.60m、東・西壁5.90m・5.70m、壁高20.0cm前後を測る。復原床面積は32.56m²である。支柱は4本を規則的に配し、北側の柱は建直しを計っている。各柱間はP₁-P₂が2.50m、P₁-P₃が2.30m、P₁-P₄が2.80m、P₂-P₃が2.65m、P₂-P₄が2.50m、P₃-P₄が2.65mを測る。炉は床面中央部に設ける。南壁沿いには段違いに2本の柱穴を配し、柱穴と壁とは細い溝で繋がる。その間に浅い屋内土塙を設置する。柱穴間は1.30mを測る。周囲は北壁と東壁の一部が途切れることは壁沿いに繋がらず。P₁-P₃の柱間軸を採用すると住居の方位はN28°Eを示す。

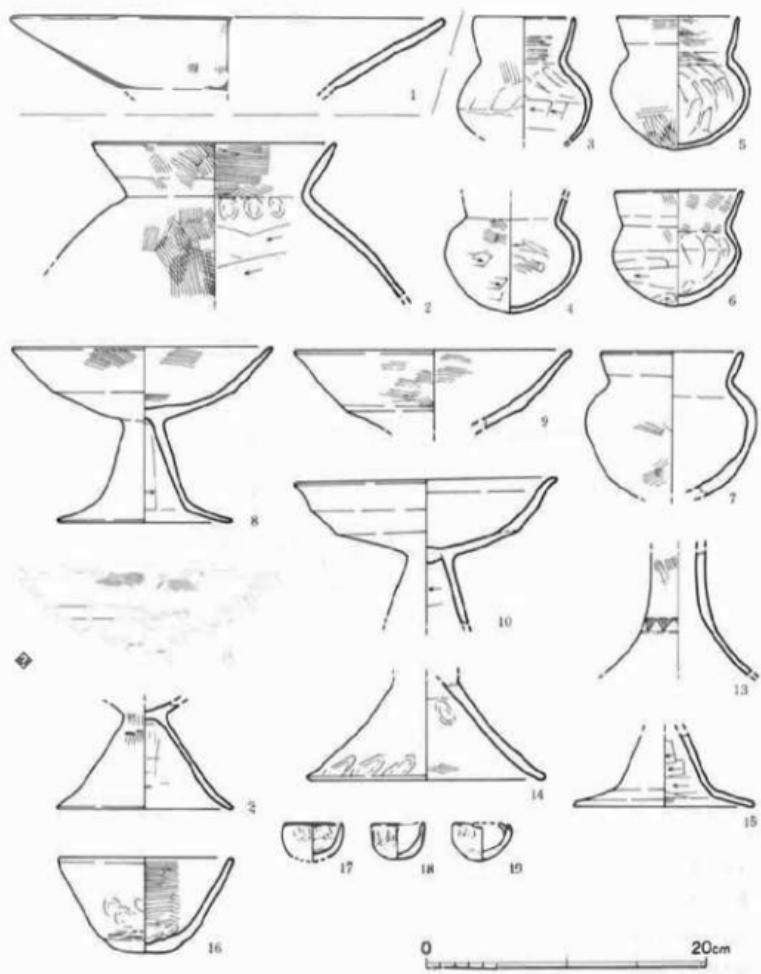
出土遺物は壺・小壺丸底・高杯・鉢・ミニチュア土器の他、石庖丁がある。

出土 遺 物

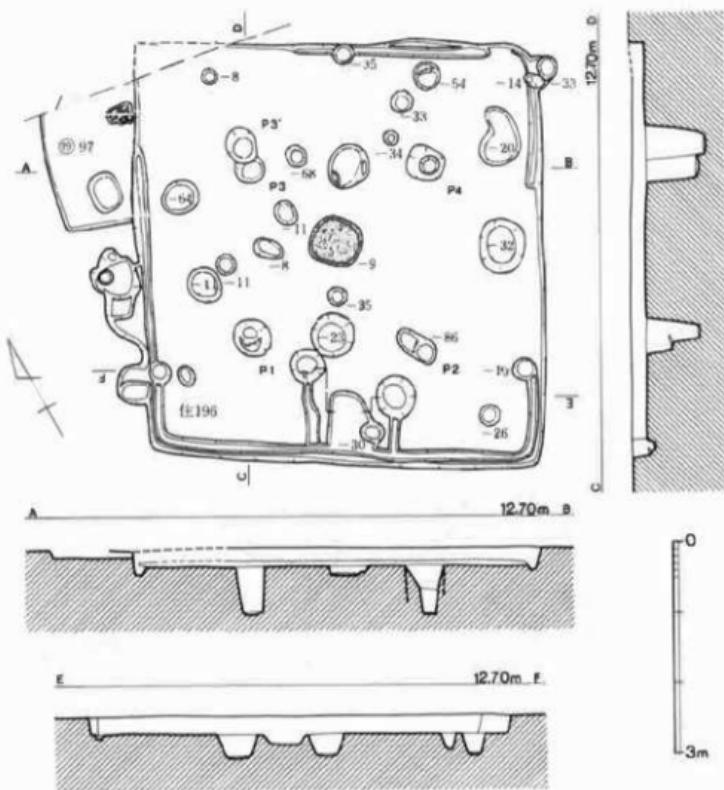
土 器（図版61・62 第274図）

2は壺で肩下半を欠損する。口縁は「く」字状に外反し、肩部の張りは強い。調整はハケと箒削りで仕上げる。復原口径17.5cmを測る。

3～7は小型丸底土器である。口縁部が僅かに内彎する3・5と最大径が口縁部にある6・7



第274図 195号、196号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



第275図 196号、197号竪穴住居跡測定図(1/80)

い口縁に胸部が張るやや大振りの粗い7などがある。この内の6は古相を示す。胸部は扁平球を呈する。すべて弱い二次加熱を受け黒くすむ。5の口径8.8cm、器高9.4cm。6は口径9.2cm、器高8.3cmを測る。

高杯は8～15がある。8は完形である。9を除くと杯部は浅くつくられ、体部の屈折は不明瞭である。胸部は直線的で口縁の外反度は鈍い。脚部は3タイプあり、8・15の柱状部が短く底部で鋭く開くタイプと12・14のスカート状に附脚するもの、13のスマートな脚に鋸歯文を配するものがある。二次加熱が鮮明なものとそうでない高杯ははある。8の口径18.7cm、基部径12.5cm。

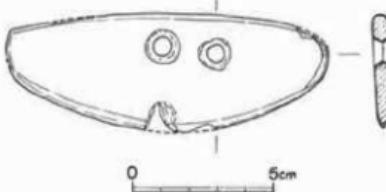
器高12.4cm。9の復原口径19.6cm。11の復原口径18.6cm。12の復原口径12.6cm。14の復原は17.0cm。15は12.8cmを測る。

16の鉢は混入である。僅かな平底を呈する。外面の一部に叩き痕が残る。弥生時代終末頃の所産であろう。

ミニチュア土器は17~19がある。ミニチュアにしては胎土は精製されている。

石 器 (第276図)

雲母片岩製の石庖丁があるが、混入である。形状的には弥生後期の特徴を示す。孔は大きく粗く穿つ。孔の内径6.0mmを測る。



197号堅穴住居跡 (第275図)

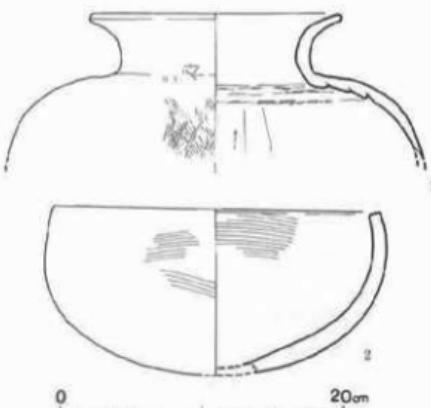
R-1区で検出した堅穴住居であるが、196号住居に切られ、しかも未測部分が多く、実体は不明である。壁高10.0cmを測る。

出土遺物は無い。

199号堅穴住居跡 (図版13-(2) 第273図)

S・T-1区で検出した大型の堅穴住居跡で、194号、195号、198号住居を切っている。住居の1/2が調査区外のため完掘に至っていない。平面形態は方形であろう。南壁長が計測でき7.80m、壁高20.0cmを測る。支柱は4本で、その内の2本は調査区外にある。2本の柱間は3.10mである。床面の西寄りには焼痕が残る。東壁際には屋内土墻を付設する。現存の壁沿いには周溝を廻らす。

出土遺物は壺・鉢の他、砥石、鉄製鋤先、土製玉杓子の柄がある。



199号堅穴住居跡出土土器実測図(1/4)

出土遺物

土器（図版62 第277図）

1は頸部から口縁にかけて反り氣味に外反し、肩部は著しく弧る壺である。調整は口縁が横ナギ。外面は粗いハケ、内面は箆で削る。肩部内面は未調整で粘土紙の接合面が残る。二次加熱を受けている。口径18.0cmを測る。

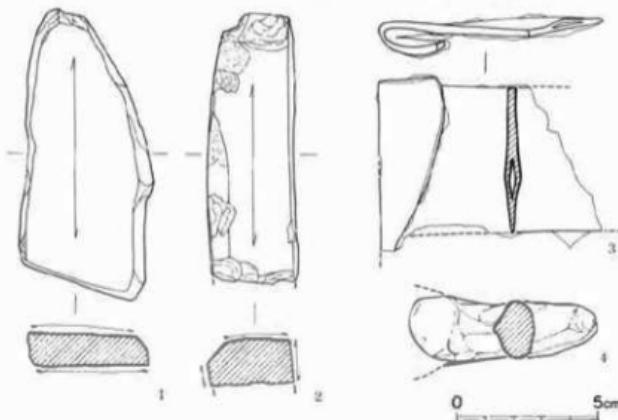
2は大振の鉢で口縁は内凹する。胴部は丸味を持ち、全体に器壁が厚い。復原口径23.1cm、器高11.6cmを測る。

石器（図版62 第278図）

1は雲母片岩質の砥石で研面は2面を数える。長さ10.3cmを測る。使用度は少ない。2は使賄砂岩製の仕上砥石である。研面は3面で、裏面は欠損する。加熱を受け黒づんでいる。現存長9.5cmを測る。

鉄器（図版62 第278図）

3の鋒先があるが、約1/3を失する。全体的に歪んでおり、中央には錆駁れが認められる。刃部は鋭利に研ぎ出しが、研ぎ減りが激しく袋部よりも内側に刃部がある。幅5.1cm、厚さ3.0mmを測る。



第278図 199号竪穴住居跡出土石器、鉄器、土製品実測図(1/2)

土製品（第278図）

4は上製の玉約子の柄である。胎土は精製された粘土を使用し緻密であるが、つくりは粗い。柄の基部は扁平になり、約子部との接合面が明瞭に残る。柄の長さ6.6cmを測る。

200号竪穴住居跡（図版13-(2)・27-(3) 第279図）

T-1区で検出した竪穴住居跡で201号住居を切っている。約1/2が調査区外で完掘に至っていない。南壁長3.90m、壁高17.0cm前後を測る。その他詳細は不明である。

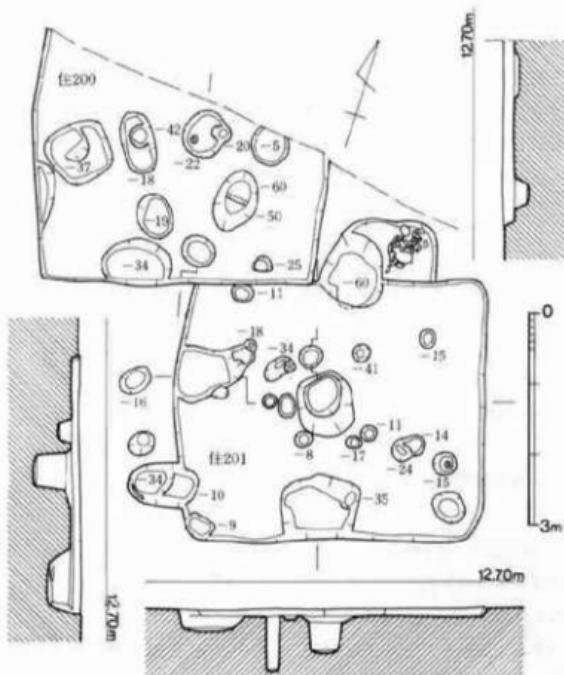
出土遺物は殆ど無い。

201号竪穴

住居跡

（図版13-(2)・27-(3) 第279図）

200号住居に切られ、25号土塙を切った状態で検出した小型の竪穴住居である。平面形態は長方形を呈し、規模は南・北壁が4.10m、東・西壁が3.70m、壁高10.0cmを測る。床面積は14.97m²である。支柱の1本は明瞭で他の1本は検出できていない。床面中央には有段をなす深さ52.0cmのピットを掘り、その周辺に小ピットを配するが其の機能は考案難い。



第279図 200号、201号竪穴住居跡実測図(1/80)

南壁際には不整形の屋内土壙を備え、一方に小ビットを配するが、両端に掘られていた可能性が高い。さらに西壁際にも不整形の土壙が掘られている。

出土遺物は脚台付土器の他、砥石（石III）がある。

出土 遺 物

土 器 (第280回)

脚台付のコップ形土器がある。約1/2が残存する。胴部上半から口縁部にかけては内傾し、最大径が胴中央にある。脚部は欠失しているが低い脚台が付くであろう。外面にハケがみられる以外はすべてナデで仕上げる。復原口径6.8cmを測る。

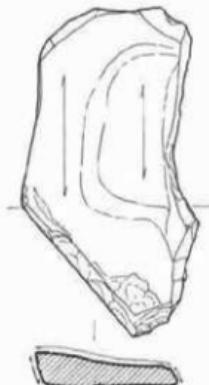


0 5cm

第280回 201号竪穴住居跡
出土土器実測図(1/4)

石 器 (図版62 第281回)

緑泥片岩の石皿を砥石として再利用したもので、約1/2を欠失する。中央には石皿様の凹面を残す。現存での研面は5面で、裏面は1/3を研面とする。現存長23.0cm、厚い所で2.3cmを測る。屋内土壙からの出土である。



202号竪穴住居跡 (図版13-(2)・27-(4) 第282回)

T・U-2区で検出した竪穴住居跡で、203号住居と7号掘立柱建物に切られている。平面プラン及び規模などは不明で、北壁は3.70mを測る。

出土遺物は無い。

203号竪穴住居跡 (図版13-(2)・27-(4) 第282回)

7号建物に部分的な削平を受けているが、全容は把握できる。

平面形状は長方形を呈し、南・北壁4.70m・5.00m、東・西壁3.20m・3.10m、壁高10.0cm前後である。床面積は14.60m²である。支柱

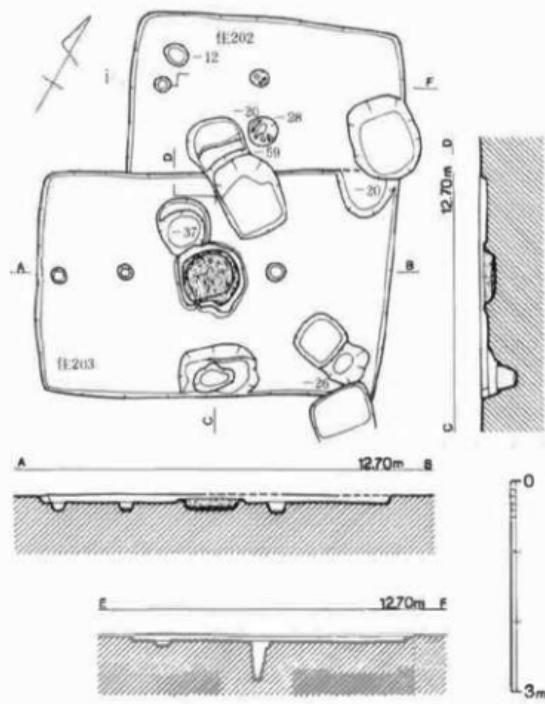
は2本で2本とも浅い。柱則は2.15mである。柱則には径95.0cmのが設け、南側一部を除いて周縁に土手が廻る。内部は炭化粒が充満していた。南壁中央には不整形円形の屋内土壙を配する。

出土遺物は漆の他、砥石が1点ある。

0 10cm

第281回 201号竪穴住居跡出土

石器実測図(1/4)



第282図 202号、203号竪穴住居跡実測図(1/80)

出土遺物

土器 (第283図)

複合口縁蓋の口縁片がある。口縁部は短く、内側をせっている。屈折部の後は明瞭である。調整はハケとナデで仕上げる。復原口径18.1cmを測る。

石器 (図版62 第284図)

砂岩製の中砥石の破片がある。残す面は表面と右

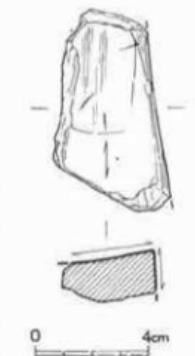


第283図 203号竪穴住居跡
出土土器実測図(1/4)

側面のみで他はすべて欠損する。現存での研面は2面を数える。現存長7.2cmを測る。埋土中からの出土である。

208号竪穴住居跡 (図版14-(2)・28-(2) 第285回)

当該住居周辺もかなりの調査状況が看取できる。総数5軒の重複がある。209号、211号住居を切っている。平面プランは長方形を呈し、規模は現存での南・北壁が5.20m・4.80m、西壁が4.80mを測る。西壁側には幅1.60m～1.90m、奥行1.30mの有段をなす造出し部が付設され、住居の出入口と考えられる。支柱は2本で、柱間は2.85mを測る。柱間に80.0cmの浅い炉を掘込んでいる。南壁際には刀形の屋内土壙を備えている。土壙の床面の両端には柱穴を配し、柱間は85.0cmである。



第284図 203号竪穴住居跡
出土石器実測図(1/2)

出土遺物は甕・鉢の他、砥石が1点ある。

出土 遺 物

土 器 (図版62 第286回)

甕には1～3がある。すべて「く」字状に外反する口縁を有す。1は肩部に最大径がある。底部は細まり不安定さを感じる。調整は円外面のハケが残るが、二次加熱を受け摩耗し黒くする。復原口径24.1cm、底径9.0cm、器高31.4cmを測る。2の復原口径25.0cmを測る。3は口唇部を肥厚させる。

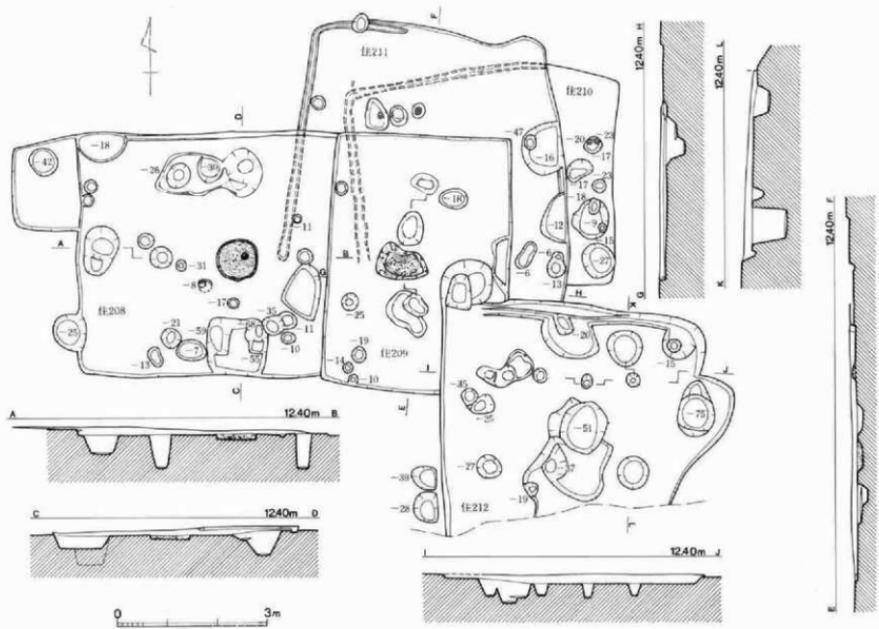
4は鉢の復原実測で、口縁を僅かに外反させ上面は内傾する。器壁は厚い。外面はナデ、内面に横ハケが残る。復原口径13.6cm、底径6.05cm、器高7.0cmを測る。

石 器 (図版63 第287回)

雲母片岩製のほぼ完形の砥石がある。研面は正面であるが、図示した裏面は一部を研面とする。表面は使用頻度が高く凹面をなす。灰褐色の色調を呈している。現存長17.4cmを測る。

209号竪穴住居跡 (図版14-(2)・28-(1) 第285回)

212号住居に切られる以外は他の全ての住居を切った竪穴住居である。平面形状は長方形を呈し、規模は北壁3.45m、西壁4.90m、壁高7.0cm前後を測る。支柱は検出できていないが2本であ



第285圖 208號~212號整穴(生層)測圖(1/80)

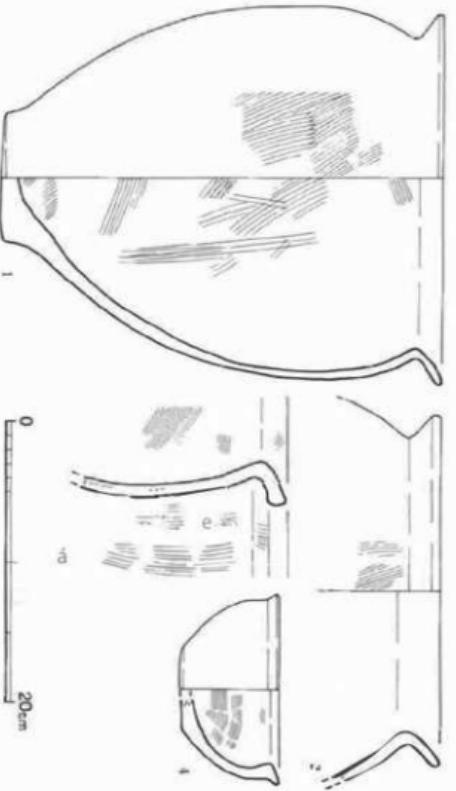


図208図 208号墳へ住居跡出土土器実測図(1/4)

らう。現存での軒穴は支柱とはなり得ない、東壁沿いには不整形の屋内土壤を備える。屋内土壤の傍には黄褐色粘土の高まりがあり、住居の出入口と考えられる。床面中央には不整形の土壤を設ける。床面の北側には黄褐色粘土による小さな高まりを設けているが、機能的には理解できな
い。

出土遺物は無い。

210号堅穴住居跡 (国版14-(2)・28-(1) 第2855號)

211号に大半が削平を受けた実体が不明である。北壁と西壁沿いに周溝がある。東壁の壁長4.10mを測り、移動から柱間軸を東西に向け建てられていたことが判る。

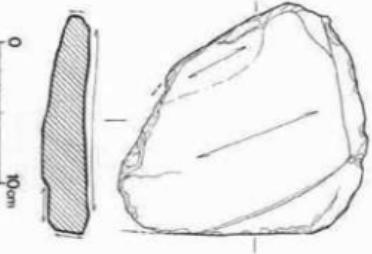


図210図 210号堅穴住居跡出土石器実測図(1/4)

211号堅穴住居跡 (国版14-(2)・28-(1) 第2856號)

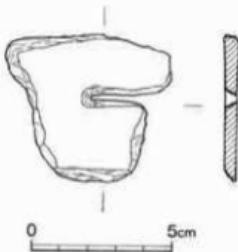
210号住居より新しく、他の3軒の堅穴住居より古い堅穴住居である。西壁沿いに周溝が掘ら

れ、柱列軸を南北にとる。その他詳細は不明である。
出土遺物は皆無である。

212号竪穴住居跡 (図版14-(2)・28-(1) 第285図)

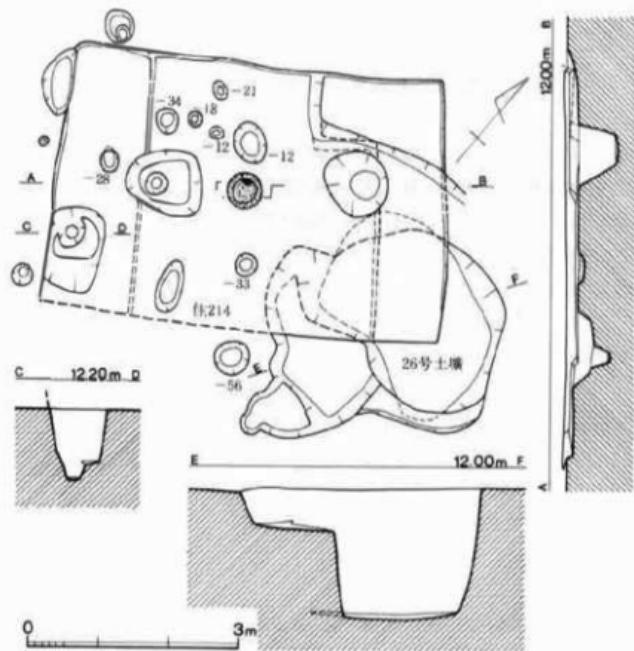
5軒の重複の中で最も新しい竪穴住居である。約1/2は耕作による削平を受ける。北壁長5.10m、壁高14.0cm前後である。その他詳細は不明である。

出土遺物は不明石器がある。



第288図 212号竪穴住居跡出土
石器実測図(1/2)

出 土 遺 物



第289図 214号竪穴住居跡、26号土壤実測図(1/80)

石 器 (第288図)

黒母片岩の石材を使用した不明石器がある。中央部に深い抉りを入れている。周縁が欠失しており用途は明らかでないが、刃部を研削していた可能性がある。また、石庖丁の失敗作とも考えられる。住居内の柱穴からの出土である。

214号堅穴住居跡 (第289図)

T-4・5区で検出した堅穴住居であるが、南壁は耕作のため削平されている。26号土壙より新しい。平面プランは長方形である。北壁長5.20m、壁高10.0cm前後を測る。支柱は2本で、柱間は2.95mである。床面中央には径40.0cmの炉を掘込む。短壁沿いには幅1.10mのベット状遺構を付せるが、東壁のベットは「L」字状を呈する。西側のベット上には屋内貯蔵穴と考えられる土壙を振り込んでいる。柱間軸の方位はN50°Eを示す。

出土遺物は無い。

217号堅穴住居跡 (図版28-(3) 第290図)

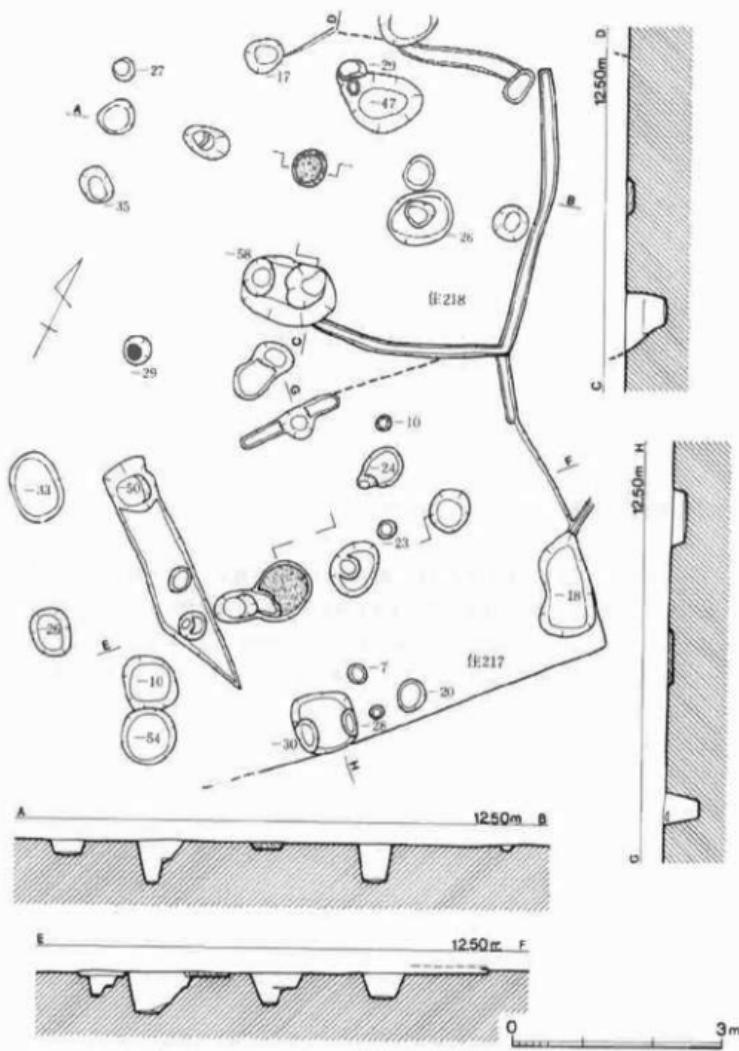
S・T-4区で検出した堅穴住居であるが、検出時既に床面が露呈しており遺存状態は極めて悪い。218号住居に切られてしまい、平面プランは長方形を呈する。規模は明らかでないがかなり大型の住居である。支柱は2本で、柱間は1.70mである。炉は柱間にきっている。片側長壁の中央には隅円方形の屋内土壙を備え、両端には小ピットを配する。ピット間は60.0cmを測る。屋内土壙内からは石剣と砥石が出土した。南西壁沿いには床面よりやや深く掘削し上面に貼床を施していた。おそらく貼床ベットを付設していたのであろう。柱間軸の方位はN45°Eを示す。

堅穴住居跡

石 器 (図版63 第291・292図)

1は頁岩質の石剣がある。茎と切先部を欠失する。全体に刃剥れが著しく、実際に武器として使用した可能性がある。実用武器として耐え得る頑強なつくりである。中央部の鎌は明瞭で丁寧に研磨し表面は平滑となる。現存長23.0cm、最大幅4.4cm、厚さ1.5cmを測る。屋内土壙内からの出土である。

2は花崗岩質砂岩の完形の手持砥石(仕上げ砥)である。研面は3面を数え、表面は使用度が著しく凹面をなす。長さ12.0cmを測る。黄白色を呈し、屋内土壙内から出土した。



第290図 217号、218号整穴居跡実測図(1/80)

218号竪穴住居跡

(図版14-(1)・28-(4) 第2290号)

— 3区で検出した竪穴住居。217号住居より伸びていて、柱跡は2本で、柱間は3.10mと長い。床面中央には板張の残部を残す。所産品には長軸1.30m、短軸90.0cmの内土器を複数見つめ、両端には柱跡が残る。柱跡は約1/2が残存する。柱跡付近の住居の方角はN73°Eを示す。出土遺物は幾つかある。

出土遺物 ◆

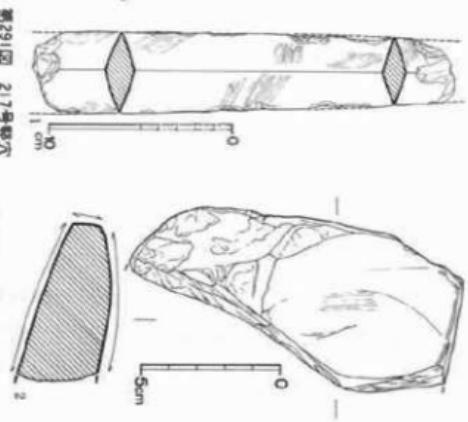
土器 (202939)

1～3は甕であるが、1・2はタイブが残る。両者とも「く」字形に口縁を外反させるが、1は肩部から胴にかけての張りは強く最大径が胴部にある。2は肩部が張らず、最大径を口縫部に持つ。両者の調査は内刃面にハケを施す。1の腹限口径22.2cm、2の口径は28.0cmを測る。3は甕の底部で二枚加熱を受け暗赤褐色に変色する。底径7.9cmを測る。いずれも屋内土器の埋土中から出土。

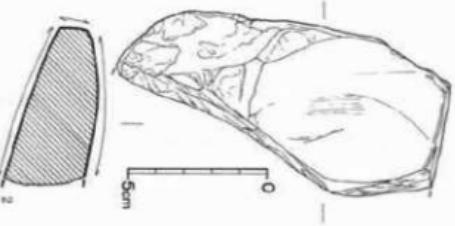
220号竪穴住居跡

(図版15-(1) 第29480)

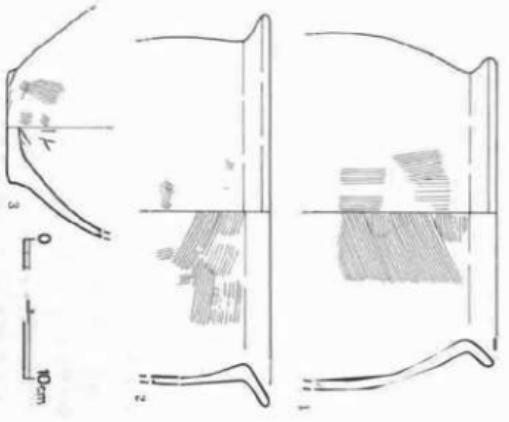
U～3区で検出した竪穴住居跡で221号住居に引かれている。地表面形状は



第279図 217号竪穴住居跡
住居跡出土石器
実測図(1/3)

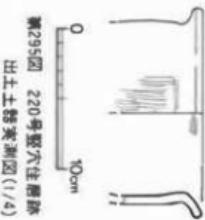


第280図 217号竪穴住居跡
出土石器実測図(1/2)

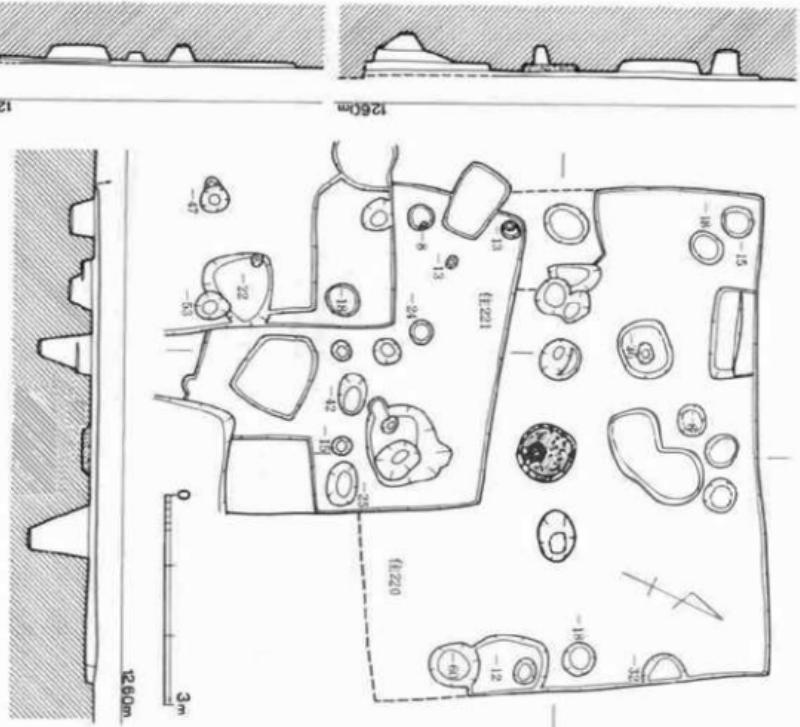


第281図 217号竪穴住居跡
出土石器実測図(1/4)

長方形を呈する。規模は明らかでないが、東・北壁が計測でき
5.66m・6.80mを測る。屋外による開口部を受け残りは窓く、側
壁は運びしない。支柱は2本で、柱間は2.70mである。柱間に
は高0.30mの枠を設ける。屋内土壇は構造中央に掘り、221号住
居の床面下で検出した。西壁側には幅1.35mのベット状運搬を
想り出している様にも見えるが、追出し湯を配置していくこと



第294回 220号、221号豊穴住居跡実測図(1/80)



第295回 220号壁穴住居跡
出土土器実測図(1/4)

も否認できず近かでない。柱用柱での柱頭の方舟はN66°Eを示す。

出土遺物は小型の甕の他、大型の砥石がある。

出土 遺 物

石 器 (図版63 第295図)

小型の甕の破片がある。口縁部は強く外反する。肩部から腹部の張りは強く、最大幅が口縁部にある。調整は外面が粗いハゲ、内面はナメで仕上げる。内外に二次丸熱を受け赤褐色に変色する。甕底口径15.0cmを測る。

石 器 (図版63 第295図)

碌な片岩の石材を使用したやや大振りの砥石がある。研削は表面の2倍であるが、裏面の使用度は少ない。長さ18.0cm、幅11.7cm、厚さ1.8cmを測る。屋内土壌からの出土である。

221号竪穴住居跡 (図版15-(1) 第294図)

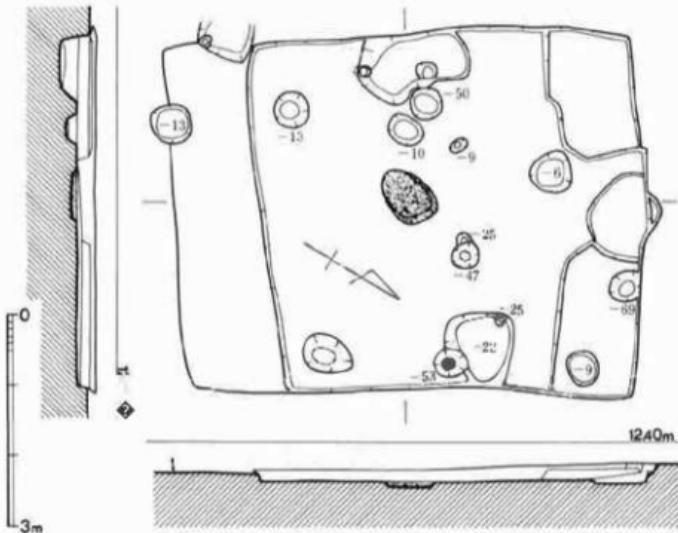
U-3区で出土し、竪穴住居跡で複数4軒の重複がある。直視関係は223号→222号→220号→221号の順である。現存では平頂プランが方角にみえる。東壁右側には焼瓦の約1/2のベットを付設する。その他詳細不明で、出土遺物も無い。

222号竪穴住居跡 (図版15-(1) 第297図)

U-3・4区で検出したやや大型の竪穴住居跡で、重複関係は先に述べたとおりである。平面形態は長方形を呈する。規模は南・北壁が約80m・5.10m、東・西壁が約20m・6.60m、壁残高20cm弱である。床面中央には不整形の骨を埋込んでいるが、支柱穴は検出できない。西壁中央部には不整形の屋内土壤を備える。同様規格の、同じ幅1.20mのベットを付設するが北壁側より中央部へと途切れる。

出土遺物は甕・瓶・支脚がある。

出 土 遺 物



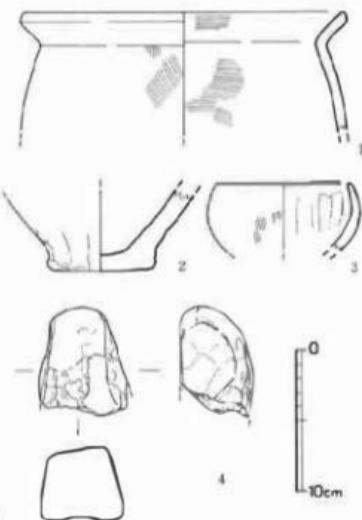
第297図 222号竪穴住居跡実測図(1/80)

土器(第298図)

1・2は甕の破片である。「く」字状に外反する口縁部に胴の張りは鋭い。調整は内外にハケがみられる。復原口径23.2cmを測る。2は底部片で歪である。二次加熱を受け暗灰色に変色する。底径7.5cmを測る。

3は塊の破片で口縁部は内湾する。二次加熱で外面に煤が付着する。復原口径9.6cmを測る。

4は支脚の上部片で粗い。二次加熱を受けている。支脚にしては胎土が精製されているが、つくりは粗い。

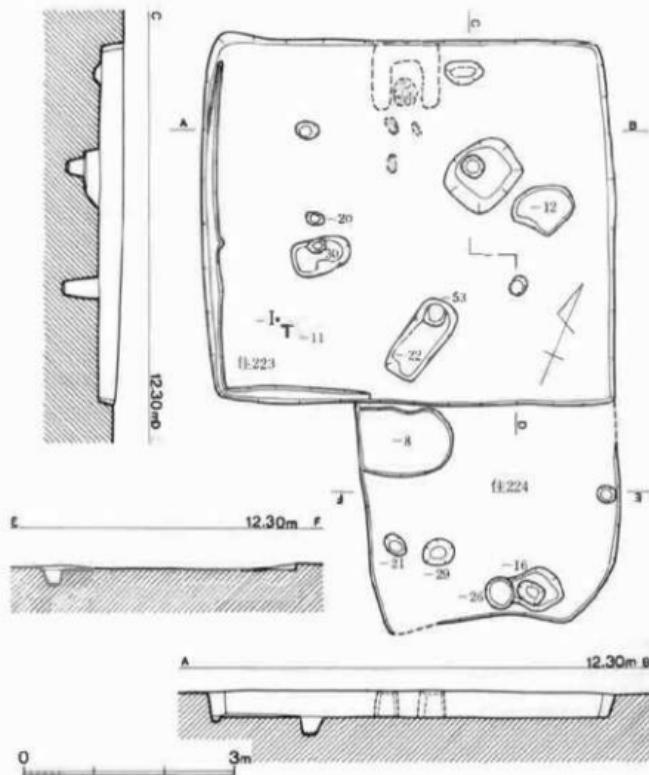


第298図 222号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

223号竪穴住居跡 (図版15-(1) 第299回)

重複する周囲の住居の中でも最も新しい住居跡で、平面形態は方形を呈する。規模は南・北壁が5.70m・5.50m、東・西壁が5.15m・5.20m、壁高35.0cm前後を測る。床面積は28.73m²である。支柱は4本と考えられるが、調査時点での支柱穴は見当らず、図示した柱穴は極めて不規則である。北壁中央には黄褐色粘土と黒色土を用いて「U」字状のカマドを付設していた。カマド底面は真赤に焼けている。

出土遺物は土器器の环、須恵器の环身がある。



第299回 223号、224号竪穴住居跡実測図(1/80)

出 土 塚

土 器 (圖版63 第300圖)

土師器 1は土瓶器の底の破片である。口縁は内面する。胎土は焼成された粘土を使用し、焼成も堅固でつくりが丁寧である。外面が加熱され黒くくすむ。復原口径16.8cm、高さ5.6cmを測る。

埴器 2は环状の光形品である。口唇部は尖り、全体は扁平である。底沿外側は左廻りの施削りで仕上げる。蓋受部には蓋との重ねきの痕跡が残る。口径11.0cm、器高4.4mmを測る。

224号竪穴住居 (第299圖)

V-4区で検出した竪穴住居である。223号住居及び耕作による著しい削平を受けた不明な点が多いため説明は割愛する。

225号竪穴住居 (第301圖)

U-V-4区で検出した竪穴住居である。5基の遺構が重複し、しかも複数個が耕作により段差がつき完全に削平を受けているため不明な点が多い。当該住居は227号、244号住居に切られていが、13号周溝との重複関係は明らかでない。遺存深度は4.35mを測る。その他詳細は不明である。

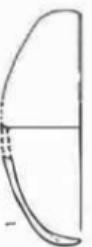
出土遺物は漆・台付甕・ミニチュア土器の小片があるが、個々の説明は省く。

227号竪穴住居 (第301圖)

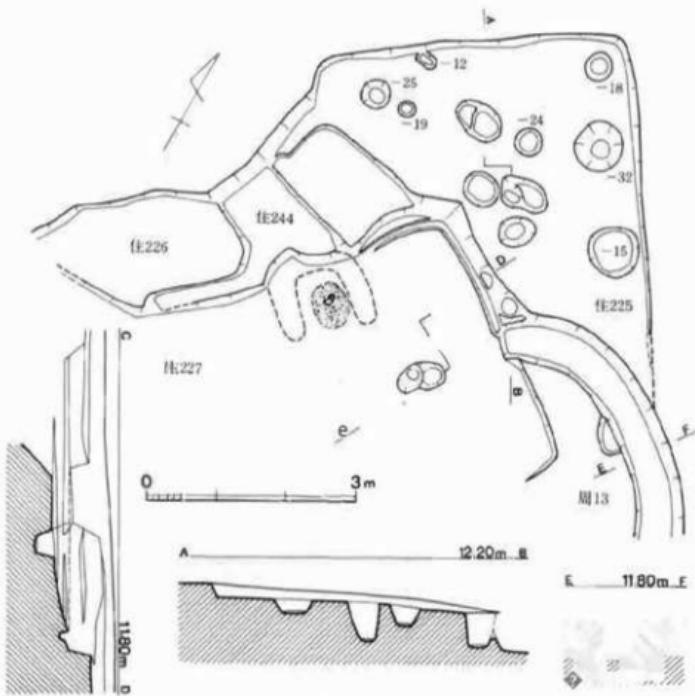
遺存率は1/2弱であるため実体は不明であるが、カマドを付設した竪穴住居である。カマドは北西壁に設け、カマドの設置箇所から推測して小型の住居とせえられる。支柱穴は1本が確認される。その他の詳細は不明である。

出土遺物は小型の甕の他、土製繩道鏡がある。

出 土 図 版



第300圖 223号竪穴住居断面出土
工部美術図(114)

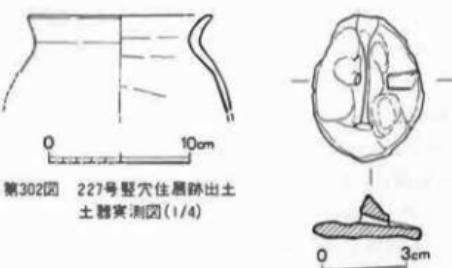


第301図 225号-227号、244号竪穴住居跡13号周溝状遺構実測図(1/80)

土 器 (図版63 第302図)

カマドから出土した小型の甕がある。胴下半を欠損する。口縁の外反度は鈍く、肩部は張る。内外面に強い二次加熱を受け変色する。カマド内の支脚に転用された甕の可能性がある。口径13.2cmを測る。

土 製 品 (図版63 第303図)



第302図 227号竪穴住居跡出土
土器実測図(1/4)

第303図 227号竪穴住居跡
出土土製品実測図(1/2)

土製模造鏡の完形品がある。形状が椭円形を呈し歪である。背面は一見人面風につくりあげている。二次加熱を受け赤変し脆い。径125.2cm×4.0cmを測る。

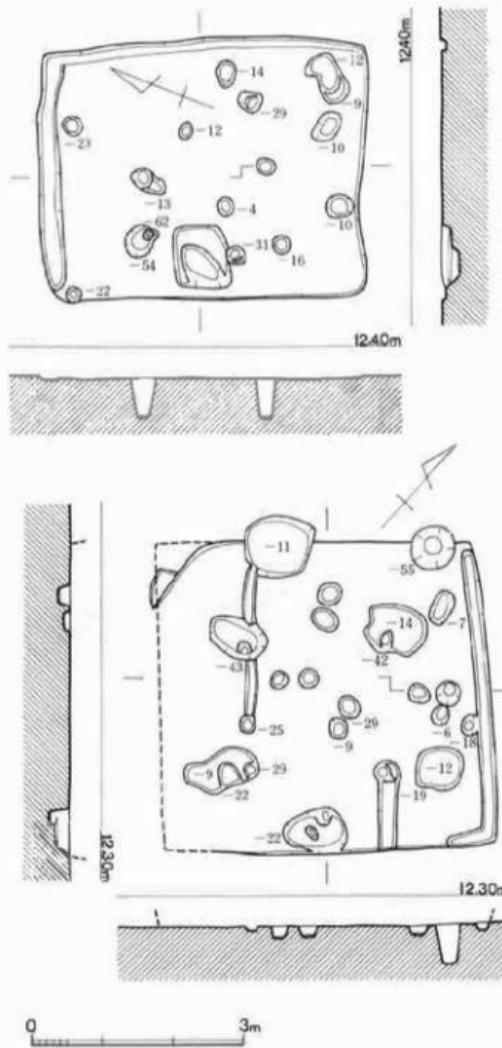
231号竪穴住居跡 (図版12-(1) 第245図)

O-4区で検出した竪穴住居跡で166号、169号住居に切られている。遺存状態が悪く様は殆ど残っていない。平面形状は長方形であろう。その他詳細は不明である。

出土遺物は皆無である。

236号竪穴住居跡 (第30-180)

V-W-2・3区で検出した小屋の竪穴住居である。耕作による削平のため遺存状態が極めて悪い。平面プランは長方形を呈し、規模は長壁4.58m・4.30m、短壁3.50mを測る。床面積は18.00m²である。支柱は2本で、柱間は1.75mである。炉は見当らず、西壁中央部に二段擲の屋内土壤を備える。周溝は北壁から東



第304図 236号(上)、238号(下)竪穴住居跡実測図(1/80)

壁沿いに廻る。柱間軸の方位はN 27° Wを示す。

出土遺物は無い。

238号竪穴住居跡（図版15-(1) 第304図）

V-3区で検出した竪穴住居跡である。僅かに痕跡の残る192号住居を切っているが、遺存状態が頗る悪く、周溝と柱穴が遺存するのみである。南西側の周溝配置からベットを付設していたと考えられる。支柱は2本と思われるが、断面に開示した内の1本は支柱とはなり得ない。南東壁中央には椭円形の屋内土壇を掘り、中から穿み石が出土した。

出土遺物

石器（第305図）

河原石を利用した穿み石がある。表面の中央には径4.0cm、深さ6.0mmと径3.5cm、深さ4.0mmの窪みをつくる。窪みの周辺は敲打痕が残る。表面の風化が著しく、ざらついており石材は不明。大きさは26.8cm×25.0cm、厚さ9.0cmを測る。屋内土壇内からの出土である。

239号竪穴住居跡

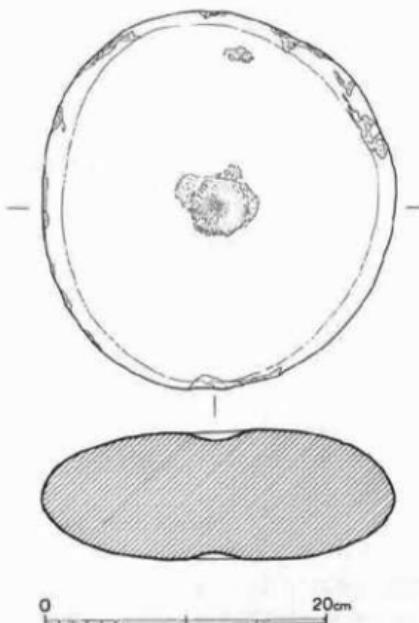
（図版15-(1) 第306図）

240号住居に大半が削平され約1/2が遺存する。西壁のみ計測可能で4.00mを測る。その他詳細は不明で、出土遺物も無い。

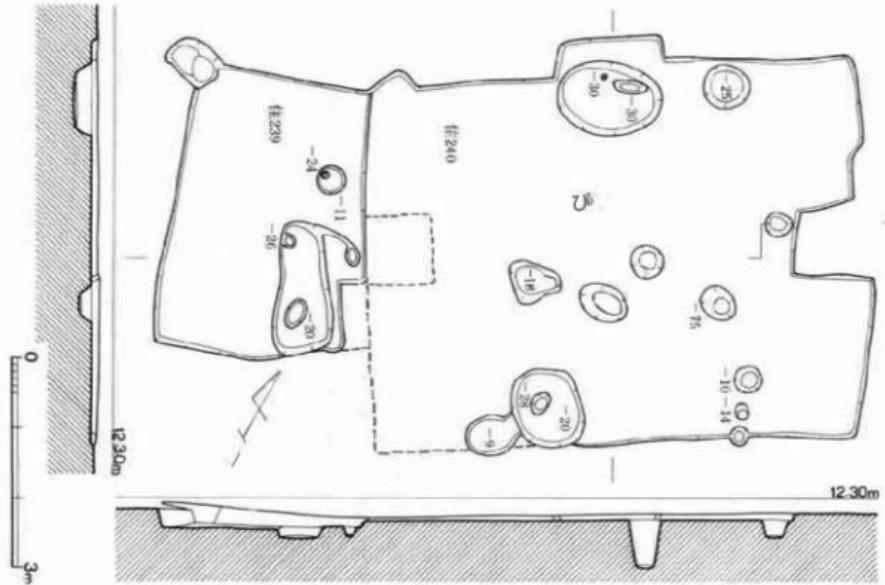
240号竪穴住居跡

（図版15-(1) 第306図）

V-2区で検出した大型の竪穴住居



第305図 238号竪穴住居跡出土石器実測図(1/4)



第306図 239号、240号堅六住居跡測量図(1/80)

跡で、平面プランは長方形を保する。両側の丸窓の中火燶が内側に突出するタイプで、B・C・2区で検出した59号窓穴位置と同一形状を示すと考えられる。規模は長軸が5.90m、短軸が5.40m・5.10m、櫛高7.00mを測る。又ね、煙などは不明。屋内土壁は北端部に焼かれ、設置方向としては斜向な例である。土礫泊いの壁面は若干の造出し状を呈する。

出土遺物は脚台付甕と鉢がある。

出土 遺 物

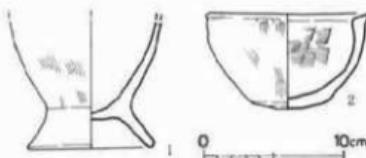
土 器 (図版64 第307回)

1は小型の脚台付甕で胴部上半を欠失する。調整は風化し不明瞭である。復原口径9.1cmを測る。住居内のピットからの出土である。

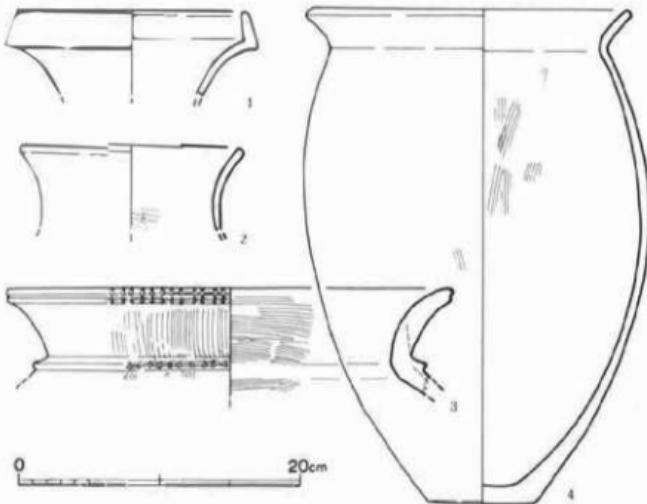
2は厚手づくりの鉢で、口縁を僅かに外反させる。体部は半球形状を呈し、底部は不安定なレンズ状を呈する。調整はハケとナデを併用する。口径11.7cm、器高6.7cmを測る。

243号竪穴住居跡出土遺物

土 器 (図版64 第308回)



第307図 240号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)



第308図 243号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

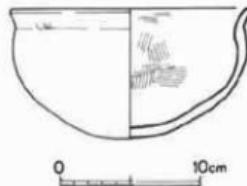
壺は1～3がある。1は折調複合口縁壺の口縁片で、口縁部は立ち気味につくる。擬口縁から頸部にかけては細まる。復原口径16.6cmを測る。2は頸部から口縁にかけて緩く外反する壺の小片である。復原口径16.0cmを測る。3は反り気味に口縁を外反させる大瓶の壺である。口唇部には二段にわたり刻みを配する。肩部には刻みをつけた三角凸帯を貼付する。調整は内外面に粗いハケを施す。復原口径31.8cmを測る。

4は「く」字状に口縁を外反する壺で、最大径を胴中央に持つ。長頸をなし小さな底部を有す。調整は二次加熱を受け摩耗する。口径22.9cm、底径7.5cm、器高35.4cmを測る。

244号竪穴住居跡出土遺物

土 器 (国版61 第309図)

図示した跡がある。口縁部は僅かに外反させる。体部は丸味を有し、底部は丸底である。調整は外面が摩耗し、内面はハケが残る。胎土は砂粒、角閃石、赤褐色粒子を含む。口径17.0cm、器高7.2cmを測る。



第309図 244号竪穴住居跡出土
土器実測図 (1/4)

246号竪穴住居跡 (国版13-(II) 第265図)

R-2区で検出した竪穴住居で、4軒の重複がある。190号、196号住居に大半が削平され実体は把握できない。

出土遺物は殆ど無い。

以上が竪穴住居跡の個別の説明であるが、砲軒数が246軒を数えるうえに紙面の都合及び報告書作成期間の限界などから不掲載の竪穴住居跡が数多くてたことをお詫びすると同時に一覧表にて代用させて頂きたい。

第1表 不標數零穴位點統一箇表

番号	平地形態	説明(図2)	主柱穴	面積(㎡)	屋上土被り	柱	時期	出土遺物		備考
								古墳時代	近世	
7	方墳		—	—	—	—	—	灰陶瓦(筒瓦)、(ルチ、アーチ瓦)		
11			2本(?)	—	—	□	弥生後期(?)			1/4号
14	方墳(?)		2本(?)	—	□	—	一期	瓦片		
17	方墳		—	—	○	—	不明			15号、16号より新
18			—	—	—	—	不明			17号より古
22			—	—	—	—	不明			23号より古
23			2本(?)	—	—	—	一期	鐵小片、鐵石3		23号、T1号より新
24	方墳		2本	—	○	—	弥生後期(?)	ミニチャード、手製品、瓦類		25号より新
25			2本(?)	—	—	—	弥生時代	T1号、瓦類(筒瓦)		24号より古
26	夷力形		—	—	—	—	弥生時代(?)			
28	夷力形	7.8m × 5.6m	2本	31.5	○	—	弥生後期(?)	鐵小片		
30	夷力形		—	—	—	—	弥生後期(?)	金、銀、ソシコ(土製)		一部削平
31			—	—	—	A	1.1号			削平著しく 全く不明
32			—	—	—	—		更多農田土		
33			—	—	—	—	弥生時代	弥生土器少量		19号に切られる
37	方墳	4本(?)	—	—	—	—	古墳時代	鐵小片		カマドオノ
38	方墳(不確)	4本(?)	—	—	—	—	後期	陶灰、鉢(土器)		カマドナシ
42			—	—	—	—	不明			地盤不明
46			—	—	—	—	不明			実体不明
55	夷力形	2本(?)	—	—	—	—	早期	第70回に掲載		9号に切られる
58	長方墳(?)		—	—	—	—	後世時代	鐵1 第80回に掲載		20号より新
57	方墳(?)	4本(?)	—	—	○(瓦類出土)	—	後期	第81回に掲載		55号に切られる
80	不確夷力形	2本	—	—	—	—	弥生時代			
83			—	—	—	—	一期	第96~97回に掲載		64号に切られる
86	夷力形	5.0 × 6.0	2本	30	○	—	—			87号より新、歴矢 有目、馬頭瓦、火炎 形等、88号より古
87	方墳(?)		—	—	—	○	一期	第110~112回に掲載		
88	方墳	2.8 × 4.0	14本	38.5	—	—	後期	第113~114回に掲載		88号、89号を切る 火炎形瓦
94	方墳(?)		4本	—	—	—	中期	第156回に掲載		カマド行け
95			—	—	—	—	弥生時代	第158回に掲載		
108	方墳	2.8 × 4.5	4本	21.2	—	—	古墳時代	第162回に掲載		カマド11
109			—	—	—	—	後期			109号より新
110	方墳	4.0 × 6.0	4本	16.0	—	—	古墳時代	鐵9錠体		カマド有リ
111			—	—	—	—	弥生後期	第184回に掲載		
112			—	—	—	—	弥生後期	第186回に掲載		重複開闢にあり
113			—	—	—	—	不明			実体不明
114			—	—	—	—	弥生時代			115号より古
116	夷力形(?)		2本	—	—	—	二期	第186回に掲載		114号より新
117	夷力形	4.4 × 6.8	2本	29.9	○	—	生田時代			124号より古
118	夷力形	5.0 × 6.5	2本(?)	32.5	?	○	二期	第186回に掲載		
119	方墳	4.0 × 4.0	—	16.0	—	○	弥生時代(?)			
124	不確方墳	3.0 × 2.6	—	8.4	—	—	不明			116号より新
125			—	2本	—	—	弥生時代(?)			削平
133			—	—	—	—	後期			削平著しい
134	方墳(?)		—	—	—	—	X期			削平著しい カマド有リ
141			—	2本(?)	—	—	弥生時代	第226回に掲載		138号、139号より新 カマド有り
149			—	2本	—	—	不明			148号より古 カマド有リ

番号	平 面 形 線	真 長 (m)	七 棒 次	面積 (sq)	屋 内 土 壤	ベト	時 期	出 土 遺 物	備 考
150	長方形	—	2本	29.0	○	—	V期	第231回に陶板	轟道と斜平 削平
152	—	—	—	—	—	—	—	—	実体不明
153	長方形	—	2本(?)	—	—	—	Ⅲ期	第232～235回に陶板	137号より古 134号より新 137号、153号より
154	—	—	—	—	—	—	—	—	—
155	方形(?)	—	2本	—	—	○	弥生後期	第236回に陶板	138号、142号より古 141号より新 141号、142号に切 られ不規
156	—	—	—	—	—	—	不規	—	143号、144号に切 られ不規
157	—	—	—	—	—	—	不規	—	145号、146号に切 られ不規
158	—	—	—	—	—	○	不規	—	151号より新 大半が削平
159	—	—	—	—	—	○	不規	—	159号、160号より直
160	—	—	—	—	—	○	不規	—	—
161	—	—	—	—	—	—	不規	—	—
162	—	—	—	—	—	○	不規	—	大半が削平
163	長方形(?)	—	2本(?)	—	—	○	不規	—	轟道と耕作で削平
164	—	—	—	—	—	—	不規	—	削平され実体不明
170	長方形	—	—	—	—	—	不規	—	165号、174号より直
176	方形(?)	—	—	—	—	—	弥生後期	【第257回に陶板】	165号、170号と重 複
178	—	—	—	—	—	—	不規	—	実体不明
182	—	—	—	—	—	—	不規	—	実体不明
184	—	—	—	—	—	—	不規	—	163号、165号より直 削平され実体不明
187	—	—	—	—	—	—	不規	—	163号、165号、166 号より直
189	—	—	—	—	—	—	不規	—	実体不明
192	—	—	—	—	—	—	不規	—	163号と重複 同一の仕組み
197	—	—	—	—	—	—	弥生時代	—	196号より古
198	—	—	—	—	—	—	弥生時代	—	196号、199号より直
204	—	—	—	—	—	—	不規	—	229号と重複 削平と直
205	—	—	—	—	—	—	不規	—	229号と重複
206	—	—	2本	—	○	—	不規	—	削平著しい
207	—	—	—	—	—	—	不規	—	削平を受け実体不明
210	長方形	—	2本	24.8	○	—	不規	—	200号、211号より直
37	—	—	—	—	—	—	不規	—	214号より古
171	長方形	—	2本	—	—	○	石 扇 戸	—	土26号より新
215	—	—	—	—	—	—	不規	—	215号より古 削平著しい
216	—	—	—	—	—	○	—	—	217号と重複 削平著しい
219	長方形	—	2本(?)	—	—	—	不規	—	削平著しい
220	長方形(?)	—	2本(?)	—	—	—	弥生後期	寮、台付便、ミニチュア	227号、244号より直
226	—	—	—	—	—	—	不規	—	削平著しく実体不明
227	—	—	—	—	—	—	X期	—	225号、244号 削13号とクレジ
228	—	—	—	—	—	—	不規	—	176号より新 230号より古
229	—	—	2本	—	○	—	不規	—	205号、206号 218号と重複
230	—	—	—	—	—	—	不規	—	実體部分多く実體 削平著しい
232	—	—	—	—	—	—	不規	—	234号より古 削平著しく不規
233	万字	4.0×4.5	—	18.0	—	—	I期(?)	【更小所】	削平著しい
234	長方形(?)	—	—	—	○	—	不規	—	削平著しい
237	長方形	5.0×3.8	2本	19.0	○	—	不規	—	削平著しく床面のみ
241	—	—	—	—	—	—	不規	—	—
242	—	—	—	—	—	—	不規	—	重複関係にあり
243	—	—	—	—	—	○	V期	寮、壁	1/2が削平
244	—	—	—	—	—	—	V期	寮、台付便	227号より古
245	方形	—	4本	—	—	—	X期	—	西側にカット有り

(2) 挖立柱建物

1号掘立柱建物 (331040)

$P_1 - 9 - 10$ 区の南斜面で検出した掘立柱建物である。裏側 1 間 × 前行間 2 間の規模を有する小型の建物である。掲載した建物は柱穴の掘方を圖示したものである。建物の東端 $\parallel \Delta$ は主軸が異なるものの柱間が 1 間 \times 2 間の掘立柱建物が併存しており、两者とも同一時期の建物と考えられる。柱穴内から $\parallel \Delta$ 物がないため、建物の上段部の邊界はできない。前行柱間側から $N 11^{\circ} E$ を示す。

3号掘立柱建物 (331040)

調査区の南西端、B - 6 - 7 区で検出された立柱建物である。規模は 1 間 × 1 間の掘立柱で、高床式の倉庫としめて機能を果たしていた可能性がある。

建物の $P_1 - P_1$ の柱間軸の西側には P_1 が埋られており、当該建物に付属する柱穴あるいは隙子穴とも考えられる。柱穴の深さは $P_1 - 68$ ㌢、 $P_1 - 96$ ㌢、 $P_1 - 76$ ㌢、 $P_1 - 64$ ㌢を測り、掘立柱建物の柱穴としては深く埋められている。傍生時代の集落に伴う建物であろう。

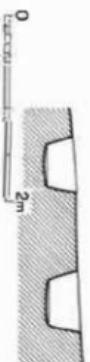
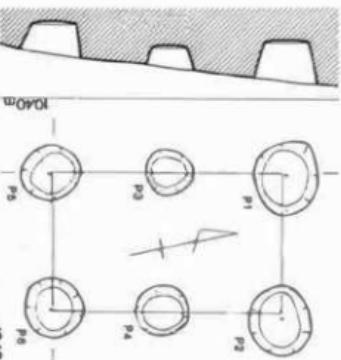
$P_1 - P_1$ の柱間軸の方は $N 10^{\circ} E$ を示す。

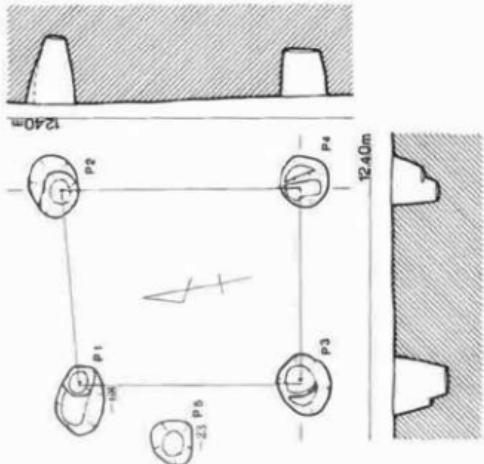
第3表 3号掘立柱建物計測表 (cm単位)

$\frac{P_1}{P_1}$	間	間	前行柱間
$P_1 - P_1$	$P_1 - P_1$	$P_1 - P_1$	
280	280	316	340

第4表 4号掘立柱建物計測表 (cm単位)

$\frac{P_1}{P_1}$	間	間	前行柱間	前行間	前行間
$P_1 - P_1$	$P_1 - P_1$	$P_1 - P_1$	$P_1 - P_1$	$P_1 - P_1$	$P_1 - P_1$
155	$P_1 - P_1$	150	130	125	255
	$P_1 - P_1$				
150	150	130	120	120	250
	$P_1 - P_1$				
305	$P_1 - P_1$	315	190	220	410
	$P_1 - P_1$				
310	200	190	190	190	395



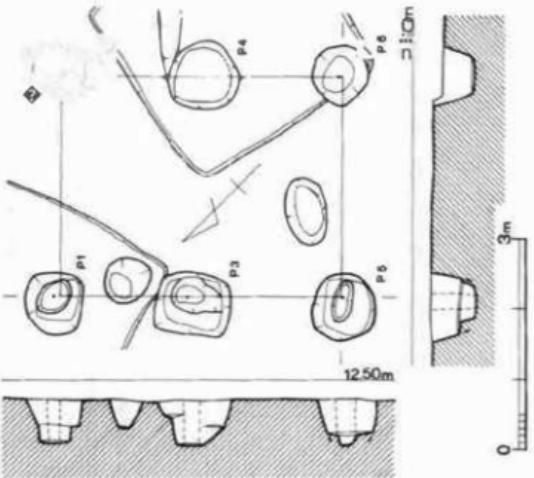


蕊翻注二云

مکالمہ

と新生児の14号住居一筋へ→vへ
り、住居の即時解約する限り、弊「附入
条件」に従つて予算へ→
RJ=60cm、Pj=63cm、Pj=64
cm、Pj=62cm、Pj=63cm、Pj=63cm、
-37cm97-
-37cm97-

秦要訣二三字



卷之三

柱間の方位はN64°Eを示す。

6号掘立柱建物

(第312図)

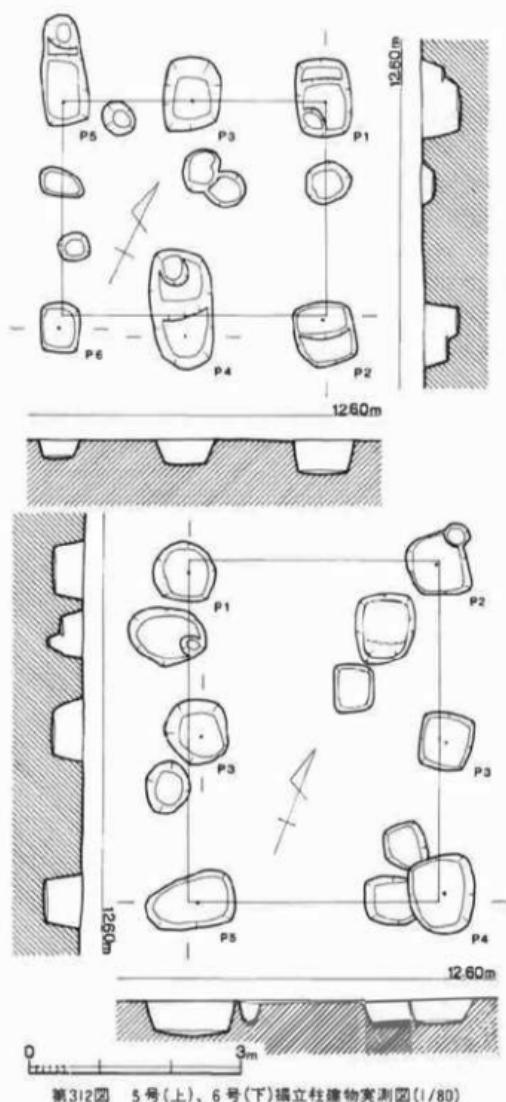
T-2区で検出した掘立柱建物である。梁間は上間×桁行間2間の規模を有す。柱穴内には黒色土が充満しており、柱痕は明確でない。各柱穴の深さはP₁-42cm、P₂-30cm、P₃-42cm、P₄-40cm、P₅-50cm、P₆-35cmを測る。桁行間の主軸方位はN20°Wを示す。

建物の構築時期を示す資料ではなく、住居の配置と建物の設置場所から弥生時代とも古墳時代の所産とも考えられ、時期の決め手となる積極的な証拠はない。

7号掘立柱建物

(第313図)

U-2区で検出した掘立柱建物である。規模は梁間1間×桁行間2間を測る。202号、203号竪穴住居と8号掘立柱建物との重複があるが、8号建物との直接的な切り合いはない。柱穴の



第312図 5号(上)、6号(下)掘立柱建物実測図(1/80)

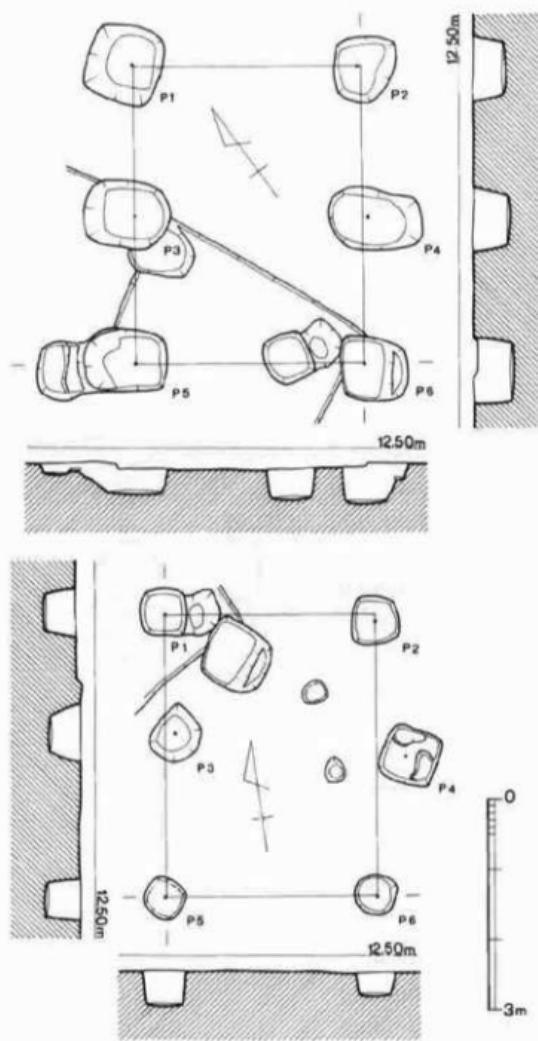
平面プランは方形状を呈するが、必ずしも画一的ではない。

建物の時期は出土遺物がないため明らかではないが、弥生時代後期前葉頃の住居を切っていることから、少なくとも後期前葉以降である。

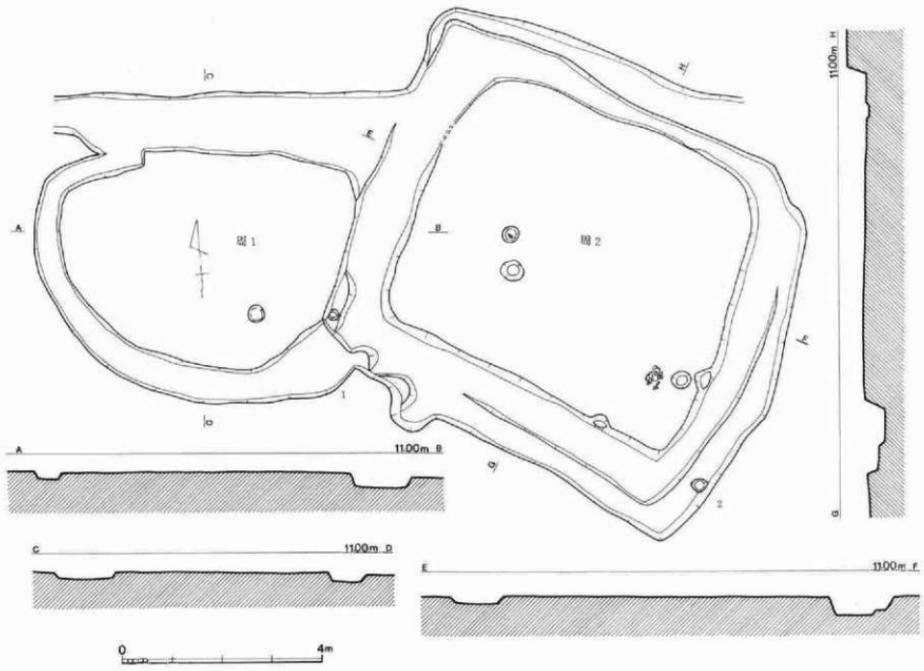
8号掘立柱建物

(第313図)

建物として設定するには柱穴の配置状況から若干の無理があるが、一応8号建物として説明する。柱穴は桁行中央柱が柱間幅上に据られておらずややずれている。柱間からも適正配置にない。各柱穴の深さはP₁-44cm, P₂-40cm, P₃-44cm, P₄-32cm, P₅-50cm, P₆-30cmを測る。



第313図 7号(上)、8号(下)掘立柱建物実測図(1/80)



第3/4図 1号、2号周溝状遺構実測図 (1/80)

(3) 周溝状遺構

1号周溝状遺構 (No.31490)

調査区の南側斜面のP-9区で発見された周溝状遺構である。2号周溝状遺構との重複があり2号が新しい。平面形態は輪円形を呈し、北側辺は削平を受け変形する。規模は東西軸7.00m (東西軸5.00m (復原)、深さ10cm~20cmと浅く、全体的に耕作による削平を受けているようである。出土遺物は少なく甕の小片がある。

出土 遺 物

土 瓦 (No.31590)

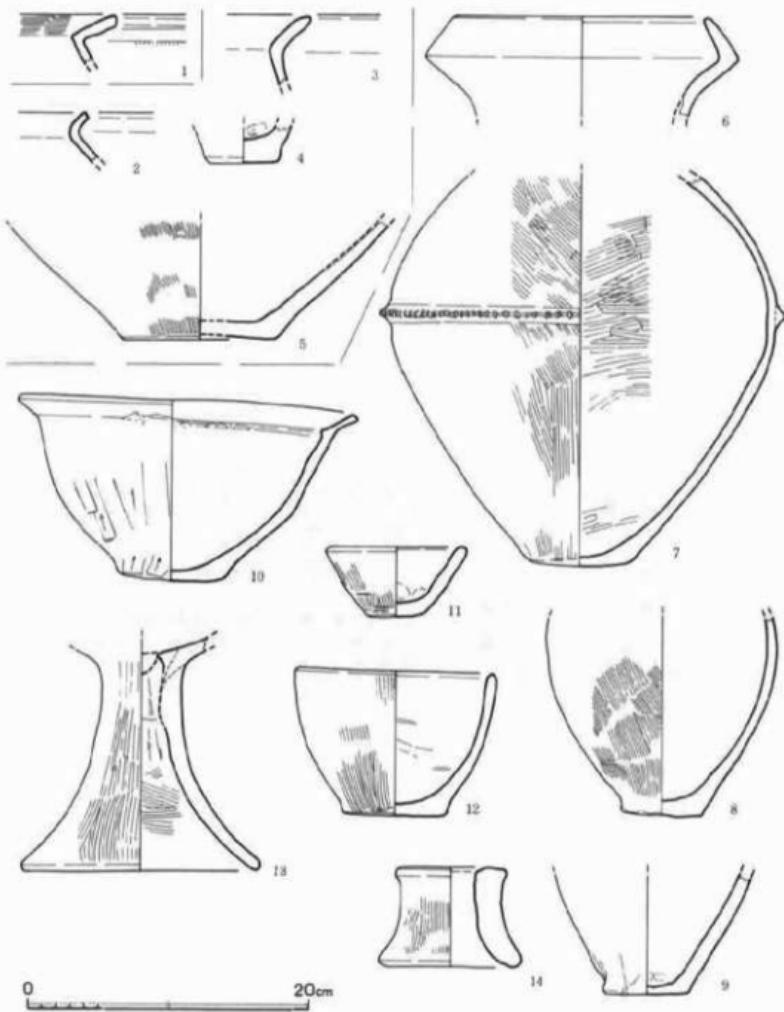
1号周溝状の埋土中から出土した甕の口縁は丸いて「く」字状に外反する口縁を有する。頸部内側の縫合は明瞭である。二次加熱を受け黒くすむ。

2号周溝状遺構 (No.31494)

本選跡内で検出した周溝状遺構で最大の規模を有するもので、平面形状が長方形を呈する。規模は長軸6.90m、短軸5.50m、削の深さは深い部分で40cm、浅い所で14cm前後を測る。しかし、全般的に削平が著しく本來の深さではない。底の内側の方形区域には3個のビットが在るが、周溝に伴うか否かの識別は困難である。内側の方形区域の占有面積は約30.1m²である。

出 土 遺 物

土 瓦 (No.31590)



第315图 1号、2号、4号周青铜状遗模出土土器复原图(1/4)

2～4は壁の小片で周溝内の堆土中からの出土である。2は口縁が高く、周溝の張りは強い。3は二次削除を受け焦茶色を呈する。4は小型の甕の底溝で底径5.3cmを測る。5は甕の底溝片で、内側はハッカとナデで仕上げる。復原底径11.2cmを測る。

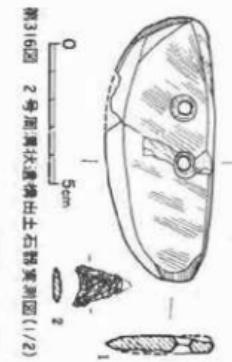
石器(国版64 第316図)

弥生時代後期の鋸面打刃石刀がある。背面は整美な面取りを施し、刃部は鍛錬に研ぎ出る。孔は正面を掘き内径5.0mm、外径1.0cmを測る。全体に刃部を受け落すも同時に表面が剥離する。長さ9.4cm、幅3.9cmを測る。

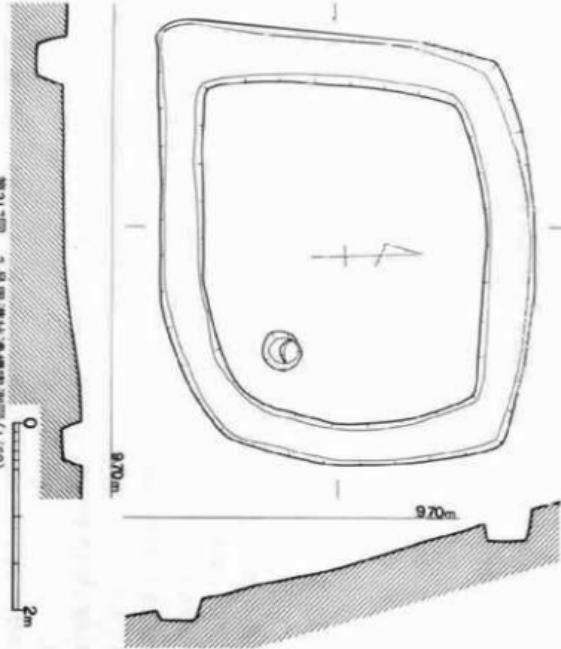
その他、2の黒曜石の石器がある。

3号周溝状遺構(国版29-2) 第317図)

調査区の南西隅で掘出した周溝状遺構で、不整圓凹長方形の形狀を呈し、断面は邊台形である。規模は長軸4.55m、短軸4.00m、溝幅45cm削後を削る。縦斜面に掘込んでいるにも拘わらず底存しており、本來斜面に設置していたことが判る。溝の内側の方形区画部には1個のピットがある。



第316図 2号周溝状遺構出土石器実測図(1/2)



第317図 3号周溝状遺構実測図(1/60)

あるのみで、他の遺構の痕跡はない。

出土遺物は無い。

4号周溝状遺構(第318図)

調査区の南西隅B-7区で検出した周溝状遺構で、耕作による削平で約2/3が欠損している。溝幅は1.20m、深さ40cm前後を測る。溝内の土層堆積では周溝の外側から流水がみられるが、黒色土が堆積しており、掘削した耕土を外側に盛った痕跡はない。溝内からかなりの土器が

出土しているが、いずれも埋土中からの出土で、当該周溝に伴うとは考えられないが、出土した土器と近い時期に機能していたと思われる。

出土遺物は壺、甕、鉢、高杯、器台などの日常用器がある。

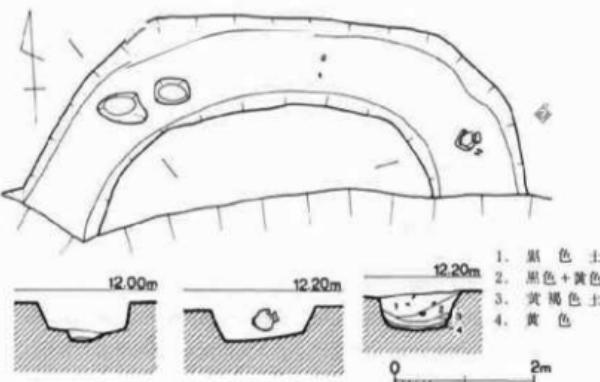
土 遺 物

土 器(図版64 第315図)

6・7の複合口縁窓があるが、色調などから同一個体であろう。口縁の屈折部は明瞭な稜をなす。頸部は欠失する。胴中央には刻みを密に配する台形状凸帯を貼付する。胴下半は細まり、不安定な平底を有す。調整は内外面とも粗いハケを施す。口径18.0cm、底径7.0cmを測る。埋土中からの出土である。

8・9は甕で胴部上半を欠損する。両者とも弱い二次加熱を受ける。8の底径5.9cm、9は6.0cmを測る。

10~12は鉢で10は小型である。10の口縁は僅かに外反させ、頸部内側は低い突起部をつくる。



第318図 4号周溝状遺構実測図(1/80)

体部全体は歪んだつくりである。

調整は副部に擦過痕がみられる以外はナデで仕上げる。口径24.2cm、底径7.35cm、器高12.7cmを測る。12の口縁は直口し体部に丸味を持つ。口径14.4cm、底径7.2cm、器高10.35cm。

13は高环の脚部で柱状部から副部にかけての開きは浅い。調整は副部がハケ、柱状部は箠で磨く。
据部径17.0cm。

14は低い器台で口径7.8cm、据部径10.0cm、器高7.0cm。

5号周溝状遺構

(第319図)

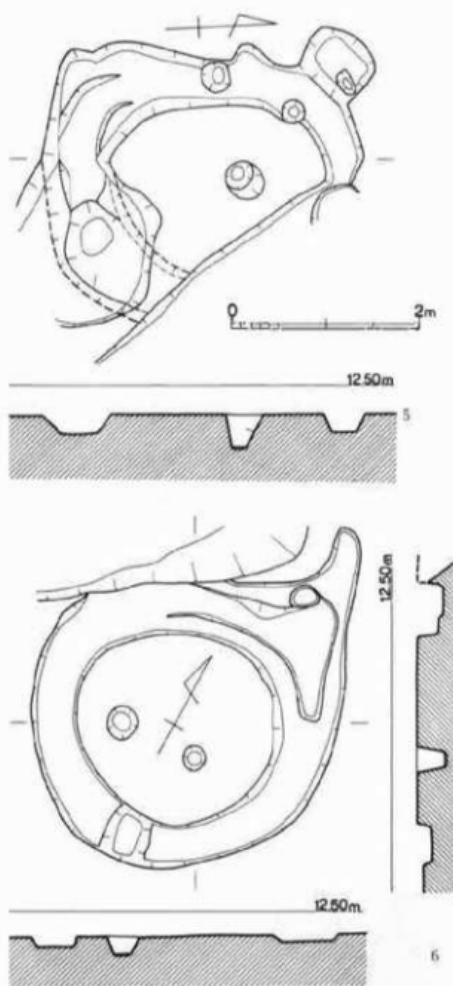
調査区の南西側で検出した周溝状遺構で、12号壁穴住居に切られしており、1/3が欠失する。平面形状は不整円形を呈する。規模は南北軸で3.40m、深さ20cmを測る。溝の断面は逆台形を呈する。内側の円形区画には1本の柱穴がある。

出土遺物は皆無である。

6号周溝状遺構

(第319図)

5号周溝と近接して設置された周溝状遺構で、12号壁穴住居に一部切られている。平面形状は円形、断面逆台形を呈する。規模は



第319図 5号、6号周溝状遺構実測図(1/60)

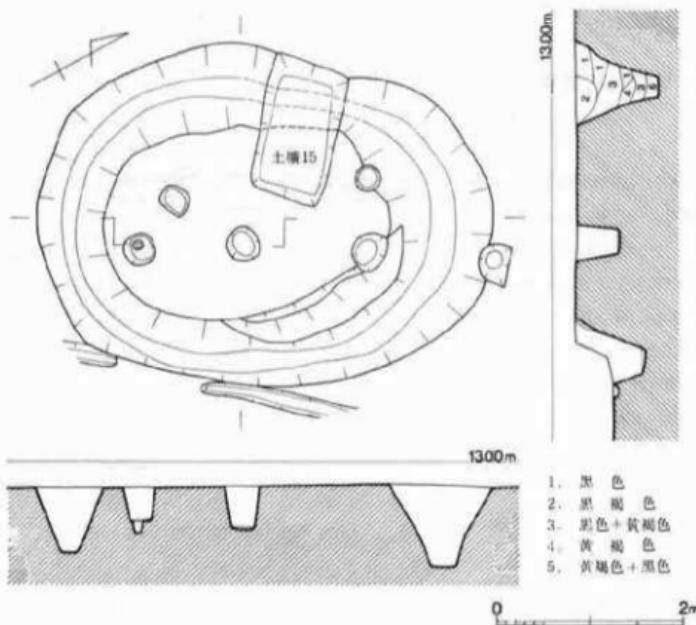
東西軸で3.30m、溝の幅50.0cm～65.0cm、深さ10.0cmを測り、遺存状況は良くない。円形画面内には2本の柱穴がある。

出土遺物は無い。

7号周溝状遺構(第320図)

B-1・2区で検出した周溝状遺構で、59号堅穴住居を切り、15号土塙に切られている。平面形状は椭円形を呈し、断面形はV字状である。規模は長軸4.86m、短軸3.65m、溝の深さ70.0cmを測り深く掘っている。内側の平坦部には5個の柱穴があるが、当該遺構に伴うか否かは不明である。

出土遺物は焼と鉢がある。



第320図 7号周溝状遺構実測図(1/60)

出土遺物

土器 (第321回)

1は知い口縁を「く」字状に外反させる處の口縁片である。二次加熱を受け内外面に煤が付着する。腹原口径26.0cmを測る。

2は鉢の破片で如意状の口縁を有す。外面に粗いテクスチャ、内面はナデる。

8号周溝状遺構 (第322回)

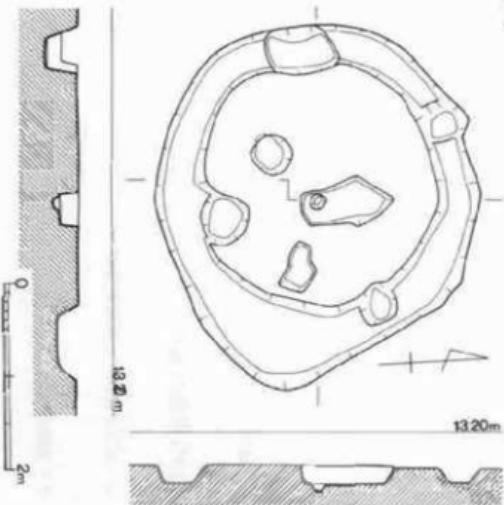
B-1区で検出した周溝状遺構で約1/2か月8分弱に自居に切られている。現存での規模は2.30m、側の深さ10.0cm前後を測り、遺存状態は悪い。出土遺物は無く時期も不明である。

10号周溝状遺構 (第322回)

G-1区で検出した周溝状遺構である。平面形状は円形を呈するが東側は何かの運搬と重複しているため幅広となる。規模は東西軸3.80m、南北軸3.50m、深さ25.0cm前後を測る。西の断面は逆台形を呈する。内部の円形区域に3個のピットと土壤層の埋込みがある。

出土遺物は壺の破片が1点ある。

第321図 7号、10号周溝状遺構出土土器実測図(1/4)



第322図 10号周溝状遺構実測図(1/60)

出土遺物

土器（第321回）

3は壺の底部片で、ハケとナデで仕上げる。胎土は精製され、角閃石を多く含む。底径10.3cmを測る。

11号周溝状遺構（付図1）

F-7区で検出した周溝状遺構で周辺の全ての堅穴住居に切られており、遺存状態が悪い。ここでは遺構の説明は省略する。

出土遺物は磨製石器片がある。

出土遺物

石器（第323回）

磨製石器様の石器片がある。現存での刃部が側面と基部側に研ぎ出しており、石剣その他の石器の再利用が考えられるが、用途は不明。現存長2.2cm、厚さ3.0mmを測る。硬質砂岩製である。



12号周溝状遺構（付図1）

L-3区で検出した周溝状遺構である。時期の不明な141号堅穴住居に切れ、しかも、北側は削平を受けており遺存しない。このため詳細は不明である。

出土遺物は無い。

第323回 11号周溝状遺構
出土石器実測図(1/2)

13号周溝状遺構（付図1）

V-4区で検出した周溝状遺構である。耕作により大半が削平を受け一部遺存するに過ぎない。

出土遺物は無い。

(4) 落し穴状遺構

1号落し穴状遺構 (図版29-(4) 第324例)

B-1・2区で検出した落し穴である。平面形状は開円長方形を呈する。規模は長軸1.75m、短軸90.0cm、深さ1.26m、底面の長軸は1.08m、短軸は82.0cmを測る。覆土は黒色土のみが下層まで堆積していた。両小口部分はテラス状の平坦部がみられ、これが意識的に掘られたのか崩落したのかは明らかでないが、昇降のための施設の可能性を秘めている。他にこの周辺での落し穴状遺構は見当らない。

出土遺物は皆無である。

2号落し穴状遺構 (図版29-(4) 第324例)

O-3区で検出した落し穴で、平面形態は隅丸長方形、断面は逆台形を呈する。規模は長軸1.16m、短軸50.0cm前後、深さ80.0cm、底面の長軸90.0cm、短軸30.0cmを測る。覆土は1号と同様黒色土が充満していた。底面には逆刺用の杭を埋める3個の小ビットが等間隔に掘られており、中央のビットは主軸からややずれていている。ビットの深さは10.0cm~15.0cmである。周辺には同様の遺構はなく単独で設置されている。

出土遺物は皆無である。

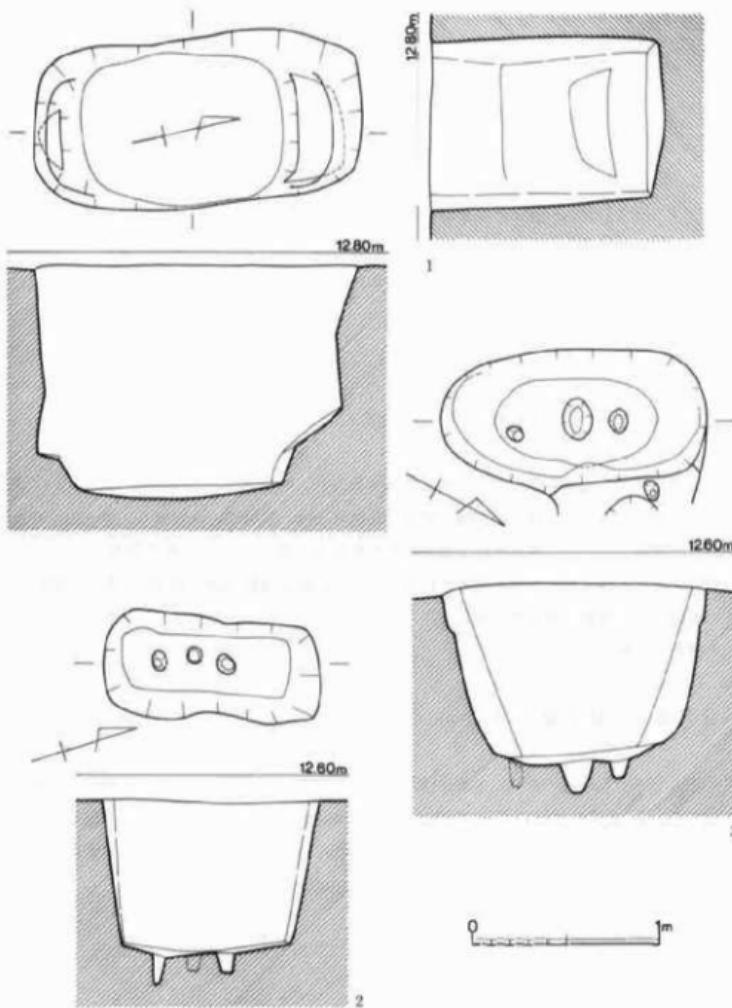
3号落し穴状遺構 (図版30-(1) 第324例)

P-5区で検出した落し穴で、平面形状が椭円形を呈し、断面逆台形である。規模は長軸1.42m、短軸72.0cm、底面の長軸87.0cm、短軸45.0cm、深さは95.0cmを測る。覆土は他の落し穴と同様黒色土の堆積が認められる。底面には3個の逆刺の杭を立てるためのビットが不規則に掘られているが、中央ビットはやや大きめ、深さは10.0cm~15.0cmである。

出土遺物は皆無である。

(5) 土 壤

土壤は26号まで確認したが大小があり、しかも確実に土壤の形態をとっているものとそうでないものがある。ここでは8基を図示したが不掲載の土壤について出土遺物のあるものは遺物のみ



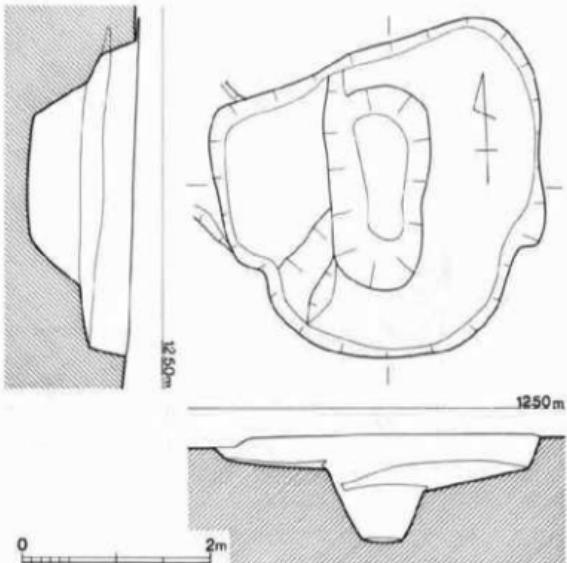
第324号 1号、2号、3号落し穴状遺構実測図(1/30)

の説明とする。

3号土壤(図版30-(z) 第325回)

C-7区で検出した土壤である。平面プランは不規則形に近い形状を示す。2段掘りを呈し内側にさらに小型の複数形の土壤を掘込んでいる。規模は南北軸3.40m、東西軸3.45mを測る。テラス部は緩斜面をなす。内側の土壤は長軸2.17m、短軸1.05m～1.10m、深さ55.0cm前後、上面からの深さは1.15mを測る。

出土遺物は甕・壺
・鉢・塊があり、13



第325回 3号土壤実測図(1/60)

号、19号住居と同一時期と考えられる。機能については定かでない。

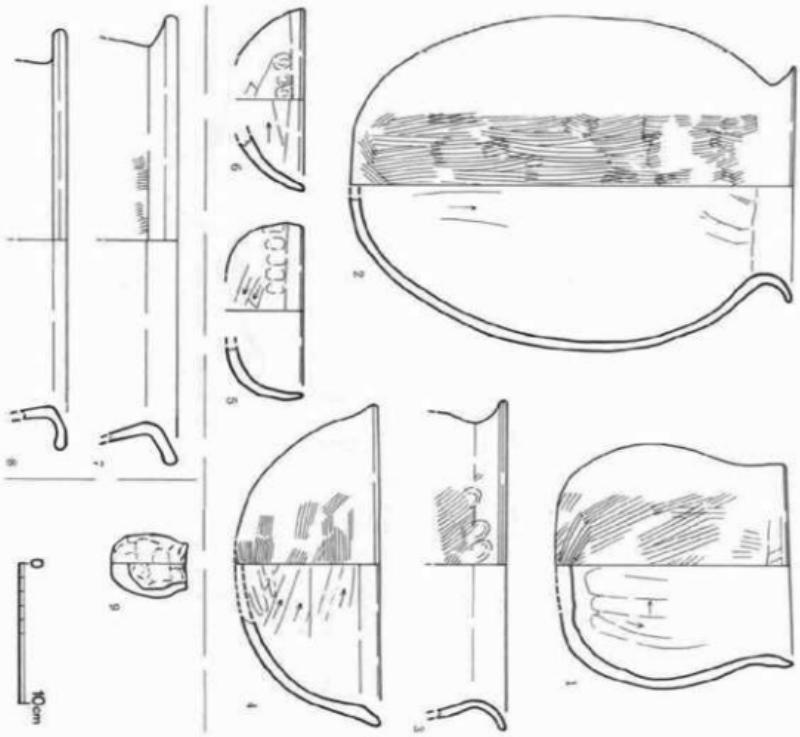
出土遺物

土器(図版65 第326回)

1はつくりの粗い直口壺である。体部が下張れの形状で安定感がある。外面には二次加熱を受ける。調整は粗いハケと箒削りで仕上げる。復原口徑14.5cm、器高16.6cm。

2・3は壺で、前者はほぼ完形である。反り気味の短い口縁を有し長胴をなす。調整は粗いハケと箒削りで仕上げる。口径16.6cm、器高31.6cmを測る。3は器壁の薄い壺の口縁片で復原口徑23.3cmを測る。

4は口縁部を若干外反・肥厚する鉢である。胴部はやや丸味を有す。調整は外面がハケ、内面



第326図 3号、6号、9号土壺出土土器実測図(1/4)

は削る。復原口径23.0cm、高さ10.2cm。

5・6は所で、5は口縁を内側させ柄から底部にかけては張る。6の口縁は直線的で、腹溝は
細まる。5の復原口径12.2cm、6の復原口径13.0cmを測る。

土 器 (第326図)

7・8の甕の口縁部片がある。7は「く」字状8は逆「L」字状の口縁を有し、後者は口唇部が肥厚する。両者とも最大径が口縁部にある。前者の口径32.0cm、後者は30.0cmを測る。

8号土壤 (第327図)

D-4区で検出した土壤で、平面形状は不整円形を呈する。規模は1.90m×1.75m、深さは35.0cmを測る。周縁及び底面にピットがみられるが、当該土壤に伴うか否かは不明である。覆土は黒色土が堆積していた。

出土遺物は無いが、集落に関係する遺構であろう。

9号土壤出土遺物

土 器 (図版65 第326図)

9の手捏ね土器がある。口縁は内傾させ、小さな底部をつくる。器面は粗くナデている。口径3.3cm、底径2.2cm、器高5.2cmを測る。

11号土壤 (第327図)

C-2区で検出した61号竪穴住居の床面下で検出した土壤である。平面形状は円形状を呈し、規模は東西軸2.05m、南北軸2.15m、深さ20.0cm前後を測る。底面には2本の柱穴があるが、その内の1本は61号住居の支柱穴である。

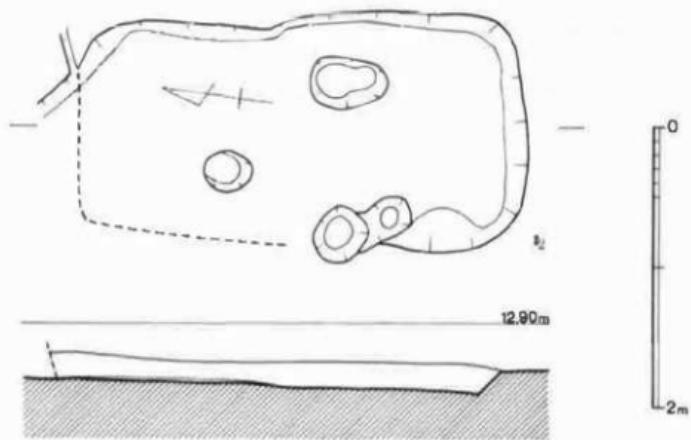
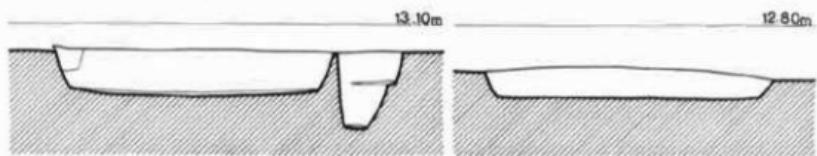
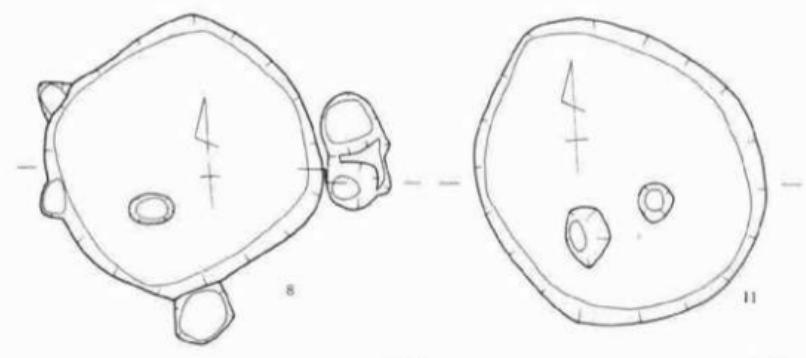
土壤の用途は明らかでなく、出土遺物が無いことから時期も不明である。

12号土壤 (第327図)

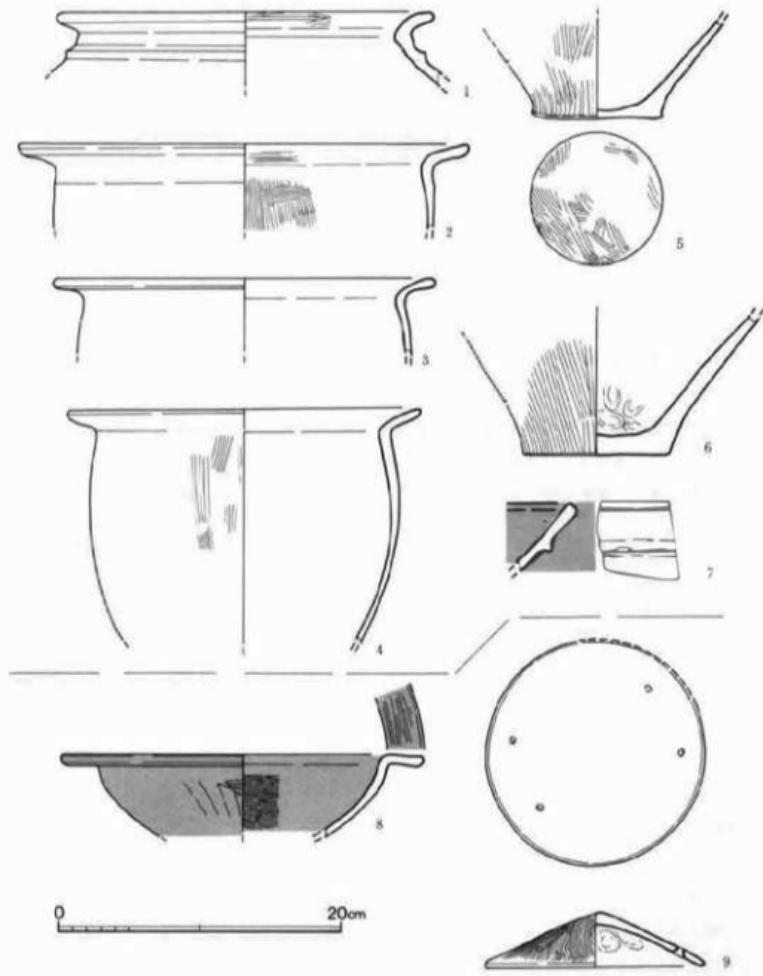
C-2区で検出した土壤であるが、61号、62号住居と重複し2軒の住居よりも古い。北壁と西壁の一部は住居により削半を受け遺存しない。平面プランは復原すると長方形となる。規模は東壁と南壁が計測可能で3.10mと1.60mを測る。

出土遺物は壺・甕・丹絞り磨研土器がある。

出 土 遺 物



第327圖 8號、11號、12號土壤實測圖(1/40)



第328図 12号、17号土器出土土器実測図(1/4)

土 器 (図版65 第328回)

1は「く」字状の口縁を有す壺の口縁片である。肩部には低い三角凸帯を貼付する。口縁内面に煤が付着する。口径26.6cmを測る。6は壺の底部片である。底径10.4cm。

變は2~5がある。口縁は逆「L」字状に近い形態をなし、逆「L」字から「く」字状に変化する過渡的様相を示す。口縁部に最大径を有す。軽体的には器壁を薄くつくる。2の復原口径32.0cm。3は27.0cm。4は25.0cmを測り、2、4は弱い二次加熱を受ける。5は底部片で外面のみならず底部にも粗いハケを施す。二次加熱を受け黒くすむ。底径9.4cmを測る。

7は円錐り磨研の土器で、小片のため器種は明らかでない。口唇部は肥厚し、口縁下には三角凸帯を付せる。胎土は精製された粘土を使用しつくりの丁寧な土器である。

14号土壤 (第329回)

13~3区で検出した土壤で平面形態が梢円形を呈する。規模は長軸2.18m、短軸95.0cmを測る。南・北の小口部分はテラス状をなし、中央部が一段と深くなり、最深部で60.0cmを測る。出土遺物は無く、機能も明らかでない。

17号土壤出土遺物

土 器 (図版65 第328回)

8は高环の杯部片である。口縁は中期の鋸先口縁の系譜を引くもので、逆「L」字状口縁を呈する。肩部は丸味を有す。調査は内外面とも円錐り磨研である。復原口径25.6cmを測る。

9は蓋形土器で精緻なつくりである。基部には焼成前に4孔を外側から穿つ。調整はハケとナデで仕上げる。基部径15.6cm、器高3.35cmを測る。

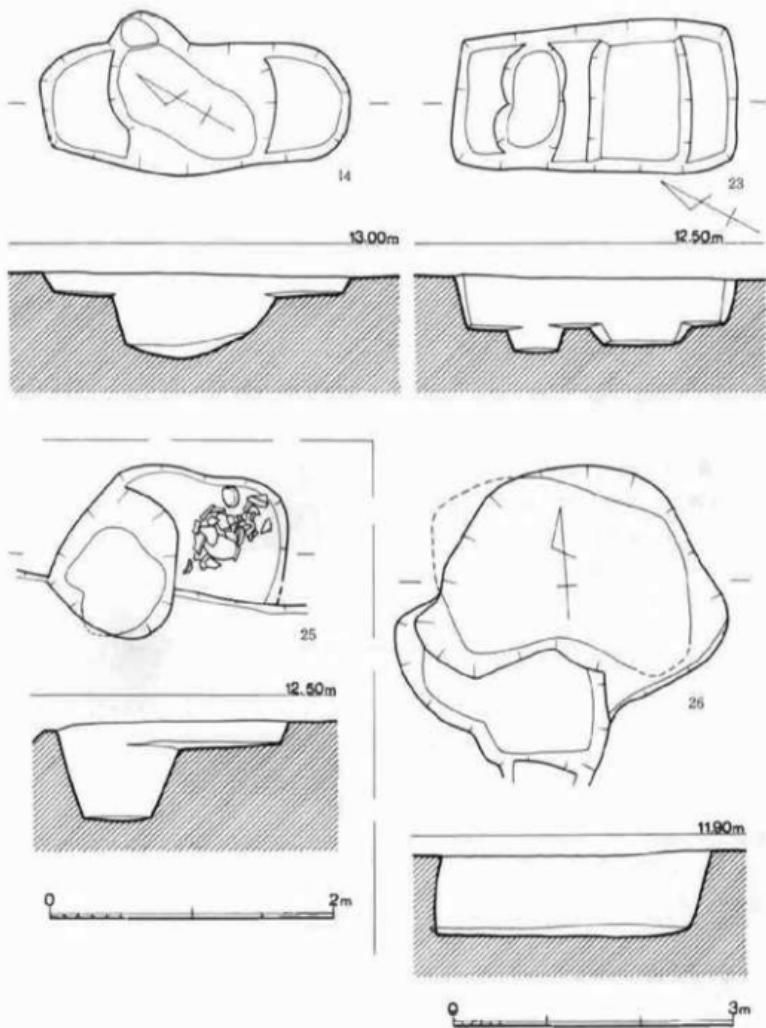
23号土壤 (第329回)

R~4区で検出した土壤である。R~3・4区とS~4区周辺は窓穴住居が設営されておらず、一概の中央広場の機能が窺える。

土壤の平面形態は長方形を呈し、底面2箇所に深い掘込み部を設けている。規模は南・北壁が95.0cm・90.0cm、東・西壁1.88m・1.95mを測る。

出土遺物は無い。

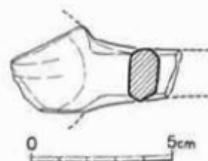
24号土壤出土遺物



第329図 14号、23号、25号、26号土塁実測図(1/40、1/60)

土製品（第330図）

土製玉杓子の破片がある。柄の断面は長方形を呈する。全体に二次加熱を受け淡く赤変する。



25号土壤（図版30-（b） 第329図）

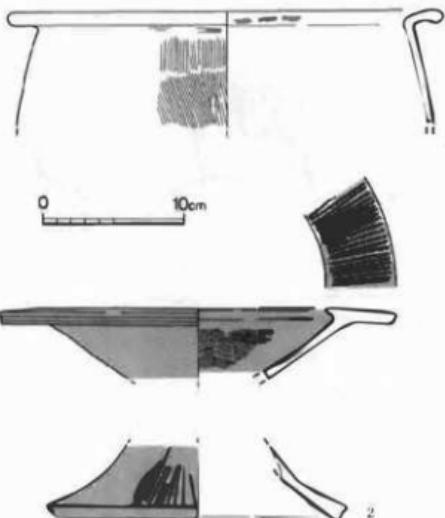
T-1区で検出した土壤である。ピットと201号堅穴住居に切られており、約1/2が欠損する。平面形状、規模などは不明で、深さ20.0cmを測る。遺物は甕と丹塗り磨研の高杯があり、その傍からは10.0cm前後の河原石が出土した。集落祭祀の関係遺構であろう。

第330図 24号土壤出土
土製品実測図(1/2)

出土遺物

土器（第331図）

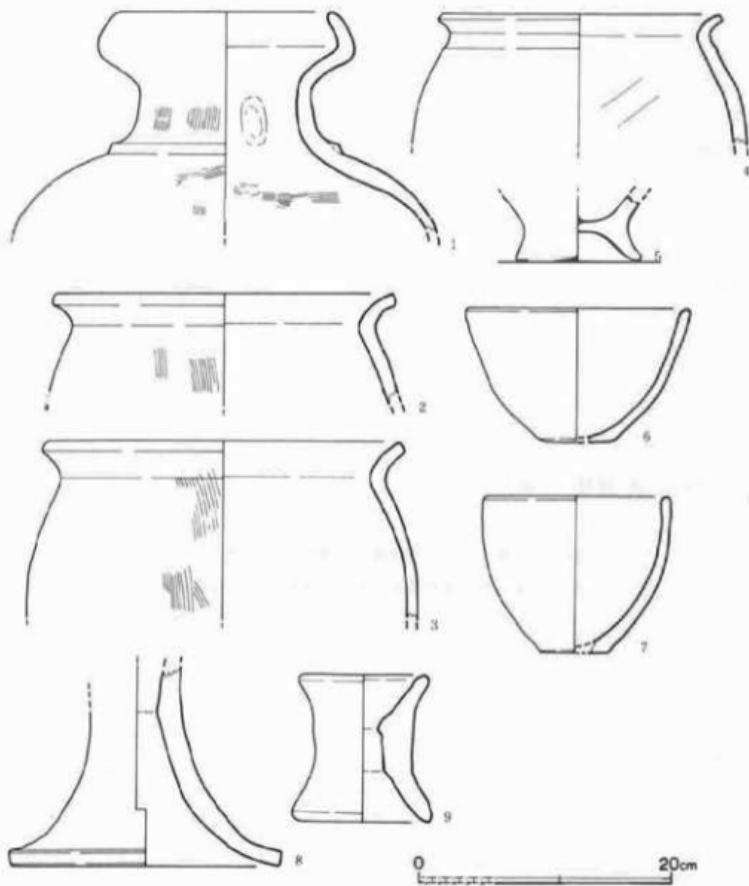
1は甕の口縁部片で、逆「L」字状の口縁部をつくる。口唇部を肥厚させ、最大径が口縁にある。調整は外面に細いハケ。内面はナデる。復原口径31.0cmを測る。



26号土壤（第329図）

第331図 25号土壤出土土器実測図(1/4)

T-4・5区で検出した土壤で、214号堅穴住居に切られているが、調査時点で同時に発掘をした。平面は不整形プランを有し、南側にはテラスを設ける。断面形は部分的にオーバーハング気味に削削している。規模は東西軸2.90m、南北軸はテラス部分を含めると3.15m、深さ85.0cm



第332図 26号土壙出土土器実測図(1/4)

面後セ尋る。

出土遺物は壺・甌・鉢・高杯・蓋台があり、器種も豊富である。

出 土 遺 物

土 器 (第332図)

1は蓋合口縁部で断面の縁は不明瞭である。底端は短く、周辺には底・三角内縫を貼付する。肩部の張りは鋭い。腹深口径14.9cm。

2は2~5がある。2~4はすべて開口縁タイプの縁で、「く」字状口縁を有し最大併が脚部にある。脚部は二次加熱を受け器面が堅密する。2の口径は24.2cm、3は25.5cm、4は20.2cmを測る。5は低い脚台を有する變で、脚部径9.0cmを有す。

6~7は外の腰片を復原実測したものである。6は脚部から縁にかけて開き、7は脚部が丸味を有し口縁は直口する。6の口径16.0cm、底径5.5cm、器高9.3cm、7の口径13.3cm、底径5.0cm、器高11.0cmを測る。

8は高脚の脚高片である。高杯にして胎土が不規で、砂粒を多く含む。復原底部厚19.3cmを測る。

9は小盤の器台で上下対照的な外反度を示す。口径9.2cm、底径9.9cm、器高10.3cmを測る。

土器はすべて埋土中のもの出土である。

(6) 窒穴状遺構（窓）

1~6区で検出した窓穴状遺構で、36号住跡の北東傍に設置する。平面アーチ形を呈し、規模は2.00m×2.20m、深さ20.0cmを測る。底面には柱穴などは無く、用途は不明である。出土遺物は枚外がある。

出 玄 田 窓

土製品 (第335図 第336図)

一部欠失するが整美なラグビー球状を呈する枚外がある。長さ4.3cm、△大径2.3cmを測る。△≈19.0°である。



0
2cm

第335図 窒穴状遺構出土
土製品実測図(1/2)

(7) 槽状遺構 (第341図)

V・X-1区で検出した槽状遺構で、W-1区で途切れる。その間隔は9.0mを測る。構築は1.0mで削平されたため遺存状況は良くない。245号住跡（古墳時代後期）に引られており、弥生時代の所産と考えられるが、機能的には明らかでない。可能性の問題としては弥生時代の墓葬に伴う墓地を開拓する溝と考えることもできよう。

(8) 墓地

調査区内で墓地を検出したのは、73号窓穴住居内の中世墓は除くとしてX-2区の弥生時代の3基のみであるが、調査区の北東40.0m付近では甕棺墓の存在が周知の事実として挙げられる。今回の調査で検出した墓地はその南限とも受け取られよう。

出土した3基の墓地は各々異った形態を示し、石蓋土壙墓、木蓋土壙墓、横口式木蓋土壙墓である。しかも、近接した配置を示していることから家族墓的様相を示唆している。

石蓋土壙墓 (図版31-(2) 第334図)

主軸をほぼ東西に向けた石蓋土壙墓で、2段掘りの長方形の墓壙を掘っている。墓壙の規模は南・北辺2.50m・2.40m、東・西辺1.45m・1.25m、テラスまでの深さ35.0cm前後である。墓壙内には緑泥片岩の板石を鱗状に覆い蓋石とする。蓋石は全面に灰白色の粘土で目貼りを施し、被葬者を丁寧に埋葬していた。被葬者を埋葬する土壙の両小口には緑泥片岩の板石を立てているが、側壁には板の痕跡すら確認できていない。埋葬した土壙の規模は長さ2.00m、幅は東小口部で40.0cm、西小口部で55.0cmを測り、西側が幅広となる。しかも底面には多くの朱の散布が確認できたことから頭位を西側とする。被葬者を埋葬した後に頭部から脚部にかけて鱗状に蓋を覆ったことが理解できる。なお腰の部分にも朱が認められた。床面には全面に灰白色の粘土を舟底状に貼り詰めている。

土壙内には約1/2ほど土砂が流入しており、中からは人骨は無論のこと副葬品も出土していない。

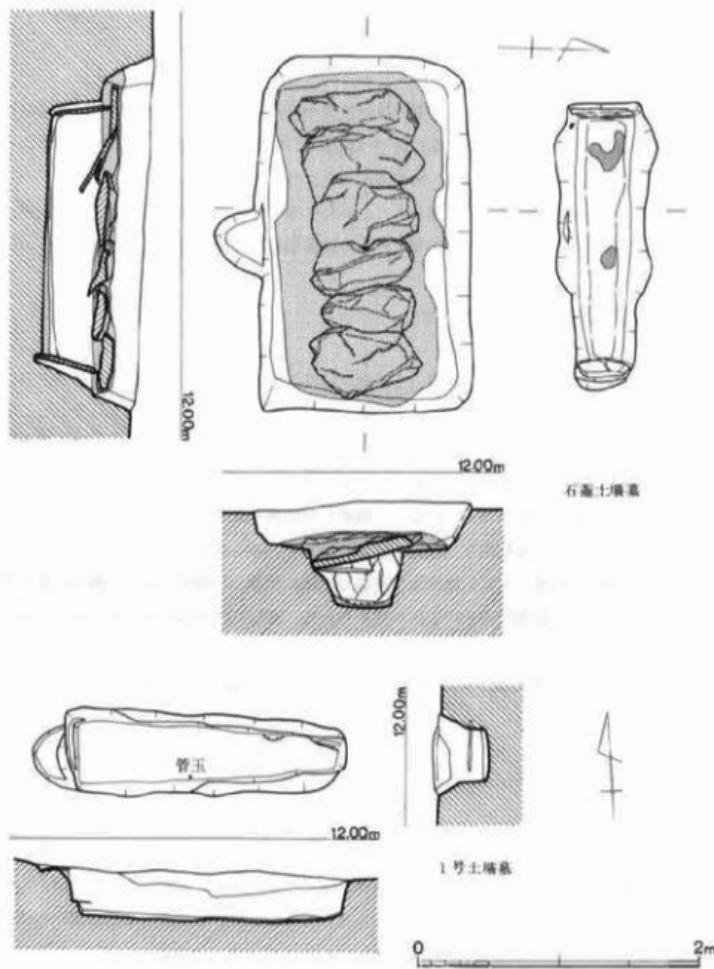
1号土壙墓 (図版30-(4) 第334図)

石蓋土壙墓の北側傍で検出した木蓋土壙墓である。規模は長辺が1.90m・1.95m、短辺が28.0cm、80.0cm、深さ35.0cmを測り、石蓋土壙墓同様西側が幅広となることから頭位は西側となる。

床面には朱の散布は確認できておらず、人骨も遺存していない。被葬者の右側腰部から碧玉製の管玉が出土したが、残念ながら移動時に紛失した。

2号土壙墓 (図版31-(1) 第335図)

石蓋土壙墓と1号土壙墓に挟まれた状態で検出した小型の土壙墓である。前記の墓を夫婦墓とすればその子供を埋葬したことが考慮される。墓地の形態は所謂横口式木蓋土壙墓で上部が崩壊

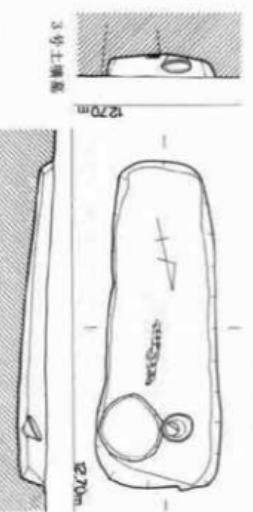
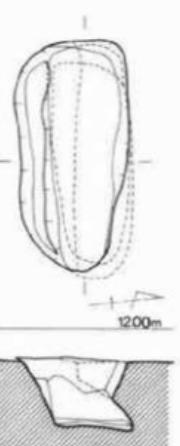


第334图 石墓土堆墓、1号土堆墓实测图(1/40)

していた。規模は長軸1.20m、上面の面積30.0cm²、奥行で60.0cm、深さ35.0cmを測る。内部には広範囲にわたり朱を散布していた。

出土遺物及び人骨は温存していない。

3号・摸謨 (4033594)



E-4区で検出した73号竪穴住居跡内に埋込込んだ土壙器である。黒色土の覆土中に埋込んでいたため床面まで掘下された時点では確認した。平面形状は圓角長方形と見し、規模は長軸が1.70m、短軸は北側が60.0cm、南側が40.0cm、現在の深さ8.0cm～15.0cmを削り北側が深くなる。端には幅1.5cmなる「三」に向けられ埋蔵していたと考えられる。頭部は青磁筒と小皿が埋葬され、被葬者の胸部に別れたと考えられる副刀が出土した。

出土遺物から土壤碳の時期は13世紀前半項と考えられ、

出土 四 出土 四

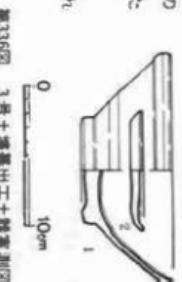


図3355図 2号、3号土築墓実測図 (1/30)

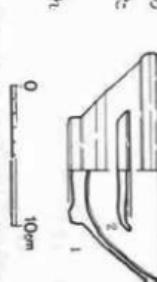


図3356図 3号土築墓出土土器実測図 (1/4)

土器 (4033590)

陶磁器 1は三面輪轂を有す青磁の高台付Eの完形品である。底部には大きく厚みのある高台を付せる。底部の内側ノト面側下半部で施釉をし、底部付近は露胎を示す。胎土は精製されてお

り。微量の砂粒を含む。白緑色の色調をなす。口径16.4cm、高台径7.6cm、器高6.4cmを測る。

土師器 小型の皿の完形品がある。底部は糸切痕が残る。口径8.5cm、底径6.8cm、器高0.9cmと低い。

鉄 器 (第337図)

土壤甌の床面から出土した短刀の完形品である。全体に柄と基部の木質が残り全容は把握しにくい。刃部と背部は関付近で直になり、刃先部に延するに従って反りを持つ。刃部は中央部で研ぎ減りが目立つ。両側をなし、基部には1孔の目釘穴を穿つ。目釘穴には釘が破損して残っている。基の先は木質が残り不明瞭であるが、尖るタイプのものであろう。全長35.0cm、峰の幅6.0mm、基長9.6cmを測る。

(9) その他の遺物

P-3 出土遺物 (図版66 第338・339回)

2・4の砥石がある。両者とも硬質砂岩の石材を使用する。2の研面は5面、4は4面を数える。2の現長6.5cm、3は約1/4を欠失しており、現長12.5cmを測る。

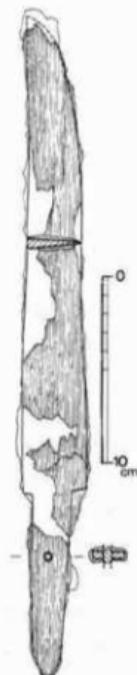
第337図 3号土壤甌出土
鉄器実測図(1/3)

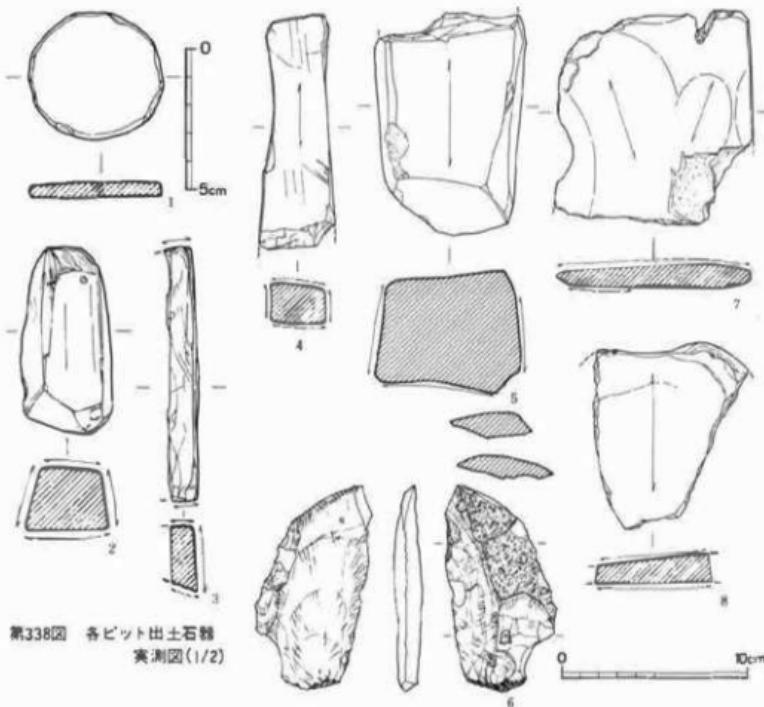
P-28出土遺物 (図版66 第338回)

1の強凹片岩製の円盤がある。周縁は図示した下方のみを磨っており、未製品の感を受ける。幼獣車の未製品の可能性がある。径4.6cm、厚さ5.0mmを測る。重さは21.7gである。

P-32出土遺物 (図版66 第339回)

5の花崗岩質砂岩の仕上げ砥石があるが、約1/2を欠失する。研面は4面を数える。黄白色の色調をなす。現長12.0cm。





第338図 各ピット出土石器
実測図(1/2)

第339図 各ピット出土石器実測図(1/3)

P-127出土遺物 (第338図)

3のフリント状の細長い石器がある。図示した上下2面を摩り平滑となる。一般的に砥石に使用される石材ではなく、用途は明らかでない。現長9.0cmを測る。

P-139出土遺物 (図版66 第339図)

6のサスカイトの石材を使用した不定形石器がある。片面を一部敲打し刃部を形づくる。片面には基部状を叩き出している。現長11.0cmを測る。

P-146出土遺物（図版66 第339図）

8の粗惡な縁泥片岩を使用した砥石がある。研面は表裏の2面で、表は平滑で裏面はざらついている。

P-213出土遺物（図版66 第339図）

7の縁泥片岩製の砥石片がある。研面は2面で、表面は2方向に研ぎ込んでおり平滑となる。裏面は一部に研面を残す。上部側面には刃部で敲打した痕跡が残る。現長11.2cm、厚さは1.2cmと薄い。

VI おわり

森ノ木遺跡は標高12m前後の低位丘陵の面積約15,000m²を調査したが、学校建設に伴う緊急調査の観点から調査範囲の制限を受け約3ヶ月間の短期間に調査であり、十分な調査体制のもとでの実施は不可能であった。しかも、検出した遺構は墓穴住居を中心とした約246軒もの莫大な集落群であり、極めて調査した状況を示していた。その規模からしても、調査期間及び調査体制に不備があったことは否めず、今後の反省課題を残したものといえる。

ともあれ、所蔵後における寄生馬代を中心としたこれはどの大規模集落はいまだ発見されておらず、当該地力の寄生馬代の一指標ともなる資料であり、慎重な検証及び分析が重視されるべき、何分、報告の時間的制約があり、この場では集落の時期別変遷過程とそれに付随する若干の問題点を述べるに留め、いまだ引掛け資料の提示の無い所蔵後後の寄生馬代後期の土器編年については機会をあらためて述べることにする。

森ノ木遺跡の集落変遷について

当該遺跡で検出した遺構の内訳は、縄文時代の窓なし穴状遺構3基、弥生時代中期から古墳時代後期（主に6世紀後半から7世紀初期）の墓穴住居246軒以上（削平された跡形を含める）と300軒以上）、掘立柱式8軒以上、圓筒状遺構12基、土塹26基、窓状遺構1条、墓地4基（中世墓を含む）などがあげられる。しかも、当該地には古井に伸びる低位丘陵の所蔵斜面の一部を調査したに過ぎず、この遺構がどれ程の規模を有し、墓穴住居の推定総数は現時点のものかは計り知れない。

ここでは検出した略少住居と出土土器資料をもとに集落の変遷過程（土器の変遷過程にも寄かる）を森ノ木一期から二期に区分して説明したい。当然、この区分には1号期円柱のa、b区（分）とすべき箇所があると考えるが、…此この項では1つの日安として述べ、別段に詳細な範囲を加える必要があろう。調査した墓穴住居の中で最も多くの時期別別の住居があり、一期には断言できないが、ここでは時期の判別した住居の範囲内で考えたい。なお、住居の変遷期が必ずしも土器の編年とは一致しないことを断つておく。

森ノ木一期の集落

1期の墓穴住居は14号、48号から50号、51号、63号、78号、81号等46軒が相当する。これらの中穴住居は重複するすべての住居より古く、調査区内で最も古廟、古墳された集落である。既に

での位置を見るとP区の西側にのみ分布しており、西、北側調査区外に拡大すると相間される。しかも、C-2、3区及びD、E-1、2区が広場として認定され、広場Aとしたエリアとは関連性はないと考える。

なお、調査区の東側T-1区で祭礼土壇の25号土壇を検出しており、当該土壇が集落祭祀としての位置付けが可能であれば、周辺の時期不明の聚穴住居はエリアを更にする集団とも相應であります。

この時期に共存する土壇群を見ると、帝においては48-1の鍋先状口縫及び袋状口縫があり、堀は「T」字状、逆「L」字状の口縫が主体を占めるが、63号住居の共存遺物を見ると逆「L」字状口縫と「く」字状口縫が共存しており、63号住居は一期よりも後出する可能性がある。ともあれ、当該期の住居群は調査区内で発見した基本的エリアである広場Aを共有する集団とは異集団と考えられ、一期では広場Aは機能していないと解釈されよう。

森ノ木II期の聚落

調査区内での当該期の聚穴住居は、一期に比較しかなりの増加傾向を示す。設営状況も広場Ⅲに認められ、区域的に概観すれば広場Aを面臨する形で設営する集団と広場Bを共有するグルーブとか存続しているかのような配置状況が窺取できる。しかし、広場に対しても各住居の主軸を必ずしも直交させる設営方法は採用しておらず、底は、高い板とした配置規制の他は特別細かい規制は存在しないと考えられる。

個々の聚穴住居を見ると一期の住居に対して大型の聚穴住居が出現し、59号住居のような大型で特異な形態の住居の出現が注目される。この住居の設営場所を二期のみの聚穴住居で見る限り特段選定されたエリートに配置されたとは看取できないか、出土土器（特に甕から）で判断すれば、逆「L」字と「く」字状口縫が共存しており、統続的な設営を考える上で一期の時期に併設していたとも受け取られ、一期の住居を加えて考えれば59号住居を小核として個々の住居が配置されているとも見てとれる。何れにせよ、現況では一期から二期へ移行する時点で広場A、Bを核とする集団規制が明確に把握できることが指摘されよう。なお、周溝状遺構が出現するのも当該期からである。

出土土器で見ると、帝は中期の袋状口縫の系譜を引く所謂複合口縫が出現する時期であるが、いまだ簡析部の後は不明瞭で型部は粗く短い。鍋先口縫の系譜を引くタイプは鍋先端が保存するか退化し、31号住居の2のように逆「L」字形に変化する。逆では逆「L」字状の口縫は袋を削り、「く」字状に鋭く外反する口縫を有する型に統一される。尚ほはトヨ特有の鍋先状口縫が残存するが、胴部はやや深くなる。

森ノ木Ⅲ期の集落

当該期にも広場A、BエリアはⅡ期の規制を踏襲しており、円空間から逸脱して設営した堅穴住居はなく秩序は保たれている。現況では広場Aを中核としてⅢ期よりも広範囲な分布状況を示しており、集落の一層の拡大が認められる。拡大するにも拘らず設置規制から逸脱しておらず、共同意識の顕在化が窺われる。

これに対してP～Vの範囲内で検出した広場Bに対応する一群は、広場Aを中心とする一群に比較して意識的な設置が認められないことが指摘でき、広場Bが当該期に機能した確証は認め難い。

個々の住居ではⅡ期で認められた大型の住居がⅢ期でも確認でき、この傾向もⅡ期を踏襲した形を示唆している。しかも、広場の前面に配置されていることは注目されよう。58号住居に見られる造り出し部は堅穴住居の出入り口と考えられるが、造り出し部を持つ住居はⅠ期からⅢ期まで継承されている。しかし、広場とは直交する方向に設けられており、出入り口が必ずしも中央広場方向に付設されていない。住居内の屋内土壌を出入り口とする考え方もあるが、大半が住居の南東側に設置しており、広場に対応する設置方法は採用していない。また、97号、159号住居が屋内土壌の設置方位を異にするなど、仮に屋内土壌が出入り口と仮定しても中央広場に対応した形はとらない。

出土土器では、34号住居の一群はⅢ期としたが、掲載した1の複合口縫壺の口縫の屈折部の後は明瞭であるにも拘らず、鋤先口縫壺が残るなどⅡ期の余韻を窺いでいる。58号住居では共伴する甕は吉相の感を残し、Ⅲ期内のa、bの差とも考えられるが、時間的都合から検討は別の機会に譲りたい。

森ノ木Ⅳ期の集落

Ⅳ期の集落は、Ⅰ期からⅢ期の広場を踏襲する形で配置がなされたのに対し、住居の設営規制に乱れが生じ93号住居の広場A内の設営を見る限り広場Aは無視された形となり、集団内の規制緩和の兆候が窺われる。規制の崩壊が何に起因するのか定かでない。仮にそうでなければ、広場Aのエリア内に特殊な堅穴住居を設営したことになるが、特別な規模や形態を有した住居でもなく、普遍的な住居形態を示すことから集落の設置形態が変化したことになる。

出土土器では、44号と61号住居出土の甕は同形状を呈し、最大径が洞部中央に有す。脚台付きの甕は長胴となる。

64号住居の一括土器は、堅穴住居が焼失しておりその後放置されていたことから好資料が得られた。今回も仔細な検討は加えないが、甕は5タイプが共存しており1の複合口縫壺の口縫は粗

折部の縁が鮮明で、肩部から胴上半部が前期に比べて張る。4、6、7のタイプの甕は口縁を短く内彎させ複合口縁を形成し、頸部は頗る短い。このタイプの口縁を有する甕は、筑後地方では野口遺跡に出土例があるが、小形で調整手法もやや異なる。当該住居出土の甕の調整手法は、外面に擦過状の削り痕が見られ、Ⅲ期にない手法が現れる。

甕の口縁は「く」字状となるが、甕部内面の縁が明瞭なものと不明瞭なものが混在しタイプが異なる。外面底部付近には甕同様削り痕が出現するが、15の甕は新規の感がある。外面底部付近の削り痕は小型の甕や鉢にも用いられるようになる。

森ノ木V期の集落

V期に至ると中核となる広場Aは完全に廃れ、聚穴住居は2分して設営されたことが窺える。つまり、A～F区に集中するグループとL～W区に設営されるグループとに区分される。既報されてきた広場が崩壊した証左として、Ⅱ期からⅣ期にかけての住居は広場Aを中心として棟木方位が直交する方向を採用する場合が多いのに対し、当該期の住居は設営方位が異なることで判別でき、中核エリアが移動した事が考慮される。

出土土器では、62号住居の甕はⅣ期のような反り気味に大きく外反するのに対し、口縁の外反度は鈍くなる。複合口縁甕では口縁の屈折が顕著でスマートな頸部を有す。

甕は口縁部が長く、しかも長胴の甕が出現する。底部の径は小さく、レンズ状を呈し不安定となる。Ⅴ期で出現した底部外面付近の削り痕は繼承されている。

森ノ木VI期の集落

VI期に至ると住居の分布状況は東側に移動している。I部F区に見られるが、大半がL～V区で設営している。おそらく、調査区外の北側に広がり集団を構成していたと考えられる。北側の調査に期待したい。

出土土器は、102号住居に一括資料があるが、捷を欠落する甕は短く内彎する口縁を有し、胴部は球状に近い形状をなす。底部は不安定となり、小さな平底か丸底となる。137号住居出土の脚台付き無頸甕も同時期であろう。共伴する甕は長い口縁を有し、頸部の屈折は不鮮明なものもある。長胴、丸底に近い形状を呈すると考えられる。190号住居出土土器については、VI期の範疇で考えたほうが妥当とも思えるが、一応V期に位置付けておく。その他、大型の基台が3点出土している。

森ノ木晩期の集落

晩期になると持来された土器（土器系）、つまり庄内系の土器を作り一群で古墳時代初期頃の集落である。8軒を当該期に当てたが、180号住居は出土資料が少なくて疑問が残る。調査区内ではⅥ期の集落から減少傾向が看取でき、集団の縮小化なのか調査区の北側に拡大するのかは判断できない。

個々の住居❶は、弥生時代後期の住居とは異なる内部構造が出現する。つまり、弥生時代の住居では複数階にベット状運搬を恐らうのに対して、晩期の住居は「□」字状にベットを配する形の構造で、この形状は最古式土器飾器を作り時期の住居から出現すると考えられる。他に、弥生時代と同様のベット配置を継承する住居も存在する。ほかの遺跡では4本柱の例も存在するが、本遺跡ではすべて2本柱である。

出土土器では、16号と119号住居から好資料が得られたが、16号住居は3の小型窓かやや断面を呈し、119号住居は庄内系と布留系の壁が共存する時期の所産であろう。しかし、12、13の戸跡は5世紀代に比定される土器で埋入である。

森ノ木晩期の集落

晩期に該当する集落は5世紀代に成立したもので、晩期の集落との間に空白期がある。总数10軒の第六住居を確認した。分布状況をみるとB-1区からH、I-7区の各住居は分散傾向にあり、集団規制による設置のあり方は示さない。しかし、H-1区からR、S-1区に分布する住居については、等間隔にしかも強引きながら設置され、調査区外の北側に恰好中央広場を形成しているかのような設営方法が看取できる。集団の中核は北側調査区外に存在すると考えられる。

個別住居では、全ての第六住居にカマドの付設は認められず、筑後地方でのカマド出現期直前の住居であろう。半円形窓は丁形が主体で、27号愛宕住居のような例外的に長方形をなすものがある。疑問視されるのは73号住居で、先にも述べたが住居形態は丸形、2本柱など弥生的要素を色濃く残すが、柱間の勾内から当該期の土器類が出土しており、則に遡って確定要素が多いといえる。H-1S区にかけての遺跡は規模の大形化が見える。

出土土器では、布留系統の繼續な作りの土器は壁を削りやすめに作りとなる。全体的に器體は薄れまりてあるが、27号住居出土の2のように口縁が反り気味に外反する厚手の器が出現していく。尚体も坯部が強く、觸感が丸味を帯びてくる特徴をなすと共にスマートな脚とスクート状の脚とする脚とが併存するものこの時期からである。その中にあって、196号住居の一群は小型丸底土器を残すと共に2の壺はシャーナーを残し、高体の坏部が強く直線的に伸びるなどやや古用

を示し、布留系土器に後出する一群といえよう。

森ノ木Ⅹ期の集落

Ⅸ期の堅穴住居は、Ⅳ～V区にかけて分布するが、総軒数は少なく8軒を数えるに過ぎない。分布状況を見る限りではⅧ期のような整然とした設営は認められず分散傾向にある。6軒の住居の内199号住居は特に大型を呈し、突出した規模を有していることが注目される。

階別住居では、1辺の壁際にカマドが付設され、森ノ木遺跡ではカマドの初現が認められる。土器では、杯を除けば粗い作りとなり、土器製作の簡略化が目立つようになると共に須恵器の共伴が認められる。

森ノ木Ⅹ期の集落

Ⅸ期の集落とはやや時期差をなしⅩ期の集落が形成される。Ⅹ期での堅穴住居は広範囲の分布状況を示し、調査区内では集落の拡大が認められる。カマドは北側か北西側に付設される。¹²⁾該期の住居は各遺跡の実例からカマドに対峙する隙所に出入り口を設けることが判明しており、南側低湿地が当時の恰好の水稻耕作地帯であることを考慮すれば当然の帰結ともいえる。

以上が森ノ木遺跡の集落変遷であるが、先にも述べたように短期間に内的報告書作成のため詳細な分析がなされていない。出土した赤生土器は、南筑後地方における指標となるべき資料であり、短期間での検討は不可能であった。別の機会に再検討を期したい。

図 版



1 森ノ木遺跡西側俯瞰



2 森ノ木遺跡東側俯瞰



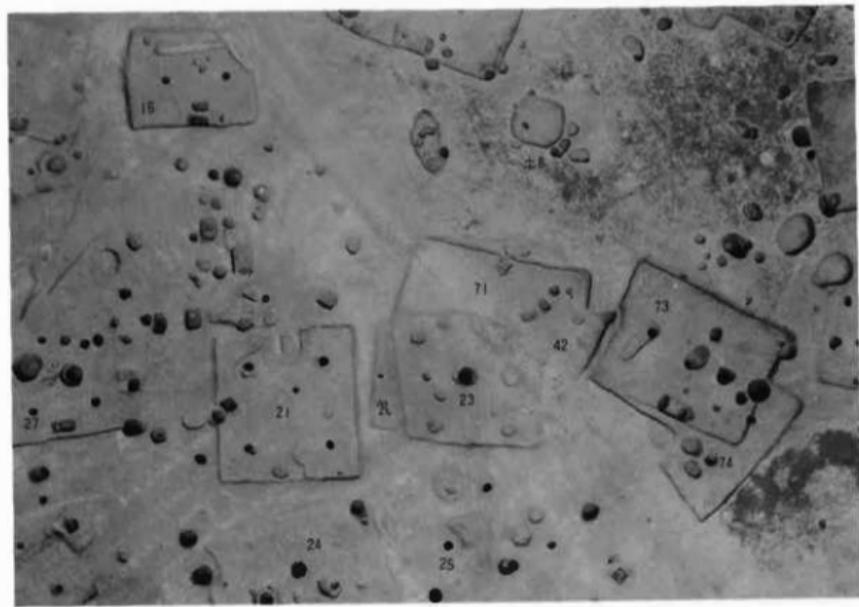
1 8号竪穴住居跡周辺遺構



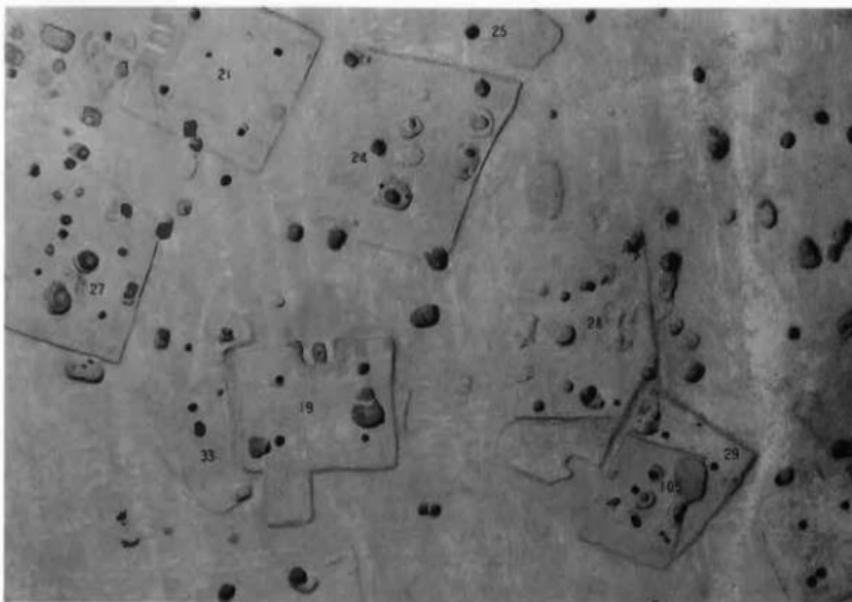
2 9号・10号竪穴住居跡、3号周溝状遺構



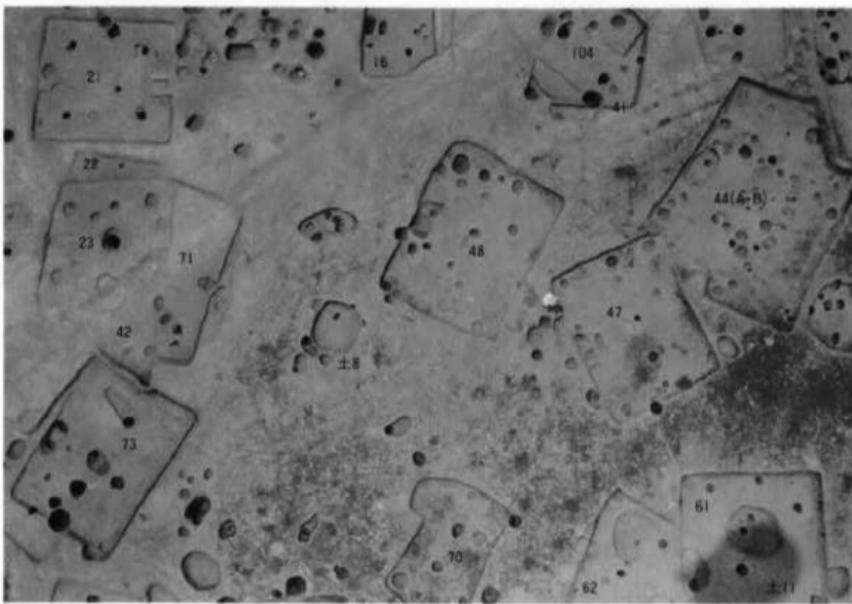
1 12号豎穴住居跡周辺俯瞰



2 16号・21号竪穴住居跡周辺俯瞰



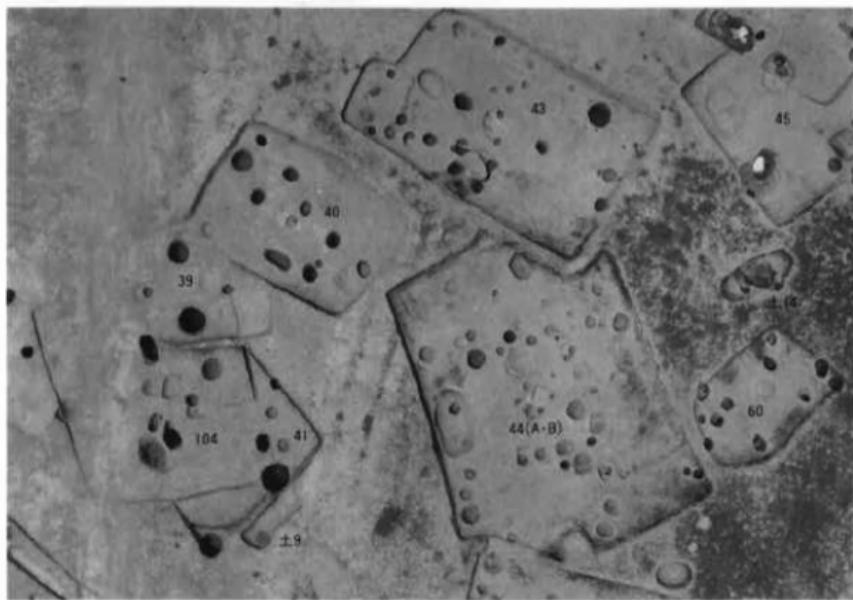
1 19号豎穴住居跡周辺俯瞰



2 23号·46号竪穴住居跡周辺備敵



1 34号～38号竪穴住居跡周辺俯瞰



2 43号竪穴住居跡周辺俯瞰



1 43号竪穴住居跡周辺俯瞰



2 58号竪穴住居跡周辺俯瞰



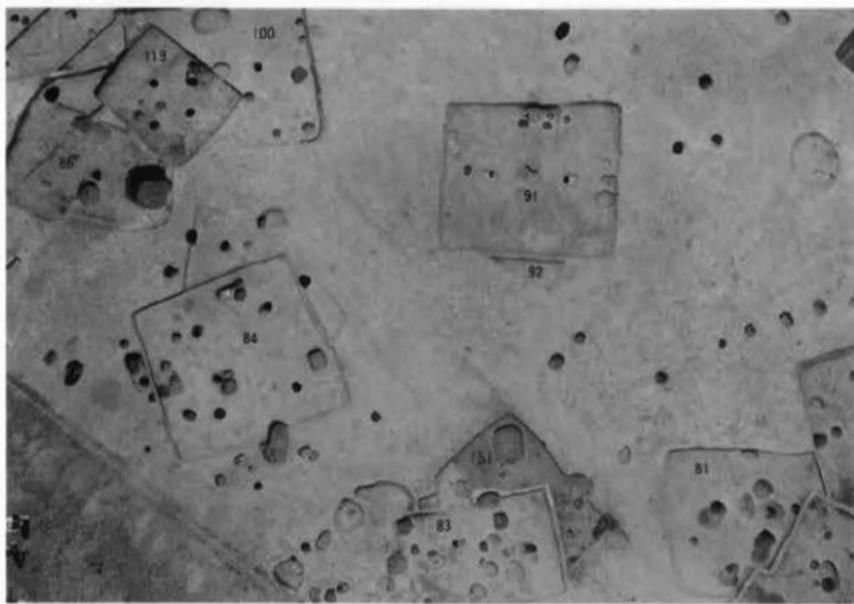
1 59号竪穴住居跡周辺俯瞰



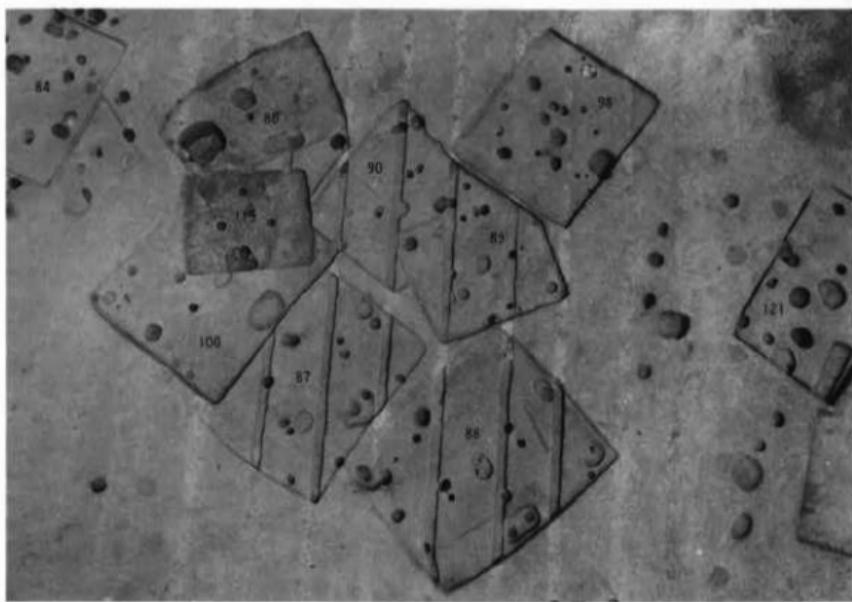
2 66号竪穴住居跡周辺俯瞰



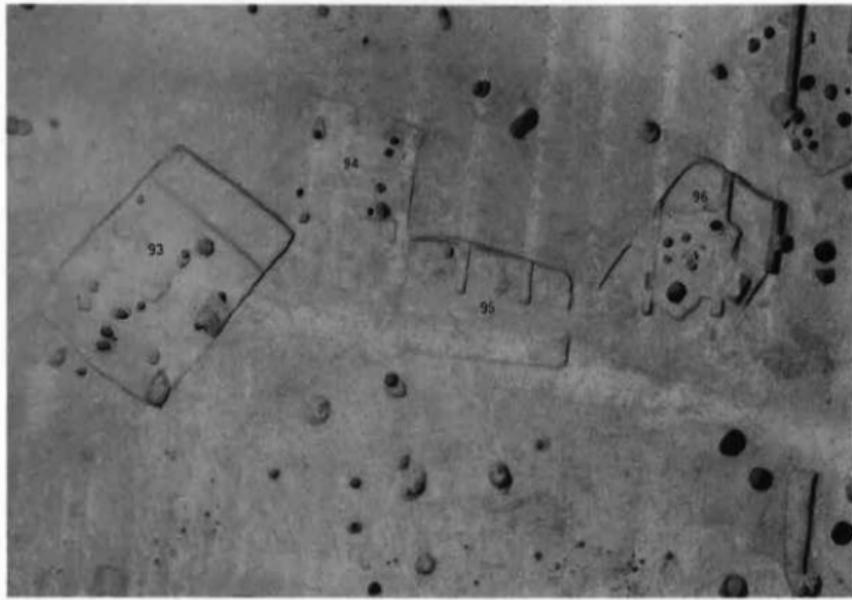
1 79号竪穴住居跡周辺俯瞰



2 91号竪穴住居跡周辺俯瞰



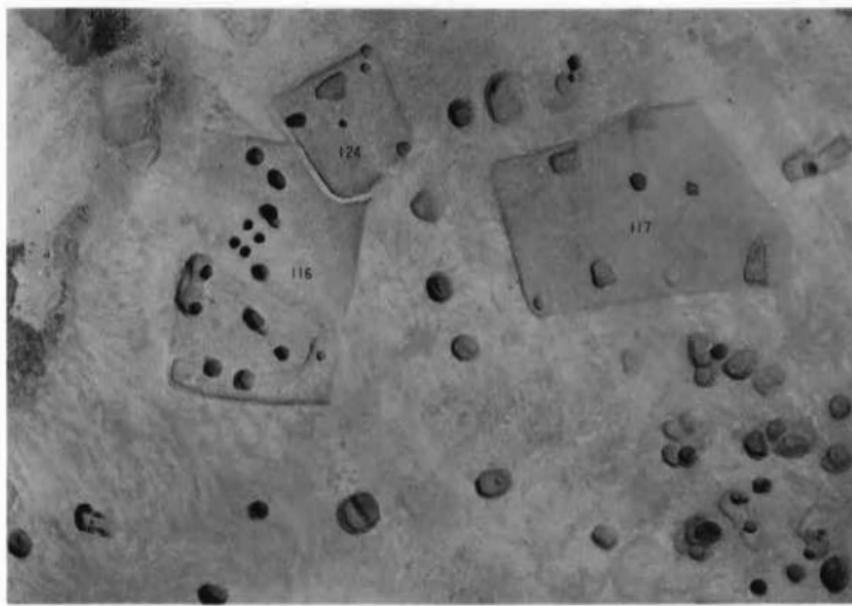
1 100号竪穴住居跡周辺俯瞰



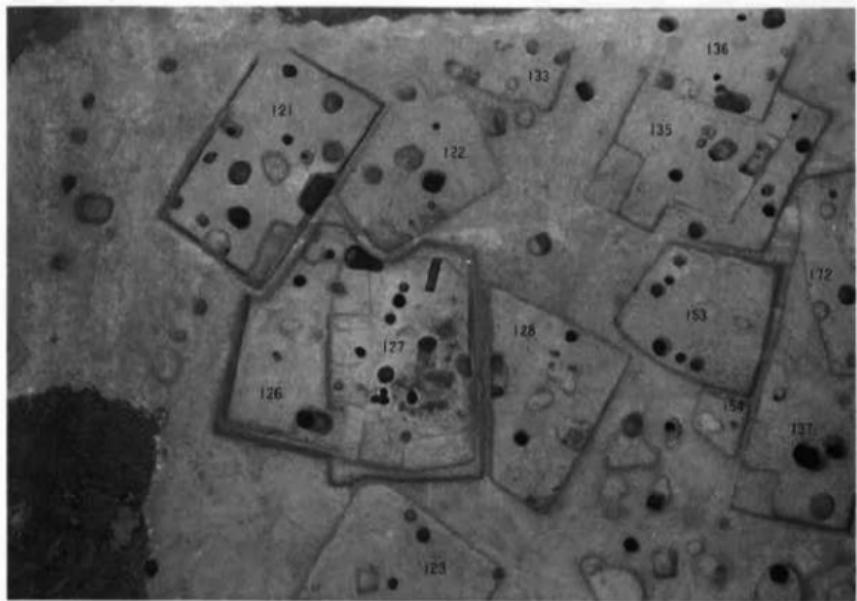
2 93号～96号竪穴住居跡俯瞰



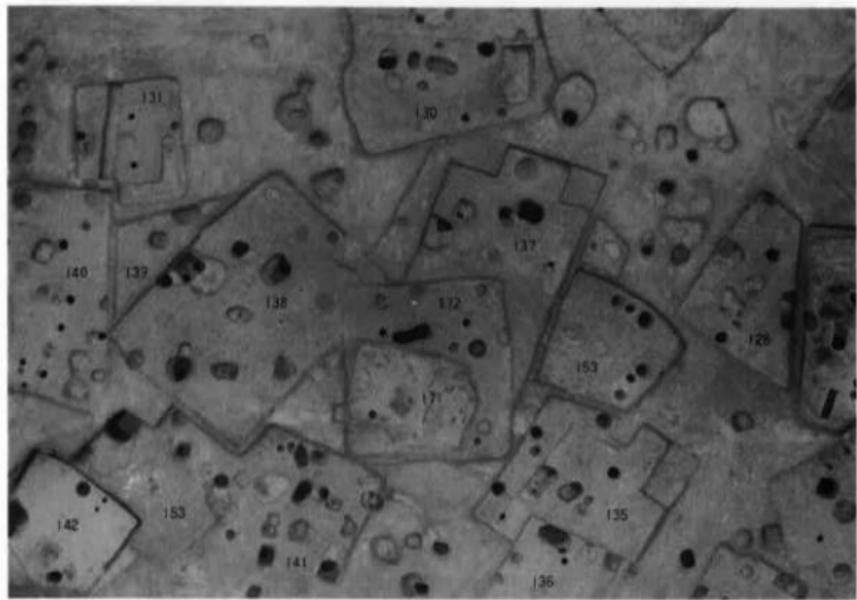
1 105号竪穴住居跡周辺俯瞰



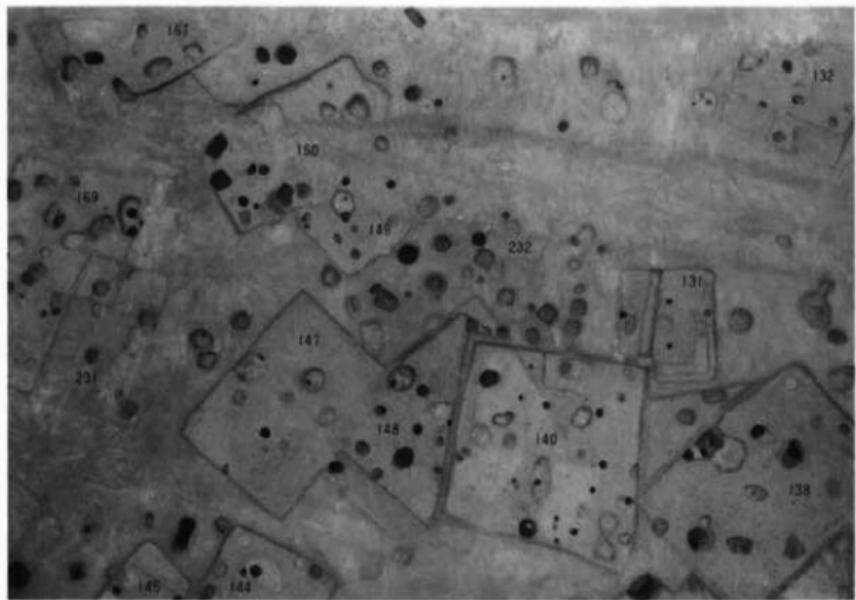
2 116号・117号・124号竪穴住居跡俯瞰



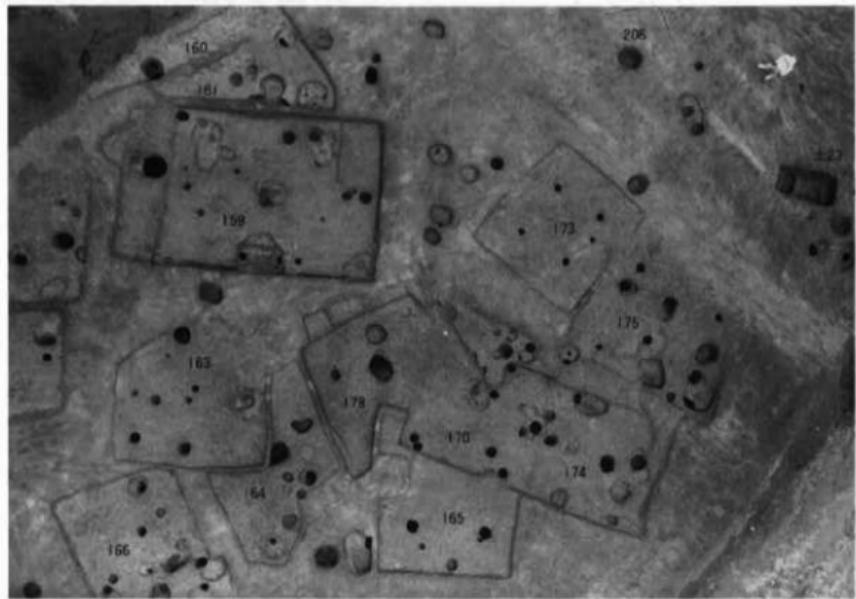
1 127号竪穴住居跡周辺俯瞰



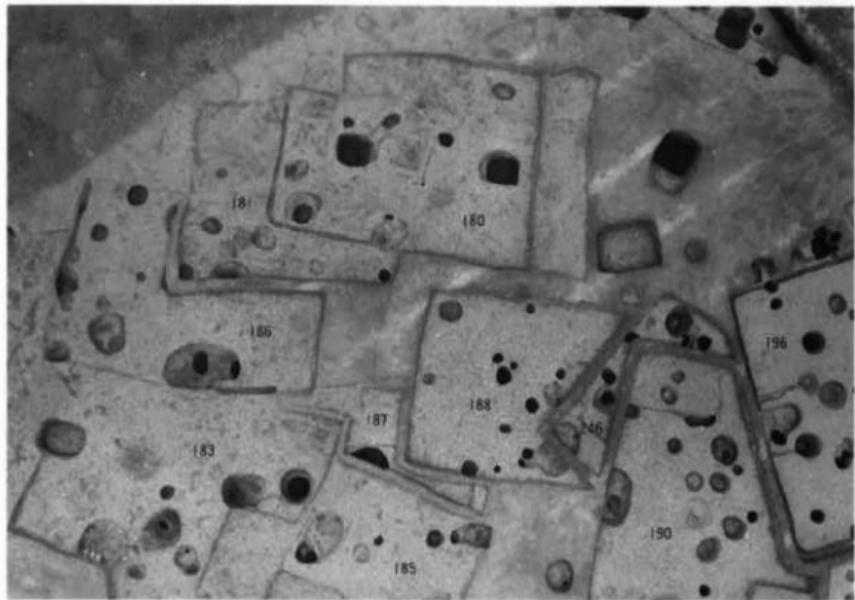
2 137号竪穴住居跡周辺俯瞰



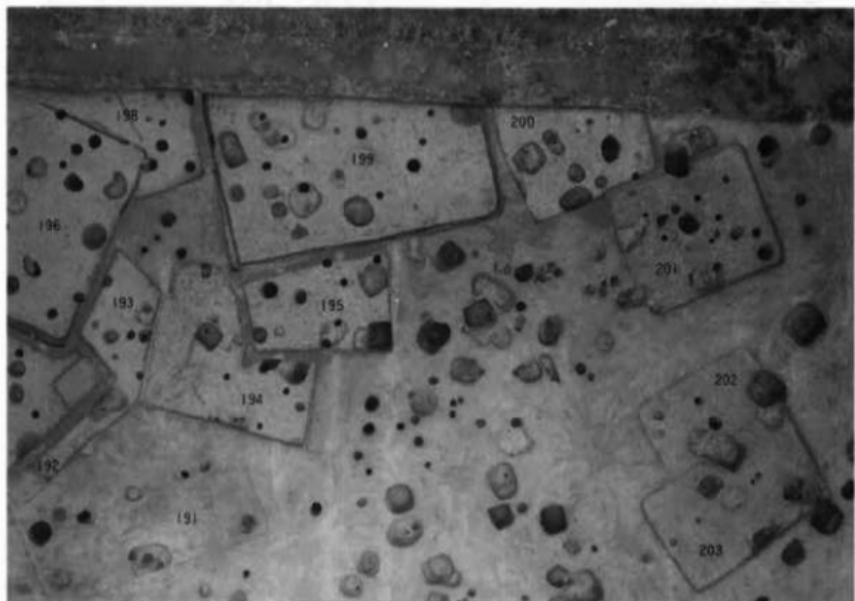
1 140号竪穴住居跡周辺俯瞰



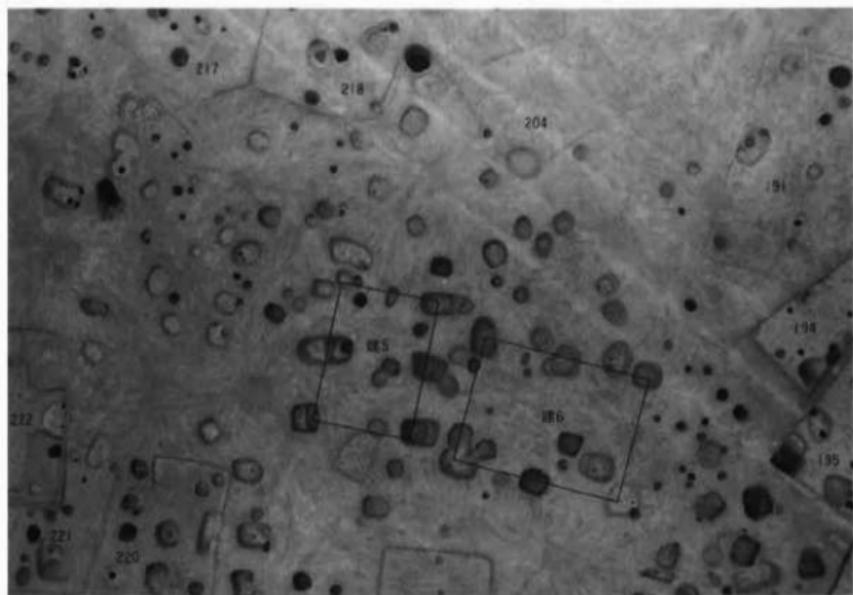
2 155号竪穴住居跡周辺俯瞰



1 180号竪穴住居跡周辺俯瞰



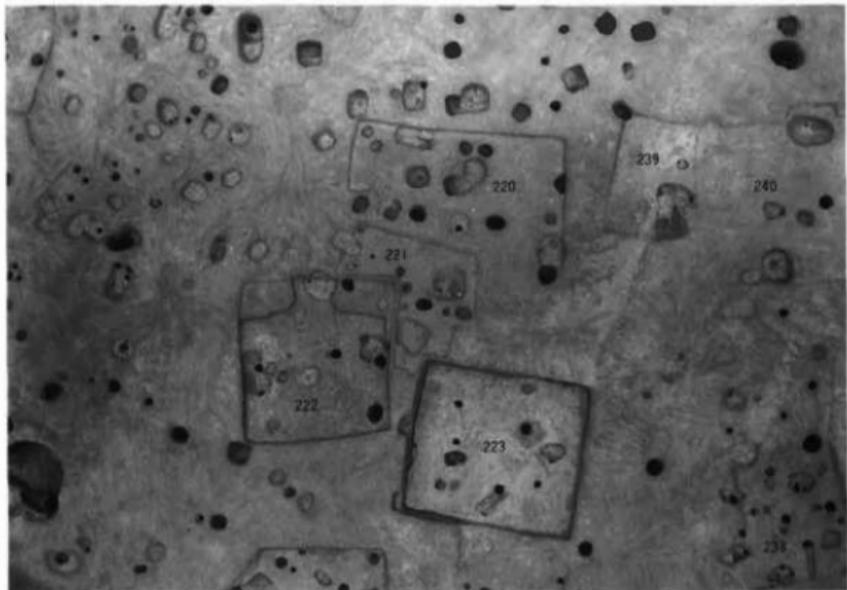
2 199号竪穴住居跡周辺俯瞰



1 204号・218号竪穴住居跡、5号・6号据立柱建物周辺俯瞰



2 208号～212号竪穴住居跡24号土塁俯瞰



1 220号竪穴住居跡周辺俯瞰



2 1号・2号土塙墓、石塙土塙墓俯瞰



1 12号竪穴住居跡、5号・5号周溝状遺構 2 16号竪穴住居跡

3 23号・42号・71号～74号竪穴住居跡 4 18号竪穴住居跡

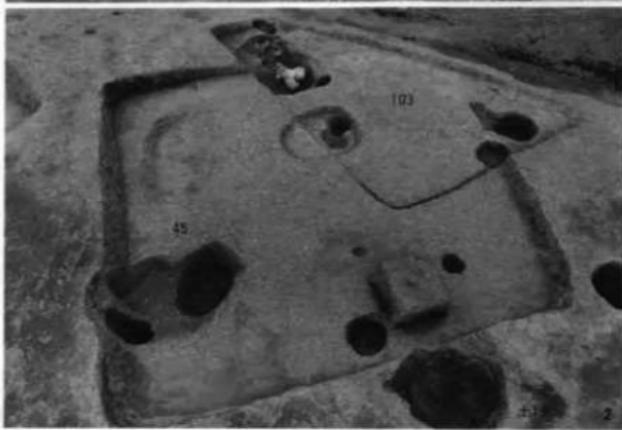
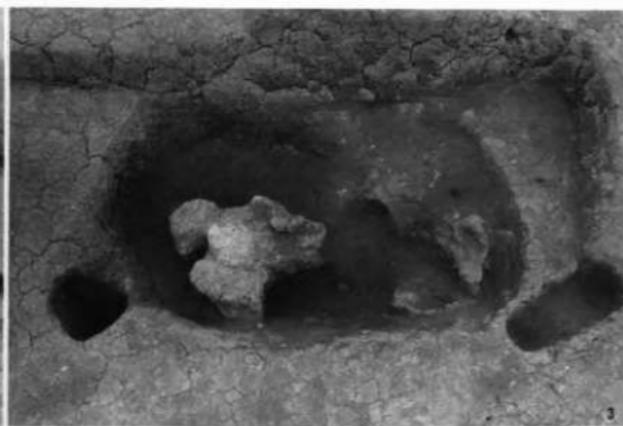


1 19号竪穴住居跡カマド

2 35号～38号竪穴住居跡

3 34号竪穴住居跡遺物出土状態

4 44号(B)竪穴住居跡遺物出土状態

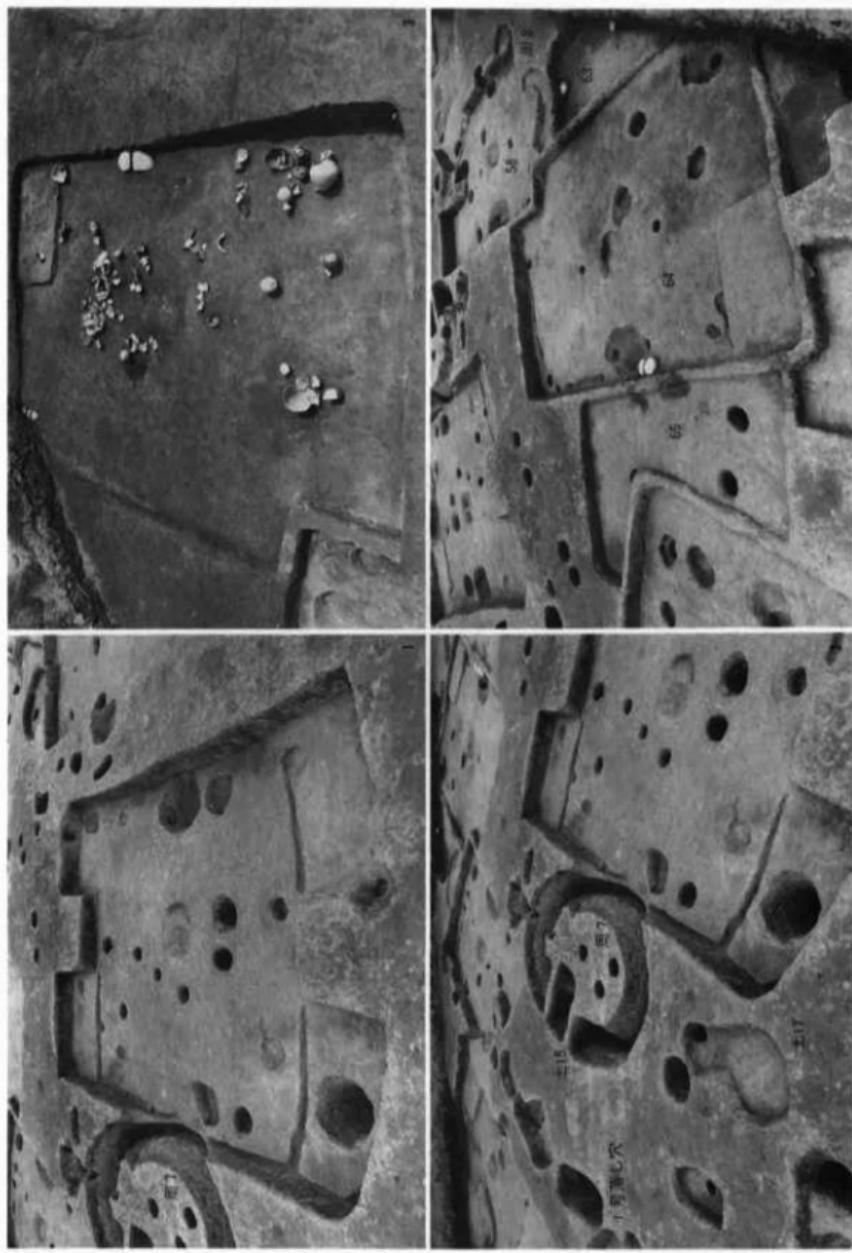


1 40号·43号竖穴住居跡

2 45号·103号竖穴住居跡

3 103号竖穴住居跡屋内土堆

4 53号·54号竖穴住居跡



1 59号竪穴式居構 2 7号圓窓欵滑輪、15号・17号土環、1号窓穴
3 64号竪穴式居構出土状態 4 63号・64号・63号窓穴



1 61号・62号竪穴住居跡、11号・12号土塁 2 56号～58号竪穴住居跡、13号土塁 3 75号～77号竪穴住居跡 4 79号～81号竪穴住居跡



1 82号竖穴住居跡

2 83号竖穴住居跡、10号周溝状遺構



3 84号竖穴住居跡、20号土壤

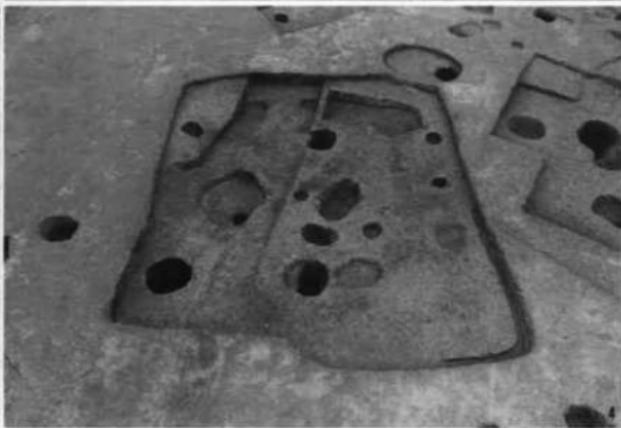
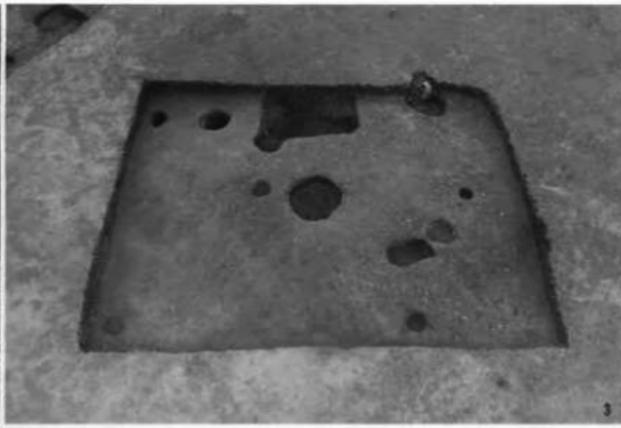
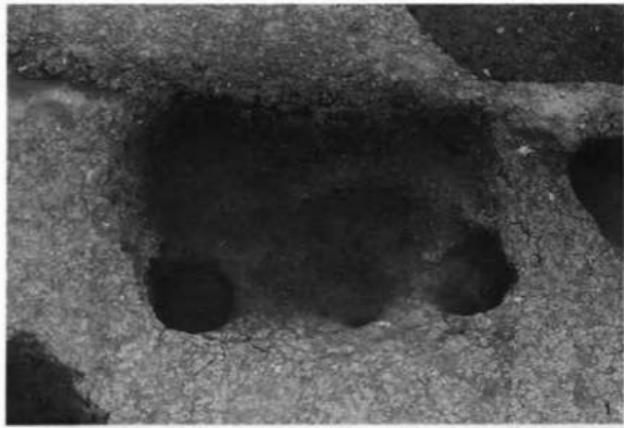
4 91号・82号竖穴住居跡



1 93号竖穴住居跡 2 85号～90号・98号・119号竖穴住居跡

3 101号・102号竖穴住居跡遺物出土状態

4 121号・122号竖穴住居跡



1 122号竪穴住居跡屋内土壤

2 126号～128号竪穴住居跡

3 129号竪穴住居跡

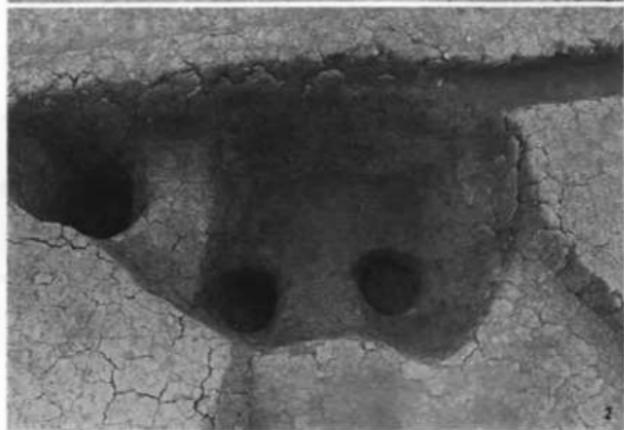
4 130号竪穴住居跡



1 132号竖穴住居跡 2 135号・136号竖穴住居跡



3 136号竖穴住居跡遺物出土状態 4 137号・153号・154号・171号・172号竖穴住居跡

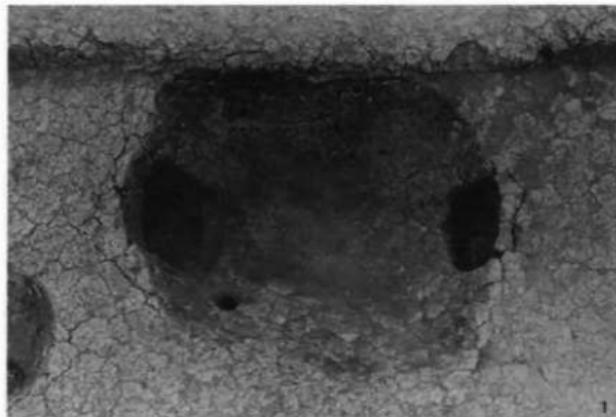


1 138号・139号・171号竪穴住居跡

2 138号竪穴住居跡屋内土壤

3 140号・147号・148号竪穴住居跡

4 143号～145号竪穴住居跡

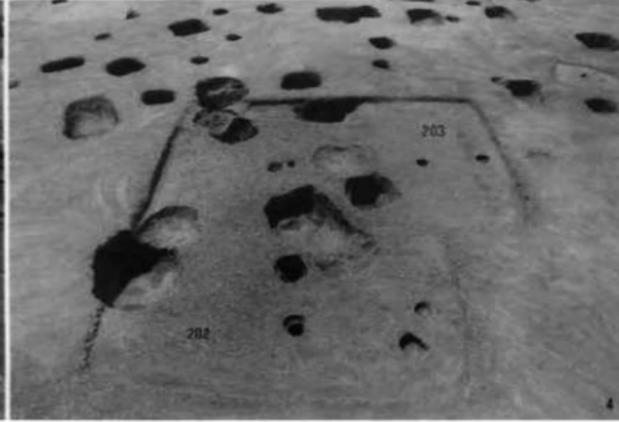


1 147号竪穴住居跡屋内土塙

2 150号・167号竪穴住居跡

3 159号～161号竪穴住居跡

4 159号竪穴住居跡屋内土塙

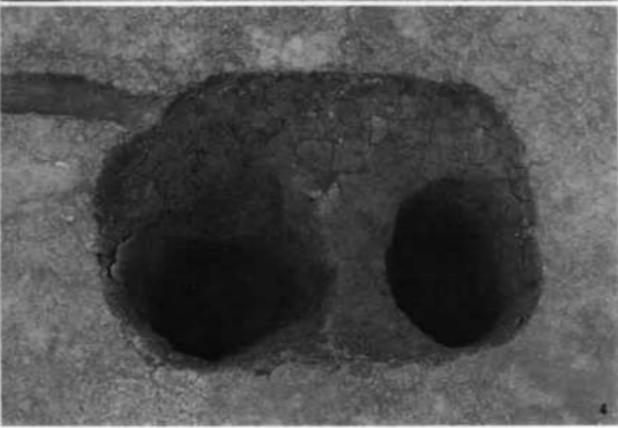
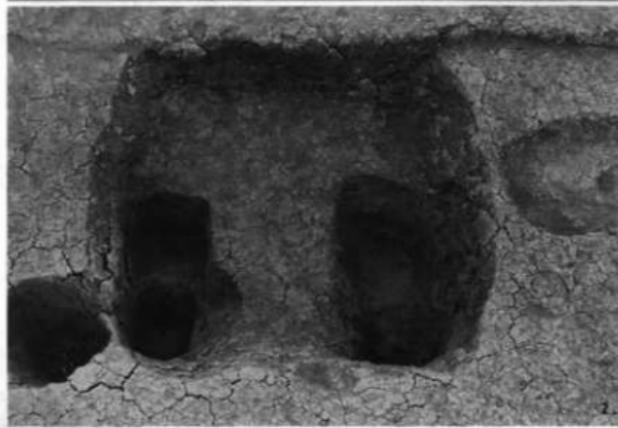
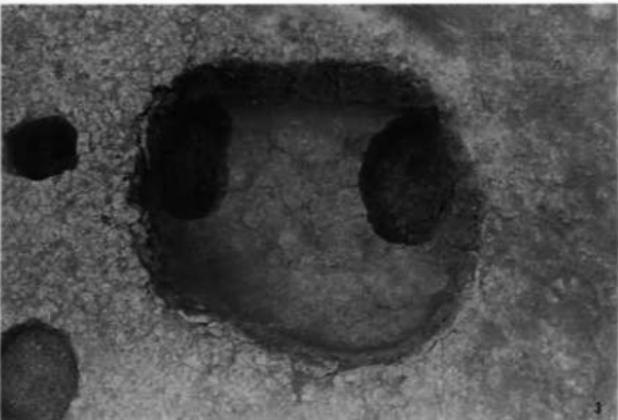


1 142号・175号・176号・177号竪穴住居跡

2 180号～183号、185号・187号・188号・190号・192号・198号竪穴住居跡

3 200号・201号竪穴住居跡

4 202号・203号竪穴住居跡



1 208号～212号竖穴住居跡

2 208号竖穴住居跡屋内土壤

3 217号竖穴住居跡屋内土壤

4 218号竖穴住居跡屋内土壤



1



2



3



4

1 4号据立柱建物 2 3号周溝状遺構

3 1号落し穴状遺構 4 2号落し穴状遺構

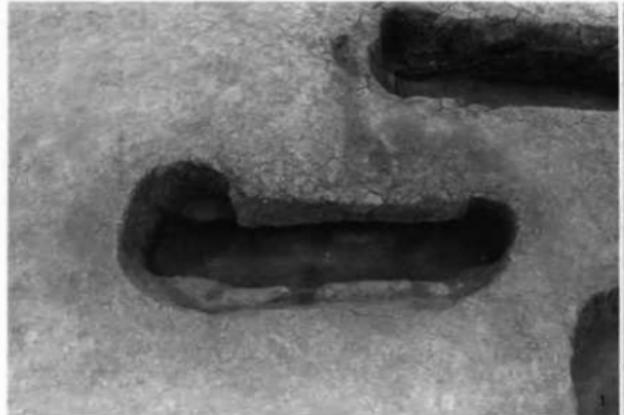


1 3号落し穴状遺構

2 3号土壤

3 25号土壤

4 1号土壤基

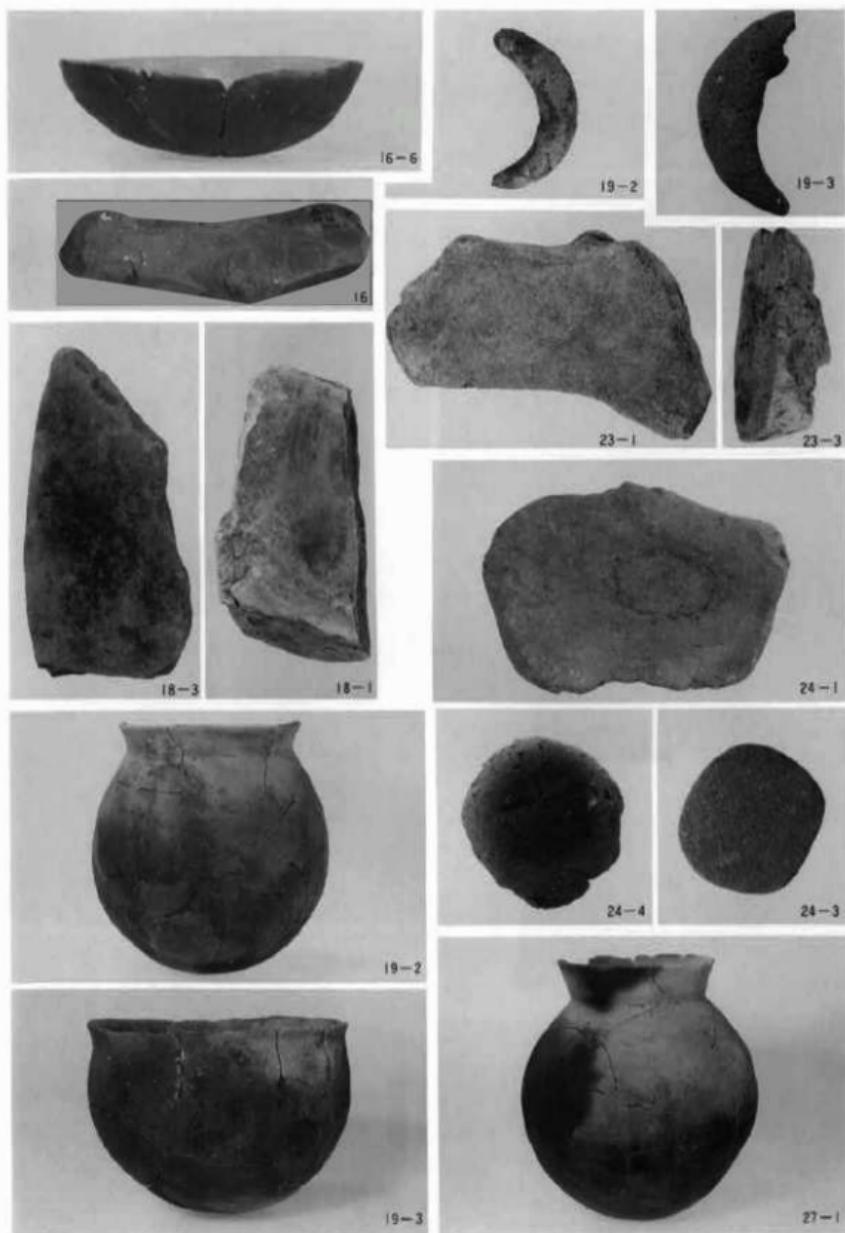


1 2号土壤墓 2 石盖土壤墓

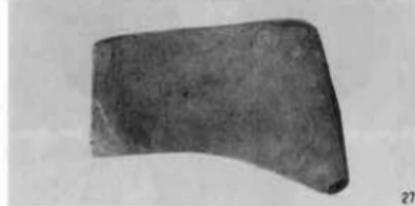
3 石盖土壤墓石盖石却被 4 3号土壤墓



3号・9号・14号・16号竪穴住居跡出土遺物



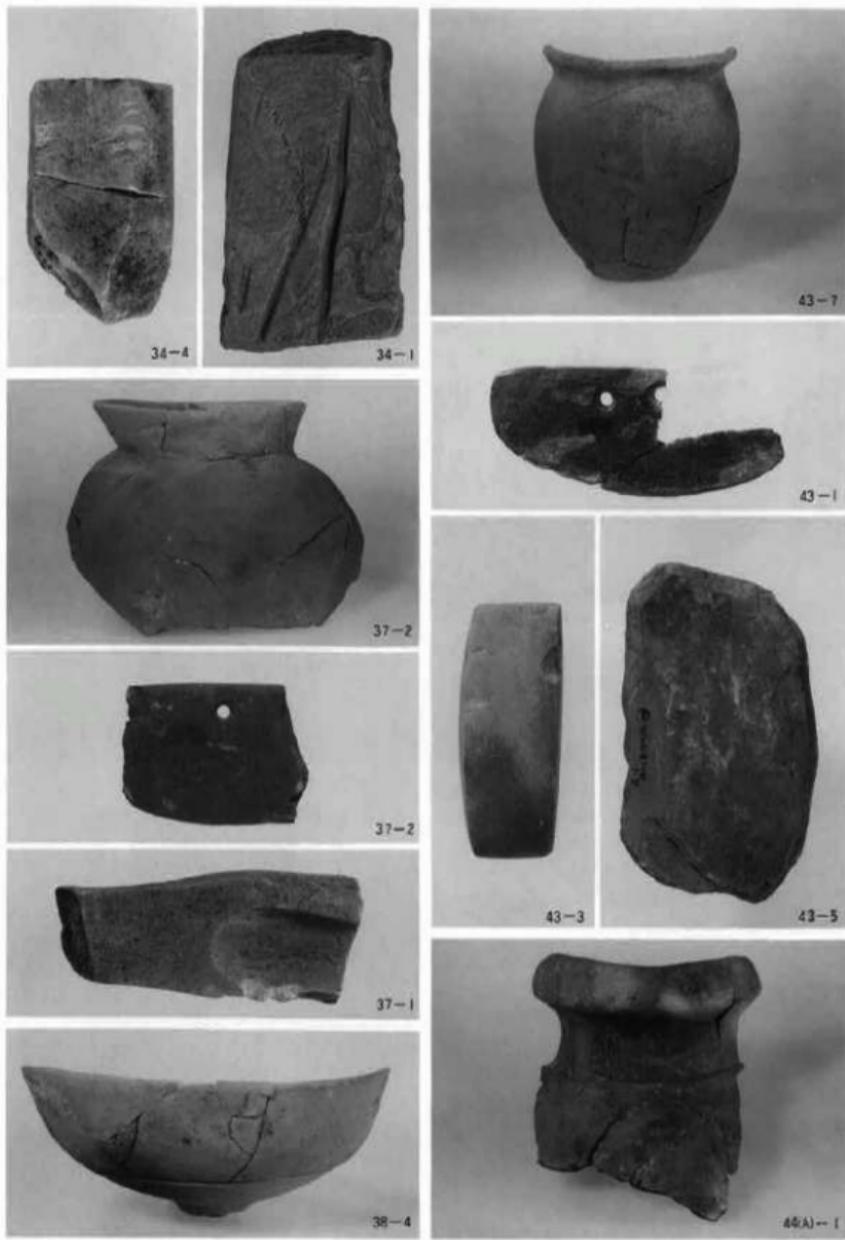
16号・18号・19号・23号・24号・27号竪穴住居跡出土遺物



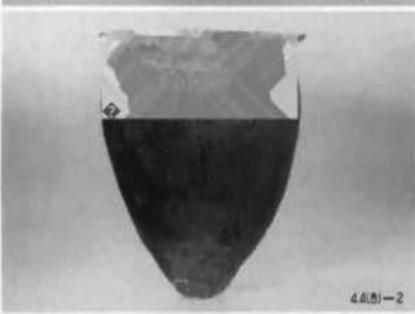
27号・29号・34号竪穴住居跡出土遺物



34號竪穴住居跡出土遺物



34号·37号·38号·43号·44(A)号竖穴住居跡出土遺物



44(A)・(B)号整穴住居跡出土遺物



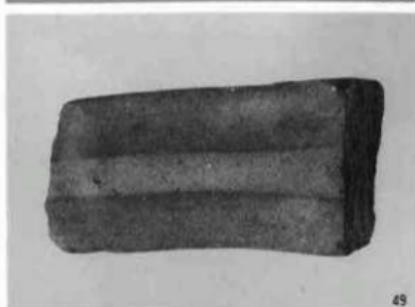
45-6



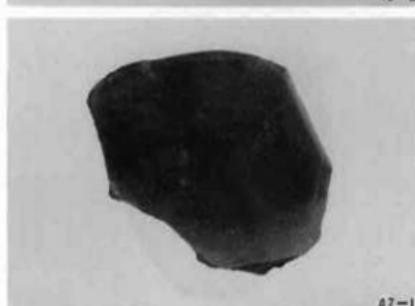
48-6



25-8



49



47-1



54-4



48-4



54-5

45号·47号·48号·49号·54号竖穴住居跡出土遺物



55-1



57-2



55-2



58-1



55



58-2

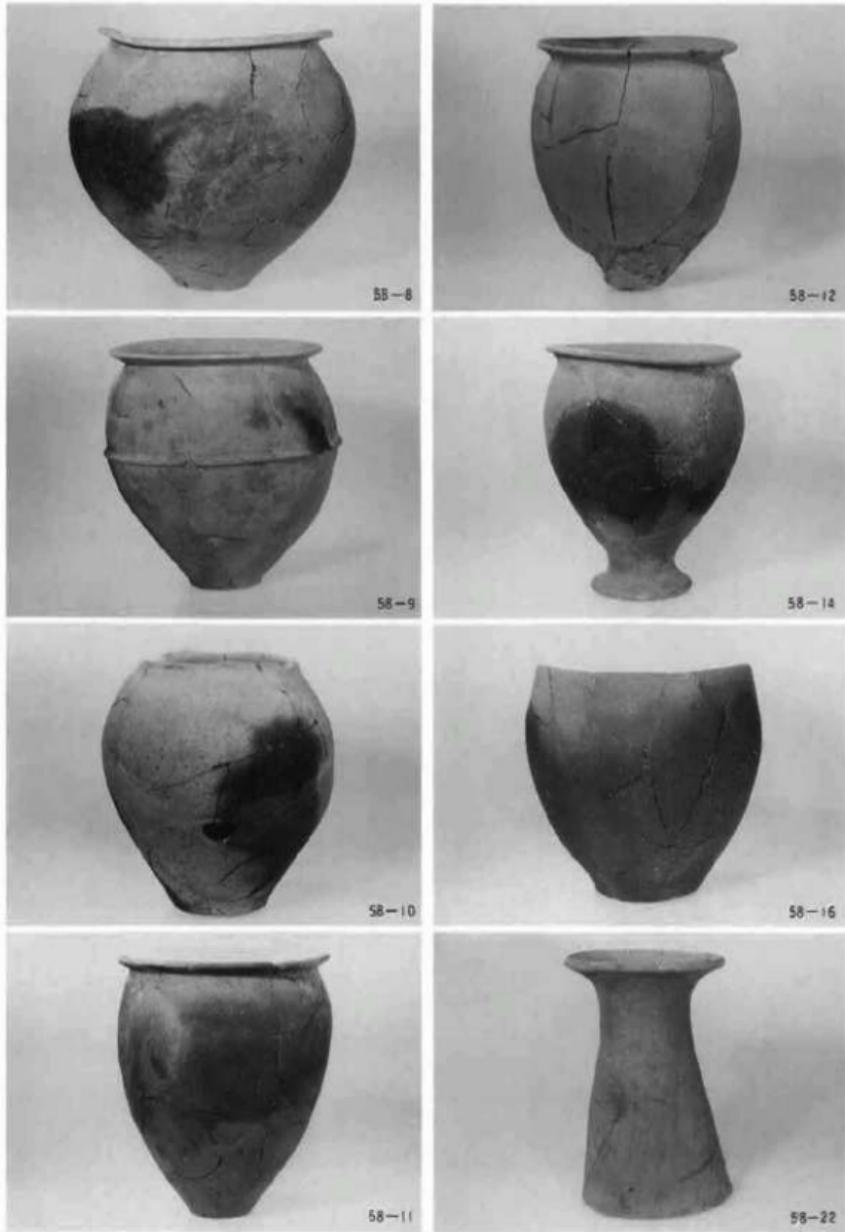


57-1



58-3

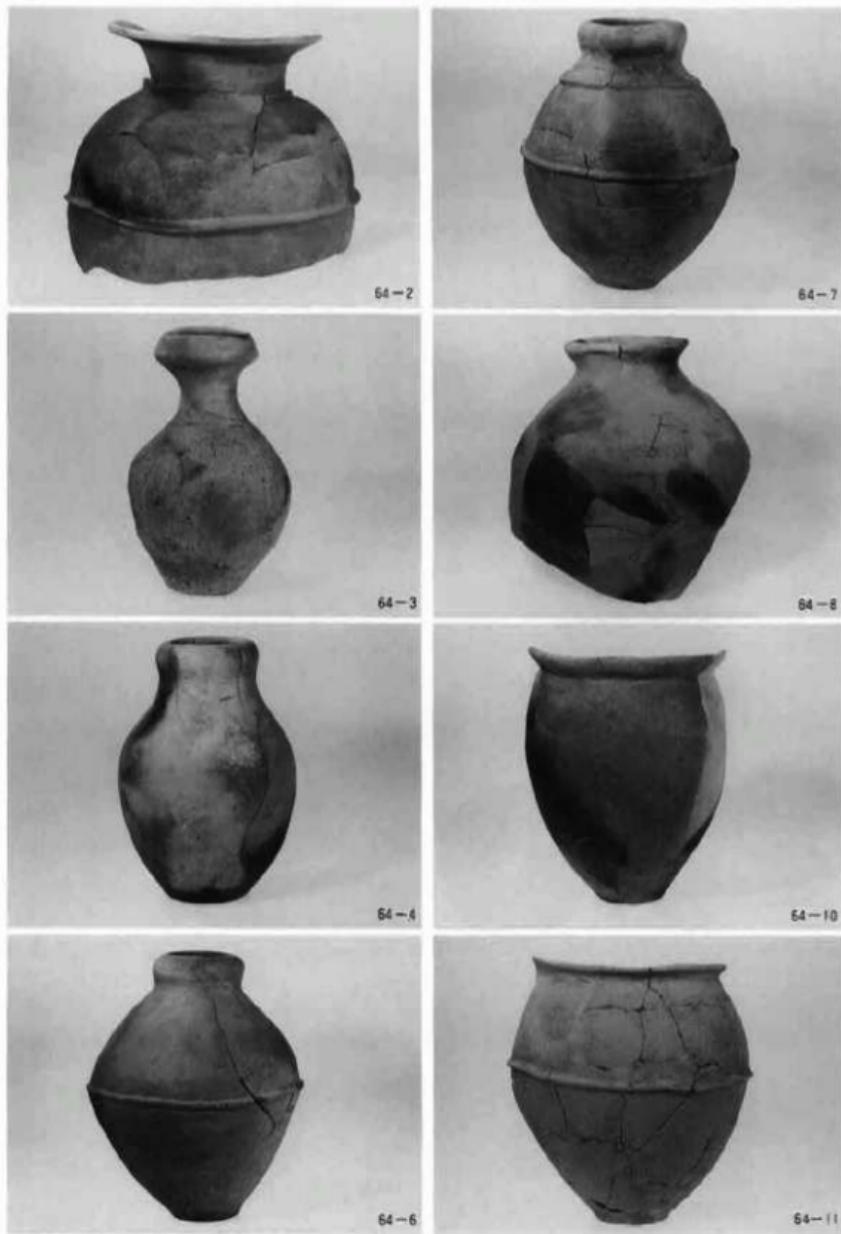
55号·57号·58号竖穴住居跡出土遺物



58号竖穴住居跡出土遺物



58号・61号・62号・64号竪穴住居跡出土遺物



64号竖穴住居出土遗物



64-14



64-35



64-15



64-39



64-28



64-41



64-36



64-42

64号竖穴住居跡出土遺物



64-44



64-54



64-45



64-55



64-47



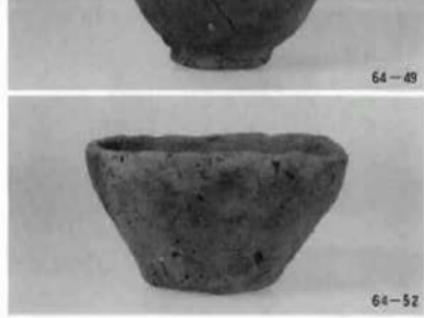
64-56



64-49



64-59



64-52



64-50

64号竖穴住居跡出土遺物



64-6



65



64-63



66-2



64-55



66-5



64-1

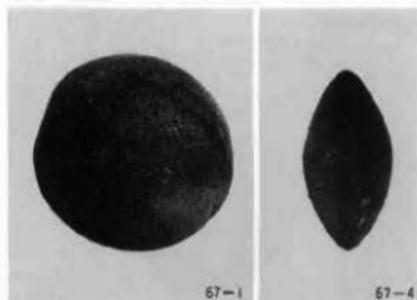


64-2



66-6

64号～66号竪穴住居跡出土遺物



56号～58号・75号竖穴住居跡出土遺物



76-3



81-1



78-2



81-3



81-2



80-1



80-3



82-1

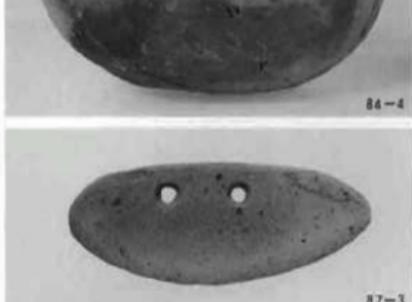


81-7



82-4

73号・78号・80号・81号・82号竪穴住居跡出土遺物



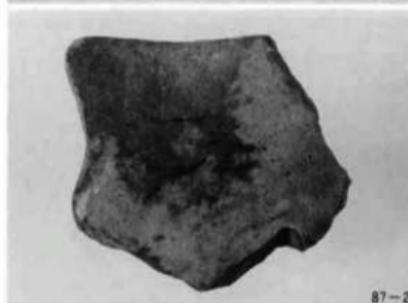
82号～84号・87号竪穴住居跡出土遺物



87-1



91-1



87-2



91-2



88



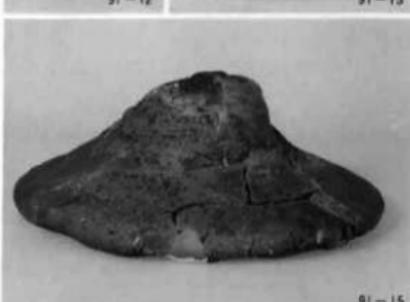
91-12



91-13



90



91-15

87号～89号・91号竪穴住居跡出土遺物



93号～96号・98号・100号竪穴住居跡出土遺物



100-4



100-14



100-7



100-19



100-10



100-22

100-23

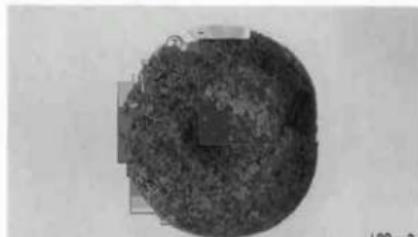


100-11



100-1

100号竪穴住居跡出土遺物



100号·101号竖穴住居跡出土遺物



102-1



103-3



102-2



103-4



102-4



103-1



102-6



103-2



103-4

102号・103号竪穴住居跡出土遺物



103-3



112-2



104



115



106-6



117-4



107



119-3



111-1



119-4

103号・104号・106号・107号・111号・112号・117号・119号竪穴住居跡出土遺物



119号・120号・126号(127号)竪穴住居跡出土遺物



130号·133号·135号·136号竖穴住居出土遺物



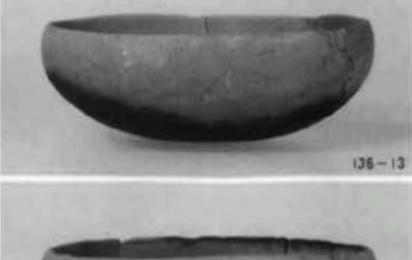
136-6



136-12



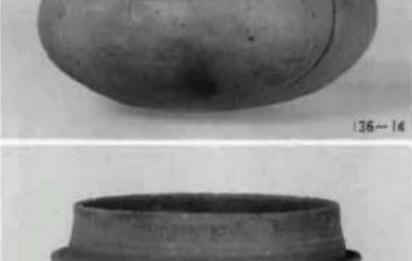
136-7



136-13



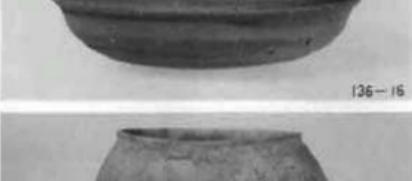
136-9



136-14



136-10



136-15



136-11



137-3

136号·137号竖穴住居跡出土遺物



137号·138号·142号·144号~146号竖穴住居跡出土遺物



147-1



153-12



153-3



153-15



153-16



153-4



153-17



153-18

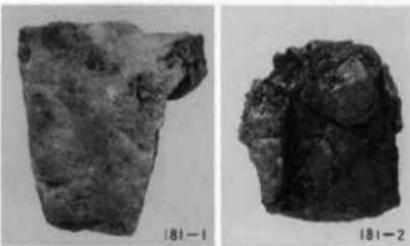
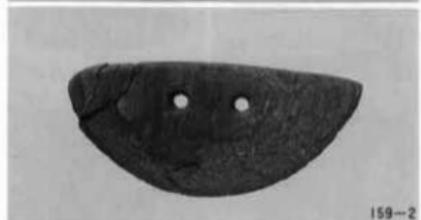
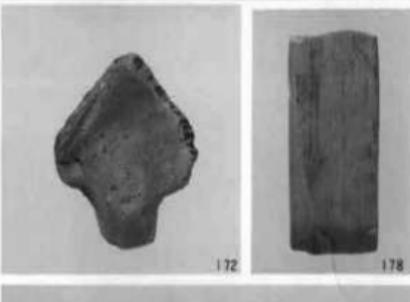
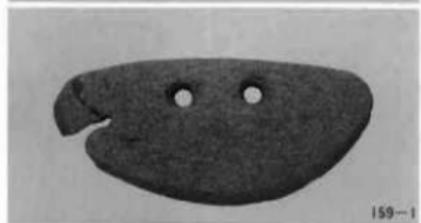
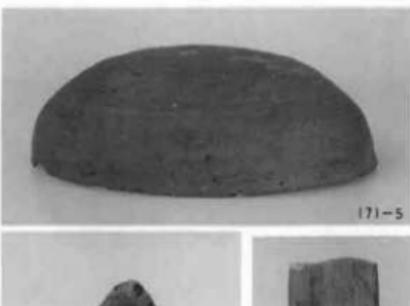


153-10

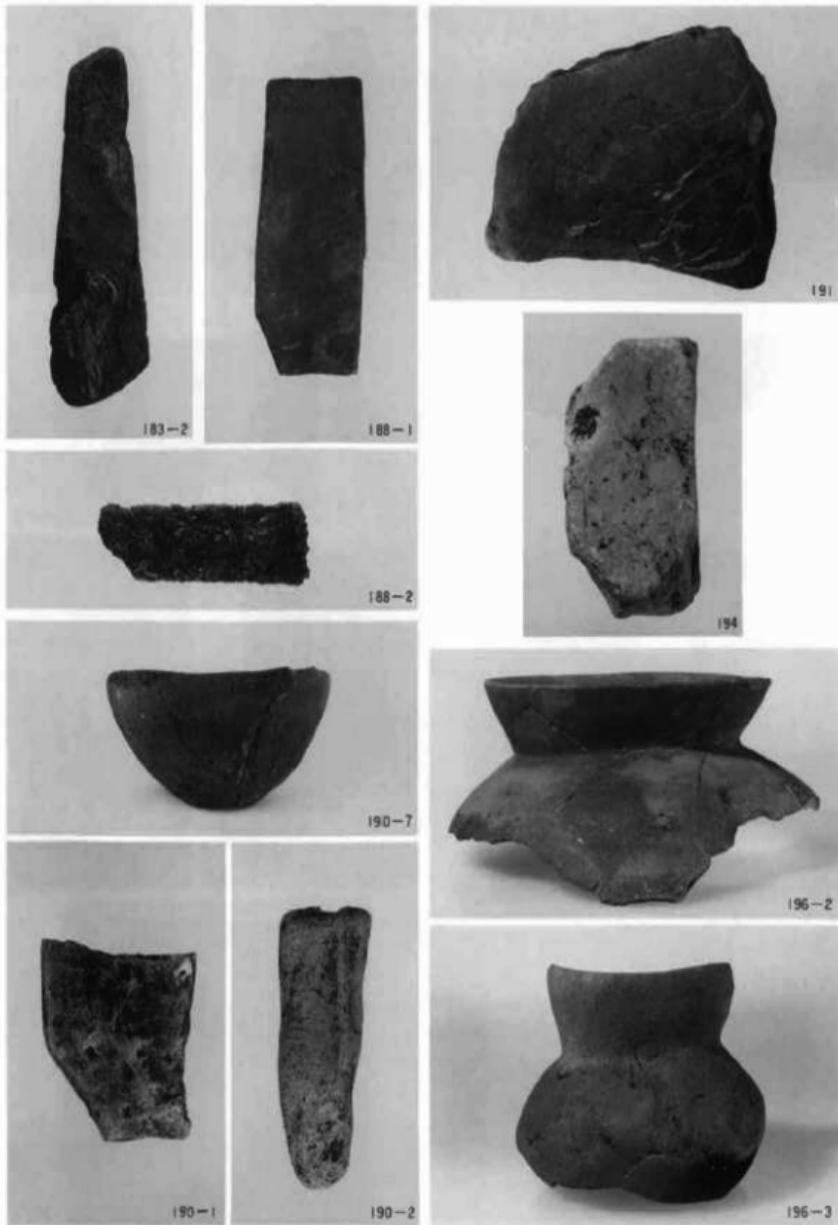


153-23

147号・153号竖穴住居跡出土遺物



159号・170号～172号・178号・180号・181号竪穴住居跡出土遺物



183号·188号·190号·191号·194号·196号竖穴住居跡出土遺物



196号・199号・201号・203号・208号竪穴住居跡出土遺物



208



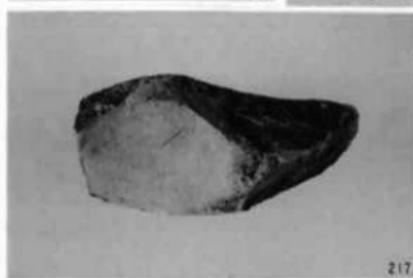
217-1



227



227



217



220



240

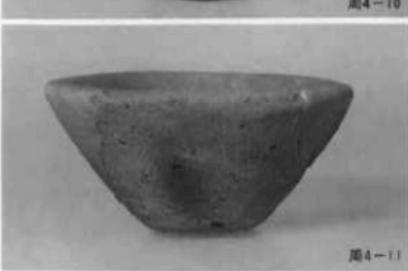


223-2

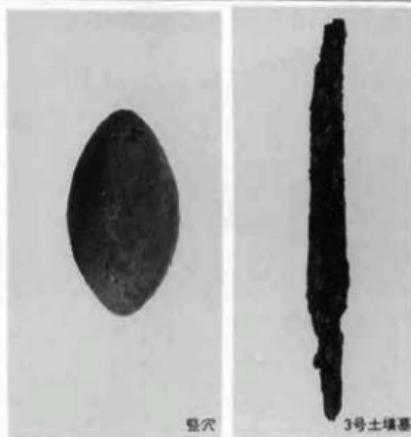
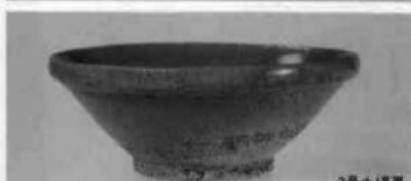


238

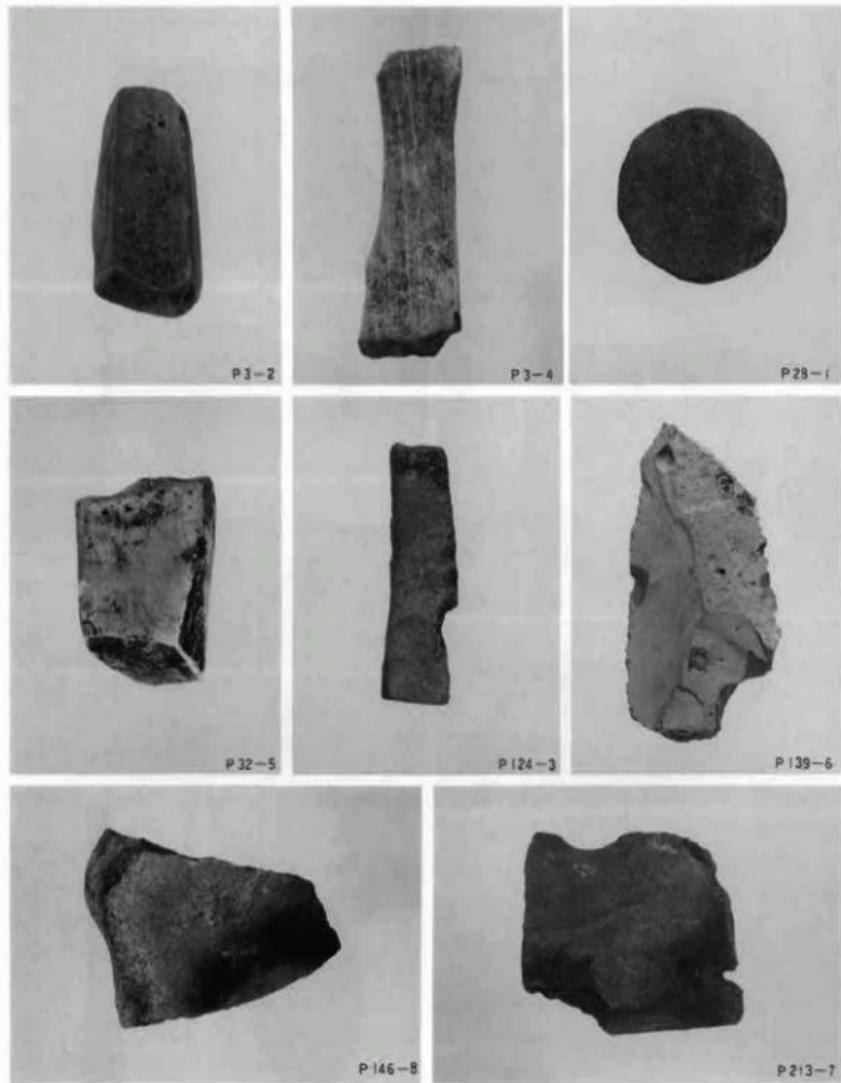
208号·217号·220号·223号·227号·229号·235号竖穴住居跡出土遺物



240号・243号・244号竪穴住居跡、2号・4号周溝状遺構出土遺物



3号・9号・12号・17号土壤、3号土墳基、直穴状遺構出土物



各ピット出土遺物

群跡遺數藏

筑後市文化財調査報告書

第6集

平成2年3月21日

発行 筑後市教育委員会
筑後市大字山ノ井898

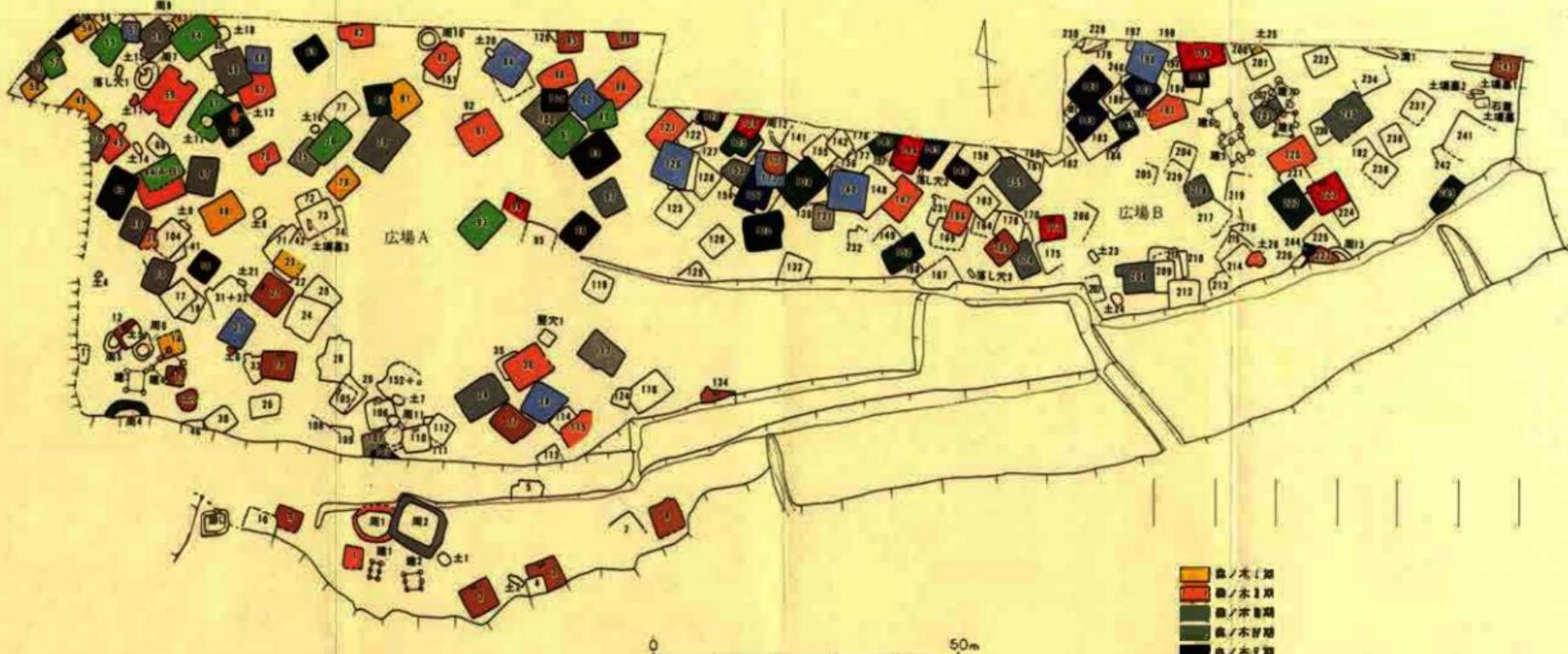
印刷 アオヤギ株式会社 印刷事業部
福岡市中央区渡辺通2丁目9-31



付図1 森ノ木遺跡遺構配置図(1/400)

50

z | A | B | C | O | E | F | G | H | I | J | K | L | M | N | O | P | Q | R | S | T | U | V | W | X



- 桧ノ木Ⅰ期
- 桧ノ木Ⅱ期
- 桧ノ木Ⅲ期
- 桧ノ木Ⅳ期
- 桧ノ木Ⅴ期
- 桧ノ木Ⅵ期
- 桧ノ木Ⅶ期
- 桧ノ木Ⅷ期
- 桧ノ木Ⅸ期

付図2. 森ノ木遺跡基層時期割定図 (1/800)